山岳

LXXIII

好日山荘®

エーデルワイス・マークの好日山荘

●東京銀座店　東京都中央区銀座3-5-7〒104☎03(561)3600・(567)9031 スキーショップ☎03(561)0966
●吉祥寺近鉄店　東京都武蔵野市吉祥寺本町1-19-1〒180吉祥寺近鉄7F☎0422(21)3331㈹内線3318
●大阪店　大阪市北区曽根崎上1-2-8〒530☎06(364)0933㈹ 登山プロショップ 芳沢ビル2F
スキーショップマルビル・芳沢ビル1F
●梅田店　大阪市北区曽根崎2-7-2〒530☎06(315)7985(代)
●セルシー店　豊中市千里中央"セルシー1階"〒565☎06(833)0123
●大阪三越店　大阪・北浜三越新館2F
●福岡店　福岡市博多区須崎町1-4〒812☎092(281)3440
伝統と信用の好日山荘は6店舗です――――最近類似店名の店がありますが、当店とは無関係です。

山岳

第七十三年

山岳　第七十三年　目次　（一九七八年度）

中印両山岳界を訪ねて……西堀栄三郎……一
穂高宣言と大峰大台アピール――自然保護一九七七―八……渡辺公平……六
〈積雪期登攀記録〉
剣沢大滝遡行（一九七八年三月）……鵬翔山岳会……一五
剣岳八ッ峰Ⅰ峰四稜（一九七八年三月）……学習院大学輔仁会山岳部……三
黒部丸山東壁二ルンゼ（一九七八年三月）……山崎祐和……四三
唐沢岳幕岩――京都ルート及び右ルンゼルート（一九七八年一月）……坂下直枝　竹内孝一……五三
アイガー北壁（一九七八年三月）……長谷川恒男……六四
☆
〈支部の歴史〉
関西支部のそもそもから……今西寿雄……七三
越後支部のあゆみと私……藤島玄……七九
熊本支部設立当時を顧みて……西沢健一……八三
☆
K2・第二登（一九七七年）……吉沢一郎　新貝勲……九〇

ブロード・ピーク登頂（一九七七年）……湯浅道男……九五
タフ・ルタム登頂（一九七七年）……桑原信夫……一〇四
プルポー・ブラッカ登頂（一九七七年）……秋山宏明……一一三
ヒマルチュリ東尾根（一九七七年春）……菅沢豊蔵……一一〇
ヌプツェ北西稜（一九七七年春）……加藤春雄……一三九
ビバ・ヨセミテ（一九七七年）……中山芳郎……一三六
トンキン・バレイ（一九七一年）……本田夏生……一四四
縦と横の山旅――積雪期飛騨山脈の横断と縦走……竹中昇……一四九
白神山地……坂本知忠　佐藤勉……一六八
明治末期における黒法師岳、大無間山の紀行……杉本良……一九〇
新クラブルーム・図書室建設報告（望月達夫）……二〇四

☆

加納一郎氏（田中栄蔵）、川崎吉蔵氏（渡辺公平）、伊藤弥十郎氏（後藤幹次）、保泉利喜之助氏（四谷竜胤）、中野征紀氏（林和夫）、可知邦成氏（高沢光雄）、安川茂雄氏（大森久雄）、沢田武志氏（見沢繁幸）、永井清一氏（木本善重）、岡本俊彦氏（山本一夫）……二〇八

追悼

近藤信行著『小島烏水――山の風流使者伝』（島田巽）、織内信彦著『快晴の山』（中村純二）、H・フーバー著『現代登山技術』（金坂一郎）、川喜田二郎編『朝日小事典・ヒマラヤ』（松沢憲夫）、日本山岳会学生部編『年報第六号』（桐生恒治）、J. Ricker 著『Yuraq Janka』（岡沢祐吉）、諏訪田栄蔵他編『世界山岳地図集成・ヒマラヤ編』（望月達夫）、C. Bonington 著『Everest The Hard Way』（中島寛）……二三七

図書紹介

佐谷健吉氏のこと（徳永篤司）……二五八
会務報告（一九七七年七月～一九七八年六月）……二五九
英文梗概……巻末

写真・図版

剣岳大滝に関するもの　写真1(a)～(e)、2(a)～(b)、図1(a)～(b)
剣岳八ッ峰に関するもの　写真3、図2(a)～(b)
黒部丸山東壁に関するもの　写真4(a)～(b)、図3
唐沢岳幕岩に関するもの　写真5(a)～(b)、図4
アイガー北壁に関するもの　写真6(a)～(f)、図5
K2に関するもの　写真7(a)～(b)
ブロード・ピークに関するもの　写真8
タフ・ルタムに関するもの　写真9(a)～(e)、図6(a)～(b)
ブルボー・ブラッカに関するもの　写真10(a)～(d)、図7
ヒマルチュリに関するもの　写真11(a)～(d)、図9
ヌプツェに関するもの　写真12、図9
ヨセミテに関するもの　写真13(a)～(c)、図10
トンキン・バレイに関するもの　写真14(a)～(b)、図11
縦と横の山旅に関するもの　図12(a)～(b)
白神山地に関するもの　写真15(a)～(e)、図13
追悼　写真―加納一郎氏、川崎吉蔵氏、伊藤弥十郎氏、保泉利喜之助氏、中野征紀氏、可知邦成氏、安川茂雄氏、沢田武志氏、永井清一氏、岡本俊彦氏

表紙カット　山里寿男

カット　山里寿男

中印両山岳界を訪ねて

西堀栄三郎

昨秋（一九七七年）来、私は中国、インドというアジアの二大国の登山界を訪れる機会に恵まれた。中国へは日本体育友交代表団の一員として、またインドへはヒマラヤン・クラブ創設五十周年記念式典に参列したものである。両国とも数々の高峰を自国領内に抱きながら、世界の登山界では、むしろ新勢力として位置付けられる。しかし、なんといっても、両国とも古い歴史的背景に支えられており、戦後の新らたな登山活動もそれに裏付けられた重みを感得させられ、日本の登山界に好刺激を与えると同時に、親善の側面的成果をもあげることが出来た。

中国訪問は一九七七年十月二十七日から十一月八日までであった。この短期間に、万里長城から桂林と充実したスケジュールを消化、また王震副主相、廖承志中日友好協会会長らと歓談、また日本山岳会の代表という立場から、十月三十日、北京飯店で中国登山界の代表者と、日本人として初めて一夜の会談を持つことが出来た。その夜の中国側の出席者は、中国登山協会の代表者、史占春氏をはじめ、王富洲、劉大義、陳尚仁の四氏、また女性登山家の袁揚、潘多両女史の計六名であった。（注1）

この夜の会談を通じてまず感じたことは、六氏とも素晴らしい登山家であるということである。置かれた体制の違

いはあっても、山を、自然を愛する気持には国境はなく、結局人間らしさというものを突き詰めた場合、そこには共通する心情があるということだ。これを基盤として、日本人ならば登山行為は個人的な発想によるものであるが、中国の登山は国家的使命感に支えられているという色彩を濃くしている。このことが、中国隊のエベレスト登山では、その山頂に測量用ポールを建設させ、心電図測定装置を運び上げる難事業をも可能にする力となっていた。これらは、昔ならば万里長城構築の国民的な力と通じるものであろう。

中国は明年建国三十周年（一九七九年）を迎えるが、この記念事業としてK2（中国名チャオゴリ）の登山計画を進めており、その関係資料の蒐集をしていたので、協力することを約した。

また中国はオリンピック開催を熱望していた。これは、その前段階として国際オリンピック委員会復帰という難問題が横たわっていて、ただちに解決するとは思われない。しかし、その時機は加速度的に早まるという感触を受け、登山における外国との交流もこれに平行して行なわれる確信を得た。このことは、互いに自然愛という人類共通の考え方に立っているからであり、この会談でも、日中双方はいつかは果さなければならない雰囲気が醸成されていたからである。そのためには地味な相互接近の努力を重み積ねていかなければならないのである。

ヒマラヤン・クラブ五十周年記念式典は、一九七八年二月十七日から三日間、ニューデリーのインド国際センターに、インド内外のヒマラヤン・クラブ関係者百人を集めて行われ、日本からは私のほか、吉田宏、梶正彦、伊丹紹泰、堀内章雄の四氏が参列した。

このクラブ構想はフレッシュフィールド（D. Freshfield）らの一八六六年までさかのぼるが、正式には五十年前の一九二八年二月十七日、デリーの陸軍参謀本部にあったバードウッド卿（Sir W. Birdwood）の一室において、世界の登山関係者百二十七人の賛同を得て発足、現会員は七百人に達している。私は一九五二年、ヘンダーソン夫人(Mrs.

Henderson）らの推挙により終身会員となった。

式典は実行委員長のサリン氏（H.C. Sarin, Indian Mountaineering Foundation 会長）の開会宣言、デサイ首相（S.M. Desai）の挨拶で開始された。今回のメイン・テーマは「ヒマラヤの環境及び生態の保全」であり、デサイ首相も、登山が若人に与えた影響に触れ、インド政府の環境保全に対する助力を約された。このほか三日間にわたり、各種の公演のほか、一九七七年インド隊のカンチェンジュンガ登頂報告が、クマール隊長（N. Kumar）、登頂者のプレムチャンド隊員（Maj. Prem Chand）からなされた。

日本からは、国分勘兵衛氏が所有されていた、英第三次エベレスト登山隊（一九二四年）のフィルム（コピー）を持参、会場で上映したあと、IMFに寄贈した。ちょうど会場には当時の隊員であったオーデル博士（Dr. N.E. Odell）が九十歳に近い高齢ながら参列されており、旧懐の情おくあたわざるといったところだった。その後もサリン会長邸で再三オーデル博士と歓談したが、非常に御壮健のようにお見受けした。

もう一人、日本登山界にとって忘れることの出来ない人に会うことが出来た。ラフール教授（R. Rahul, ネール大学）である（注2）。ラフール氏は日本のヒマラヤ登山黎明期に欠くことの出来ない人である。マナスル登山偵察行に際し、一九五二年二月、私は木原均氏とともにネパール入国の手続きのためインドに飛んだ。インドの支配下にあった当時のネパールは、その入国手続きにはインドの許可を取付けなければという考えから、日印合同登山の計画も持ち出したし、また駐印日本代表機関にも依頼したが、その斡旋は拒否された。途方に暮れながら、カルカッタで紹介されたラフール氏を探し出すことに全力を尽し、やっとデリーのとある街角の屋根裏で、学究の徒（民族学）ラフール氏を尋ねあてた。ラフール氏は言下に、ネパールは立派な独立国である、直接交渉しなさい、という忠告をしてくれた。それがきっかけとなって入国を果し、ネパール国王からはマナスルは登頂するまで日本人だけに許可を与えるという確証を得ることが出来たのである。そのあと、ラフール氏とともにダージリンに入り、ヘンダーソン夫人の努

力で、マナスル登山のシェルパをも契約した。もし、ラフール氏との出会いがなかったら、日本のマナスル登山があのようなかたちで実現したかどうか、とまで考えており、この陰の功労者と、この式典での再会を喜び合うことができた。

全体を通じ、ヒマラヤン・クラブとインディアン・マウンテニアリング・ファウンディションとは性格を異にするが、互いに補完しながら今日の発展を遂げているという印象を受けた。一つには、モディ、サリン両会長の人となりによるもので、これはインド登山界のために慶賀すべきである。

ともかく、この半年足らずのあいだに、中印両国の登山界代表者に接したわけであるが、みんなヒマラヤに対する情熱を持つ人たちばかりである。これらの人たちは戦後の新らしい歴史をたどらなければならない宿命にはあったが、しかし将来、純粋に登山の立場から見ると、国際問題は遠くにかすむ存在であり、日本が仲を取り、国境を接する両国がヒマラヤの山頂で手を握るというような思いをめぐらしながら、インドを去ったものである。（談）

〈注1〉

史占春　元バスケットボール選手。登山に転向、新中国登山界をリードする。一九五六年＝ムスターグ・アータ、クングール山群九別山の中ソ合同隊中国側隊長として登頂。五七年＝貢嘎山登山隊長。同山に登頂。六〇年、七五年＝エベレスト登山隊長。

王富洲　一九五九年ムスターグ・アータ登頂。六〇年＝エベレスト登頂。六四年＝ゴサインタン登頂。七五年＝エベレスト登山隊員、登山隊党委員書記。

劉大義　一九五七年貢嘎山登頂。五八年＝中ソ合同レーニン峰登頂。五九年＝ムスターグ・アータ登頂。七七年＝トムール峰登頂。

袁揚　女性登山界の指導的立場にある。北京地質学院卒。一九五八年＝中ソ合同レーニン峰に参加、六九〇〇メートルに達する。祁連山脈氷山主峰に登頂。五九年＝ネンチンタングラ東北峰の女性登山隊長。ムスターグ・アータ登山隊副隊長。六一年＝ク

ングール山群九別山女性登山隊長。

潘多　チベット族女性。一九五九年＝ムスターグ・アータ登頂。六一年＝クングール山群九別山登頂、当時七五九五メートルの世界女性登頂記録を樹立。七五年エベレスト登山隊副隊長として登頂。

〈注2〉

ラフール氏が吉田宏氏に提供された資料によれば同氏の略歴は次の通り。

一九四三年から四五年にかけての、チッタゴンからカラチ、カシミールからケララの聖地歴訪が生涯の方向を決定づけ、現在もヒマラヤ山域の旅を継続している。一九四六から五二年にかけては、数回にわたって中央ヒマラヤ探査隊に参加、特に五二年春にはエベレスト登山隊に加わった。そして同年夏に渡米、ハーバード、コロンビア両大学で二年間、中央アジアの研究に従事する。一九五五年から二年間は、仏教修得のため西ヒマラヤ山域の諸寺院に住み込む。インド政府から五七年夏、北方国境警備所（Arunachal Pradesh）所属の研究生に認可される。一九五九年春デリー帰着、以来ネール大学でヒマラヤおよび中央アジアの研究と指導にあたる。

この間、一九六四年（三月～六月）、印ソ文化交流の一環としてソ連中央アジア研究センターで、また七〇年（三月～六月）ユネスコの欧州中央アジア研究所でそれぞれ研修する。

〈編者注〉　本稿は、それぞれの訪問の直後なされた談話をもとに、片山全平氏がまとめたものである。

穂高宣言と大峰大台アピール

—自然保護一九七七—八

渡辺公平

上高地風景保護の公開状

「このたび、松本市に開かれた信濃山岳研究会に、来会したのを機会として、私は松本市から遠くない上高地温泉のために、温泉のためではない、日本アルプス登山の中心点のために、将に敬虔なる巡礼の心を以て、日本アルプスという厳粛なる自然の大伽藍に詣でる人々のために、同地にある美しい森林の濫伐に関して、公開状を提出する…」

上高地の森林濫伐に関しての公開状、あわて者ならショックを受ける文字である。いったい誰が、いつ書いた文章なのであろうか。誰でもちょっと信じられない一大事件であるからだ。

しかし安心して頂きたい。これはわれわれの大先輩、小島烏水さんが大正のはじめに書いた「上高地風景保護論」の書出しで、『日本アルプス』第四巻に収められている昔の話である。

われわれの年代の登山者にとっては、そんなことが上高地でもあったのかと意外に思うだけだが、この文章を読んでみると上高地も明治の終り頃から大正のはじめにかけて、森林が濫伐された時代があったらしい。小島さんはその

小論の中で次のように書いている。

かつてウェストンが森林の中の梢と梢の間にハンモックを吊り、満身に月光を浴び、玉露に濡れた「あの愛すべき森林が、商人に惜し気もなく払い下げられた。それも払い下げに依って土地の生産力を大に潤おすわけならば格別であるが、若干の価をも得られべきでないことは、樹木を見ると大概わかってしまう。売る方のみでなく、現にそれを買った商人は、樹も小さいし、巣を喰っているし、運搬は不便だし、一向引き合わぬと愚痴を零しながらドシドシ斧を入れさせる。その材木を何に使用するかと問えば、薪材にして潰すより外、致し方ないと言っている。一昨々年は温泉宿付近、前穂高一帯の森が空地になった。友人亡大下藤次郎氏がここで描いた水彩画は、今では森林そのもののためにも記念になった。昨年は河童橋から徳本峠まで、落葉松の密林が伐り靡けられた。本年は何でも田代池の椙を掃ってしまうのだそうであるが、或はもう影も形も無くなって屍体が方々に転っているかも知れない」

「そうして山骨は露出し、渓水は氾濫し、焼くが如き炎日は直射し、日本アルプス第一の美麗なる峡谷は荒廃し、欝積熱烈の緑の焔は、白ッちゃけた灰になり、その上に焼岳の降灰が積って、生々欣栄の姿を呈した『生の谷』が醜い『死の谷』に変る日も遠くには来ないであろう……」と論じた後、一戸の温泉宿や槍ヶ岳はどうなっても仕方がないが、「人間霊魂の内部に潜在する自然に対する驚異の心の消耗は、やがて人情の上に倒影して恐怖すべきほど乾燥にして露骨なる時代を、荒廃の谷地に象徴されはしまいか」と小島さんらしい精神論をぶって、森林を管轄する当局にその保護をうったえているのである。

「穂高宣言」前後

日本の自然、日本の山を愛する人間にとって現在の上高地は聖地の如き存在だが、半世紀少し以前には、小島さんの言葉を借りて云えばこんな「残虐なる破壊」がこの聖地でも行なわれたのである。

しかし昭和九年国立公園に指定され、登山者以外の国民からもかけがえのない美しい渓谷として国宝視されるようになってから久しい昭和三十年代になっても、この上高地の自然景観をケーブルカーや観光道路の建設によって破壊しようという企てのあったことを、われわれは忘れることができない。

その環境破壊の暴挙に歯止めをかけたのが、三十八年十月、上高地で開かれた日本山岳会支部長会議で、西穂高のロープウェイと上高地スカイライン建設計画に対する反対が支部長会議の名において決議され、要望書が厚生省国立公園部長と日本自然保護協会理事会などに提出された。このことは、『山岳』第六十九年を開くまでもなく、まだ会員諸氏の記憶に新しいところである。

小島さんの「上高地風景保護論」を第一次の公開状とするならば、この支部長会議の要望書は、上高地の自然を守るために提出された第二次の公開状といっていいかも知れない。

そしてそれから十年余り後の五十一年七月、日本山岳会は上高地の山岳研修所で開かれた自然保護委員会の第一回上高地集会において「穂高宣言」を採択、発表した。こじつけになるようだが、ぼくはこの「穂高宣言」を第三次の公開状だと内心思っているが、自然保護に対する日本山岳会自然保護委員会の考え方を素直に表わしているので、会報三七六号に掲載されてはいるが、記録として全文を紹介しておきたい。

〈日本山岳会「穂高宣言」〉

清冽な梓の渓流と、そこから仰ぎ見る壮厳な穂高連峰を、我等の先達はこよなく愛し、親しみ、学び、そして尊び、その美しさに心打たれたのである。

本会は、明治三十八年の創立以来七十余年、常に自然保護を重視し、今日もまた我等はこの聖なる近代アルピニズム発祥の地に集いて、偉大な先達の足跡をしのび、その気高い自然保護思想に新たな感銘を覚えるものである。

一昨年国民的合意によって制定せられた〝自然保護憲章〟によっても明らかな如く――自然をとうとび、自然を愛し、自然に学び、美しい自然、大切な自然を永く子孫に伝えよう――という精神は、今や日本中の美しい自然は日本人共通の財産であるという認識である。

しかし、時代と共に登山人口や観光客は急増し、交通の発達とあいまって、各地の美しい自然景観地は観光地化の一途をたどりつつあり、大勢の人の持ち込む一握りのゴミが、美しい景観を損わしはじめている。

このことはまことに悲しむべき実状である。我々は〝このかけがえのない美しい日本の自然〟を守るという自然保護の原点からの発想に基き、上高地、穂高連峰におけるクリーン・エリアの実現を、さらには日本各地におけるキープ・クリーンの実現を、ここに集いし各位の総意において堅く誓うものである。

右宣言する。

この宣言にも明らかなように自然保護委員会は、五十一年度の活動方針をゴミの問題に絞り、当面は岳沢をクリーン・エリアとしてとりあげ、まず会員の自然保護思想の啓蒙からはじめようということに決め、

「山をきれいに、ゴミは持ちかえろう」

というスローガンの下に、全会員に模範になってもらおうという運動を展開することになったのである。

そして二日目の十一日には一同岳沢小屋まで登り、この地域の実態調査を行なった。

穂高宣言にうたわれた岳沢クリーン・エリア――つまり岳沢、前穂、奥穂を結ぶ逆三角形の地域を自然保護のモデル地域に設定し、徹底したゴミの一掃、ゴミの持ち帰り運動のリハーサルのようなものだったが、武田満子委員の報告によると、夏山ルートは比較的汚れが少なかったが、春山のテント場に当るガレのあちらこちらにゴミの山が残されており、残念ながら本格的な登山者に対する自然保護思想の啓蒙の必要なことを痛感したそうである。（会報三七五

大峰・大台ヶ原の問題点

その年の十月三十、三十一の両日、第二回目の上高地集会が行なわれたが、この会では新潟と大阪の二地域における清掃登山や清掃ハイクの報告があり、その詳細は三上博民氏が会報三七八号に伝えている。この集会ではゴミ問題の他に関西の田村聡明氏から大峰・大台ヶ原における村道建設による自然破壊問題が提起された。

自然保護委員会が五十二年度の取組むテーマとしてとりあげた大峰山系白川又川林道の自然破壊に対する反対運動はこの集会から生れた。

委員会はまず破壊の現状視察から行動を起そうということで、五十二年六月十一、十二の両日現地を吉野山岳会会長の米田信雄氏と田村、出口両氏ら本会々員の案内で視て回った。

その視察行の詳細は会報三八六号に「大峰・大台からのアピール」として報告されている。それは奈良県当局及び環境庁に対するものであって、十一日夜大台教会山の家の集会において採択されたものである。甚だ隠健で良識的なもので、取材のため同行した朝日、毎日、読売、ＮＨＫなどの若い記者から、もっと具体的にとか強烈にとコメントを求められたが、その時点で、日本山岳会として適切妥当だと考えたアピールは次の通りである。

日本山岳会自然保護委員会は六月十一、十二日、大台ヶ原、大峰山系の自然保護の問題について視察し、つぶさにその現状を確かめて来た。大台ヶ原、大峰をめぐる自然破壊の現状はわれわれの想像を遥かに越える甚だしいものであった。

われわれはこの機会に取りあえず以下の二点を提言し、関係当局の再検討を促したいと思う。

(1)白川又川谷流域の伐採計画を再検討していただきたい。
(2)白川又川谷奥地の普通地域を特別保護地区へ昇格していただきたい。

この視察行の第一目標が白川又川谷に置かれたのは、この北山川の支流に建設されつつある林道工事によって、いかに酷く自然が破壊されてきたか、また現に破壊しつつあるかを皆の目で確かめるためであった。

しかも奈良県はこの白川又川林道を更に延長して、現在大峰山系に唯一つ残されているというその奥地の自然林を皆伐しようと計画しているからで、すでに昨年奈良県自然保護協会や奈良勤労者山岳会と協力して大台ヶ原・大峰の自然を守る会が、白川又川の伐採計画反対申入書を奥田奈良県知事と小沢環境庁長官に提出していた。

「アピール」にも書いたように、工事中の林道の長さは七キロ余程度にすぎないが、自然破壊の現状はわれわれの想像を遥かに越える酷いものであった。これじゃこの林道の延長だけは何としてでも食止めねばならぬというのが、現場における全員の結論であった。

しかし自然保護問題のむずかしいのは人間の生活がかかわりあっていることである。ここでもその問題がないわけではない。村の人たちとの十分な話合もしないで、一方的に反対、反対とむしろ旗をおっ立てて進むほど山岳会は非常識な行動をとろうとは思わない。

伐材を生活の支えとしている村民も存在している。だから伐採を直ちに中止してくれなどとわれわれは要求しない。伐採計画を再検討する、つまりこれ以上林道の延長を強行しなくとも、伐採事業は可能なのではないのか。林道の延長によって渓谷を破壊してしまってはモトもコもなくなるばかりでなく、何の関係もない村の人たちまで自然破壊の結果発生することの予想される、大きな災害にまきこまれねばならないかも知れないのである。

奈良県知事への要望書

このアピールの結果については、二ヵ月後の八月二十七、二十八両日上高地山研で開かれた第三回上高地集会でその一端が報告された。

この集会では山本良三委員長より五十一年度の委員会の活動経過が報告され、五十二年度は前年度の計画に則り現地調査（大台・大峰などの）と啓蒙の二本建で行くという方針が示された。そして各支部の報告が行われたが、その中で、田村委員は「日本山岳会の文書による県に対するアピールは強力な圧力になったと思う。県は白川又川谷の林道の本年度工事はやらず、最少限で喰いとめるよう努力しているようだ」と報告している。

たしかに、われわれの大峰・大台視察と奈良県知事に対するアピールは無駄ではなかった。反響のあったことは事実であろう。しかし、だからといってわれわれ委員会はそれに満足をするほどお人好しではない。田村委員にしても一応の評価をしただけのことなのだ。

相手は行政機関である。そうあっさりと人民の意見や提案に耳を傾け、施策にとり入れたりしてくれるものでないことは、屋久島や尾瀬や秩父連峰のスカイライン、野呂川スーパー林道などの経験で知り抜いている。

アピールの後、日本山岳会は西堀会長、山本自然保護委員会委員長の名で、奥田良三知事宛に「大峰・白川又川流域の林道建設中止の要望並に質疑について」という要望書及び質問を提出した。五十二年九月である。

これに対して奥田知事名で十一月二十一日付回答が寄せられた。その全文は会報三九三号に掲載されているので、ここでは省略するが、やはりわれわれの予想していた通り、決してわれわれを満足させるものではなかった。

われわれの最も強く奈良県に要望したものは、現在以上白川又川渓谷の自然を破壊しないために、林道の建設を凍結または中止してもらえないか、ということであった。

ところが、奈良県からの回答にはこの肝心の点がはっきりしない、ぼかされている。がよく読んでみると本音は林道工事は継続するらしいし、また事実、工事が再開されていたことは十二月十七日、田村聡明、谷幸三氏らの現地視察で明瞭となった。本会への回答は典型的なお役所の作文に過ぎなかったのである。

五月三十日の自然保護委員会は、この回答になっていないお役所一流の文書を慎重に検討した結果、奈良県知事宛西堀会長、山本委員長の名において次の如き要望書を提出することにした。

〈大峰・白川又川流域の林道建設中止並びにその自然保護について重ねて要望〉

昭和五十二年九月　日付本会の「大峰・白川又川流域の林道建設中止の要望並びに質疑について」の貴見の昭和五十二年十一月二十一日付林道一〇七号によるご回答を感謝致します。また自然を保護する基本姿勢を堅持する貴県の方針に敬意を表するものであります。

しかし、なお二、三の点について本会と見解の相違がありますので、下記の件について重ねて要望致し、且つ貴見を伺いたく存じます。

(1)　林道白川又川線の計画見直しについて。

本件について貴回答によれば伐採跡地の植栽計画のみであり、肝心の林道工事の凍結、中止に関する点が不明確であります。林道工事の自然破壊の大なることを考慮すれば凍結、中止は当然のことであります。また中流域については大栂山を越える歩道の利用、一方木材その他の搬出については架線にても可能であると思考されます。これらの点について強く再考を促すものであります。

(2)　林道白川又川線の災害について。

貴回答三における林道災害状況については、貴県ではかなり楽観的な観察をされていますが、本会の現地視察に

よる見解とは極めて大きな相違があり甚だ遺憾であります。貴回答によれば、路肩、路面と分けておられるようでありますが、路肩の崩壊は明らかに被害であり、且つ路面の崩れ落ちた事実も添付写真によっても明白であります。

このように崩壊しやすい土質、地形の所に林道を開設しようとしている現実を素直に認識される可きと思料されます。

(3) 白川又川流域についての村有林についても、買上げによる県有林への編入等により特別保護地区昇格の促進を計っていただきたいと思います。

また大台ヶ原ドライブウェイ地区における山陽国策パルプ株式会社の伐採跡地に対しても、その後の育林状況の一層の監視、指導の強化をはかり、国立公園指定の主旨に則って自然保護の実をあげられんことを切望致します。

申すまでもなく、吉野熊野国立公園は近畿の屋根として、樹齢百年を越える巨木がそびえ広大な天然林が残された唯一の地域であります。この深遠広大な森林美、渓谷美を損うことなく、国民的遺産として末長く子孫に伝えるのは現代に生きるわれわれに課せられた重大な責務であります。ここに再度の要望書を提出すると共に、ご回答をお願い申し上げます。

以上

「行政」が国民の信頼を得るためにも奥田知事や林道課長の誠意ある回答を強く期待しているが、果してどんな返書が来るか。

積雪期登攀記録〈I〉

剣沢大滝遡行（一九七八年三月）

鵬翔山岳会

剣沢大滝の登攀史（編者注1）

黒部川の支流である剣沢は、剣岳の東面の雪渓の水を集め、豊富な水量をもって十字峡で黒部川に合流している。標高二九九八メートルの剣岳頂上より九六〇メートルの十字峡まで、標高差は二千メートルを越え、その間深いV字谷を形造っている。特に中流の二俣下流より大滝付近は廊下状をなし、そこへ入り込むのは容易でない。

この大滝は幻の大滝と呼ばれている。長い間神秘のベールにつつまれ、一九六二年、鵬翔山岳会により九段の滝であると解明されるまで、二段とも、三段とも言われていた。余りに深い断崖絶壁のために、黒部川をへだてて棒小屋沢周辺から滝の一部が遠望できるほかは、大滝のふところにはいり込まなければその姿を見ることもできないのである。ただ単にこの滝を見るだけでも道なき道をとらねばならず、誰もが見るというわけにはいかない。この滝が幻の大滝といわれ、いまだに神秘に満ちている由縁である。

現在までに、この大滝を目指した人々は、知る限りでは数える程しかないが、その発見から試登、無雪期の初登

攀、そして積雪期の初登攀に至る主な登攀史をまとめてみると、次の通りである。

一九二六年　冠松次郎、剣沢大滝の所在を確認する。

一九六〇年五月　京都大学山岳部（田村孝夫、安原啓示、宮木靖雅）、大滝を下方及び上方より偵察する。

一九六二年九月十日～十五日　鵬翔山岳会（鈴木鉄雄、安久一成）、十字峡より大滝下部を偵察する。

一九六二年九月二十五日～十月二日　鵬翔山岳会（中野満、鈴木鉄雄、安久一成、飯田平八郎、鈴木彰男）、十字峡より滝付近まで往復する（一般にこの記録が剣沢大滝の初登攀とされている）。

一九七六年五月三日～九日　大阪市立大学山岳部（和田城志、片岡泰彦）、十字峡より剣沢を遡行、大滝を登攀し別山乗越に達す。剣沢の初完全遡行である。

一九七七年四月　秀峰登高会（山崎祐和、畔柳彰、紺野康則）、十字峡より大滝を経て別山乗越まで、剣沢完全遡行を成す（編者注2）。

一九七七年八月十三日～十九日　大阪わらじの会（池上昌司）、単独で大滝登攀。

一九七八年三月四日～十一日　鵬翔山岳会による本稿の積雪期初登攀。

剣沢大滝の積雪期遡行

当会のOB故安久会員等によって初めて遡行された剣沢大滝を、「冬に登ろう」と決めてから五年目を迎えた。昨年の夏に大滝を登り、今年の正月には冬の大滝に挑戦したが、その時は結局牛首尾根よりかすかに吹雪の大滝を垣間見るに終ってしまった。

直ちに再起を期した私達は、「できるだけ二月中に」ということで休暇等のやりくりをしたが、結局実現は三月の

上旬になってしまった。

私達の登攀計画の概要は次のとうりだった。すなわち隊を三つに分け、アタック隊と二つのサポート隊を編成する。前半を担当するサポート隊及びアタック隊は、赤岩尾根より鹿島槍を越え牛首尾根を下降、サポート隊は尾根上に残り交信にあたる。アタック隊は十字峡へ降り、剣沢遡行を開始、一日で二俣まで抜ける。帰路はハシゴ谷乗越より、ふたたび黒部川に降り立ち、赤沢岳北西尾根を登り返し、赤沢岳にて後半を担当するサポート隊と合流。屏風尾根を下山、というものであった。

三月四日（曇後雨）

大町より二台のタクシーに分乗し、大谷原まで入る。河原沿いに林道を歩くが、数日前のトレールがあるだけで歩きづらく、回復して来ると思われた空からは、雨が降り出した。赤岩尾根の急登にさしかかると、苦しいラッセルが始まり、十日以上の食料と多すぎるほどの登攀具でピッチも鈍る。雨はいつしかミゾレになり、高千穂平直下では湿雪に変った。時間は早いが今日はここまでとし、乾いたシュラフにもぐり込む。

〈タイム　大谷原六・四〇～高千穂平直下一二・四〇〉

三月五日（曇後晴）

僕らを包んでいたガスもいつしか消えさり、まぶしいくらいの青空が拡がる。昨夜の雪はさほどでもなく、快調なペースで尾根をつめる。最後の雪壁は状態がよく、右に上り気味に登り稜線に出た。冷池にはテントが一張あるだけでひっそりとしている。大休止の後、鹿島槍を越え牛首尾根を下降する。

胸から頭上までのラッセル、湿雪のためシュラフもつかえず過ごした半雪洞、視界数メートルの風雪の中で辿りついた鹿島槍の頂上、と正月の黒部脱出の思い出が鮮明に思い出される。あの時は結局、牛首尾根の登りだけで、全日行動したにもかかわらず四日を費やしてしまった。

途中天気図を書く井上を残し、牛首山に到着する。

〈タイム　高千穂平七・一〇～冷池一二・三〇～牛首山幕営地一六・〇〇〉

三月六日（晴）

今日の行程を考え早起きし、全員で大滝が見えるピークまで同行する。そして記念撮影後、サポート隊の励ましの声に送られ、まだある程度クラストしている牛首尾根を一気に降る。正月合宿の時に残した赤布は、ほとんどうまってはいたが、下降をスムーズに進めるのを助けてくれた。途中前回デポしたハーケン類を回収する。もうここからは、雪にうまった黒部川も見え、その流れの音さえも聞こえてくる。正面には大滝が完全に望まれ、水の流れも確認できた。尾根はいよいよ急峻になり、快適なアイゼンの音を聞かせてくれた雪も、ドロドロで腰までもぐるようになってきた。その上手掛りのブッシュは雪に埋れているので、やむなくアップザイレンをする。これを四十メートル二回で終え、黒部川右岸に降り立つ。

十字峡は話通り完全に露出しているが、百メートル下流にスノーブリッヂがあり、難なく左岸に渡る。しかし夏道はキノコ雪状のオーバーハングした雪壁になっており、これは下流より高巻く。そして吊り橋のたもとにアップザイレンで降り立つ。吊り橋はワイヤーの上まで雪で埋っていた。恐る恐る一人づつ渡ってから、別山北尾根末端に雪面を切り、ツェルトを張った。

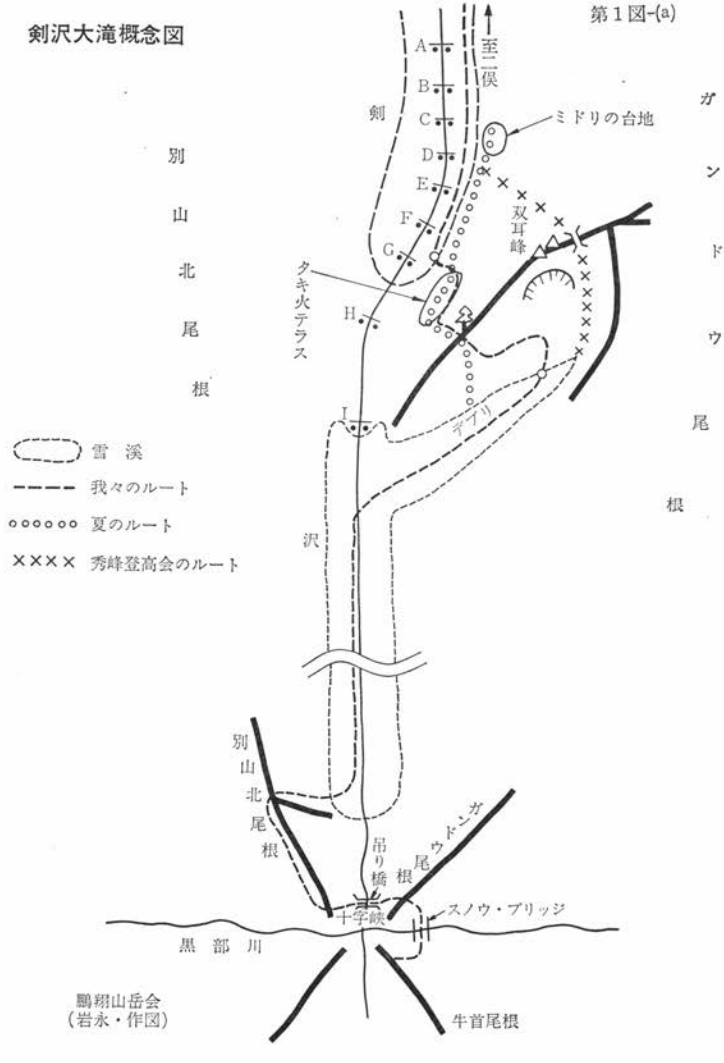
〈タイム　牛首山七・一〇～デポ地一一・〇〇～十字峡一三・〇〇〉

三月七日（晴）

午前二時起床。外に出ると気温は少々高いが満天の星空で申し分ない。余分な食料、登攀具等を残し、できるだけ身軽にしてスピーディーに行動することにする。せっかくの早起きも気持だけが先行し、ヘッドランプをたよりに北尾根を登り出すころには時計は五時を過ぎてしまった。そして暗闇の中、夏の記憶をたよりに二十分ほど登って、剣

剣沢大滝概念図

第１図-(a)



沢側の小尾根を下降する。ここで一つ尾根をまちがえたのに気づいたが、そのまま雪面をトラバースし、見覚えのあるルンゼ上に出た。ルンゼ内は氷化しており、ブッシュを支点に四十メートル二ピッチのアップザイレンで川床に降りる。沢は完全にデブリでうまり、青白く光っていて、I滝直下までは難なく達する。

水は思ったより多く、水しぶきこそないが、まだまだ水勢も強く、滝の直登は全く考えられない。岩かげでゼルブストバンドを着け、上部のタキ火テラスまでのルートを追うが、無雪期とは様相が一変していて不安定な氷雪におおわれており最悪そのもので、時間がかかりそうだ。でもおもしろいことに、無雪期には見向きもされなかった左手のスラブが、今ではタキ火テラスに抜ける唯一の登路のように思えた。

剣沢大滝は、上流からABCの順に名付けられたA滝からI滝までの九つの滝に分れており、その内最下段のI滝が最も大きい。I滝は約四十メートルの高差を有し、とうとうと流れ落ちる豪快な滝を成している。このI滝とくらべると、他の滝はいずれも規模は小さく、なんといってもこのI滝を如何に突破するかが、登攀のキーポイントであった。特に積雪期では、上部の滝はほとんどデブリにおおわれていると考えられるので、氷化したI滝付近の側壁をどう乗り越えるかが積雪期の登攀の課題となる。

夏季のルートは、滝の向って右側に高く伸び上っている岩稜を乗り越えて、岩稜の向う側にあるタキ火テラスと称するブッシュ帯へ下っている。岩稜の上部は二つの岩峰からなる双耳峰を形造っており、ルートは滝の落口から双耳峰の頂上へのびる岩稜の真中あたりを横断してタキ火テラスへ下る。この岩稜の乗越地点には杉の木が一本生えており、この木を支点にして振り子トラバースして向う側に渡り、あとは懸垂でタキ火テラスへ下るのである。この杉の木へは、双耳峰直下のオーバーハングした岩壁の下に急峻な草付まじりの壁がつづいていて、これを左上に直上するのが、夏季のルートであり、また、昨年五月、大阪市立大の二人によってとられたルートでもあった。

ところが、その草付は今はのっぺりした悪そうな氷雪壁となって、とても手がつけられそうもないのである。だ

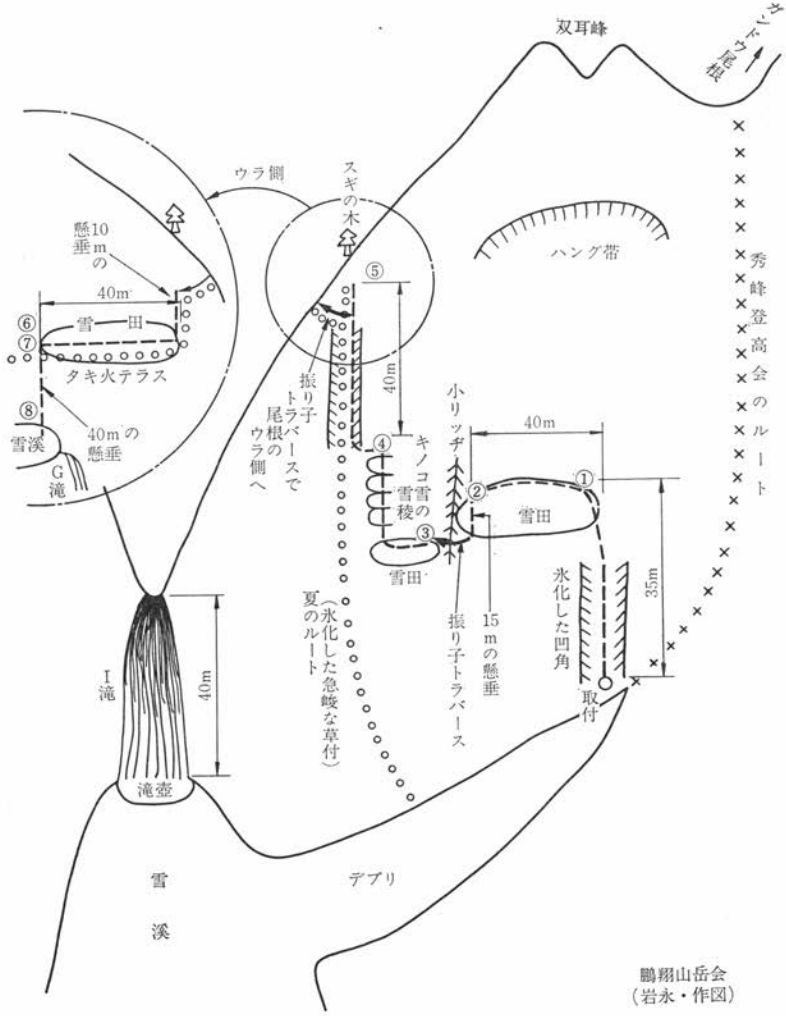
が、その左手に見えるスラブには横に拡がる二つの急峻な雪田があって、その左端には下から氷化した凹角状の岩溝が伸び上っている。夏には考えもしなかった、その岩溝から雪田へ上り雪田をトラバースして夏の草付ルートの上部に出る迂回ルートが、どうも見込みありそうに見え、他にはどうにも打つ手がなさそうなこともあって、ためらわずこの迂回ルートを試みる決心をした。

双耳峰のコルに通じるルンゼが押し出したデブリを、一五〇メートルほど登り、最初の雪田に通じる水化した凹状部にアタックする。岩永がトップで始めはダブルアックスで登り出すが、結氷が悪く、下のスラブが露出してしまう。体は常に後に引かれるが、氷と岩との隙間に手を入れ強引に登り、腕力が尽きる直前に傾斜の落ちた雪田に這い上る。雪田は氷化している。これをダブルアックスで左上に登り、最上部にハーケン二本を打ち込む（第一ピッチ、三十五メートル）。

次に氷雪壁を左端までほぼ水平にトラバースする。ピッケル、アイゼンはギシギシと気持のいい位にきく（第二ピッチ）。ここで雪田は小リッヂにより切断される。これを左へ振子気味十五メートルのアップザイレンで突破し、左の雪田に出る（第三ピッチ）。つづいて雪田を左に上り、つづいてキノコ雪状の雪稜に両腕を肩まで差し込みながら強引に直上する。そして垂壁下を左へトラバースし、夏の初登ルートに合流した（第四ピッチ）。このころより高く登った太陽が壁全体を温め、いままで静かだったこのスラブ帯に氷塊が落ち始めた。この雪田のトラバースは丁度、双耳峰直下のオーバーハング帯の真下に当るが、このハング帯にはびっしりと氷のつららがぶらさがっており、不気味に張り出してわれわれにのしかかっていた。これが陽の照り始めると共に、バラバラと落ち始めて来たのだ。そもそもこのルートに決めた時に、早く雪田を横断し切らないとあのつららは危ないな、と思っていた。それで凹角の第一ピッチから極力早く登ろうと心に決めてはいたのだが、この凹角の結氷状態が不安定な上傾斜も急で馬鹿にならないので、心はあせっても思うようにはかどらず、意外に時間を喰ってしまった。思えばこのピッチが技術的にはこのル

剣沢大滝Ⅰ滝の登攀ルート

第1図-(b)



ートで最もきびしい所だったように思う。そんなわけで、二ピッチ目からの雪田の横断は、安定した雪に助けられながら素早く行動し、何とか危険な状態におち入る前にぬけ出そうと必死だった。トラバースの途中で、出来ればハーケンを打ち安全を期したかったが、雪田の最上部を岩壁伝いに横断していったものの適当なリスもなく、打つことすら出来なかった。雪田の下方は四、五十メートル切れ落ちているし、このトラバースもかなりハラハラさせられた。とにかくこの数ピッチはずっと緊張を強いられ、かなり手強いものだった。

トップの岩永がキノコ雪の雪稜を登り切り、ラストの西村が二つ目の雪田のビレー点から二、三歩横断を始めた時だった。突然、人間大の氷塊がバラバラと、それまで西村の立っていたあたりへ落下してきた。文字通り間一髪というタイミングで、どらやら事なきを得たが、まったく危ないところだった。

落氷がものすごいが、こうしてわれわれは一応安全な小テラスに三人集結した。ここでトップを井上と替る。井上は安定したフォームで少しずつ高度を稼いでいく。ルートになっている凹状部には日電隊の針金や鉄クイが残っており、よく朽ちないものだと感心させられる。このピッチを登り終るころには、上部より流れる雪解水で手袋、ヤッケともびしょ濡れになってしまった（第五ピッチ）。

タキ火テラス上の杉の木を支点に十メートルのアップザイレンでテラスに降りる。テラスは四十五度位の雪壁になっており、これを最上部まで左へトラバースする。夏の快適なテラスは消え、ブッシュは一本も出ていない。リスを掘り出しそれに思いきりハーケンを打ち込み、井上と西村を迎えた（第六ピッチ）。大滝上部は左右の沢より落ちる雪崩のため完全に埋り、緑の台地などは跡形もない。井上がザイルをたよりにテラス下部を偵察に行った。直下の滝までも埋り、一気に下降できるという井上の声に思わずニヤッと笑う。

時間も早すぎるので、三人が腰を下ろせる位のテラスを切り、お湯を沸しながら雪崩をやり過ごし、その間ボルト二本を打ち込む。そして谷全体が静けさを取り戻すころに、四十メートルのアップザイレンでG滝の上に降り立っ

た。その上はもうすべての滝はデブリで埋っていた。われわれは難なくいくつものデブリを越えて二俣に到着した。

〈タイム　十字峡五・〇〇～大滝取付七・〇〇～タキ火テラス一二・三〇～同テラス発一五・三〇〉

三月八日（晴）

二俣よりハシゴ谷乗越を越え、内蔵之助谷を下る。その後黒部川を赤沢岳北西尾根末端までたどる。

〈タイム　二俣五・〇〇～北西尾根末端九・〇〇〉

三月九日（晴）

北西尾根を登り赤沢岳へ。そしてスバリ岳とのコルで後半サポート隊と合流した。

〈タイム　北西尾根末端五・〇〇～赤沢岳一二・一〇～コル一二・四〇〉

三月十日（雪）

コルより屏風尾根を下降、大沢小屋経由で扇沢駅へ。途中保科が数メートルスリップし、左足首を骨折、背負って下山した。

〈タイム　コル八・〇〇～扇沢駅一二・四〇〉

〔岩永慎太郎〕

〈記録概要〉

隊の構成　アタック隊（岩永慎太郎＝チーフリーダー、井上茂、西村繁幸）
前半サポート隊（轟哲之＝リーダー、小林日出志郎、石井孝行）
後半サポート隊（宮下勝彦＝リーダー、新井明博、保科正之）

目　的　剣沢大滝の積雪期初登攀

活動期間　一九七八年三月四日―十日

行動概要　三月四日、大谷原―赤岩尾根高千穂平直下。五日、冷池小屋―鹿島槍―牛首尾根―牛首山。六日、牛首尾根―十字峡。七日、大滝を登攀―二俣。八日、ハシゴ谷乗越―内蔵助平―赤沢岳北西尾根末端。九日、赤沢岳―スバリ岳とのコル。十日、屏風尾根―扇沢。

〈編者注1〉

本項は山崎祐和（秀峰登高会）、竹中昇（早大山岳部ＯＢ）両氏の寄稿による。

〈編者注2〉

この時の記録について、山崎祐和氏から次の寄稿があったので、参考記録として記載する。

剣沢遡行―一九七七年四月の記録―

山崎祐和

剣岳西面で、池ノ谷中央ルンゼ―チンネ左稜線中間ルンゼの登攀を行った後、四月二十七日、僕は黒四ダムに下った。明日二十八日に、パートナーの畔柳と紺野に会い、黒部川を下る予定だ。二人とも剣沢へは昨年の夏に入っており、大滝を越えて遡行したい僕の気持を理解して喜んで同行して呉れることになったのである。

僕が最初に剣沢遡行を目指したのは、一九七二年の夏にさかのぼる。その時は雨に降られ怪我人が出て、大滝尾根左稜で引き返したが、はるかに大滝上流を眺めて五月の方が雪渓の状態がよく楽ではないかと考えた。そして七四年五月、十字峡から下部の偵察をした後二俣からも上部偵察に下り、大滝尾根の双耳峰を確認した。この時、遡行ルートの青写真は出来上ったが、それから二年、悪天に妨げられるなどして、計画を実現する機会がないままに終っていた。僕の考えていたルートというのは次の通りだ。

十字峡より下部のゴルジュ帯を北尾根側に高巻き、雪渓づたいに滝の下まで行く。最下段の滝の滝壺は埋っていると思われる

が、もし雪が少なく露出している場合は、五月の雪融けで渡渉は無理なので、滝見沢より大滝尾根右稜を乗っ越し、末端壁に懸垂下降し、再びこの壁を双耳峰のコルに登る。コルより懸垂下降で水流近くまで下り、D滝の左岸を登り、上部雪渓に出る。あとは雪渓をたどり剣まで行く。メンバーは、万が一事故でも起して安心できるように、三人とした。

なぜ双耳峰のコルを通るルートを選んだかというと、鵬翔ルートは大滝の未知部分を解明するために開かれたルートであり、初登攀後、十年余り一度も登られていないので、人工登攀用具も多くなり、時間もかかるし荷も重くなる。又、トラバースが多いルートなので、小人数でラッシュする場合、事故など起きて退路を断たれる恐れがある。その点、双耳峰ルートは、過去二回の登攀によりルートを熟知していること、トラバースの部分が少なく、退路も十分に確保できる可能性があった。そしてこの計画を、十字峡より双耳峰のコルへ一日、二日目には二俣を越える、という日程で組んだ。もし大滝尾根右稜を乗越さねばならないとしても、一日余分に加え、行動三日、予備二日の計五日間と万全の計画を立てた。

さて、この計画を胸に、僕は四月二十八日早朝、扇沢より入山してきた二人と合流した。折悪しくこの日はバケツをひっくり返したような雨で、外へ出る気もせずに、雨が止むまでのんびりしようと、相談はすぐに決まった。

翌日、雨も上がり、まだ真暗闇の黒四ダムをランプの灯りを頼りに出発する。満天の星空で気持がよい。雪面も快適な固さだ。夏は一汗かかされる内蔵ノ助沢出合まで、河原の雪面を進み、難なく夏よりも早く着く。ようやく薄明るくなった内蔵ノ助沢は、水量が増し、ものすごい勢いで吹き出している。古い板切れを置いただけの橋を四つんばいで渡り、ランプをしまい、小憩する。

この付近、水流が出ており、水平歩道に登る。小沢の岩場に並べられた丸太が半分落ちかかり、しょっぱなからの濡れたへつりに思わぬ緊張をする。

黒部川は両岸からのデブリで埋まっているが、昨日の雨でデブリのデコボコがけずられた上適当に歩き易くしまった雪面に助けられ、ほとんど雪渓の上を歩く。各自思い思いの足ごしらえで、二人はアイゼンをつけて歩いている。大タテガビン沢の出合付近も大きく雪面が広がり、夏の眺望の悪い樹林帯とちがって、大タテガビンの岩壁の展望をほしいままにしている。

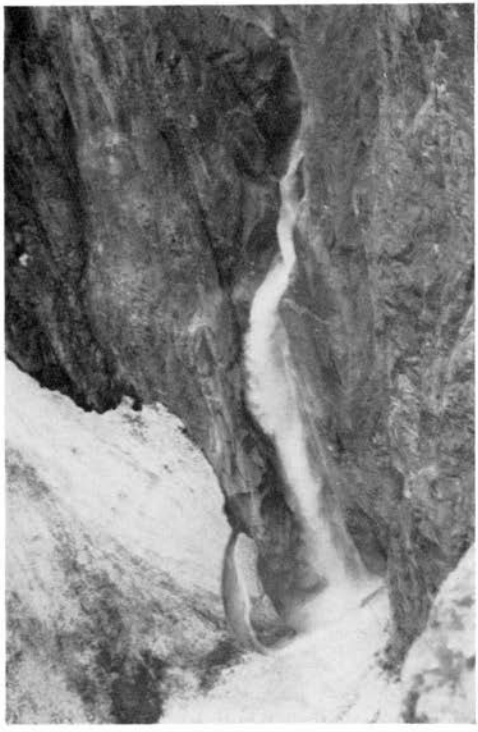
<Plate 1-(a)>

牛首尾根より剣岳を望む。
正面中央に剣沢核心部見ゆ。

(撮影・1 (a)～(e), 岩永慎太郎)

<Plate 1-(b)> ↑
剣沢大滝滝剣沢下部より大滝方面を望む。
中央に双耳峰が見える。

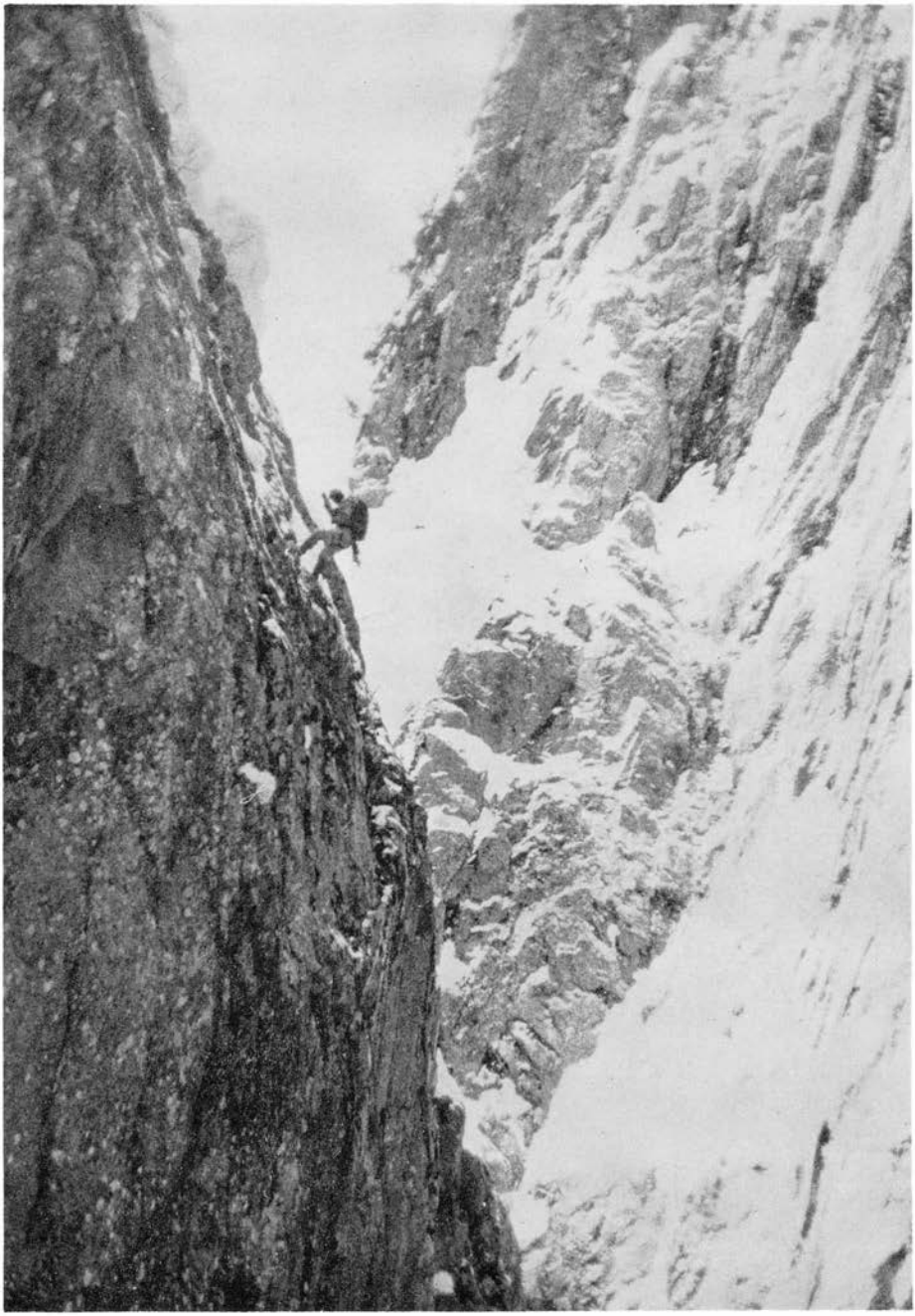
<Plate 1-(c)>
↓ 剣沢大滝Ⅰ滝



<Plate 1-(d)>

剣沢大滝Ⅰ滝　右岸側壁を登る。

1ピッチ目凹状壁を抜け雪田に出る。

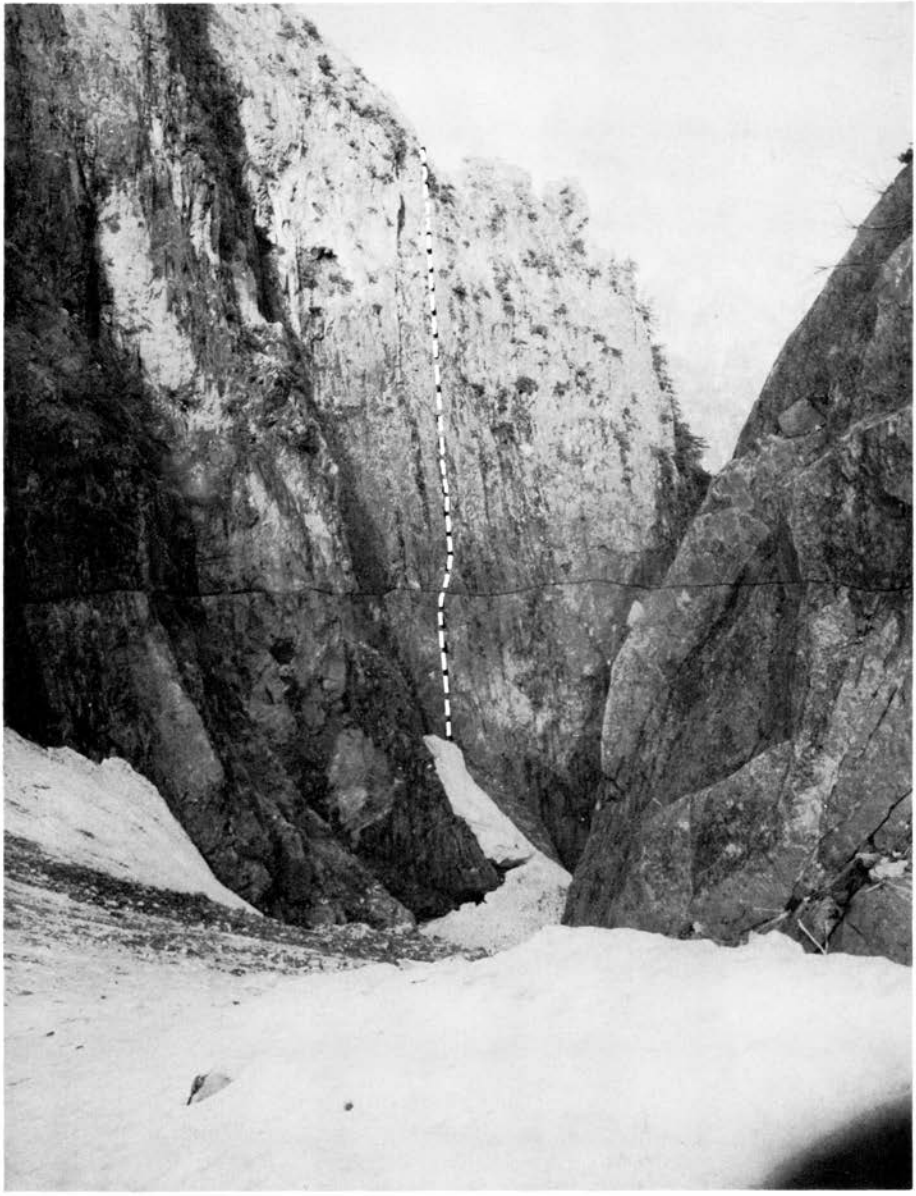


<Plate 1-(e)>
剣沢大滝Ⅰ滝　側壁を越え、懸垂で再び沢筋にもどる。

<Plate 2-(a)>

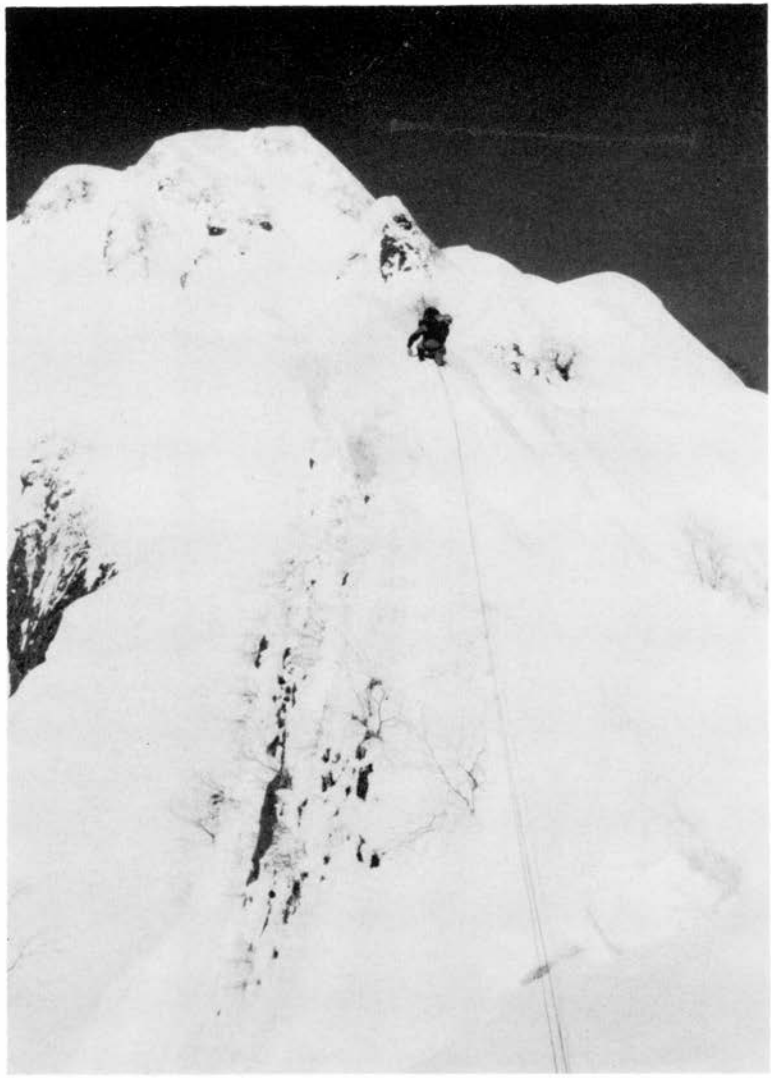
4月の剣沢大滝――ガンドウ尾根より。大滝尾根末端の大凹状壁をはさんで、右に大滝尾根右稜、左に双耳峰のある左稜が見える。

(撮影・2 (a), (b), 山崎祐和)



<Plate 2-(b)>

4月の剣沢大滝――上流より双耳峰のコルを望む。(点線は双耳峰のコルよりの 90 m の懸垂下降ルートを示す)



<Plate 3>

剣峰八ッ峰Ⅰ峰Ⅳ稜　マッチ箱付近。

（撮影・学習院大学輔仁会山岳部）

<Plate 4-(a)>

黒部丸山東壁第二ルンゼ登攀ルート——1978年3月。

（撮影・4（a），（b），山崎祐和）

別山沢出合と壁尾根が下流一杯に拡がり、まもなく別山沢出合に着く。夏から想像もつかない程広く落ち着いた盆地である。別山にもようやく日が差しはじめ、モルゲンロートに輝く岩壁群が燃えている。大量の積雪に埋められた別山のこんな眺めは初めてだ。樹林の妨げもなく、井戸の底のような夏とちがって、雪崩に埋められ河床が上がった黒部のこんな景色を誰が想像できようか。

夏の悪場の白竜峡付近は水平歩道を歩く。夏の危険地帯であるが、今は雪が多く安心できる。九時前に十字峡に着き、これからの遡行に備え、大休止しておおいに飲み食いする。

いよいよ剣沢へ入り、まず下部ゴルジュ帯を夏道沿いに高巻く。北尾根を登り、懸垂下降をして急な雪渓の上端に降り立つ。真下に剣沢が口を開けて流れていて無気味だが、グリセードの好きな私は、さっそくアイゼンをはずし谷へ飛び込むように滑降する。畔柳と紺野は、アイゼンを付けたまま、後向きで一歩一歩慎重に下って来る。対岸でのんびり見ているとダンゴの付着がひどいとみえて、中々下って来ない。「あっ」と思うまもなく、紺野が転んで滑り始めた。まるでスローモーションフィルムを見ているようである。下は雪渓が切れ、剣沢がゴウゴウと音をたてて流れている。紺野は頭を下にして転がりながら落ちてくる。一瞬血の気が引き、どうしようもないままぼうぜんとしていると、雪渓が切れる五十センチ程上で彼は奇蹟的にも止まった。そしてかすり傷も負わず、弱音もはかず、平気な顔で歩いてきた。「ハハ、滑っちゃったよ」と冗談を云ってけりがついたが、実際危なかった。

夏にはそこから更にもう一度の高巻きと二度の渡渉をしなければならないが、今は沢床が完全に雪に埋まっており、三十分で剣沢平に着く。大滝の両岸が屏風のようにそそり立つ中で、剣沢平は広々として周囲の景観を思うがままに楽しめる別天地だ。時間さえ有ればのんびりと、半日位昼寝でもしていたいくらい、春の陽光は暖かい。まだ十一時前だが、しかしのんびりもしていられない。

ザックを置いてさっそく大滝の偵察に行く、夏には高巻きと渡渉の連続で、ルート工作がしてあっても三時間はかかった滝の下までわずか十分で着く。滝壺は十メートル以上の積雪に埋まっていて、難なく大滝尾根末端壁に取りつける。

最下段のこの滝は、剣沢の水を一気に押し出し、その迫力は何度見ても圧倒的だ。只、夏に滝壺から見上げるのと違い、雪渓の高い位置から見るため、滝の飛沫も浴びず、壮絶な感じはやや弱められる。末端壁の下部ルンゼの百メートルも雪渓が完全に埋め尽している。

今日中に双耳峰のコルに達することは可能だが、怪しい雲の流れに釈然とせずに、剣沢平の岩陰にテントを張り、ルート工作に向うことにする。夏の三ピッチ目より登攀がはじまる。雪渓の上端でザイルをつけ、雪塊のチョックストーンに手をつける。雪塊は三畳分位の大きさだ。落ちそうだが、落ちないことを祈りつつ雪塊の左端と岩のコンタクトラインにルートをとる。左手のアイスハンマーをホールドに、靴を雪と岩との間にねじ込んで登り、雪塊の上に立つ。そこより左上ぎみにスラブを登り、雪崩で飛んでしまったボルトを一本打ち加え、人工登攀で越えると、すぐ階段上のやさしいフェースになり、四十メートルのピッチが終る。登攀途中より降り始めた雪が本降りとなり、そこにザイルを固定したまま剣沢平へもどる。

午後いっぱい降り続いた雪は十五センチ位積った。あたり一面真白になり、壁も困難になるように思われた。日が当りさえすればすぐ融けるのだが、谷が深いので日当りが良くない。壁の中では三～四時間しか日が当らないのだ。

翌朝、早立ちしたいのは山々ながら、雪が融けるのを待って少し遅い出発とし、七時半に剣沢平を出る。幸い気温が高く、雪は付いていなかったが、水が流れていた。固定ザイルをユマールで登り、登攀を開始する。オーダーは、ルートを知っている関係上僕がトップになり、二人は荷上げを兼ねてユマールで登る。そこから水流の中を左上するが、同じルートを今まで二度登っているとはいえ、四年もの間、手垢のついていないルートであり、水も流れていて手強い。途中ハーケンを一本打ち、更に左上し、残置ボルトで確保する。

ようやく日が当り始め、傾斜のゆるくなったスラブを左上し、大ハング帯の下からも抜け、陽光と相増して頭上は明るくなった。半分しかはいらないハーケン二本と、ピナクル二つで確保する。このルートは四十メートル毎にしっかりした確保ピンを残置したはずなのに、これで二ヶ所もなくなっている。多分雪崩で飛ばされたのだろう。

傾斜は少し急になり、右へ十メートルトラバースし、更に一段上へ左へ十メートルトラバース、そして垂直のブッシュを直上

し、援傾斜帯の広いテラスに出る。ザイルを固定し、二人が登ってくる間に水をくみに行く。丁度うまい具合に右手五メートル位の所に水が流れている。二人はユマールのため、ザイルにブラ下がってハングを二つも越さねばならず、息を切らして登ってきた。

もう双耳峰のコルまで五十メートル程で、すぐ上に見える。緩傾斜帯から、しだいに急になる凹角を直上し、快適な階段状のフェースを左上すると、双耳峰のコルに踊り出た。

D滝は落ち口をわずかに見せるだけで、上も下も雪渓で埋っている。左岸も右岸も登攀する部分は短かく、何とか登れそうだ。しかし下へ降りようにも、コルより真下は、余りの急傾斜のために見えない。垂直あるいはハングしているかも知れない。予定通り、ザイルを固定して下降、偵察をすることにする。固定作業中、誤って五十メートルザイルを落してしまう。残ったザイルは四十メートル二本、果して下まで行くのに足りるだろうか……。不安は残るが、こんなことであきらめることなんかできない。ザイルを二本継いで、ユマールを使いながら懸垂下降する。降り口から十メートルも下りると、下まで見通しがきく。垂直に近いが、ブッシュが多いのでザイルがからんでいる。幸いにもさっき落したザイルも途中に引っ掛かっているのが見える。四十メートルと五十メートルのザイルを二本継いで九十メートル一杯で雪渓の上に降りたった。

雪渓を伝ってD滝を偵察する。右岸のスラブは四十度くらいの傾斜で、岩の露出部も十メートルとなく簡単に登れる見込みがついた。剣沢の遡行は、もう我々の手中に納ったも同様だ。うれしくて大声を喚げて手を振るが、豆つぶ程にしか見えない二人には、何だかわからないようだった。

余分なザイルとカメラなどを置き、ユマールで登り返す。私の朗報に、スッカリしびれを切らしてした二人は喜んでくれた。そして、重荷を背負った二人が固定ザイルをそのまま下り、私が最後にザイルを回収しながら下ることにした。紺野が先に降る。重荷とシングル懸垂のせいか時間がかかる。下からかすかにコールが聞え、畔柳が続く。ザイルがゆるんでいるのに、コールも聞えないので不信に思いながら少し下ってみた。

見ると、畔柳が雪渓の上で頭を下に向けて横たわっており、紺野が彼のもとに歩みよろうとしているではないか。一瞬、いろ

んなことが頭の中を走馬燈のようにめぐる。落ちたらしいが、生きているだろうか。生きていてくれ。しかし……どうやって運び降したらいいんだ。ヘリコプターなんてこんな狭い谷は無理だ。スノーボートなら……なんでもいい、ともかく生きていてくれ！

雪渓に降り立つ。畔柳はうずくまっているので、紺野に事情を聞いてみる。彼が見たところによると、ザイルの結び目より制動がきかなくなり、五十メートル滑り落ち、一度バウンドして、二～三十メートル下の雪渓で止まったというのだ。止まった場所から数メートル下は、雪渓が切れていて滝が見えている。こんな急な斜面でよく止ったものだ。

畔柳は全身打撲と足をいためていて、両手は骨が見える程むけていて使用不能だが、意識はしっかりしていて歩けるようだ。今日中に、意識がしっかりしていて歩けるうちに二俣付近まで行っておこう。明日になれば動けなくなってしまうかもしれないが、二俣までいけば、ヘリも、人の助けも可能だ。

畔柳のために歩幅を狭めて雪渓にステップを大きくけずる。畔柳はビッコをひき、顔をしかめながら登ってくる。ザイルをつけ、D滝の右岸をフリークライムで乗越す。緩傾斜のスラブは簡単だが、怪我を負って手もつかえず脚もいためている畔柳をどうやって上げるか問題だ。そこで、ザイルを固定し、アブミを七台継げて梯子をつくり、上からはザイルで引っぱり上げ、下からは付き添って支え、足を一歩一歩押し上げてはアブミのプレートにのせてやる。こうして、わずか十メートルを登るのに一時間近くも費やしたが、とにかく上部雪渓に出ることができた。

傾斜のゆるくなったところまで登ってから畔柳の手に包帯を巻き、手袋を付けて、寒いというので羽毛服も着せてやる。彼のザックを紺野と二人で分け、ずっしり重くなったザックを背負う。足のふんばりがきかず、ピッケルも持てない畔柳のために、歩幅を狭く、ステップを大きく作って、キックステップで登っていく。

途中の急斜面で、畔柳にはアイゼンをつける。二俣より少し下流の広い雪原に出るところで、水流が大きく口を開け、雪の斜面を高巻きする。怪我さえしていなければ、何も問題のないところだが、急斜面の登下降は苦しいらしく、時間を喰う。日はとっくに暮れている。広い雪原にテントを張る。重荷と慣れぬ歩調ですっかり疲れてしまったが、畔柳は冗談を言える程元気にな

ったので安心する。そして紺野も、あの懸垂下降中十メートル程滑り、肋骨を折っているらしいと聞いてびっくりする。そういえば、彼は遅れて歩いていた。

翌五月一日、快晴に明ける。天気の良いことがありがたい。畔柳の荷をほとんど私一人で背負い、剣沢に遅々とした歩みを進める。畔柳も紺野も苦しいだろうに、不平も弱音もはかない。剣沢小屋へ行けば医者も居るだろうと思っていたが、満足な薬さえもなく、お茶を一杯ごちそうになっただけで別山乗越に向う。別山乗越の御前小屋にも医者はいない。室堂へ降り、一刻も早く町へ下るしかないようだ。室堂にも看護婦しかいないという話だった。室堂から列を組み登ってくるスキーヤーに道を開けてもらい、狭いステップを作りながら下る。こうしてバテバテになって、やっと信州側へ向う最終バスに間に合い、大町へ下った。

積雪期登攀記録〈II〉

剣岳八ッ峯I峰四稜（一九七八年三月）

学習院大学輔仁会山岳部

はじめに

学習院大学輔仁会山岳部は、一九七八年春山合宿に於て剣岳八ッ峯I峰四稜の積雪期初トレースに成功した。今回の春山合宿は、一九七一年三月に起きた剣岳小窓での雪崩による遭難以来続いていた低迷状態からの脱却と、今後の方向性を見定める第一歩であった。

近年、日本国内における社会人山岳会の活躍、ラッシュ・タクティクスや連続登攀の目を見張る数々の記録や、ヒマラヤ、ヨーロッパ・アルプスなどで展開される華々しい登攀に比べれば、長い日数をかけオーソドックスな方法によってなされたこの記録は地味な、小さなものであるかも知れない。しかし、計画立案より一年半を費やし、部員全員が共通の目的のために一体となって取り組んだことは、我々にとって大きな成果と意義があった。

八ッ峯I峰四稜に到るまでの布石は、前年度の冬山尾瀬ヶ原より尾瀬沼縦走合宿に始まる。それまで、我々の山岳部には、マンネリ化した合宿形態に反発した「合宿は妥協の産物」と云う考え方が充満していた。また部員構成も一

年生が大部分を占めるピラミッド型であった。当時、三年生でリーダーの酒井、深沢の間で、一つの大目標を立て、それに向って部内の基礎を固めようと話し合い、尾瀬スキー合宿を第一歩として次のような合宿を実践していった。

一九七七年

三月下旬、雄山東尾根より上部源治郎尾根。

五月上旬、北方稜線より剣岳。黒部別山南尾根より剣岳八ッ峯Ⅰ峰四稜。

八月下旬、剣沢定着岩登り合宿。

十一月上旬、八ッ峯偵察、荷上げ合宿。

合宿の多くを剣周辺で行い剣岳への距離は次第に縮められていった。そして小窓尾根より早月尾根縦走を試みた冬山合宿が悪天候のため失敗に終った時、各部員は、「何とか八ッ峯を成功させるぞ」と云う強い気持となり、一つに結集したのであった。

八ッ峯Ⅰ峰四稜及び八ッ峯主稜の登攀

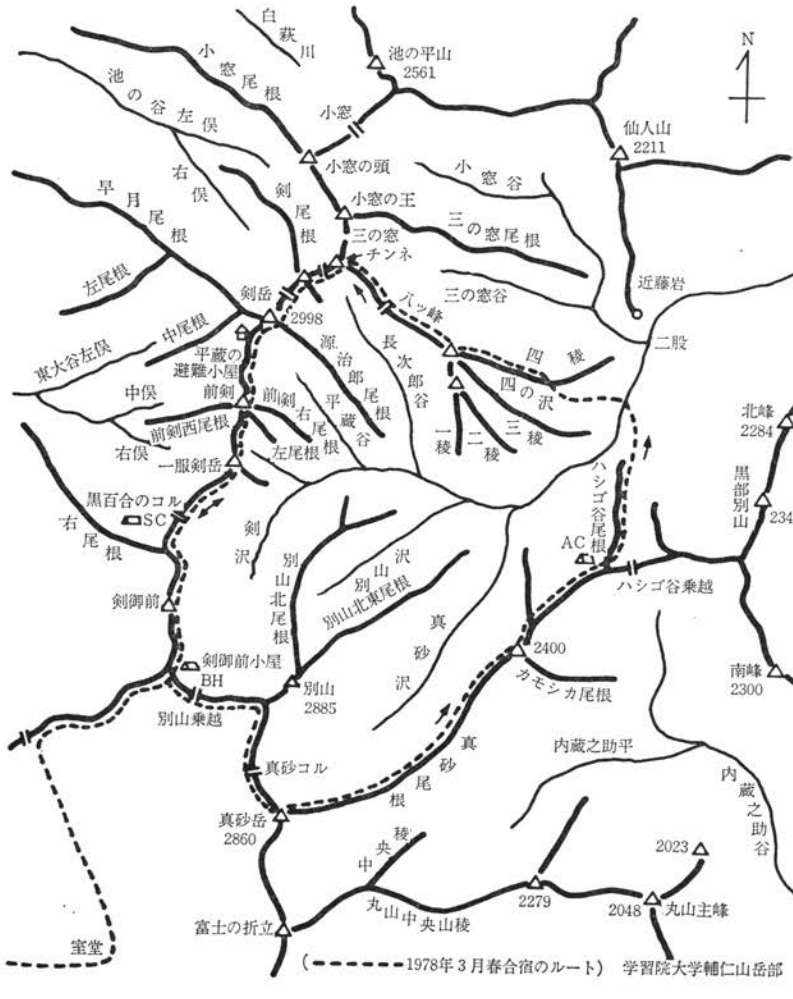
三月八日、我々八名の部員は千寿ヶ原より入山し、八日間かけてベースハウス（ＢＨ）の剣御前冬期小屋に全員集結し、アタックにそなえた。

三月十六日　曇り時々晴れのち雪。

室堂での五日間の長い停滞のあと、やっと昨日剣御前冬期小屋にたどり着き、いよいよアタック体制が整った。六時三十分に酒井、平尾、作田、新井の四名で、ＢＨに残る深沢らに見送られながら勇躍出発する。真砂尾根の岩稜帯は真砂沢側を巻くように行くのだが、急なうえアイスバーンになっており、予想以上の悪場が続くのでアンザイレンして進む。ハシゴ谷乗越上部六十メートル地点で幕営、十五時。その頃から雪が降り始め、明日からのアタックがと

第2図-(a)

剣岳八ッ峰登攀ルート図



ても不安になる。

三月十七日　雪のち晴れ。

三時に起床したが、まだ雪が降り続いており、八ッ峯は全く見えない。BHとの交信によると稜線上はかなりの強風とのことだった。九時十五分の天気図をとってみようということになって、再びシュラフにもぐり込む。なぜかぐっすり眠りこんでしまった。

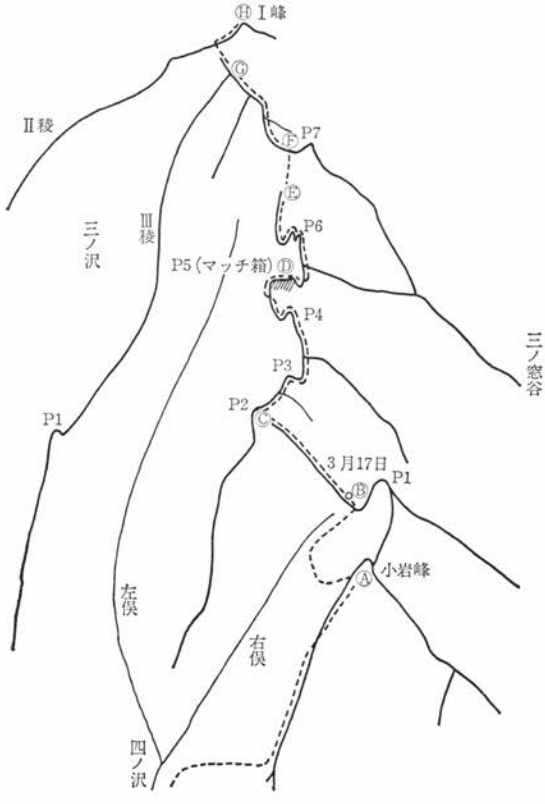
ちょうど天気図をとっている頃、雲が切れて陽が照りだした。確実に天気が回復してきている。出発の準備にもたついているうち、すっかり青空が広がってきた。九時五十分出発。ここから引返す作田と新井のコールに答えながら、ハシゴ谷尾根を下降して行く。昨夜からの積雪が三十センチ位の層になって足元から落ちてゆくが、かまわずどんどん下降して行くと、やがて剣沢に到着、十一時。

前年の五月の偵察隊と同じように四の沢をつめて行くことにする。ラッセルは膝の下あたりまでだったが、雪崩の心配は無さそうだ。どんどん高度を稼いでゆき、やがて二俣に別れるあたりで左岸の尾根に取り付いたが、急にラッセルが深くなり、喘ぎながら進む。十五時、小岩峰に着き、ここからアンザイレンをして小岩峰を越そうとしたが、ブッシュ混りの垂直な岩壁に阻まれ、やむなく再び四の沢右俣に下降し、PⅠ・PⅡのコルを目指して登ることにする。左岸の岩壁からは、時おり大きなブロックが落ちてくるが、それ程危険は感じない。四ピッチ半（一ピッチは六十メートル、以後同じ）でPⅠ・PⅡのコルに到着、十六時。ここからは雪面の登高となる。

PⅡまでルートを延ばそうと欲張ったのだが、PⅡ直下のほとんど垂直の雪壁を越すにはあまりに体力を消耗しすぎていた。約二時間頑張ったものの、徒労に終ってしまった。暗くなりかけた頃、コルまで引き返し雪洞を掘る。十八時三十分。真暗になってやっと雪洞が出来上り中へ入ったのだが、食欲も感じない程疲れ切っていた。初日ということで少し気負いすぎてしまったようだ。明日からはもう少し余裕をもって行動しなければ、そんなことを考えなが

剣岳八ッ峰Ⅰ峰Ⅳ稜ルート図

第2図-(b)



——Ⅳ稜ルート解説——

取付～A点

剣沢出合からテブリの跡のある四ノ沢を200m程つめ四ノ沢左岸の尾根を登る。ラッセル腰～胸迄。

A～B点

小岩峰から上部の稜線はキノコ雪とブッシュのまじった垂直な壁になっており，登るのに時間がかかりそうなのでアンザイレンして四ノ沢右俣へ下降し，P1・P2 コル目指し登る。雪崩の後らしく雪質は安定しており登りやすい。(約4.5ピッチ)

B～C点

C点まで雪壁，雪質不安定。C点直前の傾斜 70°～80°(2.5 ピッチ) ダケカンバ点在。

C～D点

顕著なナイフエッジの雪稜，雪庇はⅢ稜側。ラッセル膝～腰。(5ピッチ)

D～E点

D点(マッチ箱)は長方形の長さ 15m 位の岩のピーク。下降の際雪が剝れ，一枚岩が現れ苦労する。P 6は垂直の雪壁をブッシュをつかんで突破。(5ピッチ)

E～F点

E点で稜は消え，まっすぐ四ノ沢左俣上部の急な雪面を登る。ラッセル腰～胸。(2ピッチ)

F～G点

傾斜の急な雪稜，雪質極度に不安定，トップ空身でルート工作する。三稜合流，ラッセル腰～胸。(1ピッチ)

G～H点

傾斜の急な雪稜から斜面となりⅡ稜と合流，Ⅰ峰手前細い。(1ピッチ)

なお，我々は 8mm×60m ザイルを使用してのザイルスケールであることを付しておく。

(学習院大学輔仁会山岳部・平尾陽太郎・作図)

ら就寝。二十二時。

三月十八日　晴れのち曇り。

意外にも、昨日の疲労が残らず嘘のように体が軽く感じられた。そそくさと朝食をすませ、七時十分に出発。寝坊した分を取り返さなくてはならない。しかし、PⅡ直下まで昨日苦労したトレースがあり、それを取り返すのは簡単なことだった。昨日越せなかった雪壁も難無く越し、PⅡに立つ（コルから二ピッチ半）。

PⅡからはナイフエッジが続いており、しかもラッセルは腰あたりまである。急な箇所では、頭から雪をかぶりながら進まなければならない。六十メートルのザイルがやけに長く感じられる。「オーイ、あと何メートルだ」というかけ声がたびたびかわされるのだが、ラッセルをしている本人は随分進んだように思えても、一向にザイルは延びない。雪庇は三稜側に出ているが、それ程大きくはない。三の窓側の雪質は、陽があたらないためサラサラしていて、とても不安定だ。

PⅢからPⅣにかけては、特に顕著なナイフエッジになっている。PⅡから五ピッチでPⅣ・PⅤのコルに着く、十時五十五分。PⅤは長方形の大きなピークで、マッチ箱と名付けた。ありふれた名称だけれど、このピークにはぴったりだ。ピークから三稜側に、雪庇というよりも巨大なキノコ雪のような出っぱりが、今にも崩れ落ちそうに張り出して、たれ下がっている。慎重にラッセルしながら進むと、向こう側はほぼ垂直に五メートル程落ちている。体の向きをかえて下降したとたん、足を支えていた雪が無くなった。あっ、と思ったとたんに、五メートル下の平らな地点にそのままの姿勢で立っていた。目の前には黒々とした一枚岩が現れていた。ここが四稜の中で最も肝を冷した箇所だった。

PⅥへの登りはナイフリッジが消え、ブッシュ混りの急な雪壁だった。ブッシュと雪の間に空間があり、雪がどんどん崩れてゆき、オーバーハングを登っているような感じだった。ブッシュにつかまりながらほとんど腕力だけで登

るしかなかった。PⅥ・PⅦのコルに十二時到着（PⅣ・PⅤのコルから三ピッチ）。

ここからは稜が消え、PⅦの基部を巻くように四の沢左俣の最上部を詰めて行くが、三稜のナイフリッジが左手に鋭く続いているのが見え、その先には目指すⅠ峰が見えてきた。しかし、天候は崩れつつあり、太陽は雲の上に隠れてしまった。標高が上がったせいもあり、寒さを感じるようになってきた。PⅦ・Ⅰ峰のコル十四時到着（PⅥ・PⅦのコルから二ピッチ）。

ここから三稜との分岐点までの一ピッチは最悪のラッセルを強いられた。傾斜が急な雪稜のうえに、亀裂まではいっている。いくら踏み固めてもステップがきまらず、雪崩を起しそうな気配すら感じる。やむなく、ザックをおろし、空身で突破する。それからさらに急な雪壁を一・五ピッチ登ると、二稜と合流しようやくラッセルから開放された。アイゼンのきしむ音を快く感じながら細い稜線を進むと、そこが八ッ峯Ⅰ峰だった。十六時四十分。

頂上のⅡ峰側に雪洞を掘ることにしたが、掘り始めるとすぐ下に岩が現れ、随分手間取った。一時間半程でやっと二人分のスペースが出来た。山稜の陰になって昨日からBHとの交信は途絶えていたが、このⅠ峯頂上はBHと黒百合のコルのサポートキャンプSCとの中継地点としても絶好の場所だった。各キャンプからあふれるばかりの歓声が伝わって来、積雪期四稜初登攀おめでとう、という声が聞こえてきた時、ここまでつづけて来たただ苦しいばかりのラッセルが何か重みのあるもののように思えた。

もう要点は終った、あとは記録もたくさん残っている八ッ峯主稜をたどればいいだけだ。そんな安易な気持ちが広がっていったが、それを戒めるかのように、夜になって雪が降り始めた。天候は完全に下り坂に向っている。

三月十九日　雪。

激しく雪が降っている。視界もほとんどない。雪洞を広げ、居住性を良くし、停滞。

三月二十日　晴れ。

雪洞の入口はすっかり埋っていた。アンテナだけ出せる穴を開けてBHと交信すると、青空が広がってきているとのことだった。慌てて朝食をすまし、八時に出発。新雪は一メートル程積っており、再びラッセルに苦しめられることとなってしまった。

Ⅰ・Ⅱ峰のコルへは小岩峰の三番目と四番目のコルから長次郎谷側へクライミングダウンしてトラバースする。Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ峰は稜線通しに進む。雪庇は三の窓谷側に出ているが、踏み抜く程ではない。Ⅳ峰十三時三十分着。別山尾根から本峰へアタックしたサポート隊が本峰頂上で我々を見ているのに手を振って応える。Ⅳ・Ⅴ峯のコルへは、竹ぺグを十字に埋めて支点を作り、アプザイレンで下りる。Ⅴ峰からは長次郎谷側のルンゼを一二〇メートル程下り、Ⅴ・Ⅵ峯のコルへ登りかえす。十六時三十分。

三月二十一日　曇りのち雪。

高曇りですっきりしない天候だった。BHとの交信によると、そのうち晴れてくるとのことだった。とても信じ難かったが、せめて八ッ峯を抜けるまでもってほしいというのが切実な願いだった。六時二十分にコルを出発し、一ピッチ目の急な雪壁のラッセルに手間取っていると、突然Ⅴ峰の頂上に人間が一人現れた。その人影が我々のトレースをたどってⅤ峰を下りコルへ登って来るのを信じ難い表情で眺めていると、後ろから続々と人間が現れてきた。山学同志会の七名パーティーだった。これで二人だけで八ッ峰を踏破することは叶わなくなったが、ラッセルが楽になることの安堵感の方が強かった。天候が悪化してきているのだ。何はともあれ、八ッ峯を早く抜けなければならない。

八ッ峯の頭まで九名が交替でラッセルした。同志会の人達は全くアンザイレンをしない。我々のザイルはほとんど凍りついて、操作がかなり煩わしかったが、自分達のペースを守ることを心掛けた。Ⅶ峰十二時三十分。八ッ峯の頭十四時。同志会パーティーと別れ本峰へ向かうが、降雪、風とも次第に強くなり、サポート隊のトレースはすっかり消えていた。

十六時、遂に剣岳頂上に立つ。今迄、何度となくこの頂上に立った。登るたびに何らかの感慨を与えてくれる頂上であった。しかし、今度の登頂の喜びはひとしおであった。何しろ二年間の剣岳への傾倒がここに実を結んだのである。出来ればサポート隊のみんなとこの場で手を取り合いたかった。そして意気揚々とBHにもどりたかった。しかし悪天候のためサポート隊はすでに黒百合のコルまで引き返しており、トレースも吹雪のためほとんど見えなくなっている。十七時に平蔵の避難小屋到着。サポート隊が荷上げしておいた食糧を回収する。

三月二十二日　吹雪。

吹雪はおさまる気配もなかった。一刻も早くBHに帰り着きたい気持ちを押えながら停滞。

三月二十三日　吹雪。

相変らず吹雪は全くおさまる気配もなかったが、燃料が残り少なくなってきたため、意を決して黒百合のコルSCまで下山することにする。

七時に出発。やっとのことで目を開けているのだが、視界がほとんどきかず、ルートファインディングと猛烈なラッセルに苦しめられる。しかし、サポート隊が設置してくれた赤布とフィックスロープに助けられ、十四時に黒百合のコルに到着し、サポート隊と合流する。長いがしかし充実したアタックはこうして無事終った。

八ッ峯登攀を終えて

八ッ峯I峰四稜主稜の登攀は、部分的に不安定な個所もあったが、概ね安定した雪質と天候に助けられ、五日間かかって成しとげられた。現在のトップ水準を行く大岩壁のテクニカルな登攀に比較すれば、雪壁、雪稜のラッセルに終始する地味な登攀であったが、登攀のルートの全てが雪であるが故に、それはまた別の困難さをともなっていた。雪稜の崩壊、体重をかける度に崩れる雪を相手にしたいつ果てるとも知れないラッセルといった厳しさ、辛さは相当

なものである。その反面、苦労して登って来たナイフエッジにつけられた我々の一条のトレースを見る時、無垢の雪稜をたどる嬉しさと共に、そこには岩壁にない厳しさ、美しさが存在していることを強く感じたのである。

我々が目標とした八ッ峯Ⅰ峰四稜の初登攀に無事成功することが出来たとはいえ、技術、経験など力量の異なる一年生から四年生までで構成され、また三年間の登山経験しかない四年生部員がリーダーを執る大学山岳部では、二名のアタックメンバーを出すのがせい一杯であった。ともあれ、一つのことに部員が一丸となって取り組もうとした姿勢が、一年半もの長期に渡って続けられたことは、何物にも換え難い収穫であった。

大学山岳部の最大の利点は、存分に時間を費やして登山に取り組めることであろう。アプローチに十分時間をかけることで、その年特有の気象や雪質を知ることができるし、部室での資料の収集と研究、検討は、多くの知識を得ることを可能にする。その結果として、近年ほとんど剣岳において経験も実績もなかった我々が、春山合宿で積雪期初登攀を成功させることができたのだと思う。

〔文責・深沢幸弘＝七七年度主将、酒井守＝副将、平尾陽太郎〕

〈記録概要〉

隊の名称　学習院大学輔仁会山岳部春山合宿

隊の構成　アタック隊（酒井守、平尾陽太郎）
サポート隊（深沢幸弘＝チーフリーダー、作田勉、高橋雅彦、高橋暢行、加藤洋、新井誠司）

目　的　剣岳八ッ峯Ⅰ峰四稜の積雪期初登攀及び八ッ峯主稜の登攀。

活動期間　一九七八年三月八日―二十五日

行動概要　三月八日、千寿ヶ原―上ノ子平。
九日、上ノ子平―室堂。
十日、酒井、平尾ルート偵察、他はスキー練習。

十一日～十四日、吹雪のため全員停滞。
十五日、室堂―剣御前小屋（ＢＨ）。深沢他三人は室堂まで逆ボッカ。
十六日、アタック隊は作田、新井のサポートでハシゴ谷乗越のアタック・キャンプに入る。深沢、高橋暢、黒百合のコルまで偵察。
十七日、アタック隊、ハシゴ谷乗越―ＰⅠ・ＰⅡのコル。作田、新井、高橋暢、加藤、アタック・キャンプを撤収して真砂尾根二四〇〇メートル地点に幕営。深沢、高橋暢、黒百合コルにサポート・キャンプ（ＳＣ）建設、前剣まで往復。
十八日、アタック隊、Ⅰ峰四稜を完登、Ⅰ峰上に雪洞を掘る。作田らは剣御前ＢＨに戻る。深沢、高橋暢、別山尾根ルート工作。
十九日、アタック隊、停滞。作田、高橋雅、黒百合コルＳＣへ荷上げ。
二十日、アタック隊、八ッ峯主稜下半部を登攀、Ⅴ・Ⅵ峰のコル泊。サポート隊、別山尾根経由、剣岳本峰往復。
二十一日、アタック隊、八ッ峯上半部を登り、本峰を越え、平蔵避難小屋へ到着。
二十二日、吹雪のため全員停滞。
二十三日、アタック隊、黒百合コルＳＣに到着。サポート隊と合流。
二十四日、黒百合コルＳＣ―剣御前ＢＨ。
二十五日、全員、千寿ヶ原へ下山。

積雪期登攀記録〈III〉

黒部丸山東壁二ルンゼ（一九七八年三月）

山崎祐和

雪の剣と黒部に魅了されてこの地域に足を踏み入れてはや六年が過ぎ去ろうとしているが、この東壁二ルンゼのようにスケールが大きく魅力的な氷雪のルートが、ルンゼ登攀全盛の中で未登（積雪期）のまま残されていたなんて不思議でならなかった。冬ともなれば、交通の途絶する黒部に位置し、黒四ダムからわずかな距離にあるにもかかわらず、恵まれた展望台も少ないせいだろうか。僕自身にしても、昨年三月に、対岸の黒部別山南尾根よりながめるまでは、このルートの存在さえも知らなかったのである。

その時僕は、雪崩の恐怖におびえながら南尾根の末端の雪面を登っていた。突然丸山の沢という沢が雪崩れ始め、黒部の谷には豪音が轟きわたった。先程歩いていた踏跡さえもデブリの下になってしまったのだ。見ると丸山東壁では、ルンゼ全体が雪崩に翻弄されていて、その様を見てはとても登ろうなんて気にはなれなかった。雪崩に巻き込まれることもなく、やっとの思いで南尾根に這い上がったとき、正面に見える丸山東壁を見ながら、私は平静をとりもどしていた。日が陰るとともに、先程までの雪崩の饗宴はピタリと止み、快晴無風の尾根上で私の目は二ルンゼのルートを追っていたのだ。取りつきから頂上へ真直ぐに突き上げる一条の氷雪の帯、中央壁の二倍以上のスケールだ。

こんなところが登れるのだろうか、雪崩の恐怖におびえながら……。

無雪期に一度登りルートを把握しておきたかったのだが、パートナーの墜落という思わぬ事故で、無雪期には下部数ピッチを登っただけだった。全てが困難なフリークライムであった。その後十二月初旬の氷雪の付着の少ない時期に登ろうと思った淡い期待も崩れ、三月の雪の安定する時期を待った。

三月初旬、黒四ダムより入山。初日は午後二時過ぎより一ルンゼを登る予定で、偵察後取りつきまで行ったが、前日の雨で雪は腐り、登る状態でないので引き返した。翌朝、わずか一時間十五分の登攀で一ルンゼを登りきった。下から見上げる二ルンゼは圧倒的で、一ルンゼなどその比ではない。予定では、日が蔭ってから登り始めて、その日の内に登り切れないときは、ビバーク後、翌朝日が差す前に登り切るか、又は、未明から登り始め、日が差す前に登り切れない場合は途中でトラバースして雪崩をやりすごし、日が蔭ってから日暮れまでに登り切る、という計画だった。しかし、翌日パートナーは下山しなければならず、単独で登ることも考えたが、ルートの恐しさを改めて感じて、スゴスゴと帰り、出直しをはかった。

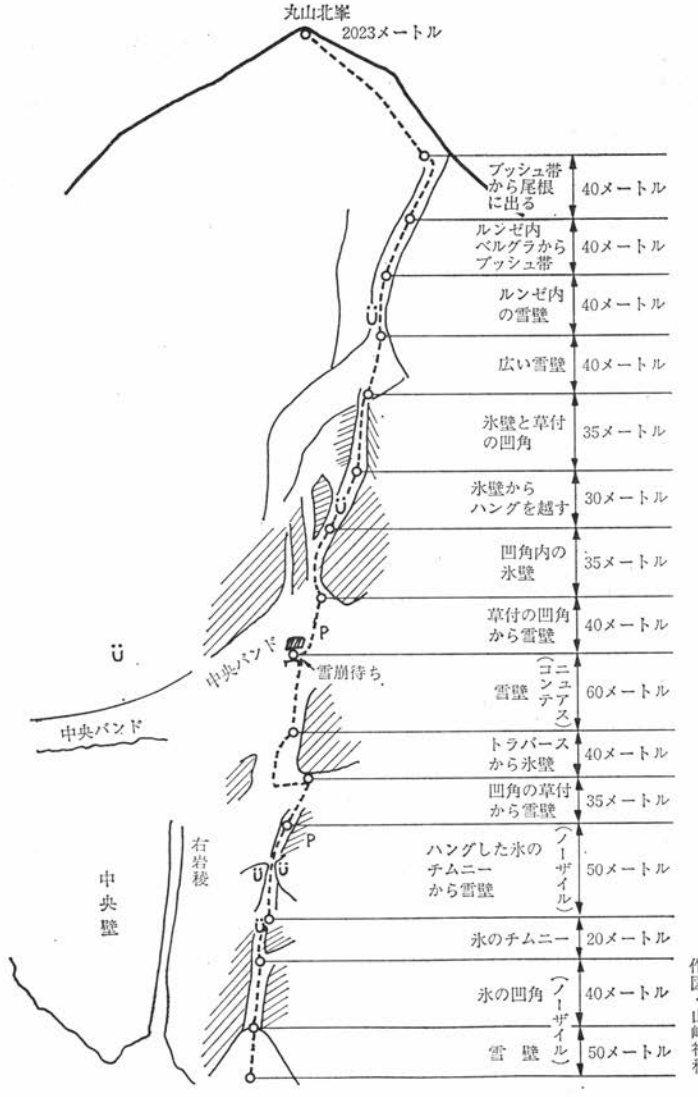
三月十六日、東京発。天気は最高の状態とはいえない。でも藤原という最高のパートナーを得て絶対の自信を持って出発する。今回を逃したら来年まで待たなければならない。昼間の急行で新宿を出発、夜九時頃黒四に着く。晴れている。明日早立ちして、夜明けには丸山の頂上だ、そんな思いで眠りにつく。

三月十七日（雪後晴）。せっかく早起きしたのに雪降りで気をそがれる。九時頃、空が明るくなったので出発する。今朝の雪が三十センチ位積もり膝上のラッセルとなり、赤沢岳北西尾根末端の台地に着いたのは十一時頃になっていた。テントを張り、太陽が照り始めた中で惰眠をむさぼり、ひたすらのんびりする。今頃は一ルンゼも二ルンゼも雪崩の渦がひしめき合っているだろう。

午後二時過ぎ、翌朝のために偵察をかねてラッセルをつけに出掛ける。ラッセルは膝くらいだ。午前中なら雪崩の

黒部丸山東壁ニルンゼルート図

第3図



作図・山崎祐和

危険におびえながら歩かなければならないが、日蔭となった今は安心して歩ける。案の定、一ルンゼと二ルンゼのデブリはすごい。今朝の新雪もすでにデブリとして押し流されている。取りつきの下に立ち、氷壁の取りつきまで急な雪壁を登ってみる。中段までは急傾斜の氷壁ながらなんとかなりそうだが、その上に雪をつけなければならない垂直の岩壁帯が二ヶ所あって難しそうだ。昼間に時間待ちをするのは気が滅入りそうなので、明日早朝出発ということにする。又思いきってビバークの装備、食料もけずった。

満天の星空に明け、予定通り出発する。昨日のトレールが役立ち、ちょっとでもトレールをはずすと膝までもぐる。最高の状態とは言えない。上部でラッセルがひどいかもしれない等々、いろいろな心配は残る。しかしもはや賽は投げられた。最高の状態じゃないが、絶対に登れる状態だ。

薄暗い中、ヘッドランプを付けて、二ルンゼの狭いクーロアールに入り込んで行く。まだ暗いせいか恐怖心など微塵だにない。ザイルをつけずに、雪壁から急に狭くなった氷壁の最奥部にピッケルを打ち込み、アイゼンを蹴り込みつつ登っていく。

夏に苦労したハングの凹角からダブルアックスで登り出す。夏のおもかげは全然ない。氷雪の覆いでチムニーもクラックも隠されている。頼れるものは四肢に固められた氷壁用の武器のみ。スイスイと登れたのははほんの四十メートルだけで、ハングした氷のチムニーが乗っ越せない。氷が薄く、左手のピッケルが岩をたたく。僕は恐怖心のとりこになってしまった。ほんの三、四歩のハングが越せず、五メートル程下りて藤原と代わり、ザイルを付ける。ハーケンを打つ場所もないので、ピッケルのピックをハンマーで打ち込んで確保する。藤原は難なく乗っ越し、視界から消えていった。すぐザイルに確保されて登り出す。何てことはなかった。先程は恐怖心におどらされていたのか。又ザイルをしまい込んでノーザイルで登り出す。

しかし、下半部ではそこが一番難しく、そんなところでザイルをしまい込んでザイルの確保なしで登るなんて、愚

かな行為をしたものだ。ここも氷のチムニーで、ザイルを付けて登った先のチムニーより、大きいハングをもち、狭い。しかもピッケルは刺さらないで氷が割れてしまう。ハングの出口では、バック・アンド・フートの姿勢をとったところ、氷が割れてひとかかえも有りそうな氷塊がくずれ落ちてしまった。僕はなんてバカなんだろう、こんなに難しいところでザイルをしまっちまうなんて。左手がしびれてきた。打っても打っても刺さらないピッケルで、一つのホールドを得るために何回ピッケルを振り回したことか。やっとの思いでハングを抜け、緩傾斜の雪壁で一息つく。もう氷塊を落すこともないので、藤原に合図をする。やはり彼は、何事もないように登ってくる。だんだん自信が失せてきた。僕と彼の技量にそんなに差があったのか。

雪壁は狭く急になってきた。又ザイルをつけるべく、ハーケンを打つ場所を捜す。僕は頼りないブッシュに捨縄をかけてぶら下がり、藤原はアイスバイルにぶら下がって、ハーケンの打てる場所を捜す。冬は雪崩に、夏は水流に磨き込まれ岩壁はハーケンを受けつけない。やっと打ち込んだ頼りないハーケンとブッシュの確保でザイルをつけ、登り始める。ザイルは、仲間との命の絆だ。ピッケルは氷結した草付に良く効いたが、急傾斜なので安心できない。やがて傾斜も落ちた雪壁となり、安心できる太いブッシュにシュリンゲをかけて確保する。藤原を迎え、そのままトップを代わる。岩壁の露出した部分の基部を左へトラバースして、氷瀑にルートをとる。彼のルートは確実だ。ザイルが伸び切るが、コールはなかなか来ない。又ハーケンが打てないのだろうか。

やがて「おーい、山崎、登って来いよ」という声で、傾斜は急だが、ガッチリ喰い込むピッケルとハンマーに助けられ氷壁を登る。上部に日が差し始めてきた。待避場所を捜さなければならない。コンテニュアスにて六十メートル程雪壁を登った後、ブッシュを掘り出し確保点にしようとしたが、オーバーハングした部分の下にテラスが掘れそうなので、そのまま雪を掘り、テラスを作る。斜め右上に走る中央バンドの直ぐ下だ。

テラスを掘り終え落ち着いたころ、雪崩が落ち始めた。本流は直ぐ三、四メートルほど横を通り、余波が頭上を通

り過ぎる。暁の太陽は暖かい恵みを与えてくれるが、同時に我々の行動をも停止させてしまった。日が蔭るまで只々じっとしているだけだ。正面には去年登った南尾根が見える。去年この登攀を思い着いて、今二ルンゼの真只中に居るのだ。定期的な雪崩の洗礼、大きなのが来ると、スノーシャワーのベールに被われる。雪崩が渦まく中で、小島のような小さなハング下のテラスに居る僕たち二人。時々膝をかかえて、奥のないテラスのより奥に逃げ込もうとしていている姿はこっけいそのものだ。南尾根から雪崩におびえる僕らの姿はどんな風に見えるだろうか。雪崩の渦中に居ながらも、傍観者の僕等は気が楽だ。「今頃登って居たら必ず飛ばされて死ぬな」とか、「このルートはドリューの北東クーロアールにさえ匹敵するさ」とかとりとめもない会話に時はどんどん過ぎていく。

十一時には日も蔭り、雪崩も納まったが、用心して十二時まで待つ。天気は高曇りになり、再び緊張の糸の張りつめた世界にもどされる。テラスの右の草付の凹角から登り出す。トップは僕の番だ。

雪壁はだんだん急になり、狭くなり草付になってくる。早くもこのルートをとったことに後悔し始め、左に行こうかと戻りかける。又憶病風に吹かれ始めた。行けないもんか、と気をとりなおし登り始める。狭い凹角、草付、傾斜は益々急になる。ハーケンの打てるところは……と捜しながら、もうこれ以上は真直ぐ登ることは不可能になってきたことに気付く。草付に沿って左の雪稜に移らなければならない。右にリスが見える。ピッケルを打ち込み、更にハンマーでたたく。バンドから手をはずし、バンドに自己確保を取る。僕の体重はピッケル一本にあずけられた。そして体を右によじってハーケンを打ち始めた。いいリスだ。厚刃のクロモリが高い音を発して根本までガッチリと喰い込む。カラビナをかけザイルを通すと、僕はもうさっきの僕とはちがう。百人も千人も味方を得たように勇気百倍だ。

何でこんな恐しい思いをしてまで、冬期登攀を続けるのか。いつも思うのだが、僕は常に憶病で、信頼のおけるパートナーと確実な天候と絶好調の体調を得て始めて、冬期登攀が可能だと考えている。全天候性のクライマーでなけ

れば、冬の岩場をこなせないと多くの冬期登攀をしてきた人は言うが、僕の意見はその辺に微妙に喰い違いがある。ちっぽけな人間の力でいかにオールマイティなアルピニストを目指してみてもたかがしれている。風雪の荒れ狂う中にわざわざ身体をさらし、トレーニングと称する人も居るが、そんな彼らを強い人だとうらやましく思っても、僕には決して真似できない。僕は天の恵み得る最高のコンディションを待ち受け、又は登れ得るコンディションの範囲内でしか登らない。僕は山が恐い。山がほほえんでいる間にのみ、こっそりと登攀を行うのだ。

アイスハンマーを打ち込んでピッケルを抜き、又打ち込む。左側へ左側と登る。薄い草付にがっちり喰い込み安心できる。傾斜は垂直に近い。頭上は岩で、ピッケルの入り込むすきまもない。左の小リッジの乗っ越しだ。三～四ミリの細いブッシュをつかみ、ほんの支えにしてピッケルを振りステップを切る。左足を静かに移動し、ピッケルを打ち込んで全体重を移動する。斜めに走る中央バンドの雪田に出た。雪壁をかけ上がり、太いブッシュにビレーをとる。この上のルートは複雑だ。藤原が登っている間、ルートを捜す。左側の垂直の岩壁は下から見えていたが、手強そうだ。右側はブッシュのハング帯。真中の凹角は雪がつまっているが、入口しか見えない。しかしルートはそこしかない。

藤原を迎えトップを代わる。ルートを相談するが、彼も同様にその凹角しかないと云い、その凹角内に消えていく。ザイルは伸び、氷片がどんどん落ちてくる。ザイルの流れが止まり、ひときわ大きな氷雪片の流れが通り過ぎ、声がかかる。僕の番だ。凹角内の快適な氷壁だ。ルートはすぐ右に折れる。左右を垂直の岩壁にはさまれた唯一のルートだ。七十度の急傾斜ながら、ピッケルは良い氷にガッチリと喰い込む。快適そのものだ。四十メートルを一気に登り、再びトップになる。

氷壁は急傾斜になり、それを越えると傾斜の落ちた雪壁となるが、十メートル上はオーバーハングした氷壁に阻まれている。雪壁をゆっくり登りながら考える。だんだん急傾斜になり、アイス・フォールの下に着く。ここは、夏は

大きなチョック・ストーンが詰っているようだ。雪を崩しながら登り、ハング下に着く。左側はのっぺりした一枚岩で、一本のブッシュがはえている。この細いブッシュに捨縄をかけ、これを手懸りに乗越そうとするがうまくいかない。二ルンゼに入って初めてアブミを出す。捨縄にアブミをかけ、不安定な姿勢ながらステップを切り、ピッケルを突き刺して乗起しに成功する。再び傾斜の落ちた雪壁。しかしその上は、傾斜の急になった狭い氷の付いた凹角が続いている。太いブッシュにビレーをとり、藤原を迎える。

「こんなところを登るのか！」

藤原の第一声だった。左はかぶりぎみの岩壁。右はのっぺりとしたスラブである。危険極まりない唯一のルートだ。平均斜度八十度位、部分的にはかぶっている。

まずは二～三メートルの大きな一枚岩のチョック・ストーン。ハングしている。左側に残置ボルトを発見する。藤原はそれにカラビナ、ザイルをかけ、右側から試みる。両足を一杯に拡げ、細いホールドを拾っていく。難しそうだ。手袋を取り素手になった。あっ、左足のアイゼンが滑った。思わずザイルを握りしめるが、かろうじて彼はハンマーにぶら下った。

チョック・ストーンを越し、いよいよ傾斜のきついルンゼに入っていく。氷片が僕を直撃だ。よけようがない。途中にハーケンを一本打ち、一時間もかかってその凹角を終える。彼は途中二回、足をすべらし両手のハンマーとバイルにブラ下がった。登攀終了後、彼はここで何度止めて下りようかと思ったか知れないと語ったが、それ程難しいピッチだった。セカンドの僕にとっても、頭上に伸びる確保ザイルの助けがあることを割引いても、余りある難しさだった。ダブルアックスがブームになり、登攀難易度を落しているというが、決してそんなことはない。急傾斜でのダブルアックスがどんなにつらいものなのか、味わった自分自身でなければ分からない。二、三歩の急傾斜やハングならともかくも、四十メートルも常につきまとう落下の恐怖。実際、僕らはいつこの氷の管から剝されるか気が気じゃ

なかった。

困難なピッチは終了した。下から見て考えたルートよりも右にはずれてしまったが、もはやもどるすべもない。只、より簡単なルートを選び高みへと登る以外には方法はない。高曇りの空から時々小雪さえも舞い、時刻も四時になろうとしていた。

広い雪壁を一ピッチ登り、狭いルンゼに入る。少々てこずるもなんということもない。四ピッチで広い尾根に出てザイルを付けたまま十五分程ラッセルして頂上に立つ。頂上より尾根を北に下り、広い沢から内蔵ノ助谷に下った。

〈記録概要〉

隊の構成 山崎祐和（登攀クラブ蒼氷）、藤原一孝（ヤルクライマースクラブ）

活動期間 一九七八年三月

目　的 黒部丸山東壁ニルンゼの積雪期初登攀

行動概要 三月十八日、赤沢岳西北尾根末端部四・〇〇―取付五・一五―中央バンドの下六・三〇～一二・一〇―丸山北峯一七・二〇―赤沢岳西北尾根末端部一九・二〇

装　備 ロープ（八ミリ×四〇メートル）二本、ピッケル（シモン一本）、アイス・バイル（シャルレ、ガバルー各一本）、アイスハンマー（シャルレ、サレワ、各一本）、アイゼン（シモン、スチュバイ、各一組）、使用ハーケン（岩用三本）、アブミ（一回使用）。

積雪期登攀記録〈IV〉

唐沢岳幕岩（一九七八年一月）

――京都ルート及び右ルンゼルート――

坂下直枝
竹内孝一
（山学同志会）

都会の雑踏を離れて山で味わう爽快感とはまさに対照的に、山に向かうのがすこぶるおっくうで鬱々とした気分に滅入ることが稀にある。考えてみるにそれは、山について考えたり実際に山行に出かけたりすることから遠ざかった時に多いようだ。そんな時、私はとにかく再び山にとび込んでいくことにしている。

今度も、かねて推進中のカンチェンジュンガの計画がいろんなことから暗礁にのり上げ、今後どのように展開して行こうかと思い余った挙句、ふと幕岩に行こうと思いついたのだった。

二週間前の冬山合宿では、三十人もの会員が参加して幕岩の全ルートを登っちゃおうという威勢のいい計画だったのだが、季節はずれの土砂降り雨で、一本も登れず終ってしまった。

前夜発の夜行列車に鈴木、湯田、竹内と私の四人で乗りこんで十四日の朝信濃大町の駅に降り立つと、又もや雨。

正月の二の舞かなと懸念しつつ葛温泉に向かう車に乗った。車窓を打つ雨が、山が近づくにつれ次第にみぞれとなり雪に変わった。

五時三十分、葛温泉着。電力会社の見張り小屋に登山届を出した後、小雪の中を、氷結したアスファルト道路を一時間あまり歩いて、唐沢の出合いに着いた。

高瀬川の景観は、ダム建設の為、十年程前から完全に趣きを変えてしまった。清冽な流れをもった深い渓谷の脇を細々と走っていたトロッコ道は、今は大型ダンプがゆったりと往来できる程広く、黒々としたアスファルト道路となってしまい、眼前には黒四ダムを凌ぐといわれる途方もなく大きなダムがあるだけだ。ロックフィールド工法といわれる、巨大な自然岩を累々と積み上げてできたこのダムは、何故かコンクリートで出来たダムより、ひときわ人工的に感じられた。そして今高瀬川は、過去幾多の登山者に与えてきた限りなく深い渓谷の美しさと静寂さのかわりに、何十万ボルトとかいう電力を人々に提供するというわけなのだ。

ダムの基部で簡単な朝食をとって唐沢に入った。膝位までの新雪をラッセルしながら、雪に半分埋もれた沢をさか上った。濃い霧が依然として山を被い幕岩の姿はみることができないが、朝方からの雪はいつの間にか止んでいた。四時間程で幕岩の右稜のコルに着いた。昼飯の後、右ルンゼの冬の初登を目指す湯田、竹内パーティと別れ、私と鈴木は京都ルートに向った。

〔坂下直枝〕

京都ルート

一月十四日（雨のち晴）

京都ルートは、一ピッチ目の二十メートル以上も張り出した巨大なオーバーハングと、中間のメガネハング、そして上部の大ハングと三つの大きなハング帯、そしてその間をつなぐ小ハング帯とスラブ帯によって構成されており、

大部分人工登攀に終始するルートである。私は以前、九月に和田と八時間位でこのルートを登っているので、三日の短い休暇でも十分登り切れるだろうと判断してこのルートを選んだのだった。

午後二時、鈴木がザックを置いて空身で取付く。一ピッチ目からハングの登攀というのはどうも変な感じだ。衝立や屏風のハングは、ある程度登ってからハング帯につきあたり、やむを得ずの感があるのだが、このルートは途方もなく大きなこのハングをわざわざ意識的に登る為に作られたルートといえる。

鈴木のつけている二本のザイルの一方に鈴木のザックを結びつけ、もう一方を自分のゼルプストにゆわえた。三日分の食糧と冬の装具を入れたザックは、先に進むに従って下がってゆくハングを登るには、ちょっときつい重さだ。ゼイゼイいいながら、ボルトからボルトへとアブミを懸け替えながらの空中遊泳だ。アブミに乗って重いザックのぶら下がっているザイルをカラビナからはずす仕事も、結構骨が折れた。ようやくハングを抜け、パートナーの待つビレー点についたら既に五時、冬の短い陽が沈みかけていた。トップを交代し、小さなハングを越え、ボルトの連打された垂直のスラブを登る。陽が既に落ちた暗い壁の中では、ヘッドランプの小さな灯りだけが頼りだ。

ハング帯の下の小さな草付テラスについた。雪が発達してキノコ雪のように張り出している。その厚い一メートルを越す雪の中に埋もれたボルトを探す為、ピッケルを振りたんねんに雪を削り落とした。腕がこのきつい労働で硬直してきた頃、ようやくテラスに達することができた。そのために幅一メートル、長さ四メートル程の雪の溝を削ったことになる。明日越えるべきハングがちょうど我々のねぐらの屋根となって、絶好のビバークサイトを提供している。六時登攀終了。夏でもかなり難しかった右ルンゼルートに取り付いている仲間のことを思いながらビバークに入った。湯俣のダムは電気代をとられないせいか異常な程の明るさで、何となく落着かない。

一月十五日（曇のち風雪）

荷物を軽くする為シュラフを持ってこなかった私は、少しつらく、長い夜だった。起床五時。冬の朝の出発は思い

切りが必要だ。今にも降ってきそうな寒々とした灰色の空を仰ぎながら、私がトップで第一ハングに取り付いた。昨日の疲労が幾分残っており、腕に力が入らない。ハングを越え、垂直の壁に点々と打たれたボルトを、アブミをかけかえながら進む。処々フリークライミングをまじえてのスラブの登攀。ザイルが四十メートル一杯となったので、ボルト二本でビレイ。鈴木はユマールで登ってくる。

四ピッチ目は第二スラブのフリークライミング。薄い氷がスラブに付着し非常に難しい。トップの鈴木は五メートル程登ったところで行き詰り、中々ふんぎりがつかず登れない。夏の軽装、足にフィットした靴、素手の登攀と違って、アイゼン、手袋そして重装備と冬の登攀は自分のバランスの限界点がつかみにくいので、微妙な個所でのふんぎりは、かなりの勇気と決断が要る。交代しようかという私の声にもかかわらず、ふくらはぎの硬張った鈴木は、降りようにも降りられず、再び登ろうと試みる。手袋をぬぎ、慎重に細かいホールドをひろい、ジワリと体をずり上げる。そして宙に浮いた右足のアイゼンの前爪が微妙なスタンスを捕えた。そのあとは一気に三メートルばかりを登り切って、片足が完全に乗るスタンスに立つことができた。ビレイしていた私の方もまず一安心だ。

その後も十メートル程傾斜の幾分落ちたスラブを登り、ハング下の雪田に出て太い松ノ木でビレイした。この上は、遠くから幕岩を眺めると黒いメガネのようにみえるところから名付けられたらしいメガネハングとなっており、松の木より右へ五メートルトラバースしてハングに取り付く。ハング基部には、ルート開拓の為のボルトやブランコが二年前と同様残置してあった。ハーケンにかかっている赤いシュリンゲにアブミをセットし、次々とアブミをかけ替えながらハングを越え、垂壁に打たれたボルトを頼りに淡々と進む。時折りまじるフリークライムの個所がなかなかに手強い。スラブから雪の斜面に出る最後の部分が、薄い油氷に被われていてどうしても登れない。もう少し厚ければアイスハンマーが喰い込むのだが、わずか数ミリでは手のほどこしようがない。残念だったが、此処でボルトを一本打ち足して雪田に抜け出た。左へ十メートル余トラバースし、露岩にハーケンを打つが、リスが浅くて効きがよ

くない。次のピッチは、広島ルートよりの左の雪のつまったルンゼに入るか、正面の壁を登るか迷った。容易にみえる左のルンゼをまず鈴木に試してもらうが、雪の状態も悪く、登るに従って傾斜もきつくなるとのことで途中で引き返した。正面壁に転ずると、しっかりしたホールドが随所にあって、予想外に簡単だった。

七ピッチ目。正規のルートはスラブを直上するのだが、冬の利点を活用する為、私は右に十メートル細かいトラバースを行い雪壁に出た。ハンマー、ピッケル、アイゼンのコンビネーションによってグングンと高度を稼ぐ。ザイルがのび切ったところで、固く凍結した草付をみつけ、その根株に太い捨縄をかけビレイした。鈴木トップで正面の凹凸のある壁に取り付くが、難しいとみえて中々進まない。

風が激しさを増し、突然日が落ちた。急がねばならない。トップを交代し、正面は放棄して右へ右へと細かいホールドをひろいながらトラバースする。そしてツルツルの油氷のついた小さな凹状壁の氷の付着していない部分をひろい、ヘッドライトの灯りに頼りながら、手袋のフリクションをきかせて岩をあやすように登る。薄い粘着性の油氷は、ピッケルでいくらたたいても完全にははがれないのだ。もうあたりはすっかり闇に包まれ、パートナーの姿も視界から消えた。闇の中を静かに、そしてきわめて無心の状態となって登る。二十メートルの岩と氷のミックスした部分を登り切って左へトラバース。そして氷瀑にサレワのアイスハーケン一本とピッケルのピックを叩き込んでビレイし、パートナーがユマールで登って来れるようザイルをフィックスした。漆黒の空間に向って「いいぞ」と叫ぶが、強い風の音に消され、声が全く届かない。しかし、やがてフィックスしたザイルが張りを増し、パートナーが登り始めたことが判った。厳しい登攀で火照った体も勢いを増した風の前に急激に冷え、やがて耐え難い寒さとなった。しかし、あと残された五、六メートルの雪壁を登れば、広い中央バンドに出てビバークができる。ビバークサイトでの湯気のたった熱い紅茶のことを思い浮べながらパートナーの来るのをじっと待った。

やがてランプの灯が見え、その小さな光が次第に近づいて来た。そのまま彼に登ってもらう。バンドに出てから二

十メートル以上トラバースすると平坦なところがあり、細い潅木を下に敷くとよい寝床となった。六時半、ビバークに入る。熱いお茶と食事とで暖かさが身体の隅々まで浸みわたり、疲労した筋肉をほぐしてゆくようだ。そのまま心地良い眠りについた。

真夜中、人の声に眼がさめた。驚いたことに湯田達が壁から下降して来たらしい。時計をみると十二時を回っていた。懸垂したボルトが抜け、ひどい目に会ったらしいが、幸い怪我はなかったとのことで一安心。再び寝入る。

一月十六日（晴）

休日は今日までなので、午前中に終了しないと今晩の夜行に間に合わない。幸い天気も上々なので、登攀のスピードを上げる為中央バンドにザックを置いて行く。岩壁に沿うようにして立っている松の木を二～三メートルよじ登り、その枝から岩壁に取り付く。小さなハングを軽く越し、垂壁を人工とフリーのミックスで登る。風はそれ程ないが、日は全く差さず、見渡す限り灰色の世界だ。右ルンゼパーティーが動き始めた。昨夜の遅くまでの行動がたたって、彼等の出発は大分遅くなったのだ。激励のコールをかけた後再び登り始める。人工からフリーに移る最後の部分が悪い。左のアイゼンの前爪一本をボルトのリングにかけ、体重をそっと右へ移動し、右手を思い切りのばして、細いブッシュを把む。頼りないブッシュの為、上から押さえるようにして、ジワリと足を上げ、次の太いブッシュをつかみ、強引にテラスに出た。

この上は最後の大ハングが庇のように大きく張り出している。荷物のない空身の有難さ、鈴木は軽々と越えていった。ザイルの都合で、あと十メートル程鈴木に行ってもらう。そして最後のピッチ。小ハングを越せばスラブ帯に出て終了だ。息をはずませながら最後のハングに取り付く。初登の記録では、このハングの上で小さな雪崩にやられ、下まで叩き落されている。幾分の不安を混じえて、最後のハングを抜けると、予想に反して太陽の明るい日差しを浴びた白く乾いた岩肌があった。暗く凍てついた、灰色の景色は過去のものとなった。風のないこの上なく柔らかな日

差しの中で、身体はほぐれ、飛翔してゆくようだ。唐沢岳の頂上の彼方に蒼い空が限りなく拡がり、飛行機雲が二すじ、くっきりと描かれている。私は久し振りの青空を一瞬呆けた様にみつめる。限りなく謙虚な心で太陽の恵みに感謝した。そしてもう傾斜のゆるくなった、フリクションのきく岩を二十メートル程登り、しっかりした潅木でビレイする。下の壁の中のすべての潅木はまだ枯れたままだったが、ここではまだ随分と堅いけれど小さな蕾をつけた若木が、浅い春の訪れを感じさせる。後続して来る鈴木にコールをかけながら、登ったぞ、という喜びに浸り又青空を仰いだ。登攀終了十二時。

〔坂下直枝〕

右ルンゼルート

広島山の会が一九七〇年夏にルートを開いて以来、今日まで第二登もされてないと言われているルート、それが右ルンゼルートである。中央バンドからの上部ルートで、すべてのパーティがルートを見出すことができず涙をのんでいるのである。事実我々も、上部は他のルートを登ってしまい、次の日にルートを見つけ完登した訳である。以下は我々の冬期初登攀の記録である。

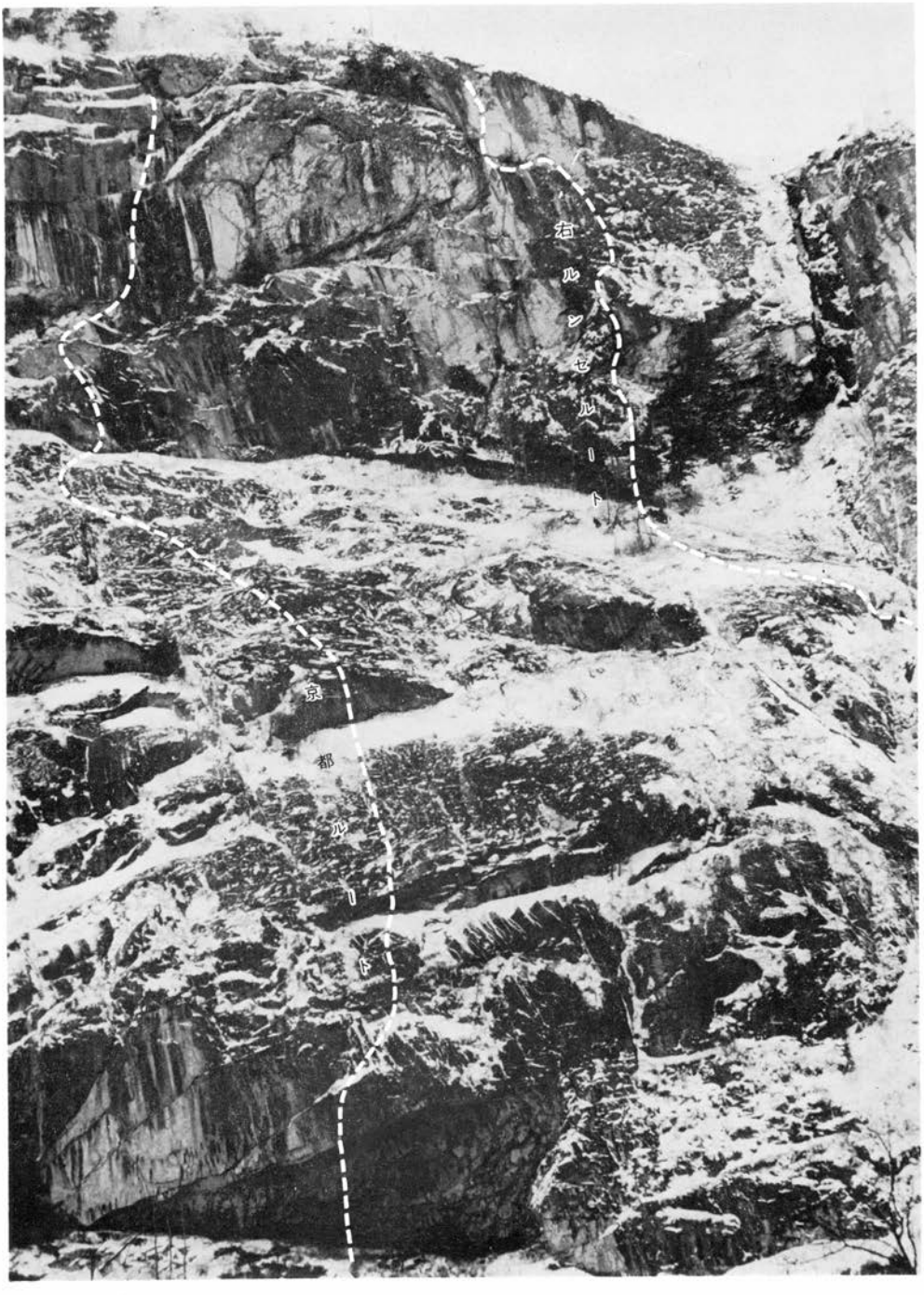
一月十四日（雪のち晴）

右稜のコルに着いた時には、もうガスもぬけ、銀のベールに包まれた幕岩の全貌を見ることができた。これから取付く右ルンゼルートは、ここから一望の内に見える。昼食をとりながら登攀具をつける。合宿の時残しておいた食糧とハーケンを補給する。

京都パーティの坂下、鈴木氏と、終了したら大町の宿で合流することを約束してルートに向かう。

我々は、取付の凹角をめざして五十メートルのラッセルをする。湯田がトップでかぶりぎみの凹角をスタート。凹角を抜け左上ぎみにハング下までいく。ピンは凹角より上はなく、所々にあるブッシュに確保点をとる。二ピッチ

<Plate 4-(b)>
黒部丸山東壁第二ルンゼ核心部
登攀ルート— 1978年3月。



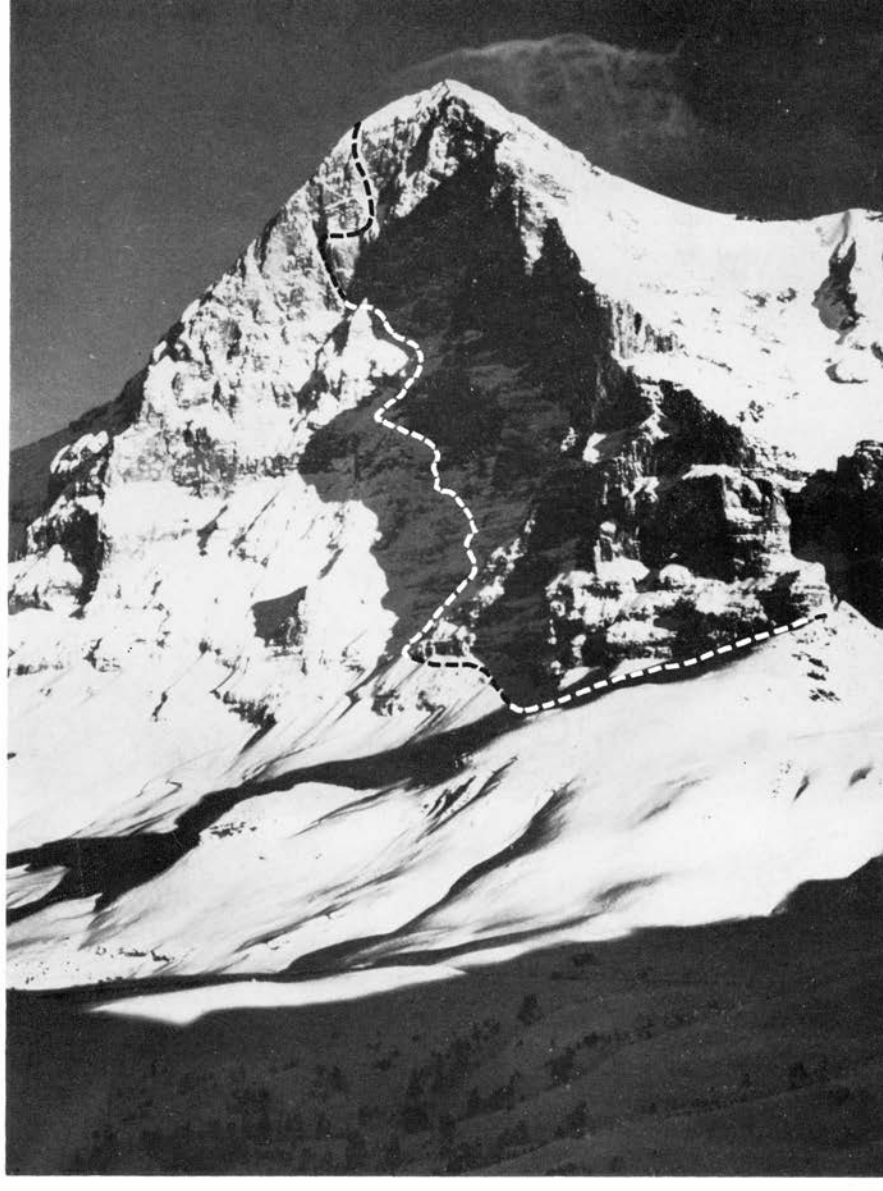
<Plate 5-(a)>

唐沢岳幕岩　右ルンゼルート（上部）及び京都ルート——1977年12月。

（撮影・5（a），（b），岡田　昇）

<Plate 5-(b)>

唐沢岳幕岩　右ルンゼルート——1977年12月。



<Plate 6-(a)>

アイガー北壁全景と登攀ルート——1978年3月。

Eiger North Wall——March, 1978.

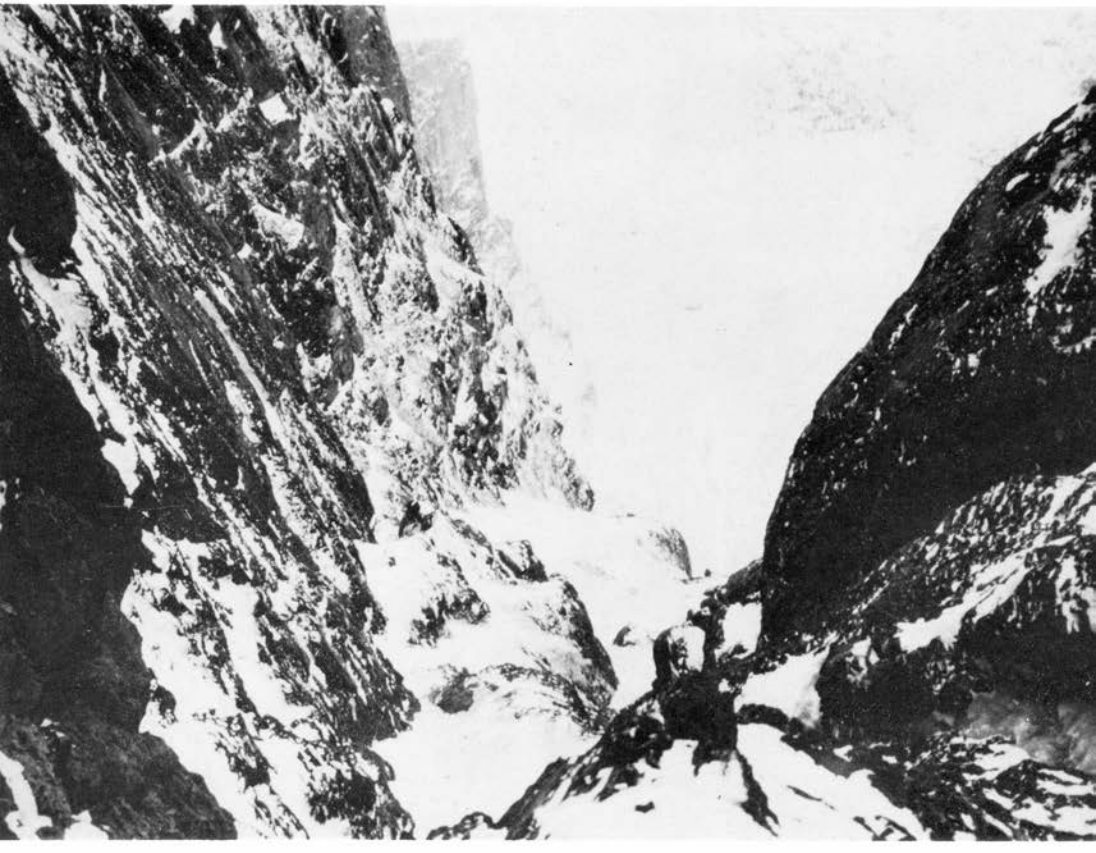
(Plate 6 (a)～(f), by T. Hasegawa)

<Plate 6-(b)>
アイガー北壁上半部。
Eiger North Wall, Upper Wall.

<Plate 6-(c)>
アイガー北壁下半部と荷上げに向う筆者。
Eiger North Wall, Lower Wall.
The Writer starts to carry loads up.

<Plate 6-(d)> →
アイガー北壁、第一氷田。
Eiger North Wall, Climbing the First Ice Apron.

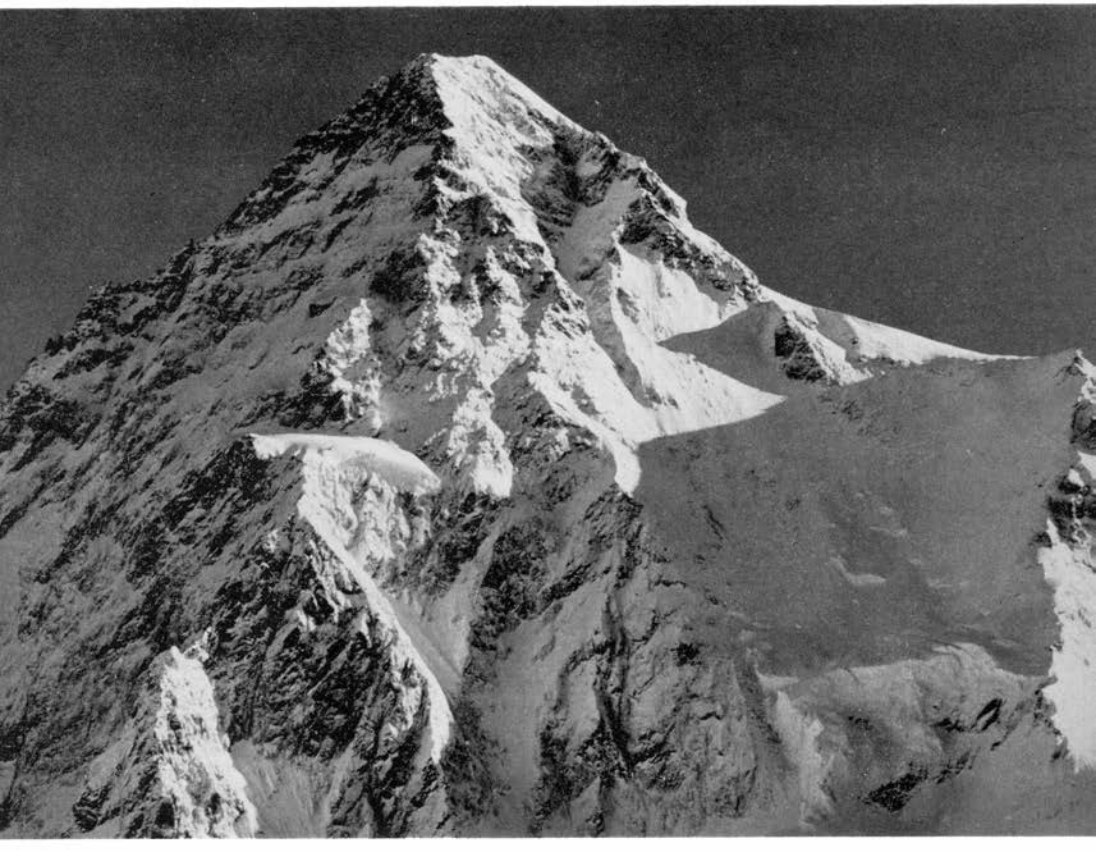
<Plate 6-(e)> ↓
アイガー北壁、神々のトラバース。
Eiger North Wall, Climbing the Gods' Traverse.



<Plate 6-(f)>

アイガー北壁——コルティ・ビヴァークから白いくもを見下ろす。

Eiger North Wall, Looking down the Spider from the Corti Bivouac.



<Plate 7-(a)>

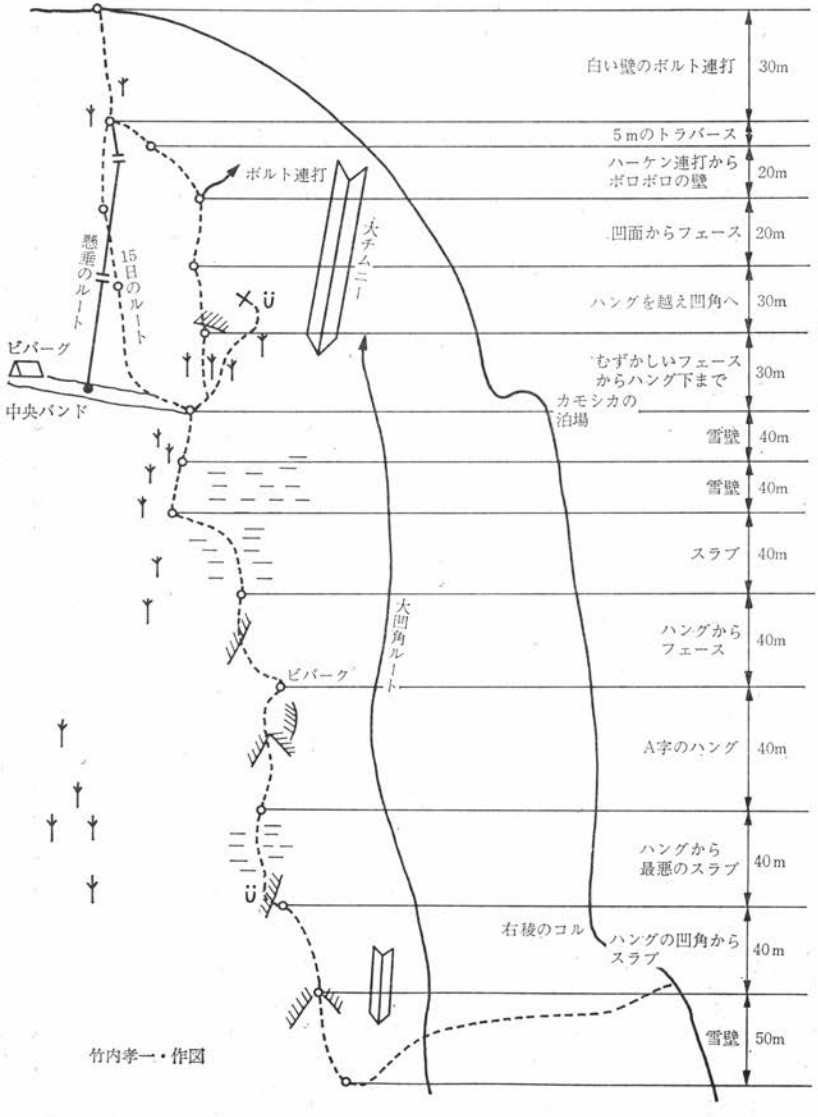
朝の K 2—ブロードピーク BC より。

K 2, seen from BC of Broad Peak.

(Plate 7 (a), (b), by I. Yoshizawa)

第4図

唐沢岳幕岩・右ルンゼルート図



目、ハングを左側から越す。トップの湯田は十メートル登ってザックを置いてしまった。ザックを背負って折れそうなブッシュをたよりに登る垂直の壁はきびしい。「たのむぞ、たのむぞ」の連発である。上の状態のわからない僕は、ただ上から落ちる雪に耐えながら、首をすぼめて確保しているだけである。長い時間が立ち、ボルトの打つ音がする。行きづまったらしい。

しばらくしてOKのコール。ここより僕はユマールをつかい、片方のザイルで湯田の残したザックを引き上げてもらう。小ハングをユマールで越すと、傾斜のきついスラブが続いていた。湯田はこのピッチをノーピンで確保している。三ピッチ目、上にある三角形のハングを左から越す。そのハングの左に残置ピンがあり、ルートであることを確かめる。直上し、潅木のあるテラスまで上がる。このころより暗くなり、ルートを捜すが見当たらない。ビバークするなら横になれるところと決めていたが、どうもここしかなさそうだ。

潅木にビレイはとってビバークしたものの、テラスは外傾しているので、気がつくと体がずり落ち、風でツェルトがめくれて、「はっ」として元にもどる。これの連続であった。

一月十五日（曇のち風雪）

長く寒い夜もやっと明ける。このビバークで手袋片方をなくした。目の前にあるハングは左から越せそうなので、湯田トップで八時スタート。かぶりぎみの草付のハングからスラブを右上しビレイ。五ピッチ目、傾斜の落ちたスラブを左上、行きづまりボルト一本を打つ。このころより風が強くなり、スラブの真中の不安定な氷のスタンスで、風がおさまるまでじっとしていなければならない。スラブを越え、潅木帯に入りほっとする。

潅木帯を登り、中央バンドに着く。中央バンドから一ピッチ目、ルート図による大チムニーの三十メートル左の所から取付くが、ボロボロで登れそうもない。そばに大きな松の木があり、その枝が十五メートル上で壁の方に伸びている。この木を登れば、枝をつたってうまく越えられそうだと話し合い、僕はこの木を登りだす。しかしこの枝は僕

の体重をささえてくれそうもない。途中まで行き、上の壁の状態を見て降りる。時間がたつのが気になり、登れそうな所から登るしかないと言うことになり、中央バンドを左にうつる。

かぶりぎみの凹角が上まで伸びており、ここなら行けそうである。中央バンドから一ピッチ目、二時スタート。少し登ると残置ピンがあり、他のルートのようである。下の方から「ドーシ」の声。京都ルートのパーティがスラブ帯を登っていた。ここは山嶺第二ルートとのことである。二ピッチ目、A2のハングを混じえた人工でほぼ直上する。三ピッチ目、かぶりぎみの白い垂壁を登り、緩いスラブ帯にて終了する。

このころより暗くなり、雪をともなった風は一段と強くなる。この強い風の中ではビバークする気はせず、登ったルートを懸垂することにする。湯田が先に降りるが、ザイルがだんごになっていたらしく、一時間あまりザイルにぶらさがっていた。僕は烈風の暗やみの中で待たされ、ガクガクである。壁の中に降りると風も弱まる。ほとんど空中懸垂で、ハングの上にへばりついたブッシュまで降りる。ザイルのだんごを直すのにひどく苦労したとのことである。ここより十メートル左下に三ピッチ目に登った時のテラスが見える。ここから振子トラバースしてそこに行こうと、湯田にボルト一本を打ってもらう。片方のザイルをそのボルトに通し懸垂用に使い、片方のザイルで確保してもらう。そのボルトに体重をかけた瞬間、僕は真暗な奈落にほうりだされてしまった。確保があるので止まるとは思っていたが、落ちる時間がやけに長い。運よくハング帯なのでどこにも当たらない。そう思っていると、ハング下にあるテラスの上で止まってくれた。少し体を振り、テラスにある潅木にしがみつく。助かった後で聞くと三十メートル落ちたと言うことだ。ザイルを上に上げて、湯田にここまで降りてきてもらう。「ちょっと早く降りたようなもんだ」と冗談を言う。

ここより一ピッチで中央バンドに降りる。ザックに入れた液晶の時計も寒さで字が消えて時間がわからない。バンドを左へ行きビバーク地を捜す。ツェルトを張っていたら、京都ルートのパーティのツェルトも見えた。ぐっすりと

安眠のようだ。食事をし、眠ろうとしている時、湯田持参の感度の悪いラジオからほたるの光が聞こえた。となると十二時近くであろう。

一月十六日（晴）

右ルンゼルートを完登すべく、再度ルートを捜す。三十分ぐらい捜し、昨日登った木から三十メートル左の枯木の所から取付く。九時、ブッシュをつかみ、微妙なバランスでフェースをハング下まで行くと、さびたハーケンがあり、ハングした壁にさびのにじみ出たボルトが三本続いていた。ここだ、長い間登られないでいたために、さびて抜けそうなボルトが印象的だ。ハング下の潅木でビレイをとる。

二ピッチ目、この抜けそうなボルトを一本一本たしかめながら登る。ハングを越え、垂壁をブッシュをつかみながら、数本の残置ピンにアブミをかけながら登っていく。三ピッチ目、五メートル登るとレッジがあり、ビレー点はここのほうが安定しているので、湯田に上がってもらう。ここからは上部の壁が見え、古いピンが左上ぎみに打ってあり、右の方に目新しいボルトが続いている。右は最近作られたルートらしい。古いピンに全体重をかけないようゆっくり登り、ボロボロの壁を数メートル登ってから古いシュリンゲのついたハーケンにビレーをとる。湯田がユマールで上がってくるにはピンがあまりにもたよりなかったため、一本ピンを追加する。四ピッチ目五メートルの寝っころがってのトラバースで、昨日の三ピッチ目のテラスについた。

A1の人工で終了し、昨日の下降点と同じところから三ピッチにわたる下降をし、中央バンドに降りたった。京都ルートのパーティは、もう右稜の、カモシカの泊場まで降っている。時間を聞くと、もう四時をすぎていた。カモシカの泊場まで上がり急いで右稜の下降に入る。

五ピッチの懸垂で右稜のコルに着き、暗い中、葛温泉へと急いだ。

〔竹内孝一〕

〈記録概要〉

隊の構成　坂下直枝、鈴木昇巳、湯田一男、竹内孝一（山学同志会）

活動期間　一九七八年一月十四日―十六日

目　的　唐沢岳幕岩京都ルート及び右ルンゼルートの登攀。

〈編者注〉

(1)唐沢岳幕岩正面壁京都ルートの無雪期初登攀は、一九七二年七月二十八日～三十一日、登攀倶楽部（青木元、渡辺悦男、岡本幸彦、大柳典生、山本一夫）によって成された。また、積雪期初登攀は一九七四年三月二十六日、登攀倶楽部（青木寿、大柳典生）による。積雪期第二登は一九七四年十二月三十日―七五年一月一日、山嶺登高会（藤島正純、石原賢二）。

(2)唐沢岳幕岩正面壁右ルンゼルートの無雪期初登攀は、一九六九年八月一日、広島山の会（平田、野田、勝沼、城山）によって成された。

積雪期登攀記録〈V〉

アイガー北壁（一九七八年三月）

長谷川恒男

はじめに

アイガーは、メンヒ、ユングフラウと共にベルナーオーバーランド三山の一つであり、その登山基地であるグリンデルワルトの村は古くから日本人にとっても観光に登山に親しみのある地である。一九二一年、槙有恒さんによってアイガーの東山稜が初登攀され、最近では一九六九年夏、加藤滝男さんひきいるＪＥＣＣのメンバーによって北壁にダイレクトルートが開拓された。一九七二年には山岳同志会パーティのアイガー北壁ダイレクトルート冬期第二登といった記録もある。登山に少しでも興味のある人ならば、この北壁の名前は一度ならず耳にしたことであろう。そして又、こうした成功例だけでなく多くの遭難事件でもさわがれたあまりにも有名な壁であり、アルプスにおいてこれほど話題の多い山もないのではあるまいか。アイガー北壁の中で起った多くのドラマは、日本のアルピニストによる物語をも含めて、常に死闘の歴史であったといっても過言ではない。過去に多くのアルピニストの生命を奪い傷つけてきたにもかかわらず、一向にその魅力を失わず今もなお多くのアルピニストをひきつけている。それは魅力という

より、むしろ魔力といった方が適当かも知れない。私もその魔力にとりつかれた一人であり、熱にうかされた旨者のごとくこの壁に向っていったのであった。

北壁の概要

アイガー北壁は標高差一八〇〇メートルであり、その間、岩壁の部分部分には色々な名称がつけられている。その名称のどの一つをとっても、この北壁にいどんだアルピニストと北壁の興奮と恐怖に満ちた歴史を感じさせてくれる。登攀ルートを辿ってみると、取り付き地点から順に、Tの字雪田、割れ目の多いバットレス、難しい割れ目、赤い岩壁、ヒンターシュトイサー・トラバース、第一氷田、氷の管、第二氷田、アイロン岩、死のビバーク、第三氷田、ランペ、ランペ氷田、もろい岩棚、神々のトラバース、白い蜘蛛、白い石英の割れ目、コルティビバーク、頂上へぬけ出る割れ目、頂上雪田、そして頂上へ至る。その登攀距離はおよそ三二〇〇メートルに及ぶ（トニー・ヒーベラー著「冬のアイガー北壁初登攀」によると、標高差一八〇〇メートル、登攀距離三七〇〇メートル）と思う。標高差の割に登攀距離が長いという事は、その登攀が直線的な登攀よりも、トラバースが多いことを物語っている。現にルートは、岩壁右側のTの字雪田より取り付くや、難しい割れ目をぬけて左斜めに登り、ヒンターシュトイサー・トラバースを経て第一氷田に入る。そして、第二氷田も第三氷田もトラバースの連続である。ランペに入っても、そのルートは左斜めにとられ、神々のトラバースなどその名のごとく二〇〇メートルにも及ぶ大トラバースを強いられる。このようにアイガー北壁のルートの三分の二以上が斜登とトラバースである為、天候急変や不則の事態で登攀を断念した場合の下降がまたむずかしい。ある一定の地点まで登ってしまうと下る事は不可能に近く、いかなる状態下でも登らなければならない登攀となる。私はそんなルートを単独登攀することになった。

アイガー北壁へ

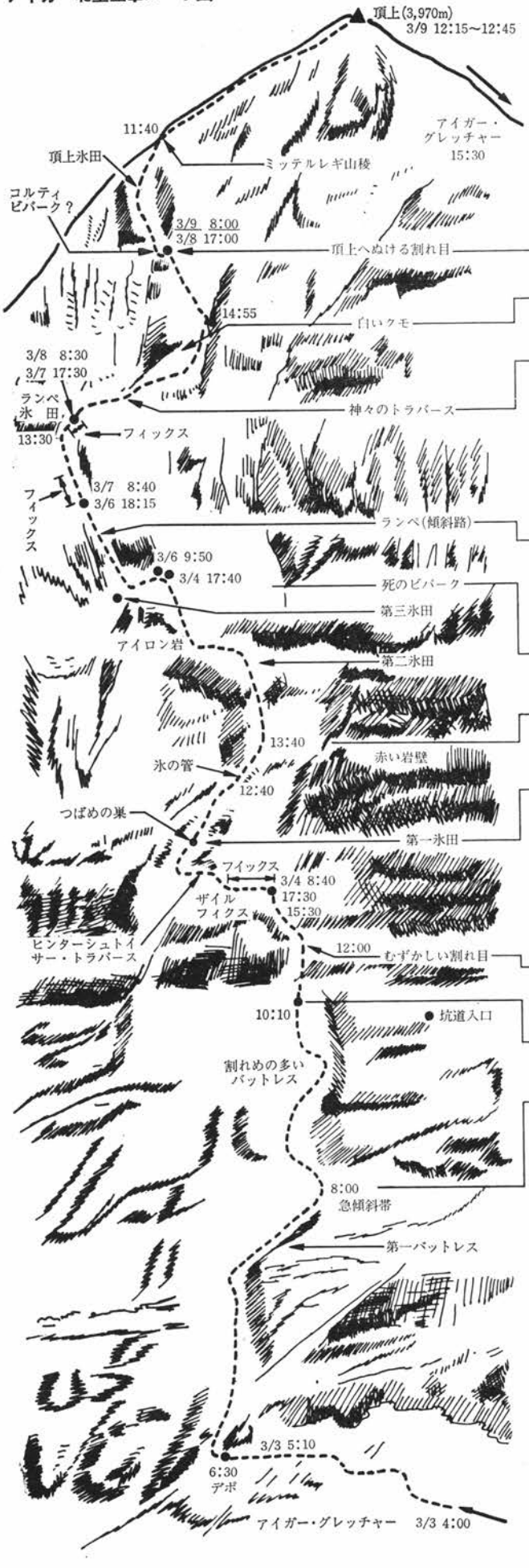
仲間数人の見送りを受け、一九七八年二月六日に、私はアイガー北壁へ向けて羽田を出発した。昨年のマッターホルンの北壁に続いての登攀であるので気楽に出発してみたものの、飛行機が日本を離れヨーロッパに近づくにつれ、不安はつのるばかりであった。二日後パリにつき、友人の待つシャモニーに向う為、リヨンから夜行列車に乗った。翌朝早くシャモニーに着き、友人宅を訪ずれたところ、その友人は去年よりドリューの北東クーロワールを狙っているというし、同宿の山学同志会のメンバーは、アイガー北壁からマッターホルン北壁の連続登攀をめざしているとの事であった。

私は四日間滞在したシャモニーを後に、昨年マッターホルン北壁を登攀した際お世話になったツェルマットのホテル・バンホフのビナーおばさんを訪ね、その後ツーンの友人宅も訪ねた。長年この町に住む彼から、今年の天候の移り変わりや積雪状態等、アイガーについての情報を聞き、グリンデルワルトに向った。グリンデルワルトに近づくに従い、期待と不安の入り交った複雑な気持がこみあげてくる。車窓よりアイガーを捜し求めたがこの日(二月十七日)はあいにくガスがかかり、その雄姿は見る事ができなかった。グリンデルワルトに着くと、日本の観光局の紹介状をもち現地の観光局へ挨拶に行ったり、警察に登攀の報告に行ったり、ヘリコプターの手配等々忙しい日々を送った。そして、私の登攀記録を写真に残す仕事をする為、私より二週間遅れて日本を発った妻と、三十五ミリのカメラと十六ミリのムービーを担当のスイス在住の日本人カメラマン等と共にクライネシャイデックに上った。二月二十六日のことだった。

その後私は北壁への荷上げと偵察を繰返したが、チャンスはなかなか訪れてこなかった。そんな中で、二日から三日の周期で天候が崩れる事が分ってきたので、途中一日か二日の風雪を覚悟の上で、アタックすることにした。次の

アイガー北壁登攀ルート図

第5図



3/9 12：15	頂上		
11：40	頂上氷田 （氷壁）	ザックを肩にピッケルとアイスハーケンのコンビネーションでの登高。	
3/9 8：00	氷と，もろい岩壁ルンゼ	3ピッチをビレイしながら登る。	
3/8 17：00	頂上へぬけ出る割れ目	1ピッチはビレイしながら登る。	
14：55	白いクモ	ザックを肩にザイルを束にして腰にぶら下げて登る。 最後の30mはザイルを固定しながら往復する。	
	神々のトラバース （もろい岩と，もろい氷のトラバース）	ザックを肩にザイルを束にして、腰にぶら下げて，ダブルアックスでトラバース。	
	むずかしいクラック （岩と，雪のミックス）	ザックとザイルを固定してビレイを取りながら登り，ザイルを固定して下降，ザックをかついで登り返す。	
3/8 8：30			
3/7 17：30	ランペ氷田 （雪壁）		
3/7 8：40			
3/6 18：15	ランペ （雪と岩のミックス）	60mを1ピッチに，ザックを置き，ビレイを取りながら登り降りする。	
3/6 9：50	第三氷田 （青黒い氷）	ザックを肩にザイルを束にして引きずりながらダブルアックスで登高。	
3/5	死のピバーク	停滞	
3/4 17：40	死のピバーク （氷雪）	ザックを肩にザイルを束にして，ひきずりながら，ダブルアックスで，登高と，トラバース。	
	第二氷田		
13：40			
	氷の管	ザックを置いて，ザイルをひきずりながら，ダブルアックスで登る。	
12：40			
	第一氷田 （50度の氷雪） ヒンターストサー トラバース	ザックを肩にザイルを束にしてひきずって登る。 ダブルザイルと7㎜のフィックスザイルで越える。 氷雪を，ダブルアックスで登る。 フィックスザイルを張る	
3/4 8：40			
3/3 17：30	赤い岩壁基部テラス	ザックを置いてザイルをひきずっての登攀，ピッケル，アイスバイルを使用。	
15：30	雪壁		
12：00	むずかしい割れ目 岩と氷のミックス	ザックとザイルを固定して，ザイルを体に巻きつけ，ビレイしながら登る。（ザックを取りに下降する。）	
10：10	60度ぐらいの傾斜の氷と雪	ザックをかつぎ，ザイルをひきずって登り，ザイルが重くなるたびにピッチを区切る。	
3/3 8：00	クロワールの突き当り	ザックをかつぎピッケルを支点にしての登高。 氷の上に足首ほどの雪が付着している。	

長谷川　恒雄・作図

天候の崩れは待つほどもなくすぐに訪れ、三月二日朝には小雪が散らつく空模様に変ってきた。翌日を出発の日と決めて、その日はカメラマンと助手の二人、それに妻と私の計五人で、明日からの健闘を祈り日本食の昼食をとった。献立は、はるばる日本より運んできた貴重な納豆と漬け物である。ささやかではあるが、ここスイスでは大変なご馳走であった。久々の日本食に全員大喜びでワインもあけて乾杯する。

あくる日、アイガー北壁アタックの出発地アイガーグレッチャーに向ったのは、まだワインの酔いが醒めきれぬ昼下りだった。「いってらっしゃい」の妻の言葉に手を振り、カメラマンと共に登山電車に乗り込む。十分ほどでその日の目的地アイガーグレッチャー駅に到着した。ホテルに入りシャワーを浴びて、出発準備を終え一段落したが、窓から見えるはずの山はガスの中である。小雪もまだ舞っている。手持ちぶたさの私に気を使ってか、「早目に夕食にしますか」というカメラマンの言葉にうながされ食堂へ向った。お客は我々だけのようで、ガランとした食堂でブランデーを飲み干した。しかし、食事は喉を通らない。お酒ばかりが美味しく感じられた。外はまだ雪であった。明日の天候もいささか心配であったが、早目にベッドに潜り込んだ。しかし、目が冴えてなかなか眠つかれない。ビッグクライミングの前日はいつもそうであった。不安と期待の入りまじる中で、悶悶と夜明けを待つのみである。

翌朝、一睡もできぬまま予定の時間より早く起き出し、朝食の用意を始めた。朝食といっても餅をバターで焼いた簡単なものであったが、これなら比較的スムースに喉を通ってくれた。窓の外を見ると星一つない真暗な空間が広がっている。しかし、雪は止んでいるようだった。不安のしこりが心の隅に残るが、兎に角出発ときめる。三月三日午前四時、クラストした雪面を踏んで取り付きへと歩き出す。歩み始めると、心の隅に残るしこりが攀じる自信へと溶け込んで、次第になくなっていくのは不思議だった。東の空が白み始めた頃、偵察の時に食料、装備等をデポしておいた地点に到着した。荷物の整理をし、出発の用意をするが、あいにく悪天候への兆しが見えてきた。朝焼けであった。ゆっくりと装備をつけながら、進退に迷う。今年のヨーロッパは天候不順で観天望気はまったく当たらない。大

きく崩れると天気図が物語っていても、雲が垂れ込めるだけで雪にならなかったりもする。しばらく迷った後、試登のつもりで兎に角登ってみることにした。

「死のビバーク」まで

六時三十分、まだ傾斜のあまりきつくない雪壁に一歩を踏み出す。荷物はかなり重く、喘ぎながら登り出す。暖かな太陽の光がクラクネシャイデックの村を照らす頃、真青な空が頭上に広がり始める。グリンデルワルトの村は、まだ朝靄の中で眠ったままである。まったく平和なそんな情景とは対照的に、ここ北壁の中は冷たく暗かった。斜面の勾配は強まり、氷と岩が現われ始める。やがてこの日のビッグイベントである難しい割れ目に差しかかった。約五十メートルの垂壁とオーバーハングの乗越しは、私が岩登りに対してまったく無能であるかのような難かしさであった。時々、氷から現われているザイルに手を延ばしたが、いつザイルが切れるかと私の心臓は縮み上がり、このピッチを登り終えた時にはもうクタクタになっていた。それでも赤い岩壁の下のテラスにどうやら這い上る。岩場の難しいのは当然だが、今回の苦しみはザックが重い為であった。準備の段階での失敗ではなく、出発直前の不安な気持がさせた食料・装備の持ちすぎが原因だった。私自身の弱さがザックの重量を増していたのである。反省の念にかられ、あらためて荷物の整理をし、思い切れる物を袋に詰込み、私自身の弱さと共に取り付きめがけて投げ落した。そして、北壁での記念すべき第一夜を祝うべく大切に持参してきたブランデーを取り出し、口をつけた。この北壁の暗黒な世界とは対照的に、グリンデルワルトとクライネシャイデックの暖かな灯が眼下に広がっている。その灯を眺めながら平和な憩いのひとときを過した。

三月四日。昨日一日の疲労と、あまりにも快適なビバークサイトのおかげで、なかなか目が覚めず出発は九時に近かった。登攀開始。安定したテラスからの第一歩はいつもいやなものである。それでも昨日フィックスしておいたザ

イルのおかげで、スムースにスタートを切ることができた。それに加えて、ダブルアックスも快適に効く雪質だった為、単独で登っていることを忘れさせてくれるほどだった。ヒンターシュトイサー・トラバースには、数日前の先行パーティが張ったフィックスロープが残っていた為、順調に第一氷田に入ることができた。アイスバイルとピッケルを確実に利かせツァッケを蹴こみ、高度をかせいでいく。鳥が大空を自由に飛び回るように、私はこの大自然と一体になっているのを肌で感じていた。第一氷田も氷の管も順調に越え、第二氷田の半ばに差しかかった時である。登攀に没頭していた私は、いつからか小雪が舞い始めているのに気付いた。見上げると空は灰色にぬりつぶされていた。間もなく、雪は風を伴い激しさを増してくる。だが、下る気にはなれなかった。ただ黙々と第二氷田をトラバースし、安全な場所を捜し求め前進するのみであった。何度となく襲いかかる泡雪崩から必死に身を守りながら、死のビバーク地点へ到達する。ここでは大きな雪洞を掘ってビバークする予定でいたが、何とそこにはフランス人が数人すでに雪洞を掘ってビバークしているではないか。ビックリはしたが、兎に角カタコト英語で挨拶を交した。彼らは直登ルートを登ってここまで来たという。私の登って来たノーマル・ルートとは丁度この死のビバーク地点でクロスするのであった。私は小さなテラスを作って持参したツェルトを張り、ビバークすることにした。夜のとばりがおりはじめた頃から風雪が激しくなって、眠ることなどとてもできそうにない。昨日とはうって変って厳しいビバークが始まった。まさに死のビバークだった。

頂上へ

三月五日の朝がやって来たが、外は相変らずの風雪であった。停滞と決める。一睡もできずに夜を明した私にとっては、覚悟の上の停滞とはいえ、この上なく辛い停滞となった。トランシーバーのスイッチを入れてみる。交信はクライネシャイデックに居る妻とであった。今日はクライネシャイデックも雪だという。昨日彼女は、ヘリコプターに

乗って、登攀記録を撮りに何度となく飛んできてくれた。長い長い時間が過ぎたように思う。恐怖が心を覆い、不安で身体がふるえ、小さなツエルトの中で身を縮めるが、どんな苦しい登攀でも最後までやりとげて来た私が、どうしてこれ位の苦しさに耐えきれないのかと、自分自身に言い聞かせ続けた。

明け方より雪音も静まり、冷え込みと共にあたりが明るさを増してくる。ツェルトから顔を出すと眼下には一面に雲海が広がり、純白に装って点在する山々はあたかも大海原の島々を思わせた。そんな美しい風景にしばらくの間心を奪われていたが、それとは裏腹にルートの状態は非常に厳しいものであった。第三氷田の青黒い氷は鋼鉄のように固く、ガラスのように脆い。そして、雪の詰まったランペは除雪作業を強いられ、登行は捗らなかった。ランペカミーンの下でこの日はビバークときめた。この地点は、二週間前にスペイン隊が救助された地点で、あたりには彼らの装備が散乱し、氷づけになったシュラフが痛々しく目に写った。

ちっぽけなテラスで、寒さの為一睡もできずうつらうつらするうちに、三月七日も明けた。登攀を開始してから五日目であった。意識のもうろうとする中で、のろのろと出発の準備をするが、徐々に気力が充実して来る。今日は昨日越えられなかったランペカミーンにアタック開始。一寸刻みの登攀中、岩角にアイスバイルを引っかけてしまい、アイスハーケンと共に落してしまった。あっと言う間もなく、アイスバイルとアイスハーケンが谷底に吸い込まれていく。これからまだまだ活躍してもらわなければならないアイスバイルとアイスハーケンである。しかし、これからの難関はアイスハンマーを使って突破する他ない。ふくらんだ氷に出た。私は必死でピッケルを振い、アイスハンマーを振ってこの氷に挑む。生きる事への執着が勝ったのであろう、数時間後には脆い岩棚に到達、そこをビバークサイトとすることができた。ささやかな夕食をとったが、心は難関を突破した喜びで満ちていた。そして、白い雪と青黒い氷と岩壁で作られたこの世界に、また寒気と不安な夜が訪れる。

三月八日。取り付いて六日目になるが、ほとんど睡眠はとれず、意識がもうろうとする中で夜が明けていく。寒さ

に身を震わせながら難しいクラックに取り付くが、凍てつく岩壁を攀じる指がみるみる感覚を失っていく。岩壁に指をたたきつけながら登攀を続けるが、指先から血が滲み出て激痛が指を襲う。非常に痛いがこうしなければ、指の生命は失なわれてしまう。難しいクラックをぬけると、そこには一状の氷の帯が横たわっていた。神々のトラバースである。二〇〇メートルに渡るトラバースの始まりであった。神々のトラバースの名にふさわしく、高度感はすばらしく、足下には千メートル余に及ぶ空間がひろがっていた。スリル満点のトラバースを終え、白い蜘蛛に入る。休む間もなく白い硝石ルンゼを越え、コルティビバークに着くが、この頃よりまた空模様が怪しくなってきた。小雪がちらつくと同時に泡雪崩がたびたび襲ってくるようになる。今日はここでビバークときめる。陰うつなガスが立ち込めているが、どうやら雪は止んだ。頂上直下三〇〇メートルの地点でアイガー北壁の最後のビバークである。トランシーバーの交信によると、このガスもどうやら頂上だけのようであった。相変らず寝れぬビバークではあったが、その夜はいつもとは違っていた。明日は頂上に立てるのだ。

三月九日の朝、強風吹きすさぶ中、頂上めざして登攀を開始した。今日はいつもよりもっと慎重に確実に登行しようと心に誓う。頂上氷田を経てミッテルレギ山稜へ出た時、背中に日の光が当った。一週間振りの太陽だった。太陽の光を浴びながらもう歩くだけだ。一歩一歩を確実に歩めば頂上につけると私は思った。冷たく暗い北壁の中で、自分との戦いに勝った私は、満身に太陽の光を浴びて頂上に立った。大きな仕事を成し遂げた満足感で心は充実していた。一九七八年三月九日、十二時十五分であった。

〈記録概要〉

活動期間　一九七八年二月六日～三月二八日（登攀期間）三月三日～三月九日

目　的　アイガー北壁冬期単独初登攀

行動概要　三月三日、アイガーグレッチャー発、赤い岩壁着。四日、死のビバーク着。五日、死のビバーク停滞。六日、ランペカミーン着。七日、もろい岩棚着。八日、コルティビバーク着。九日、頂上へ到達（十二時十五分）、西壁下降。

支部の歴史〈I〉

関西支部のそもそもから

今西寿雄

日本山岳会は明治三十八年（一九〇五年）に発足したが、関西支部はその三十年後の、昭和十年（一九三五年）に設立された。このことは昭和五十年に日本山岳会七十周年記念行事と関西支部四十周年行事が重なったことなどから、一部には記憶されている方もあるかと思う。四十年を経た今では支部も全国に十七か八もあって、支部の方々もこれという抵抗もなく山岳会に入っておられるようだが、最初にできた関西支部はなみなみならぬ努力の結果生れたのだった。どんな情勢の中で、どのようにして支部が発足したか、幸い当時の模様を津田周二氏が関西支部報一号に掲載されておられるので、ここに引用してみよう。

「ＪＡＣ関西支部の発足についてどうしても除外できないのはＲＣＣとの関連性です。ＲＣＣの誕生（大正十三年）は関西におけるスポーツアルピニズムの台頭と見てよく、かつ全国の登山団体にも大きい刺激をあたえたものと思いますが、約十年を経て行きづまりを感じたのです。それを打解するにはＲＣＣの構成を全国的なものに押し広めるか、あるいはグループだけの小さなものにするか、その二つしかないと考えました。しかしグループだけの小さなものにするには、あまりに当時のＲＣＣはオフィシャルになっており、全国的に拡大するには我々の力と熱意の不足は明らかでした。

当時ＲＣＣの中心だったメンバーはほとんどＪＡＣの会員で

あったので、偶々ＪＡＣの会合を催しても、中心のメンバーが世話するといった状態でした。ＲＣＣもすでにグループ活動からオフィシャルな形に移っていたときのこととて、実際上にはＪＡＣもＲＣＣも似たような形になりかけていました。

当時の日本の登山界はのび切れるだけのび切っていたといいましょうか、積雪期の日本アルプスは冬から春にかけてすでに主峰はことごとく登りつくされ、如何にすればさらにより困難な登山が行いうるかといった一つのギャップにあり、何か大きい一転換を期待せねばならない状態でした。

そんなときでしたから、登山界のあり方にも大きな転換を心のどこかで望んでいたのでしょう。ＲＣＣを解散して、日本の登山界のためにも、ＪＡＣの強化を目標としてＪＡＣ一本で動いて行こう、といった考え方は不思議と仲間一同一致したのでした。そこで議論されたのはＪＡＣは如何にあるべきかといったことです。ＲＣＣの解散はＪＡＣの根本的な改革によって、いわゆる発展的解散としたかったのです。そしてそうすることによって日本の登山界に貢献しうると考えたのです。

その頃のＪＡＣはＡＣ（英国山岳会）の形をそのままに堅持し、虎ノ門のビルの一部に二室を陣取り図書室を設け、一介の登山人は近より難いクラブ形式を取っておりました。小島さんを会長に、高頭さん、高野さん、木暮さん、鳥山さん等々、日本登山界の大先輩がずらりと役員の席にあって、若いかけ出し登山者は一指もふれることができない牙城を築いていました。昭和六、七年のことだったと思います。

当時ヨーロッパアルプスを見て来た若い者は盛んに独塡山岳会やらスイス山岳会の模様を報告し、日本山岳会も何とか根本的な改造をせねばならないと叫んでいました。ＪＡＣを単に特定人の個人的集りに止めず、形態を改め、全国登山人を糾合し、最もオフィシャルな登山会にまで発展さすべきだとの意見でした。

具体的には支部中心の組織を作り、全国的に（少なくとも日本アルプスの要所に）山小舎を持ち、会員には登山行のために鉄道運賃の割引をさせ、支部は支部報年報を発刊して実際的な登山活動を行う、本部は支部の統轄を行う、といった考え方です。組織について最も議論したのは水野祥太郎君と私でした。関西支部で日本アルプスや関西の要所にＪＡＣの山小舎を多数持とうと思っていたのですから、今考えれば大した勢いだったと思います」

このような動きを今あらためて読んでみると、そこには単に会員が関西に多いからというのでなく、当時の尖鋭派のイデオロギーとしての動きが感じられ、これはさらに発展して次の話につながっていく。

津田周二「だいたい支部をつくる一番最初は、水野君が東京と関西に二つに分けようといい出したんだよ」

水野祥太郎「いやいや、支部をこしらえようという話を藤木九三さん達とやっておって、藤木さんが関西支部を作るんなら関東支部もなきゃいかんやないかと言い出したんだが、そのへんでもめ出してね。それを聞いた小島烏水先生がユデダコになって怒ってね、東京が本部です、東京のことは放っといて下さいとね。(笑)

そこで、関西支部をこしらえるのなら、東京が本部らしい働きをしないのはスッキリしない。全国的な組織だとすれば本部は本部として、支部は支部としてやるべきだ。誰がいい出してそうなってしまったか解らないが、とにかく藤木さんとこういう結論を出したわけです」

しかしこのような形をなしてゆくには、かなりのアプローチがあった。昭和五年十月二十六日、大阪美津濃ビルに於て関西在住会員集会が開催されたが、山岳会では幹事会、評議員会を開いてこれを協議し、当日は小島評議員、松方幹事等が出席され、大正初期からとだえていた関西在住会員の集会について種々話合われている。また昭和五年十一月九日～十二月十四日にかけ三回にわたって関西研究部集会が開かれ、雪崩の発生的分類とデータ集めのための調査票の配布等へ発展的会合がもたれている。その他関西小集会が継続的に開かれるようになり、昭和八年四月の理事会では関西集会室設置の必要性について中原繁之助、津田両氏より説明がなされた。

このように地味な実績を積み重ねながら、支部設立について中原、三木高岑、津田氏らは当時豊年製油の重役をしておられた小島烏水会長のもとへ数度にわたって交渉に出かけられ、むつかしい顔をした会長の壁に突当っていた。関西支部設立に対する反対は、

水野祥太郎「まあ、反旗をひるがえすととりよったなあ」

今西錦司「関西支部を作ることに対して東京の長老連が反対やったのを、うまく裏工作してくれたんは松方、伊藤ゲンさんですよ。まあ伊藤ゲンは僕等が動かしとったんやが――」

水野「小島さんが湯気を立てた大阪の集会の前の日に、松方さん、小島さんと京都へ行って貴方がたと話をしたでしょ。そのときに松方、伊藤の線で大体まとまっていたんだと思いますが、大阪へ来たとき藤木さんがそれを知らずにワーッとまくしたてたもんだから――」

今西「そやないんや、京都から大阪へ行くのに一緒に汽車に乗りこんで話合いをやっとったんや」

水野「あの会で一番印象に残っているのは、初めからしまいまで今西さんは一言も言わなかった。ちゃんとその汽車の中の裏工作で済んどったんやな」(笑)

昭和十年七月十一日、定例理事会に於て関西支部設置が可決、支部規則を決定す。同九月一日、ルームを大阪貯蓄銀行ビル三階八号室に開設す。同十月八日支部設置記念晩さん講演会

を堂ビル清交社で開催。

当時は本部へ理事三名を選出し、支部役員を設けた。（理事）別宮貞俊、高橋健治、三木高岑、（支部役員）宮崎武夫、西岡一雄、小川正十郎、中村勝郎、松井久之助、安藤博、津田周二、影山寅造の諸氏。

支部ルームの設置には三木、中原、西岡氏の尽力は大きく、

津田「ビルには好日山荘が先にあったんです。隣りがあいていて、そこを借りたんですが、その時に敷金がなくて三木高岑さんが国債で二百円か三百円にして立替えて下さったのです。そのうち初めのルームが狭くなって、後に好日の向いへ引越したんです」

昭和十一年九月、三木高岑氏蔵書アルパインジャーナル創刊号より当時までの全冊、高橋健治氏より独逸山岳会々報一揃い、奥貞雄氏よりフランス山岳会々報一揃いをルームの書架に無期限拝借、飾らせて頂き会員が利用しているが、これは御本人がなくなられた昭和五十三年現在も、いまだに拝借しっ放しで支部に保存してある。またルームの管理には長岡書記が電話局の勤めが終るとルームに出勤し、一隅に置いた机で郵便物等の整理や発送をされていた。

しかし支部として豊かな貯えがあるわけでなく、支部が発足すると同時にルーム維持会員なるものが募集され、四十名の諸氏が名をつらねたが、支部の予算を本部で負担してもらうよう折衝した結果、図書費の二百円を削除した八百円が認められている。そのために図書新設資金募集も行なわれ、加納一郎、宮崎武夫氏が購入に当られた。

同年十二月一日立教ナンダ・コット遠征隊歓迎会を開催したが、この刺激によって関西でも計画が進められ、六月には京大のK2、早大のナンガ・パルバット計画等について支部でも意見の交換が行なわれた。しかし昭和十二年には日支事変が始まり、情勢は次第に戦時体制へと傾いていき、会員の中にも応召して戦地へ出発する人が出てきた。

昭和十四年、第二次欧州大戦が始まる。
昭和十五年、大阪府山岳連盟が発足。
昭和十六年、太平洋戦争はじまる。
昭和十七年、八月十二日から五日間、大阪毎日新聞社で次のとおり山岳研究講座を開催。

第一日	登山と探検	加納一郎
	露営技術、森林作法	山口季次郎
第二日	登山と国民練成	四谷龍胤
	登山の装備に就て	諏訪多栄蔵
第三日	砂漠の体験	宮崎武夫
	山岳信仰の変遷	笹谷良造
第四日	岩登り術の基礎	水野祥太郎
	登山の文化史	桑原武夫

第五日　「ナンダ・コット」及び「アンデスの霊峰を衝く（ポーランド山岳協会のメルセダリオ初登攀）」の二映画を上映

また十一月二十六日より三日間、同じく大毎講堂で冬季山岳研究講座を開催。

第一日　スキー術の変遷　水野祥太郎
雪中露営　関根吉郎

第二日　登山におけるスキー術の変遷　津田周二
氷河地形の観照　田中　薫

第三日　北と南　今西錦司
登山用短スキーについて　角倉太郎

これは関西支部発足以来の快挙で、非常な成功裡に終り、この講座を朋文堂から二冊にまとめて出版したが、この出版に際しても本部は大事をとって関西支部編とするよう申入れがあったようだ。支部ではこの余剰金五百円を本部へ寄贈し、本部から感謝状をもらうという一幕があった。

昭和二十年六月一日、支部ルームのガラス窓を破って焼夷弾が飛びこんだが、幸い一隅にあった長岡書記の机を焼いただけで図書などは類焼をまぬがれた。当時支部の世話をしておられた富田氏は図書の保管を憂慮し、空襲によって全焼せぬ間に場所を移しておくことに腐心され、加賀正太郎氏の別荘を借りる了承を得たが、戦時中のため運送の便が得られずそのまま終戦を迎えたのだった。

昭和二十一年、日本登山協会と日本山岳会との合体問題が起り、近畿地区においても関西登山協会はＪＡＣ関西支部と合体し、日本体育協会に加盟しているＪＡＣ側が主体となることが決ったが、体質的になかなかスムーズには事が運ばず難航を続けた。そのため関西支部の体質を改める意味から、今までの関西支部を再発足する方向に動いて行った。

昭和二十二年三月七日、大阪朝日新聞社講堂で新支部の発会式が開催され、関西地方の実情に沿った、より活発な事業を進める体質として出発した。また、従来の関西支部は支部役員制をとっていたが、昭和二十三年より支部長を置き、篠田軍治氏が就任した。

昭和三十二年、篠田支部長が辞任されたあと、しばらく空席となったため常務委員が代行する時期があった。この年から関西支部研究会が諏訪多栄蔵氏の企画によって開催され、昭和四十年まで続行された。この研究会は単なる登山の講習ではなく、登山に関する研究の発表の場であり、実践への検討の場としてユニークな存在で、支部会員のみでなく広く大学山岳部、社会人団体からも多数の出席を得て、かなりの影響力をもったものであった。

同年、支部設立当時からルームとしていたビルの建て替えの関係から支部の移転問題が起り、北区老松町にあった好日山荘

のあっせんで、同店のビルの一室へ十一月に移転を行なった。

昭和三十三年、支部長に津田周二氏就任。支部長の努力によって関西支部報第一号が発行された。

昭和三十四年、海外遠征が次々と行なわれる中で、支部としても意義のある登山を実行してはどうかとの考えに傾き、企画委員がきめられ検討が続いた。最終的には南米アンデス、アコンカグア南壁が候補にのぼり、希望者を加えて計画が建てられたが、まだ自由でなかった渡航や目標の評価、その他多くの事情のため尻すぼみに終ってしまった。

この年、うつぼ公園内に大阪市が設置補助しているスポーツマンクラブに入会し、事務所に机を置き会場使用等の便利を得るようになった。

昭和三十六年、支部の運営に功労のあった方々に、以後相談役となっていただくための支部評議員制をとることを定めた。

同年大阪市立大学登山隊がランタン・リルンで遭難し、隊長森本嘉一氏は支部委員として最初に海外で遭難死された。

昭和三十七年、支部長に水野祥太郎氏就任。この年、神戸のグループで日本山岳会関西支部訪台友好登山隊を組織し、関西支部と称する最初の海外登山が行なわれた。

昭和三十九年二月、支部設立当時から御援助を惜しまれなかった西岡一雄氏は、静養中の宮崎で逝去された。

昭和四十年、大阪市の御堂筋に新築された明治生命社屋の建設記念会を七月に開催するに当り、日本山岳会に援助依頼があり、十九日は今西錦司氏、二十日は深田久弥氏の講演があった他、支部委員による夏山相談所、装備展示会、坂本直行氏の絵画展が併設された。

日本山岳協会が発足するに当って、関西支部がどのような立場をとるかについて、十一月十六日加藤泰安氏が来阪され、日本山岳会が日山協に加盟した経過など説明、各支部も府県の協会支部、岳連に加盟の方向を進めてほしいとの依頼があったのに対し、水野支部長から了承の意向が出された。

昭和四十一年、支部ルーム代値上げの申入れがあったが、それまでにも部屋代については好日山荘の援助があり、なおそのうえ支部が他の山岳会に又貸しするような状態が続いており、値上げによってルームの存続が危ぶまれる事態となって、五月十一日評議員会を開いた結果、すでに加盟しているスポーツマンクラブの事務室に支部を移転して財政の健全化を図ることに決定し、支部の店子には丁重に御引取りいただいて、六月十五日移転を完了した。ただし図書等については水野、今西寿雄両委員に保管を委託した。

昭和四十四年、支部長に今西寿雄就任。同年十月、ネパールのニルギリ付近へ偵察行の梶本徳次郎委員が高度障害のため死去。委員として二人目の海外遭難となった。

昭和四十六年、大阪大学P29の登頂未確認から、支部が後を

引受けてP29に登山隊を送る計画が建てられ、許可申請を提出するところまでになったが、住吉隊長の望遠写真によって登頂が決定され、またプロモーターの不足等もあって支部としての隊は編成されないで終った。

昭和五十一年五月十七・十八日、関西支部設立四十周年記念懇親会が、摩耶山上、神戸摩耶ロッジで開かれた。当日は東京から望月達夫氏を御招きして記念の講演をしていただき、豪華な福引き、尽きることのない懇談会が続き、翌日は下界までのハイキングによって閉会となった。

同年十月二十八日、日本山岳会創立七十周年記念講演と映画の集いを堂島の毎日ホールで開催。講演は槇有恒氏の「山への回想」、中島道郎氏の「高所順応について」、映画は「マナスルに立つ」が上映され、盛会であった。

支部の図書は倉庫に保管されたままになっていたが、死蔵するには惜しいということから、今西方のビルの一室に支部の図書室を設置して、図書委員が目録の作成を進めている。これらの図書は支部の方々が設立当時に寄贈されたものを始め、大冊を拝借したもの、その後も寄贈をいただいたもの、とぼしい中から支部で購入したものなどかなりの数量にのぼっており、今では貴重な文献となっているものもあって、これの整理と運用を今後も考慮していく必要がある。

さて最近の関西支部は山菜山行が盛んで、何かの楽しみを求めて歩き始めているが、ぼつぼつ支部で企画した海外登山も気運として出てきているようだ。今まで何回となく考えられては消えて行った計画が、どのように形をととのえて動いていくか、大きい楽しみの一つである。

〔文責・阿部　和行〕

支部の歴史〈II〉

越後支部のあゆみと私

藤島玄

昨年、越部支部創設前後から現在までの保管資料の一切を茶箱（高さ一尺三寸、縦横一尺一寸×一尺六寸）四個に詰め込んで積み上げたのであるが、これを整理、取捨選択するのは次代の会員の仕事として、今は遠くなった記憶だけで記しておく。

大正中頃の当時は、新潟県の旦那様扱の富農商の子弟は慶応、無産者の子弟の俊英は早稲田と決っていたそうだ。私はそのどちらでもない高小卒の新潟鉄工所の徒弟になった。したがって山に縁のある学校生活の覚えはない。山など馬鹿でも登れるが、同好者の組織化について、山の技術について、山をどう科学するかについて、それを教えてくれた先輩はいない。

信濃川に立つと、新潟平野の彼方に連立する越後山脈の銀屏風が見渡される。大人になったらあの見える限りの山に登りたいと、幼な心に思った。しかし、現実は家がランプから五燭の電灯になり、買い水が水道になったはいいが、新聞は取っていなかった。もちろん登山案内書などあろう筈もない。手探り足探りで日帰りの山をがむしゃらに登った。東京大震災に上京して、世の中にはこんなにルックザックを背負う人がいるのかとたまげた。

その頃、おっかなびっくり北アルプスなる山々に登った。道のある山に案内人を雇って、剱、立山から槍、穂高も歩いたが、金がかかる。昭和の初め飯豊連峰に入った。道も小屋もなく、山では金の使い道もない。以来、飯豊登山に精を出し現在

に至っている。

その頃、新潟高校ができて、会員小林文平先生が赴任され、初めて指導者を得た。二王子岳でスキーの練習もした。飯豊の春山にも登った。恋女房ももらったし、子供もできたが、両親は丈夫であった。せっせと山は登ったが、一方では失敗の連続だった。鉄工所員だけの山とスキーの会を作りあげた。町の人達の交友も拡まって、それらの同好者の山岳会の組織をつくったが、二度とも自分で作った会則により、自分が追放された。喧嘩口論大好き、性格的に狷介の点があったのだ。ただし、戦後まで酒は飲まない。飲むとすぐ吐きそうになってダウン。歌も知らぬし、芸もない。一向に面白くない真面目な議論ばかりしている。山へ入ったら、くそ負けるもんかという自負心があった。第一そいつらの多芸多趣味が気にくわない。賭事勝負のあれこれや、趣味の会の練習の余暇に、山もやるという根性が嫌いであった。そんなことにむきになって怒る方がどうかしているのに気がつかないのだ。

小林先生の紹介で日本山岳会の会員になった。入会金の値上げで一年待ったら、また値上げになった。また値上げかと文句言ってやったら、前年度でよろしと返事がきた。その借りを返えそうと、終身会員で入会したのだが、年会費を永年会員になるまで続けてきた。そんなものは、月割りにしたら散髪料より安いもんだ。永年会員になったら、嫁に行った娘を入会させて、穴を埋めた。そんなことより、一年待たずに入会したら、会員番号は三桁であったのに残念だ。

入会しても上京の機会がないから、本部も知らぬし、同県の高頭仁兵衛翁には、苗場山の大平晟先生の銅像除幕式で、大平先生には新聞社の座談会でしかお目にかかっていない。一方『山岳』に仙台二高の飯豊連峰の報告が次々と載った。新潟高校山岳部とは関係していたが、当事者でも学生でもない私は、飯豊に対する実績も研究も決して劣るものでない自信はあったが、発表する力もなければ、発表機関の連絡も持たなかった。特に佐々保雄氏の飯豊紀行には学ぶべき点が多々あった。飯豊をしっかり捉えて、音と響きを流し、彩りで飾った。

ただ羨しい思いで頭を下げた。終戦の前年だと思うが、寒いころ県内の疎開先から塚本繁松氏が訪れてきた。前後合せて四十泊以上はしたと思う。煙草は喫ったが当時は酒を飲まない私は、塚本氏が酒飲みだと知らぬし、本人も一言も言わない。乳児に配給の粉ミルク、砂糖が唯一のご馳走で、今もよく家内がいうが「またですか」と言うほどガブガブ飲んで、日本山岳会の四方山話にふけった。酒がほしいと言えば、手に入れる方法もあったし、濁酒を造る所へ案内もできたのに、よほど後になって知って、これには残念したし、感心もしたもんだ。そんなとき、でてきたのが、何とかして越後支部を作ってみたい、という考えであった。具体的な腹案については、私自身が固まっ

ていなかったので、それにはふれなかったと思う。

終戦直後、日本山岳会では会員に呼びかけ、会の復興を図るため「会報」を出すことになり、戦災をまぬがれた新潟で印刷しようと引受けた。手をつくして長岡、新潟を走り廻って紙の入手に努めたが、私や印刷所の力では定期刊行物の紙の確保はできなかった。そこへ救世主の松方三郎さんの一言で、新潟日報が新聞紙をくれて印刷することになったのは嬉しかった。

越後支部創立三十周年記念会を先年やったので覚えているが、昭和二十一年十二月、高頭邸に於て、支部結成発起人会を開き、その日をもって創立結成と本部へ報告した。本部の役員会でどのように扱ったかは、こちらはお構いなしに、認められたものとして、早速その組織化にかかった。

県内の会員諸氏の同意を得ること、市町村単位の山岳会を再建してその代表を新会員にすること、県体協に加盟すること（国民体育登山部門を担当して、運動具の配給を受けた）、などに着手した。また、支部は事業らしいことをしないことにきめた。しない支部が看板だ。したがって役員会も金集めもしない、喧嘩の種になる銭の問題を切捨てた。役員は新会員に依頼した。

こうして、評議だの会則だの選挙だの、後の恨みを残すようなことなく、うやむやのうちに支部は成り立ち、当然のように支部長に私がなっていた。翌年の初夏、まだ残雪の多い苗場山に、高頭、冠翁を講師に臨席いただいて、創立総会を開催した。その帰途、産みの親の一人、塚本主事がチフスで亡くなられた電報を受けたのは哀感に絶えなかった。それより先、終戦と同時に学徒動員生を引率されて行った小林先生もチフスで亡くなられている。二人の恩人を同じ病気で失なったとは、岳友を戦争で失った以上の痛手であった。

しない支部の方は『越後山岳』五号まで出した。そのうちに、新潟国体を迎える直前に山岳連盟問題が起きた。主催者の県の圧力でぎりぎりまできて、支部長、県山岳協会長の出る幕となった。誰が相手であっても、譲ることで国体登山を無事成功裡に終ることだ。条件は、一切の協会の人事をお任せする、渡す財産は一銭もない、私はもちろん退く、ただし、登山会場は既に決めた飯豊連峰は動かさない、トレードマークの協会名、旗、印判はそのまま残す、ということであった。そんなことは、子供に大人の帽子を被せたようなもんだと思っていた。似合なければ、いつでも取り上げて大人の頭にチョンとのせられる。その自信があったのは、寝食を共に山で苦労した実力者がそろっていたからだ。JACだ岳連だと騒ぐのは見っともない上に、馬鹿々々しい徒労である。

国体登山は物の美事に、支部会員達のお得意の会場仮室でイニシアティブを握って、成功のうちに打ち上げた。国体登山十周年に、岳連の当時のお歴々を招待してみた。みんなのご出席

にこちらが驚いた。そして、随分国体はやったが、記念日に招待されたのは越後支部が初めてだ、といわれて、またこちらはたまげてしまった。

支部の行事はすべて、全会員の気運の盛り上りを待ってやった。次は新潟県境全縦走だった。点ではなく、線だ。約七〇〇キロの踏破だ。支部会員は全力投球した。『越後山岳』六号の報告書を出した。支部は一銭の損得もなし。人様に一銭のおねだりをした覚えもない。それが支部長の仕事である。このころになって、岳連の帽子は大人の頭に戻って、県山協は面目一新、新しく発足して、ますます健在である。

年のせいで記憶に前後の違いはあろうが、支部の辿った足跡を拾いあげてここまで一気に書いてみた。人生の一巻が終ると二巻はない。そこで一棺の文字を当てる終りも近い。記録を基にした正確な越後支部の歴史は、これを口火に、これからである。越後支部では今、『越後山岳』七号、一等三角点の山特集が進行中である。

支部の歴史〈III〉

熊本支部設立当時を顧みて

西沢健一

はじめに

熊本支部は昨年（一九七七年）七月十三日をもって設立二十周年を迎えた。記念行事は十一月五、六日に宮崎県西臼杵郡高千穂町で行い、六日はウォルター・ウェストン師が明治二十三年十一月六日に登った祖母山（一七五七メートル）に、八十七年前を偲んで彼が辿ったコースから登った（会報『山』第三三八号記載）。本部から望月達夫、折井健一両副会長の参加があり、関西支部会員をはじめ県内外の会員三十八名が参加、盛況であった（会報『山』第三九二号、同第三九三号記載）。

これからの支部は二十才代の成年期に入るが、これを機会に設立以来の事柄を記録にして残しておこうと思い記念誌の執筆を思い立ったが、なかなか筆が進まないうちに山岳編集委員会から記事の依頼があったので、お受けすることにして私の山日記のメモから拾って当時を想い出してみた。勿論全容を記すことは出来ないし、紙面の制限もあって設立当時の前後のことを中心に書いてみた。支部設立に最も尽力があった初代支部長北田正三氏が死亡しているため、私の知っている以上に、初代支部長の御尽力があったことをあらためて申し上げるまでもないが、彼の遠大な構想と熊本県岳界に尽した功績に対し、敬意を表したい。

設立承認まで

熊本支部の設立は、昭和三十二年（一九五七年）七月十三日阿蘇郡一の宮町宮地の北田正三宅（聖山荘）に九名の会員が集って開いた第一回集会をもって発足の日としている。その前に設立準備の期間があるので、昭和三十一年後半からの記憶を思い出してみよう。

昭和三十一年といえば、日本山岳会が戦後初めてヒマラヤの八千メートル級の山マナスルに登頂した年である。それは、マナスルのみならずヒマラヤの巨峰が次々に各国の登山隊に登られた頃である。同年七月十八日には、熊本でも市内桜町にある自治会館でマナスル登山隊員であった加藤喜一郎、大塚博美両隊員を迎えて講演とスライド上映がもよおされた。

こうした時代の背景の中で、当時日本山岳会には山形、福島、越後、東京、山梨、信濃、富山、石川、静岡、関西、山陰の十一支部があり、九州には結成されていなかった。九州では福岡、大分両県下に少数ながら会員が在住していたが、いずれも支部を結成するには至っていなかった。私の知るところ熊本県内には北田正三氏（会員番号九八一号）のほか三谷孝一氏（同四〇九二号）が居られた。九州各県には岳連加盟の山岳団体はかなり多く組織されていた。だが、九州在住の会員は比較的少なかったので、九州で支部を結成するには、会員数を増やし、当時二十名以上とされていた定数を満たす必要があった。現在九州には熊本支部のほか、福岡、東九州の三支部が設立されて会員数は多くなっている。

昭和三十五年に熊本県で国民体育大会が開催された。当然、登山部門は従前どおり日本山岳会が担当せねばならないと考えていた（実際にはその前年の東京大会まで日本山岳会が担当して、熊本国体以降は全日本山岳連盟が担当した。現在は日本山岳協会となり、日本山岳会は日本山岳協会の一加盟団体となっている）。北田正三氏は県内で会員を募り、定数に達して熊本支部を結成し、来る熊本国体にそなえようと考えられていた。

この年の七月十八日、北田さんは県庁へ来られ、私に日本山岳会への入会をすすめられた。当時私は熊本県庁の統計課に勤めており、以前から北田さんは県庁へ来られた時は、私の部屋へ寄られるのを常とされていた。私はいろいろな話をきいては指導かつ激励をうけていた。二十四日に一足先に入会された三谷孝一氏（二代目支部長）にも会って山岳会の近況をきいた私はためらわず北田さんへ一任した。北田、三谷両氏の紹介で入会決定の通知があったのは九月十四日であった。私と一緒に入会したのは玉名金助氏、岸本舜治氏（県教育庁勤務）の二名であった。

北田正三氏は一方、熊本県山岳連盟の会長もされていたので、岳連の会員諸兄へも入会をすすめられていた。だがこの方

の希望者は残念ながらなかった。地方の山岳会に所属しているので重ねて入会する必要はないというのである。当時は現在のように山岳協会の組織が確立していなかったので、岳連の一部に（他県のことはよく知らないが）、日本山岳会に対し批判をもつ者もいた。それにもかかわらず北田さんは、入会を希望していた竹田市の首藤宗利、山口辿、大津省吾の各氏、荒尾市の荒尾宏氏、そのほか個人的に入会をさそい、私へも県庁内で会員を募ってくれと話があった。

会員を募集するにあたり、北田さんは支部は県庁内に置いて私に支部の世話をやってくれと申された。県内では長老的存在であった北田さんであるが、支部の会員を選ぶとなると慎重に考えられていたようであり、支部会員が家族的な連帯となっていける支部をつくりたいと言われ、また熊本県だけは岳連とうまくやっていき、事業は岳連がやって、岳連にできない面を支部がやるという両立した方針で県内和やかにやっていこうという北田さんの考えがあった（北田書簡より）。

また、支部を県庁内に置くという北田さんの考えは、県の観光、自然保護、保健体育行政を総招する県庁内に置いた方が、県自治体とのつながりができて連携が保てると思われたからである。当時は全岳連と日本山岳会の組織が一体化しておらず、登山部門を代表する日本体育協会加盟の山岳団体は日本山岳会が認められていた。これは国際的にもそうであった。

北田さんから入会のすすめがあって、早速県庁内から会員を四名推薦して入会してもらった。岸本舜治、菅隆雄、森秀雄、古賀寧の四氏であった。県庁内に支部を置き、県庁のメンバーが支部の主体となってやっていくことについて、十月六日県庁登山部（熊本県岳連加盟団体、当時主務幹事西沢健一）の村山豪氏と二人で北田正三氏を訪ね、支部のことなどについて話しあった。支部は県庁登山部内に置くことになった。

こうして話が具体化して、発起人の氏名も決った。北田正三、三谷孝一、玉名金助、西沢健一、岸本舜治、菅隆雄、森秀雄、古賀寧、首藤宗利、山口辿、大津省吾、粟津寿八朗、荒尾宏（敬称略・順不同）の十三名が発起人となった。そして十一月二十一日の理事会で設立が承認された。発起人十三名という小数会員で設立承認があったことは、発足後は二十名以上に充実する約束がなされていたとはいえ、別宮会長はじめ本部役員の格別な御配慮によるものと思う。特に折井健一理事には設立当初大変お世話になった。十二月二十六日折井理事から承認申請一切について総てOKとの通知があった。

設立総会の前後

支部発足にあたっては、本部地元の山岳関係者、体育関係者及び報道関係者来賓多数の御来駕を願って、大がかりなものを考えていたが、経費の点を考えて結局ごく質素な形で行うこと

になった。総会の案内状は七月一日付で支部会員へ発送され、その時の文面をみると、支部の設立総会は本部から正式連絡を待って挙行したい、その前に支部会員の集会を開いて懇談したいと書いている。正式の設立総会はこのあとに考えており、まずは支部会員集って話合いたいということになっていた。実際にはこのときの会合をもって設立発足の時となった。

ここで設立総会の内容を簡単に記してみる。昭和三十二年七月十三日（土）午後八時に会場となった阿蘇郡一の宮町宮地北田正三宅（聖山荘）に集合。出席者は北田正三、三谷孝一、玉名金助、西沢健一、森秀雄、菅隆雄、荒尾宏、首藤宗利、猪本勝茂（敬称略・順不同）以上九名。自己紹介につづき、支部規約承認、役員選出と議決がすすみ、支部役員は支部長北田正三、常務委員（兼会計監事）西沢健一、委員三谷孝一、同玉名金助、同首藤宗利を選出した。行事として本県出身の中野征紀氏（元日本山岳会北海道支部長故人）の帰国歓迎会を開くことを申合わせている。その他会員の意見交換を行い、首藤宗利氏から熊本支部へ入会し、竹田山岳会にとって将来とも明るい兆が見出され喜んでいると挨拶があり、北田正三氏からさきに九大生の阿蘇高岳北尾根遭難救助の状況説明があり、午後十時半閉会した。北田宅に一泊、翌日は全員揃って仙酔峡から楢尾岳（一三三一メートル）に記念登山した。

午前九時四十分、私たちは北田宅を出発、仙酔峡まで工事中の車道を歩いた。晴天に恵まれて仙酔峡には午前十一時半に到着した。楢尾へは東北尾根から取りつき、東谷へ入りジャンダルムへと進んだ。それよりナイフリッジを通り西のコルへトラバースし、頂上に着いたのは午後二時十五分であった。下山は楢尾鞍部から硯石避難小屋、馬の背を経由し、坊中駅（現阿蘇駅）に着いた時は午後四時二十分を回っていた。設立総会はかようにして終り、この日をもって私どもの小さな支部は産声をあげた。

支部で要する経費は当初はその都度分担徴収してまかなうことにした。早速支部旗を作り、支部長職印やらゴム印を用意した。昭和三十四年から三年間は山日記を委託販売し、販売手数料がわずかではあったが入った。個人の寄付金もあり、当初はそれでもよかったが、次第に物価が上昇してくると支部会費を徴収して収支予算をたてて事業費をまかなったがよいという意見が出て、昭和三十八年度から支部費を年額三〇〇円徴収することになった。支部旗を最初に作ったが、これは折井理事に照会したところ本部の規制はないということで、こちらで自由に考えた。大きさは縦七四センチ横一〇四センチ、天竺木綿の上等を選び、白地に茶褐色でＪＡＣのマークとその下に支部名を横書きに入れた。熊本市の丸総に依頼し、価格は七〇〇円であった。また、職印は支部の印は一寸角で七六〇円、支部長印は八分角で七二〇円、八月十四日熊本市の勧業館専門大店で調製

した。

最後にふれてみたいのは、支部規約第五条に規定した支部会員等の組織である。熊本支部は熊本県内在住会員及びその周囲に在住する会員と支部員として承認した者をもって組織している。発足当時すでに大分県竹田市在住の首藤宗利、山口迪、大津省吾の三氏は創立発起人として支部設立のために尽力されている。その後現在に至るまで支部会員として福岡県大牟田市、宮崎県西臼杵郡高千穂町在住の会員が在籍されている。こうした現象は熊本が九州の中心地であるばかりでなく、阿蘇、九重、祖母、背稜山系、いわば九州の山岳地域を地元にもった地理的条件と、創立者北田正三氏との繋りがあったことが挙げられる。現在は福岡県を主体とした福岡支部、大分宮崎両県を主体とした東九州支部があり、九州には三つの支部があるが、中九州的位置にある熊本支部は、今後とも地理的に隣県に接する地域の会員を含めて、地域会員の連帯を図りたいものである。

北田初代支部長の遭難

支部発足一年後に支部長北田正三氏の遭難事故が起きた。予期しないことだけにそのショックは大きかった。熊本支部にとってこれからというとき、また熊本県岳界にとっても熊本国体を前にして大きな柱を失った。

北田支部長は、昭和三十三年七月二十七日推定時刻午後一時三十分頃、阿蘇高岳鷲ヶ峰松ヶ尾谷源頭で遭難転落死された。この日北田さんは来る八月一日から開かれる第一回九州地区高体連登山大会の下検分をするため単独で高岳鷲ヶ峰へ登山された。遺体は翌二十八日午前十時半頃竜ヶ峰の岩場登攀を目的に入山中の礼峰クラブのメンバーによって発見され、そのあと熊本県岳連から派遣された捜索隊によって死亡が確認された。遺体収容は翌二十九日早朝から熊本、福岡、大分各県より駆けつけた約一五〇名の岳友により行われた。

七月二十七日の出来事はまず、根子岳で二名の遭難者が出た、という報告で始まった。三菱化成黒崎工場のパーティが根子岳縦走中、天狗岩大くだりで墜落死したというのである。熊本県岳連では直ちに救助隊が出動し、多数の岳友が根子岳へ行った。いつもこうした場合、陣頭に立って指揮をとられる北田さんの姿がこの日は見えなかった。岳連では早速北田宅へ連絡をとると、山へ行ったまま帰って来ないという。仙酔峡へ人を遣わしたが不明のまま夜になってしまった。そこへ八代の興国人絹山岳部の中島氏が見えて、二十七日正午頃鷲ヶ峰頂上で北田さんに会ったという情報が入り、北田氏は鷲より竜尾根へ向われたことがわかった。興人パーティの話によると、その日赤ガレ谷ガリーからキレットを越してジャンダルムへ向った興人パーティは、虎尾根西稜から一人で登って来られた北田氏と正午近く北壁下部で会っている。ここで興人パーティは軽い食事

をしていたので北田さんも一緒にトマトなど口にされた。これより北田さんは西稜回りで鷲頂上へ先発され、再び頂上で興人パーティと会って居られる。午後一時二十分頃まで頂上で写真を写してもらったりして興人パーティと別れた。遭難はこのあと竜尾根へ下降された直後、午後一時三十分頃と推定される。竜尾根東稜、鷲頂上より約一五〇メートル下降した地点であった。

興人中島氏の情報では死亡されたとはわからず、仙酔峡の山小屋や根子岳山麓の小屋など探索されたが不明、山上測候所にも立ち寄ってないことがわかり遭難の可能性が強まった。私は根子岳頂上にいたが、北田さんの情報を聞くや下山、要員のため宮地へ降りた。

翌二十八日を期して岳連では竜尾根へ伊藤信夫ら三名の捜索隊がくり出された。一方鷲ヶ峰では竜尾根に入っていた札峰クラブのメンバーによって午前十時半頃、遭難現場に白シャツ、白ズボン、黒チョッキの老登山者の転落死体を発見した。

北田さんの死に連なる転落原因が何であったか、誰も現場に居合わせなかっただけにその原因はわからない。胃けいれんが起きたのか、心臓麻痺が起ったのか、何かの原因でバランスを崩されたことが予想される。

各地から駆けつけてくれた山岳団体は三十六団体一五四名になった。この中には日本山岳会会員の方も多数居られた。

故北田正三氏の葬儀は熊本県岳連葬をもって八月十日午後二時より地元宮地の県立阿蘇高等学校講堂で行われ、日本山岳会本部より別宮会長の弔詞（会員による代読）が捧げられ、支部としても設立当初から御尽力かつ御指導をいただいた故人の遺徳を偲んで花輪と香典をお供えした。

熊本支部では昭和三十三年九月二十七日大分県竹田市で北田春子未亡人を招き支部主催の追悼総会を行った。この席で次期支部長に三谷孝一氏を選んだ。

あとがき

以上をもって支部発足当時の説明を終える。現在支部会員数二十名、この二十年間に入会した人は多いが、また退めた人もあって一時は二十名を越していたが、設立当時と大差ない人数である。二十年の間はあっという間に過ぎ、これといっためぼしい行事も取りたてでない。しかし、この二十名の会員と奥さん方を交えて毎年春秋二回開いている親睦登山を通じて、和やかな家族的雰囲気が自然に作り出され、今はそれが永い間の友情として結ばれている。永い間例会を通じて結ばれた会員の絆が、家族的に溶けこんできているといえよう。例会は原則的に春秋二回、会場は地域を持ち回り、県内か隣県の手軽な山へ出かけ、懇親会を開いて一泊、翌日は近くの山へ登るということにしている。今は一人でも多くの会員に出てきていただくこと

を願っている。しかし、このほかに支部の事業としてもっとやるべきことがあろうと思われる。単に親睦登山のみに終るべきでないことはわかっているが——。これからもっと若い会員を増やして、会員へのサービスを第一にいろいろと考えてみることにしたい。（一九七八・五・一）

K2・第二登（一九七七年）

吉沢一郎
新貝勲

高峰や俊峰や峻峰の登頂に成功した、登山隊の報告書を読むと、チーム・ワークのよかったことが、真先に強調されているのが多い。しかしチーム・ワークはいくらよくても、成功するとは限らない。天候の激変や不測の事態というのがあるからである。

それにしてもこのチーム・ワークとは何なのだろうか。全体の人数にもよるが、一人や二人の不届者、無自覚者がいても、それらを補って余りある優秀な人物が何人かおれば、差引きはプラスとなり、難しい登攀も案外スムーズにいったかのように見える場合がある。

われわれの場合は登攀の主力が地方の一匹狼の寄せ集めに過ぎなかったが、大部分のクライマーが人間性の豊かな、自己顕示欲のない者であったから、たとえサミターになる見込みはなくとも、自己犠牲的精神を発揮して隊全体のために、喜々として働らいていた。私はそれをBCに二十日間いた毎日実見していたのである。

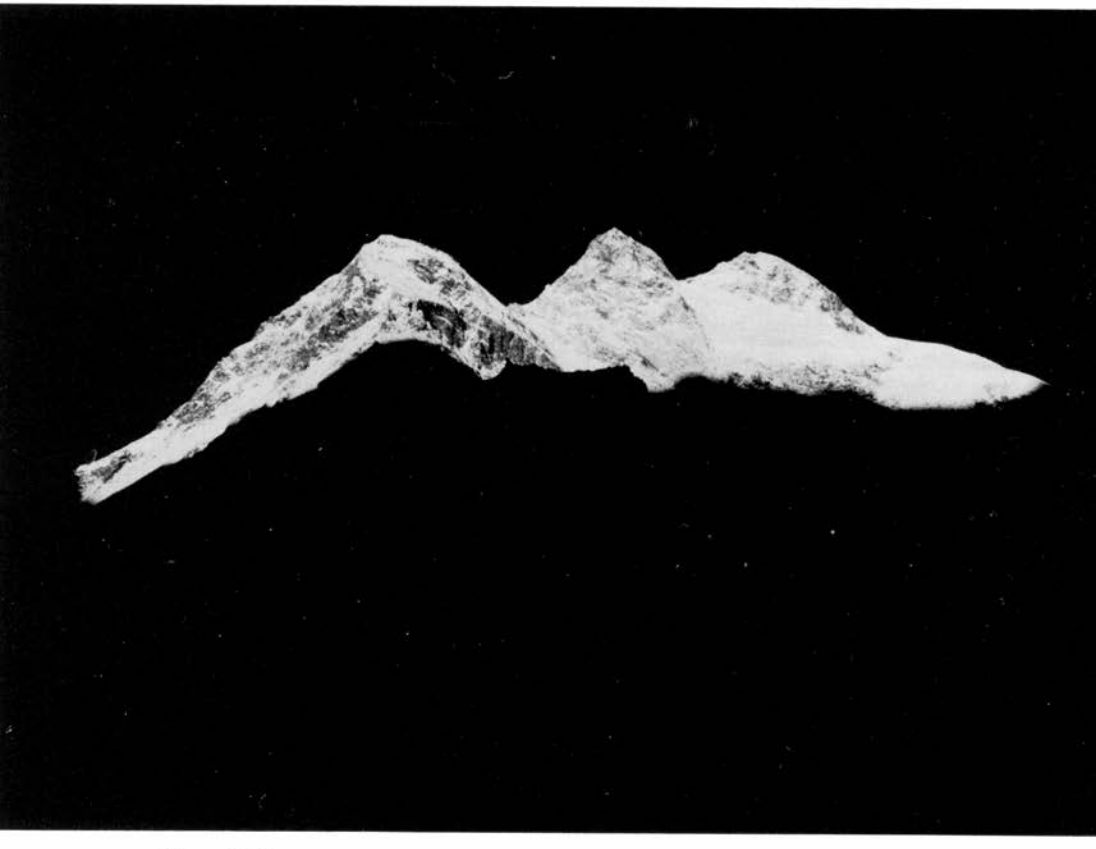
チーム・ワークというものは、タテ社会、ヨコ社会の問題とは大した関係がなく、今度の経験によって私は結局、それがタテ、ヨコに関わらず、個々の人間の人間性にあることを発見した。

兎に角、隊を構成する総ての者に必要なのは、経験と体力と人間性、それに多少の知性も欲しいが、これは人間性で補うことが出来る。大工であろうと左官であろうと、そんなことは問題でない。

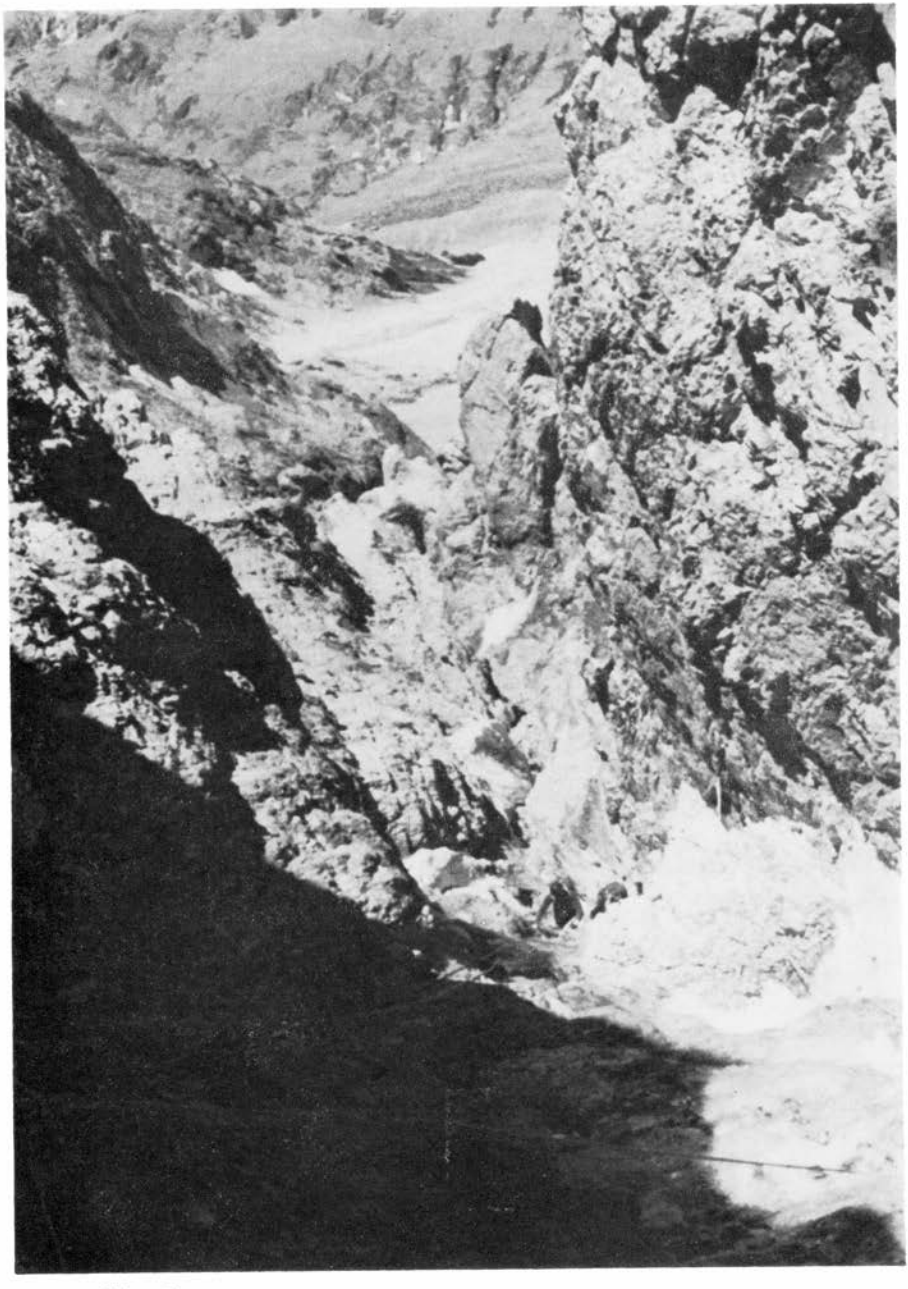
〔吉沢一郎〕

K2登攀関係最新年表

一、一九〇二年



<Plate 7-(b)>
K 2 の BC より望むブロード・ピーク。
Broad Peak, seen from BC of K 2.



<Plate 8>

ブロードピーク：センタールンゼを登る。

Broad Peak, climbing the center gully.

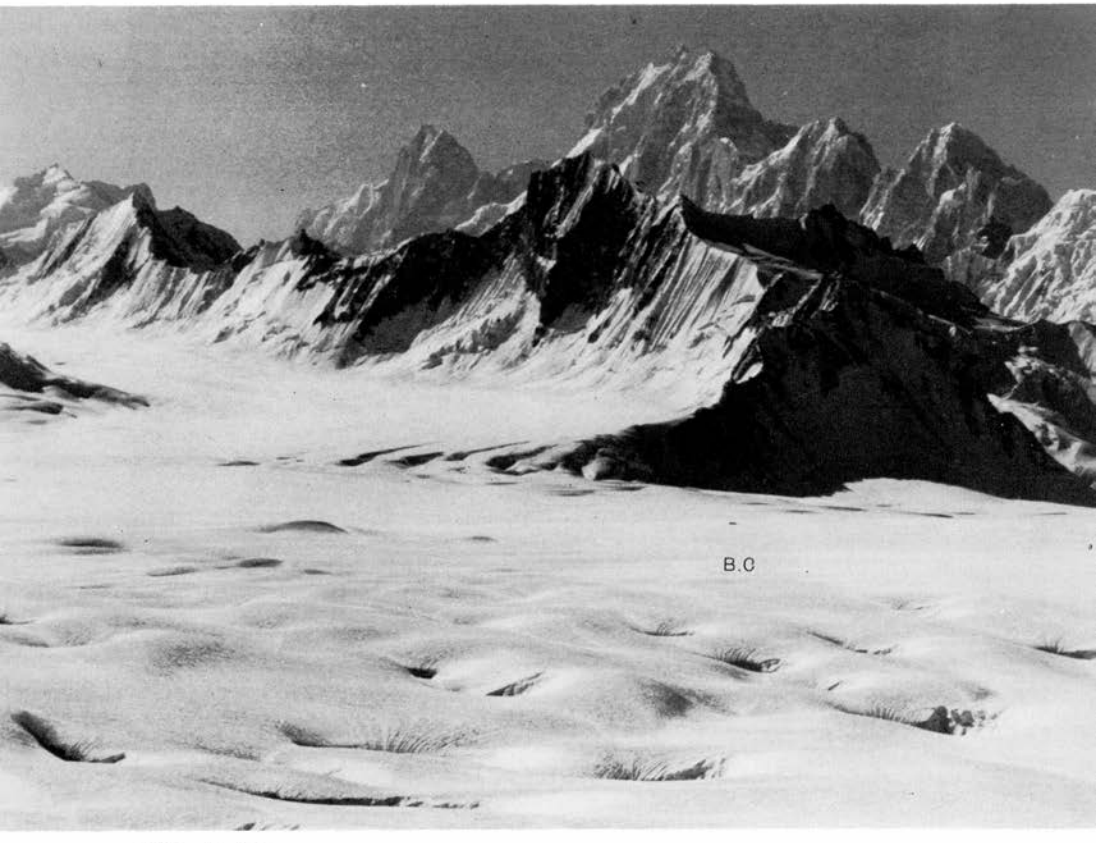
(by M. Yuasa)

<Plate 9-(a)>

タフ・ルタム (6,651 m), カニバサ氷河より。

Tahu Rutum (6,651 m), seen from upper branch of Kani Basa Gl. acier.

(by K. Makabe, Tokyo Seizan-kai Mountaineering Club, in 1968)

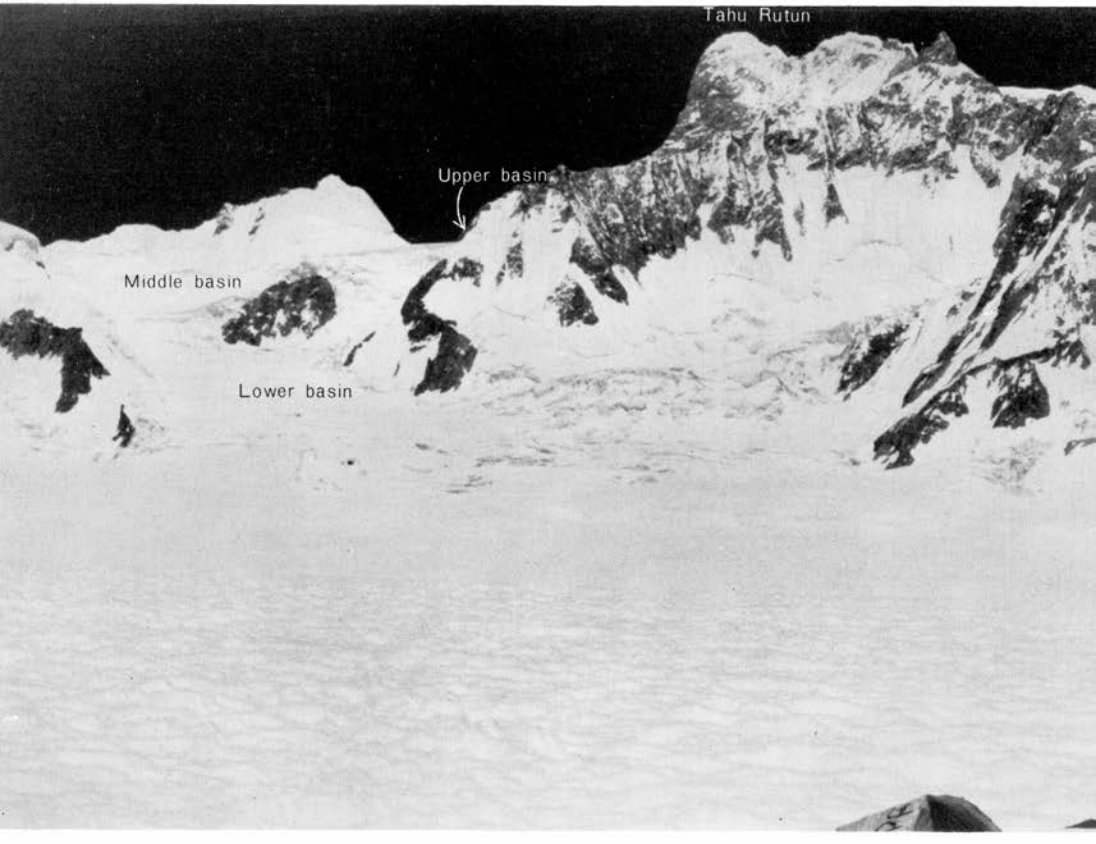


<Plate 9-(b)>

南タフ・ルタム氷河 5,250 m 地点よりオーガー (7,285 m)。

Ogre (7,285 m), seen from South Tahu Rutum Glacier at 5,250 m.

(by H. Ohnishi)

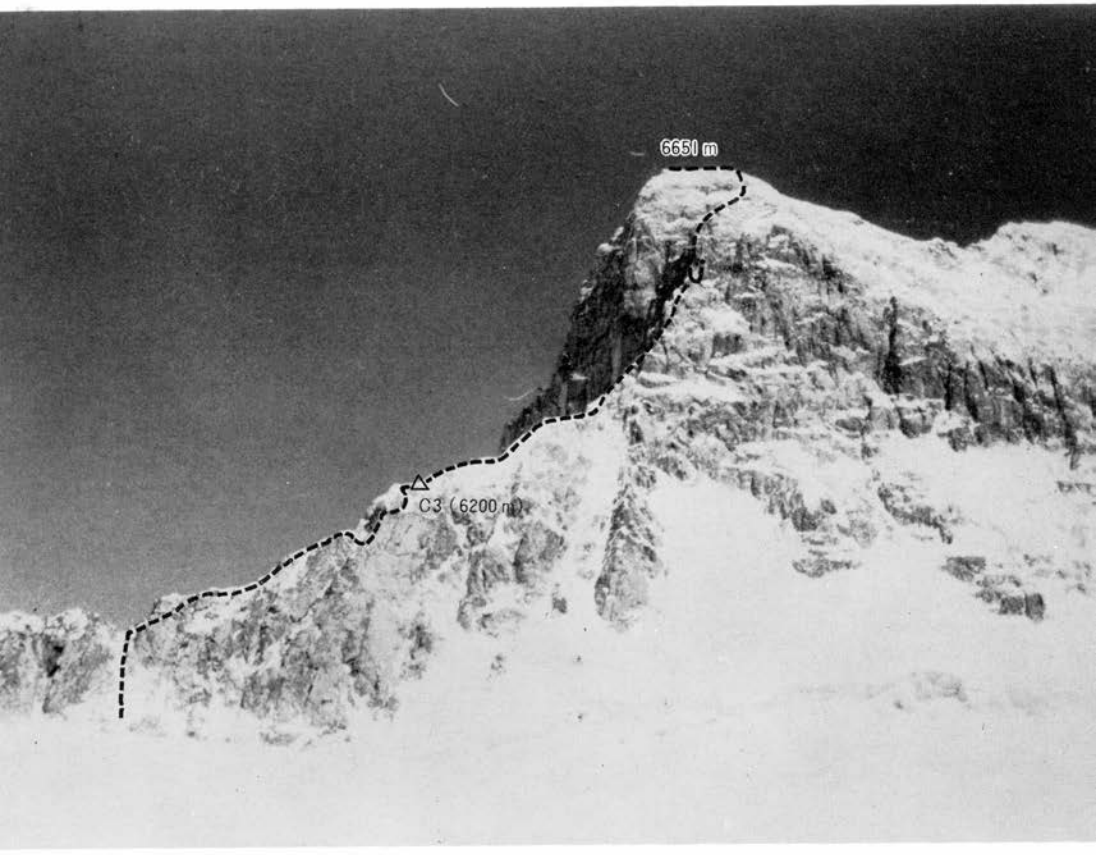


<Plate 9-(c)>

ベースキャンプ（5,090 m）より登攀ルートを望む。

Climbing route to Tahu Rutum, seen from BC (5,090 m).

(by K, Obata)



<Plate 8-(d)>

タフ・ルタム南西稜登攀ルート、第2キャンプ（6,030 m）より。

Tahu Rutum South West Ridge, seen from C 2 (6,030 m).

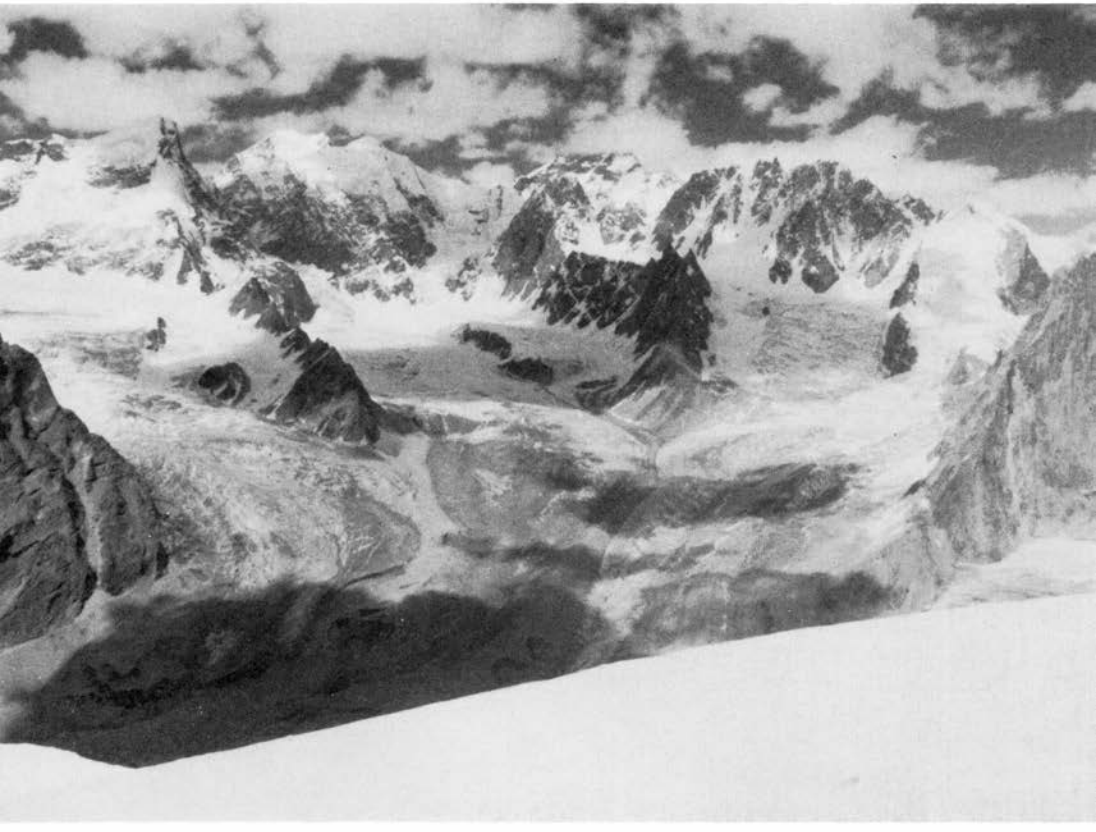
(by K. Obata)

<Plate 9-(e)>

タフ・ルタム南西稜を登る。

Climbing on Tahu Rutum South West Ridge.

(by K. Obata)



<Plate 10-(a)>

チュブギャル・ダブサ・ヴェステン氷河（19 の首を並べた氷河の意）、カルパトリワン氷河源頭のコルから見下ろす（中央やや左奥にプルポー・ブラッカ、中央雲につつまれたチョゴリザが見える）。

Chubuger Dabusa Vesten Glacier, seen from the col at the head of Carupatoriwan Glacier. Pruppoo Brukh in left backside and Chogolisa in the cloud in center back.

(Plate 10-(a)～(d) by H. Akiyama)

エッケンシュタイン国際隊、北東稜六六八〇メートルまで。

二、**一九〇九年**
アブルッチ侯隊、南東稜六〇〇〇メートルまで。

三、**一九二九年**
スポレト公隊、デジオとクルー、南東稜五六〇〇メートルまで。

四、**一九三八年**
ハウストン隊、南東稜七九二五メートルまで。

五、**一九三九年**
ウィースナー隊、南東稜八三八〇メートルまで。

六、**一九五三年**
デジオとカシン、偵察。

七、**一九五三年**
ハウストン隊、南東稜七七二メートルまで。

八、**一九五四年**
デジオ隊、南東稜を経て二人登頂。初登。

九、**一九六〇年**
ハケット（アメリカ）国際隊、南東稜七三〇〇メートルまで。

一〇、**一九七四年**
A・カーター隊、北西稜偵察。

一一、**一九七五年**
J・ウィッテカー隊、北西稜六七〇〇メートルまで。

一二、**一九七五年**
日本隊、広島三朗他、偵察。

一三、**一九七六年**
日本隊、高塚武由他、南東稜試登、七一〇〇メートルまで。

一四、**一九七六年**
ヤヌシュ・クルチャブ隊、北東稜八二六七メートルまで。

一五、**一九七七年**
日本山岳協会隊、吉沢総指揮、新貝隊長、計七名登頂。第二登。

〔吉沢一郎〕

記録概略

名称　日本K2登山隊一九七七
主催　日本山岳協会
隊員（パキスタン政府に最終的に提出したもの、人名等、塚本珪一による）
本隊員（年令順）
（1）**総指揮**、吉沢一郎（明治36年生、73才、一橋大学山

岳部ＯＢ、日本山岳会）

（2）**隊長**、新貝勲（昭和4年生、48才、福岡登高会、日本山岳会）

（3）**副隊長**（総務担当）、深田泰三（昭和6年生、45才、福岡市役所山岳部）

（4）**副隊長**（登攀担当）、原田達也（昭和10年生、42才、京都カラコルムクラブ）

（5）**登攀リーダー**、土森譲（昭和12年生、40才、京都カラコルムクラブ）

（6）**登攀リーダー**、森田勝（昭和12年生、39才、クラブ・アルピノ高嶺）

（7）**登攀リーダー**、中村省爾（昭和17年生、34才、ＪＥＣＣ）

（8）**登攀リーダー**、広島三朗（昭和年18生、34才、秀峰登高会）

（9）**登攀リーダー**、小野寺正英（昭和18年生、33才、ＪＡＣ）

（10）**登攀リーダー**、副島勝人（昭和19年生、32才、福岡北稜会）

（11）**登攀リーダー**、重広恒夫（昭和22年生、29才、ＪＡＣ）

（12）**学術隊**、塚本珪一（昭和5年生、46才、京都カラコルムクラブ、ＪＡＣ）

（13）**学術隊**、宮森常雄（昭和7年生、44、才会津山岳会、ＪＡＣ）

（14）**医療**、高橋俊紀（昭和23年生、28才、ＪＡＣ）

（15）**医療**、賀集信（昭和24年生、28才、関西登高会）

（16）**隊員**、高塚武由（昭和17年生、34才、魚津山岳会）

（17）**隊員**、寺西洋治（昭和22年生、30才、広島山の会）

（18）**隊員**、谷野彪（昭和20年生、31才、鳥取岳稜会）

（19）**隊員**、森田富雄（昭和22年生、30才、鳥取久松山岳会）

（20）**隊員**、馬場口隆一（昭和22年生、30才、碧稜山岳会）

（21）**隊員**、北崎暎次（昭和22年生、29才、福岡登高会）

（22）**隊員**、岸順之（昭和22年生、30才、G登攀クラブ）

（23）**隊員**、中込清次郎（昭和22年生、30才、東雯山岳会）

（24）**隊員**、内田志郎（昭和17年生、34才、京都カラコルムクラブ）

（25）**隊員**、酒井秀光（昭和23年生、28才、黒桧山岳会）

（26）**隊員**、小林利明（昭和23年生、28才、鵬翔山岳会）

（27）**隊員**、宇部明（昭和23年生、28才、鵬翔山岳会）

（28）**隊員**、小西信二（昭和23年生、28才、西鉄山友会）

（29）**隊員**、山本秀夫（昭和24年生、27才、関西登高会）
（30）**隊員**、丹生統司（昭和24年生、28才、大垣山岳会）
（31）**隊員**、門田完司（昭和24年生、27才、愛媛山の会）
（32）**隊員**、宇津孝男（昭和24年生、27才、名古屋山岳会）
（33）**隊員**、渡辺優（昭和24年生、27才、横浜蝸牛山岳会）
（34）**隊員**、林原隆二（昭和25年生、27才、京都カラコルムクラブ）
（35）**隊員**、大塚岩夫（昭和25年生、26才、JECC）
（36）**隊員**、瀬戸進（昭和26年生、25才、国鉄クライマーズクラブ）
（37）**隊員**、柏計雄（昭和27年生、25才、岐阜大学山岳部）
（38）**隊員**、小杉礼一郎（昭和29年生、22才、岐阜大学山岳部）

報道映画関係

（39）松尾良彦（西日本新聞）
（40）久坂信輔（毎日放送）
（41）門田竜太郎（北斗プロダクション）
（42）瀬川順一（〃）
（43）川本茂（〃）
（44）赤松威善（〃）
（45）阿久津悦夫（〃）
（46）塚本公雄（〃）
（47）田代啓史（〃）

パキスタン隊員

（48）アシュラーフ・アマン（33才）
（49）ナジール・アーメド・サビール（32才）
（50）ババール・サルダール（23才）

連絡官

（51）カマール・アフザール・カーン少佐
（52）シェラ・ハーン大尉

ハイ・ポーター　六名

その他　三名

総計　六一名

隊の行動

一九七七年

五・二六・大部分の隊員スカルドゥ出発。隊荷、約二五トン（ポーターの食糧を含む。トラクター、一五台。ジープ、二〇台。ロー・ポーターはスカルドゥ、バハー、その他で傭入れ、九〇〇名弱）。

五・二九・第一次隊バハー出発。
五・三一・第二次隊、六・二・第三次隊出発。
（以下第三次新貝隊の行動で日付を追う。）
六・三・ダッソ～チャポ
六・四・チャポ～チョンゴ
六・五・チョンゴ～アスコーレ
六・六・アスコーレ～コロフォン
六・七・コロフォン～バルドゥマル
六・八・バルドゥマル～パイユ
六・九・滞在
六・一〇・パイユ～リリゴ
六・一一・リリゴ～ウルドカス
六・一二・滞在
六・一三・ウルドカス～ゴレポロ
六・一四・ゴレポロ～コンコルディア
六・一五・コンコルディア～BC着
六・一六・第二次隊、BC着
（第一次隊のBC着は六・一一。）
六・一九・南東稜上にCI（五五三〇メートル）
六・二二・C2（六二六〇メートル）
七・一・C3（六八五〇メートル）
七・一二・C4（七四六〇メートル）
七・二九・C5（七九二〇メートル）
八・三・C6（八一三〇メートル）
八・四・第一次攻頂隊（馬場口、寺西、宇津、小林、ナジール）C6発二時半、八三〇〇メートルにて天候悪化、前進中止（三時四五分）。
八・八・第二次攻頂隊（重広、中村、高塚）**C6発五時、K2頂上着午後六時五〇分、下山開始七時二〇分、C5着、翌午前〇時一五分。**
八・九・第三次攻頂隊（広島、小野寺、山本、アマン、C6発五時一六分、頂上着午後二時一五分、下山開始四時一〇分、C6着、七時三〇分。
八・一〇・第四次攻頂隊、八名（馬場口、寺西、渡辺、ナジールはC6から、小林、丹生、林原、門田はC5から）予定したるも前夜半より悪天候となり登攀中止。
八・二二・降雪中にBC撤収、いよいよK2を後ろにして再びバルトロ氷河を下り下界に向って行った。
（以後の行動は公式報告書（講談社版）に譲る。）

〔新貝　勲〕

ブロード・ピーク登頂（一九七七年）

湯浅道男

ブロード・ピーク登頂（1977年）

はじめに

一九七七年八月八日、午前八時四十九分、待ちに待った瞬間がやってきた。

「それ以上高い所はありませんか」「ハイ！　K2以外には見当たりません」「オメデトウ……」

久しく忘れていたあのさわやかな感動が静かに私の全身をつつんでいた。十年来の宿願を果たし終えたからであろうか。思えば私にとっては長い歳月であった。しかし、ともに計画を立てた黒宮義孝君はもういない。ともにヘルマン・ブールを敬愛するという単純な動機から一緒にこの山を選んだ立案者は、その代案として実行された中部ヒンズー・クシュの最高峰コー・イ・バンダコールの頂稜に消えてしまったからである。私より先に頂上に向うことになった黒宮が最終キャンプを出るときに言った「先生、この借りは、カラコルムで返しますネ」という言葉は、一日として私の耳から離れない。BC設営から一週間という当時としては異例のスピード登頂ではあったが、かけがえのない黒宮を失なってしまった。爾来、私、そしてバンダコールの仲間にとってブロード・ピークは一日として忘れることのできない夢であった。「黒宮の遺志を果たそう」という仲間だけが知る秘めたる願いからこの計画は実現した。あの翌年、再起のための部員全員による韓国合宿を行ない、その実現を誓い合った。あれから九年、ヒンズー・クシュ、アルプス、ムスターグ・タワー、エベレストへと、仲間は、この日の来るのを待っていた。

私達には何の気負いも必要ではなかった。仲間だけの登山だったからである。それだけに、私たちなりの登り方をしさえすればよかった。一年前、「私たちなりの……」という、このあ

たり前の原則を忠実に厳守すること、これを肝に銘じていよいよ計画の実行に着手した。大野、伊藤（賢）のバンダコールの仲間、桜井、本郷のエベレストの仲間、アルプスやムスターグの辻、野呂、尾崎、そして若手OB会の頭目である寺西、そして現役の二十才になったばかりの連中が中心となって準備活動が開始された。

計画の概要

周知のように、ブロード・ピークは一九五七年、ヘルマン・ブールをはじめとする当代一流の四人の登山家からなるオーストリア隊によって初登頂された。それは、私達を魅了する激しいアルピニズムの躍動を、そのままの形でヒマラヤの舞台で実践した最初の登山隊といえるだろう。しかし、私達の登山隊は、そのような超人と評価されるような登山家ばかりで構成された隊ではない。燃えるような情熱で山を登りつづけている者もいれば、生涯一度だけ氷河を見ればよいという者もいる。成功するためには、文字どおりチーム・ワークによって登る以外にはない。大きな石と小さな石の組み合わせによって強固な古城のように石垣を築けばよい。

私達は、高所順化のための幾つかの諸原則を確認し合った。初めて到達した高度には絶対宿泊しないこと、常に休養日はBCで二日間休むことにした。そして若い隊員が多いだけに、不時の場合に備えて全キャンプに酸素ボンベを必らず二本常置することにした。装備は固定ロープ以外は最少限にする、アンザイレンを必らずする、そしてテントは各キャンプともに軽量テント一張りとし、荷上げ時には移動用の二人用超軽量テントを併設することにして、徹底的に荷上げ負担を軽くすることにつとめた。そして、従来のブロード・ピーク隊と異なるのは、最終キャンプを七三〇〇メートル以上に設営することと、酸素を徹底的に有効視する姿勢であった。これは、主峰および中央峰ともに、その初登頂隊は、通常の登山家ならば「遭難」と評価してもよいほどの激しい登攀活動をしたからである（中央峰のポーランド隊は下降中三名死亡）。私達の隊員のすべてが、そのような試練に打ち克つことのできるだけの可能性を十分にもっていたとしても、少なくとも「経歴」の上でそれを実証していない、という考え方を基本としていた。もちろん、多くの隊員は、海外登山の経験もあり、厳冬期の滝谷登攀程度の経験はもっていた。しかし、少なくとも、ブールのように一九五〇年代初めに「ドリュの西壁」を一日で完登したり、ナンガ・パルバッドの単独登頂をしたりした激しい経験はもっていなかったからである。

こうして、私達は、今日のヒマラヤ登山の最先端の基準からいえば、超安全主義ともいうべき思考を基礎に実行することになった。とはいえ、隊荷総重量はライト・エクスペディション

なみにすることにつとめた。いずれにしても、修練に修練を重ねてきた隊員には気の毒であったが、この登山の意味、巨峰登山の意味を理解して貰った。「他人志向型」の登山をするな、というのが合言葉であった。ルートは、北面は雪崩のために問題外とし、最終的には、いつもの私流に「山をみてから決める」というものであった。

B C まで

六月六日、隊荷通関のため先発隊五名がラワルピンディに向けて出発。一週間遅れて本隊が羽田を発ち十三日総勢十三名がピンディに集結した。二十日、スカルドに全員集結。現地食糧調達、ポーターの雇用のために一日を費やす。スカルド・ポーターは六十名にして、他はシガール・ポーターをやとってほしい、というSP（警察）の指示に従い、また増水のためジープがバハーまで行かないため、他のポーターは熱砂のボナでやとうことにした（ジープ四台、トラクター三台）。

ボナは、まさに熱砂と砂嵐の舞台である。口といわず鼻といわず、砂が遠慮なく入りこんでくる。かろうじて川辺だけが息ぬきの出来る場所である。しかし、スカルドからここまでのトラクター旅行と、この場所での試練を若い隊員はまことにさりげなく受けている。若さとは素晴しいものだ。日陰ひとつない砂の上で、ポーター雇用の業務が始まった。スカルド警察から、わざわざ随行して来てくれたオフィサーとわがリエゾン・オフィサーをつとめるキャプテン・モハマッド・クルシードとを中心として、事務は進められている。サーダーとしてスカルドから二十才の青年が知らぬ間についてきている。自らドクターと称するサーダーは、パキスタン政府が辺地医療のために養成した医療技術士とでもいったらよい薬品投与専門の技術者である。どうもスカルド・ポーターの大多数は、この青年が幾ばくかの手数料を収受するという約束で採用されたもののようである。

二十三日、一二八名のポーター、コック二名をともない、ふくれ上がった私たちの隊は、桜井、本郷をキャラバン責任者としてボナを出発、ダッソーに向かった。二十四日チャボ、二十五日チョンゴとキャラバンは順調に進んだが、一日二十キロ、四十度を越える暑さには閉口した。二十六日、アスコーレ着。

ポーターの再編成がはじまる。正義感の強いキャプテンとスカルド・ポーターのサーダーとの冷たい対立がそろそろ顕在化しはじめた。農村出身のキャプテンは、ポーターからピンハネをするサーダーのやり口を許すことはできないと主張するものの、「郷に入れば郷にしたがえ」ということをある程度納得して貰うしかない。スカルド以外のポーター・グループのそれぞれ信望の厚いポーター五人を選び、彼らと協議しながらキャラバンの運営をしたいというのがリエゾンの申し出である。平等

感を身につけているリエゾンの人柄を彼らは信頼しはじめているようだ。この頃からリエゾンのサーダー無視の行動がはじまった。

二十八日、ポーター一一八名とともに最奥の部落アスコーレを後にした。途中、ジュラの橋の通過や、最増水期の徒渉に苦労しながら、七月三日、ウルドカスに到着した。バルトロ街道における最後の緑の泊り場である。ここで一日休息をとりながら、明日からの食糧を作っておかなければならない。それと、一昨日ポーター用の食糧買付けに、アスコーレに走ったポーターの到着を待たなければならない。今日はとりあえず隊員用の米を支給してことなきを得た。

七月五日、ウルドカスを出発。次第に高度の影響がではじめ、ポーターの故障者が続出。今日の泊り場は、二日分の給料を支払うという約束で、ゴレ・ポロまで直行することになったからである。延々十二時間を越える氷河の上の行動時間で、みんなバテバテであったが、ポーターも気持よく頑張ってくれた。ピンハネ専門のサーダーを除いて、隊員もポーターも共に理解し合っているような空気がただよっていた。若い隊員が「バルティスタン・ポーターは悪い奴だなんて誰がいい出したんだ！」というほどであった。ほんとうに佳い一日であった。

六日、コンコルディア着。日本隊総指揮吉沢一郎氏と会い隊員一同感激した。

七日、ゴッドウィン・オースティン氷河の中央モレーン帯四九〇〇メートル地点にBCを設営して全員集結した。とにかく、今日から我々だけの生活だと思うと嬉しい。もうポーターをめぐるトラブルもない。ポーター・トラブルでは悪名高いバルトロ街道である。しかし、もうそのような時代は終りをつげるであろう。もし、トラブルがあるとすれば、それは、登山隊側の責任と考えるべきであろう。もともと、トラブルの本質は、その大半の原因が登山隊側の責任だという認識がなかったというところにあったのだろう、というのが私達の一致した意見であった。とはいえ、人間関係の煩わしさから解放されることにみんな喜んでいた。給金を貰ったポーターは「ジンダバード・キャプテン」を連発してどんどん下って行く。ピンハネ・サーダーは完全に浮いてしまったようだ。

それにしてもどうやって登ろうか。見上げるブロード・ピークは取りつくしまもない。二つの山をつみ重ねたような山だ、というのが私達の印象だ。ここから見る限りでは、ルートはない。約六〇〇〇メートルくらいまで赤い岩壁帯が聳立し、氷河や雪のつまったルンゼは常に雪崩の危険がひそんでいるからである。見ている前を、七〇〇〇メートルくらいに横たわる懸垂氷河の舌端が崩壊し雪崩が落ちて来る。どんなに時間がかかっても岩壁帯にルートをとらなければならない。

BC設営の合間をぬって、野呂、つづいて湯浅は、さらに中

央モレーン帯を登高する。ウルドカス辺りから見ると登高可能にみえた長大な南西稜（ディーレンフルトの指摘した「西稜」とは、この尾根なのだろうか。ヤニック・セニョールのいう「西稜」とはこれを指称するのだろうか。むしろ、私達が忠実に辿った尾根を西稜というべきであろう）は、下部だけで、七〇〇〇メートル峰の登攀、しかも今までのどのヒマラヤ登山の七〇〇〇メートル峰よりも厳しい登攀を強いられる「岩登り」ルートであって、まず現在のわが隊では登攀することはできない。さらに登ると、ブール隊以来の登高ルートとなっている下部岩壁帯を北西氷河右側に望見し、ホッとする。野呂は嬉しさのあまり、「あった、あった、登れるゾ」とBCに駆けもどったくらいだった。それにしてもブロード・ピークは、その名の通りがっしりと肩をいからしたべらぼうにスケールの大きい山だ。しかし、幸いにして若い隊員の調子は上々であるし、頭痛を訴える者は一人もいなかったので、前途に不安はなかった。

登攀活動

七月八日、ルート決定のために、大野、伊藤（昌）、野呂、尾崎が出発。

湯浅、桜井は中央モレーン帯からのルート指示を兼ねてK2隊を表敬訪問。私のもっとも尊敬する登山家の一人である森田勝が氷河で二時間も私たちを出迎えのため待っていてくれた。ただ、抱き合って声も出なかった。原田副隊長に導かれてBCへ到着、温かいもてなしを受ける。誰も彼も私の大切な友人ばかりだ。新貝隊長とは無言でお互いに人前も省みずボロボロと涙を流して向かい合っていた。この四年間の新貝さんの苦労…。帰り際に、くれぐれも雪崩に注意して下さい、との忠告をK2隊全員から受けてBCに帰った。

偵察の結果、下部岩壁のルートとしては、オーストリア隊のそれは現在は雪が皆無でルートとして不適切。フランス隊の北西氷河ルートは余りにも雪崩の危険が多過ぎるということで、結局、若干の落石はあるが、ポーランド隊とほぼ同じ「中央ルンゼ」をルートとして決定した。

BCからセラック帯を約一時間登高し、下部岩壁帯の取付点の急傾斜のガレ場中央にある「大岩」をデポ地点とした。

九日、直ちに登攀開始。伊藤（昌）をリーダーとしたルート工作隊はほぼ九十パーセントの作業を完了。快調なペースだ。他の隊員はデポ地へのボッカに専念。

十日、湯浅、辻、多田のルート補強隊は工作隊の後を追って荷上げルートの整備をする。C1予定地までの整備が完了。五十メートルダンラインロープで十八ピッチを固定した。難易度は三級上から四級上までであった。喜びの余りC1で一時まで談笑していた。しかし、帰路、ルンゼは融雪のためにその様相を一変した。突如奔流と化したルンゼ内を石がごろごろと音を

立て、落石は絶え間なく空中を飛来して、全行程をアップザイレンで下降している全隊員に襲いかかった。特に、湯浅は同行者がもうだめかと思うほどの落石に見舞われた。早朝行動の原則の厳守を身をもって知らされたわけである。

十一日、五四五〇メートル地点、鷲の巣のような狭いガレ場の突起部にC1を建設。早朝、ルンゼ内は結氷が著しく、固定ザイルには氷雪がびっしりとまとわりつきユマールの使用もできない。しかし、午後からはルンゼ内は流水と落石の雨となる。

十四日、C2へのルート工作隊は、午前十一時まで行動して、十六ピッチ、高度約六〇〇〇メートルまで達した。この高さまでの順化に一番気を付けなければならない。とにかく荷上げの苦しさの中で順化する。順化したかどうかのバロメーターは、一定以上の行動スピードとその夜の脈搏チェックによって決定する。

十九日、三日ぶりに好天が訪れる。C1までの荷上げが酸素ボンベを除いてほぼ完了していたので、一気にC2を建設し併せて荷上げを完了するために、荷上げ管理を担当する桜井をはじめ主力メンバーのほとんどをC1に集結させ、現役部員多田、鈴木もはじめてC1入りさせる。C3用テントを寸借してC1に仮設した。

二十日、予定地をデポ地として荷上げをする。現役部員の浜谷もC1入り。二十一日、二十二日、好天を利用してC1～C2間の荷上げに専念。行動スピード随一を誇る尾崎（BCとC1間を約二時間半、C1とC2間を二時間半くらいで行動する）とともに行動した現役部員三名はぐんぐんと目にみえて力をつけてきた。スピードも脈搏も平常値に近くグンと下がってきたからだ。これで登頂への不安はまったくなくなった。後は、次第にネパール・ヒマラヤでいえばポスト・モンスーンのような寒気の増してきたこの天候状況の変化にどのように対応するかであった。モンスーンの影響を受けているというのがほんとうのところかもしれない。

二十三日、風の強くなった「クの字岩」の上六二〇〇メートル地点にC2を建設。どんなに辛くとも主稜線上にテントを張るという原則を守ることができた。ブールのルートは採用しなかった。移動用二人用軽量テントも併設した。ガスの出る時刻が早くなり悪天の兆しがみえてきた。天候のパターンがつかめなくなってきた。

二十四日、風雪の中を辻をリーダーに四名C2入り。現役部員三名がこの風雪の中を行動したことは彼らに大きな自信を与えることになった。二十五日、風雪の中を技術的にしっかりしている尾崎、鈴木をC2からBCまで下降を試みさせる。悪天下でのルンゼ内下降の可能性が確認された。二十六日、C1が雪崩の危険にさらされる前に、寺西、多田、浜谷をBCに帰着

させる。二十七日、風雪のため全キャンプ停滞。午後、天候回復の兆しがみえ始めた。強風をついて、辻、野呂はC3へのルート工作を強行した。

二十八日、待望の好天である。寒気が顕著になった。C3までのルート工作隊の苦闘がプリズムを通してよくみえる。下部プラトーから主峰直下にせり上がる南西稜と西稜支稜と合流する肩まで、何どもシュルンドに落ち込みながら上昇をつづけ、C3（六九〇〇メートル）を建設した。

八月一日、C4へのルート工作。尾崎と浜谷C3入り。伊藤、本郷はBCへ帰る。

二日、尾崎、浜谷はC4へ向かい、テントを七五〇〇メートルのセラックの基部に設営。浜谷はC2へ帰り翌日の休息日に備える。代りに鈴木がC3入りした。C3の高度が若干高いので、尾崎だけに酸素を毎分〇・五リットル使用を指令。

三日、酸素使用のために完全に疲労回復した尾崎と鈴木は、酸素ボンベをC4に荷上げして登頂態勢を完全に整えた。桜井は「隊長見習いだから……」とひやかされながら最終ステージの計算に従事するために、わが隊きっての天気予報官・寺西とともBCに帰ってもらう。湯浅、寺西、桜井で徹夜で登頂態勢作りに専念した。鈴木は休養のためC2に下降し、登頂メンバー辻、野呂、尾崎がC3に合流した。連日行動のために、尾崎だけには午後からずっと酸素の使用を命じ、辻、野呂と同じコンディションにした。ここ数年、最も精進をした尾崎に登頂の機会を与えるために、隊員すべてがローテーションを無視してまで、彼に気を使っていた。C3へ張りつけ、毎日彼だけに酸素を吸わせるという芸当は仲間だけができることだ。

登頂態勢整う

四日、五日、天候が大きく崩れる。われわれにとっては絶好の休息日和である。どのテントにも酸素は充分常置されているのだから何も心配はない。ちょっとでも不調なものがいればC1といえども酸素を使用するように指令。登頂メンバーのうち、辻、野呂は七〇〇〇メートル以上での行動経験がなかったが、七〇〇〇メートルまでの彼らのスピードから考えれば何も心配はない。高度順化は充分とみたので、五日の夜は逆に酸素の使用を指令して体力の温存をはかった。これで三人の調子は万全だ。

六日、晴天になったが風が強いので、C4入りを断念。

七日、快晴。辻らがC4入りして登頂態勢は完了した。恒例の脈搏チェックによって全員好調を知る。入念な登頂打ち合わせ。そしてC3以下のメンバーには、収容態勢と撤収の打ち合わせを行う。後は明日の好天を祈るのみであった。明朝の出発予定は午前二時から三時、サポート隊は六時、行動開始とした。正午から必らずといってよいほどガスがかかるので、万全

を期することにしたのである。

登頂成功

八日、午前一時、野呂から入感。眠れなかったのであろう。酸素残量のチェックをする。全員のボンベが一〇〇気圧とのことである。毎分三リットル使用で二時間半は大丈夫である。最大の難場といわれるコルの取付まで残量ボンベで充分に間に合う計算だ。交信時には、レギュレーターのゲージを必らず通報することにした。BCではそれを直ちに「2リットルならば後何時間」という返事を通信することにした。コルの登りは新しい一五〇気圧の酸素ボンベ一本だけになるので担荷量も減り好都合だ。コルからは陽が昇るし、ルートも容易になるので二リットル使用で充分である。この旨を登頂メンバーに告げる。天候は大丈夫のようだ。BCは雪がパラついていたがバロメーターの針は上がりっぱなしだからである。

午前二時三十分、全員元気に出発。六時七分、待望の主峰と中央峰のコルに到達した。元気いっぱいの交信。この瞬間、私は「ヤッタ!」と思わず叫んでしまった。この行動スピード、あの声の元気さ、もう頂上は間違いなかったからである。酸素は替えたばかりの一五〇気圧入りボンベである。二リットル使用で六時間。C4まで帰るのに充分の量である。成功は疑いない。八時四十九分、遂に頂上に到達した。写真をとり、黒宮のレリーフを頂上直下の岩にそなえ頂上のセレモニーを終了した登頂隊は、尾崎の「頂上よ、さようなら」という声を合図に、九時十五分下降を開始した。十一時五十四分C4に帰着し、サポート隊と合流した。酸素はC4到着五分後に空になった。午後三時二十八分、撤収メンバーを含めた全員がC2に集結した。五時、登頂メンバーは食事を終わり、残った酸素ボンベを使用して、C2のテントで静かに眠っていた。それから間もなく、K2頂上の重広から登頂を告げる交信があった。嬉しかった。新貝隊長とカマール大佐に心からの祝辞のトランシーバー交信をした。

おわりに

あっけない幕切れであった。実行動日数十九日、隊員の平均実行動日数は十五日、隊荷総重量は酸素ボンベ二十二本を含んで約二トン、C1以上への荷上げ総重量は酸素ボンベ二十本と固定用ザイルを含んで五〇〇キロくらいであったろうか。それでも、C1からC3まで、非常事態に備えて、未使用の酸素ボンベ二本以上を各キャンプに必ず常置しての上であった。

日本を出発して帰国するまで約二カ月半というのも比較的短い遠征期間であったといえるだろうか。ブロード・ピークでの登山は、八五〇〇メートル以上のそれとは本質的に異質であるとはいえ、きわめてコンパクトに登山を終了し得たことはまこ

とに幸運であったという一語につきるであろう。隊員のすべてが、決して〝経歴的〟には精鋭とはいえないし、十三名とはいえ、登攀要員ははじめから十名という計画であった。それでも、私達には成功の確信があった。それは、自分達の持場に徹することができるという、隊員同志の信頼感があったからである。だから、私達の登山隊の成功の真因は、最も古典的な高所登山論をもっとも忠実に実践した結果であり、それがいくつかの幸運をよび込んだということがいえよう。全員が激しい頭痛一つ味わうことなく登山を終了し得たことは、一にも二にも、強い登山家を基準にした最近流行の高踏な高所登山の一般論を、私達の力に応じた「私達なり」の戦術論に応用して展開したからであろう。ブールの記録も、メスナーの記録も、それは自分達の登山を行なうための一つの資料に過ぎない。金坂一郎氏のいわれるように「高所登山の忘れ物」がないようにというのが、私達の登山隊の哲学であり信念であった。それは、黒宮が「死」をもって教えてくれた登山だったのである。例をあげれば弱い者は一キロの荷上げ、強い人や強い人になり得る隊員にはそれ相応の荷上げをして貰うという「あたりまえ」のことを忠実に守ったからである。それに対して、仲間内でなにも不満がなかったのは長所も短所も知りつくした仲間だからであった。

〈記録概要〉

隊の名称　愛知学院大学カラコルム学術登山隊一九七七

活動期間　一九七七年六月～八月

目的　ブロード・ピーク（八〇四七メートル）の登頂

隊の構成　隊長＝湯浅道男（41）、副隊長＝大野紀和（33）、隊員＝寺西邦夫（31）、伊藤賢治（30）、辻美行（30）、伊藤昌弘（29）、桜井洋介（28）、本郷三好（26）、野呂和久（26）、尾崎隆（25）、多田光孝（22）、浜谷光安（20）、鈴木清彦（20）、リエゾン・オフィサー＝モハメッド・クルシード大尉

行動概要　6月21日スカルド発。7月7日BC（四九〇〇メートル）着。7月11日C1（五四五〇メートル）建設。7月23日C2（六二〇〇メートル）建設。7月28日C3（六九〇〇メートル）建設。8月2日C4（七五〇〇メートル）建設。8月8日登頂（辻、尾崎、野呂）。

タフ・ルタム登頂
——南西稜の登攀——（一九七七年）

桑原信夫

プロローグ

当初、目標とする山を、バツーラ第一峯の西方にある六八八五メートル峯にするか、タフ・ルタム（六六五一メートル）をとるかについて議論を交わしたのであるが、広島山の会のカンピレ・ディオール隊の記録や、泉州山岳会のバツーラ踏査隊の記録から、六八八五メートル峯の正確な位置の山容に疑問が生じたところから、私達はタフ・ルタムを選ぶことにした。

この山は、タルタムと呼ばれたりしているが、シプトン隊が一九三九年に作成した「Hisper-Biafo Glacial Regions」という地図や、また一九五九年のイタリヤ・モンツィーノ隊のカンジュト・サール登山報告書の中に出ている Tahu Rutum の方を取り、多少言いまわしがむづかしいが、タフ・ルタムを隊で用いる名称とした。

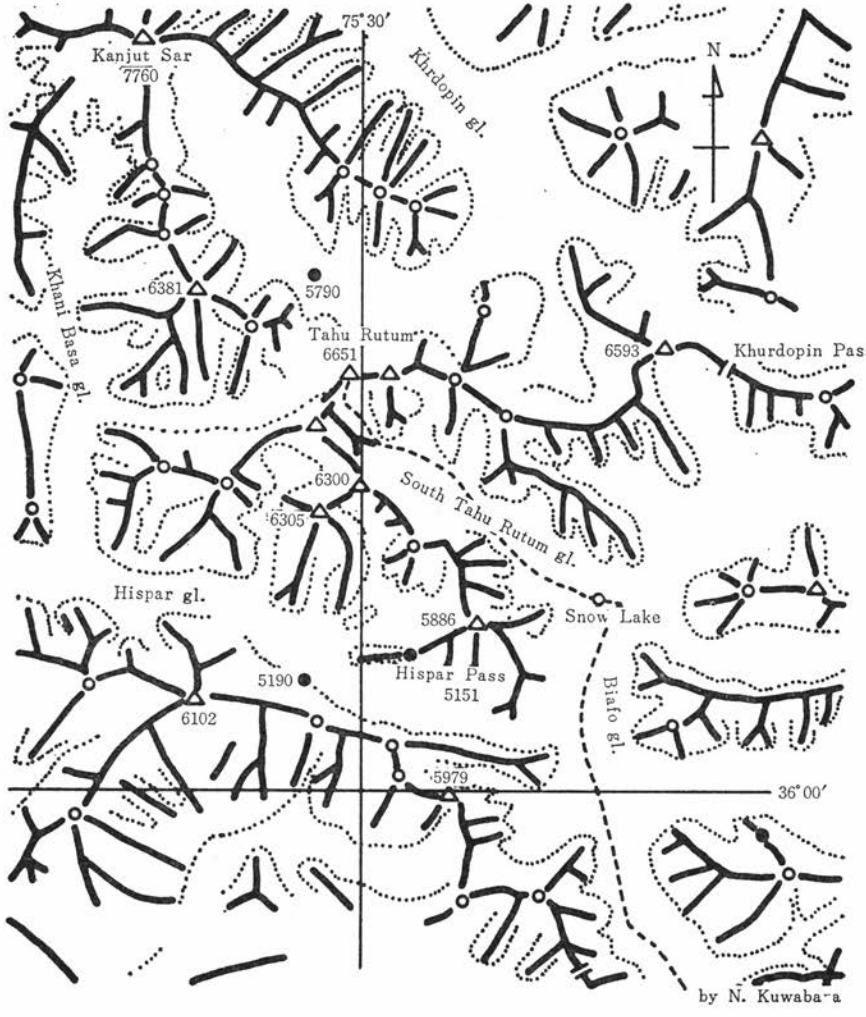
一九七六年夏、泉州山岳会カラコルム登山隊がビアフォ氷河域ラトック第一峯に遠征した。私達は、ビアフォ氷河を源頭近くまで踏査された同隊の上川、谷口両氏から、タフ・ルタムの正確な情報を得ることができた。

この山は通常ヒスパー氷河から入るのが最も具合がよいので、パキスタン政府へ提出する登山許可申請書にはそのように記したのであるが、このルートからの許可は下りにくいという見通しを持っていたので、山はタフ・ルタム一本にしぼり、ルートを別にビアフォ氷河を経由するものと、アランドを経てムシクラ峠を越えるものとを併記して、一九七六年十月八日に在京パキスタン大使館へ登山申請を行なった。その結果、年明けた一九七七年三月十七日になって、在京パキスタン大使館からビアフォ経由ということで許可を得た。

許可書を手にしてから出発までは二ケ月余りしかなかった

Chart 6-(a)

Route Map to Tahu Rutum



が、隊員の意気も高く、あらかじめ立案していた計画にしたがって進められる準備は早かった。特に食糧については、ベースキャンプから上部のものはすべて二食分一パックのレーションとし、パッキングケースも各キャンプごとに色分けしたので、極めて軽量かつコンパクトにすることができた。

五月二十五日、全隊荷六四三キロ（中味五五〇キロ）を航空便に託し、隊員は全員揃って六月三日に羽田空港を出発、ラワルピンディに向かった。

キャラバン

四十度を越える酷暑のラワルピンディでは、政府、リエゾン・オフィサーとの打ち合わせ、隊荷の引き取り、装備食糧の買い増しなどの多くの作業を、全員で手分けして迅速に進めた結果、一週間という驚く程の短期間で総てのことを処理することができ、私達は六月十一日にはスカルドへ向けてローカルフライトでラワルピンディを飛び立った。

スカルドに着いたその日のうちに、必要とするポーター四十八人を雇い入れ、われわれはレストハウスに宿をとった。先にラワルピンディから送った荷物四十一個のうち、二個が未着のため、三人の隊員を残し、翌日私達は三台のジープに分乗してスカルドから四十八マイル先にあるバハに向かった。

繁雑な作業をこのようにスムーズに進行させることができたのは、何にも増して有能なリエゾン・オフィサーのキャプテン・ブット氏を得たからであった。スカルドで雇ったポーターたちは、サダール（ポーター頭）の他はすべて四十八マイルを徒歩でバハまでやって来るので二日間かかる。この間にスカルドで未着の二個の荷物を受取った三人の隊員もバハに到着した。

カラコルムのほとんどの地域の水が濁っている。バハ滞在中に、この濁水は一度ボイルして静置しておくときれいになることがわかり、それから大鍋に水を入れて焚火でボイルさせて使うことにした。

食べもののうらみはどこの国へ行っても変らないようで、バハ出発の前夜ブットの食糧をサダールが少し失敬したのがばれて、怒ったブットは速刻サダールを馘にした。以後わが隊のポーター頭はブットが兼ねることになった。これは別の意味で都合がよかった。というのは、われわれの雇ったサダールはじめポーターたちは、ビアフォ地域を全く知らないので、アスコーレでポーターの半数を解雇する予定だったが、もしサダールがいたらアスコーレ以降のキャラバンの統率が更にむづかしくなっていただろうから。

六月十五日朝、ポーターを集合させ、ブットがウルドゥ語に訳してくれた訓示をたれてバハを出発、いよいよキャラバンに入ったが、折悪しく出発する頃から雨が降り出した。歩く程に雨足も激しくなるので、この日は約二マイルの行進でダッソに

つき病院の建物を借用して泊ることにした。夕方には雨も上がり、翌日から本格的なキャラバンに入った。チャポ～チョンゴと泊りを重ねて、三日目にはアスコーレに入った。

アスコーレでポーターの半数を解雇して、アスコーレのポーターを補充したが、このうちの数人の年輩のポーターは極めて性が悪く、トラブルに次ぐトラブルに悩まされた。その原因は靴などの装備の要求と支給する食糧についてであった。それでもブットの努力によって、キャラバンは遅滞なくナムラマンゴを経てバインターのキャンプ・グラウンドに歩を進めた。

これから先は氷と雪の上を進むことになるので、ポーターたちは高所ポーターなみの条件を要求してきた。われわれは賃金については、隊荷を準備する段階であまりにも軽量コンパクト化を目ざしていたので、ポーターに貸与できるのは十一足のゴム長靴と靴下手袋だけであった。このため、このバインターから出来るだけ上まで荷上げしてデポ地をつくったのち、十一人を残して解雇した。

四日間かけて氷河上に二つのキャンプを伸ばし、隊員のほとんどはポーター以上の荷物を背負ってピストン輸送を重ねた。六月二十六日夜、定期的な賃金の支払いをすませたところ、翌日の未明に六人のポーターが逃げ帰り、残るポーターは五人になってしまった。彼らはチョゴリザの南にあるフーセ村の兄弟と従弟から成るグループの若者で、われわれは彼らを「フーセ村の五人衆」と呼んでいた。彼らにはエキストラ・チャージを支払って、テントと若干の食糧をかつがせ、隊員も四十キロ近い荷物を背負って、この日ベースキャンプ予定地である五〇九〇メートル地点の雪の台地にたどりつき、ベースキャンプを仮設した。

その後三日間、C1へのルート工作と併行して氷河上に残した荷物をかつぎ上げ、六月三十日八〇〇キロの荷物を上げ切りようやくBCの陣容を整えることができた。

この段階でフーセの五人衆には七月二十二日に上って来るようウルドゥ語で記した指示書を渡し、若干のボクシスを与えて下山させた。ポーターへの高所用装備の不足から、バインターから上のキャラバンには苦労させられたが、隊員が五〇〇〇メートルに近い高所で、三〇キロ以上の荷物を背負って荷上げをしたことが高所順応に極めてよい結果をもたらした。

展　開

BCはヒスパー峠を左にやりすごし、ピアフォ氷河の源流、スノーレイクと呼ばれる地域を越えて、タフ・ルタムから南に落ちる氷河の末端の雪の台地に設営した。このあたりはカラコルムというよりアラスカの氷河のような感じである。

タフ・ルタムは、南西稜、北西稜、東稜の三本の峻険な岩尾

根で構成されており、各稜の間にカニバサ氷河支流、南タフ・ルタム氷河、クルドピン氷河を形成している。特にカニバサ氷河支流側である南西稜と北西稜に囲まれた一面は、頂から一気に切れ落ちた岩壁となり、三段のオーバーハング帯を有している。

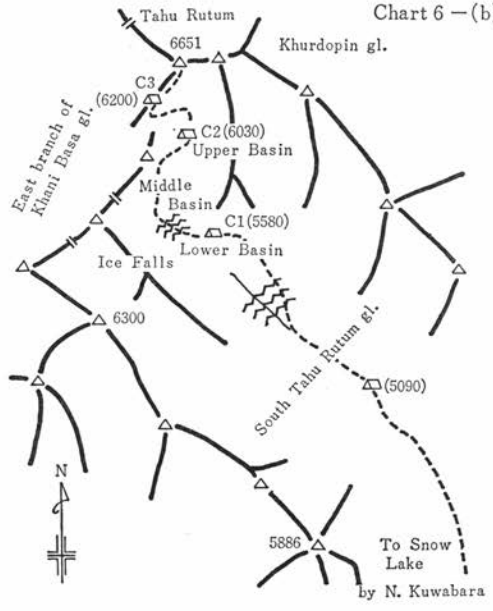
われわれのルートとしたスノーレイク側は南西稜と東稜の間に氷河が形成されており、これを南タフ・ルタム氷河と名付けた。

南タフ・ルタム氷河はルート工作には都合のよい三つの雪の台地を有しており、BCから先にあるクレバス帯を越したC1附近の台地を「前の院」、その上のアイスフォール帯を越したあたりを「中の院」、C2を設けた東稜と南西稜に囲まれた広大な台地を「奥の院」と呼び、C1の西方の尾根を「モスラーリッジ」、C2の裏側にある白い山を「鉢伏山」と呼んだ。

BCからの登山活動は、隊長、ドクター、ブットは別として、七人の隊員を二つのパーティに分け、ルート工作と荷上げを組み合わせ、四日間行動一日休養の割合でルートを伸ばしてゆくようにした。結果として、誰一人不調を訴える者もなく、当初の二パーティ構成を維持しながら進行した。

BCからC1までは、ほぼフラットな雪面を三マイル歩いてクレバス帯にかかる。クレバスを左右にさけながら右寄りに登高して、七月一日、五五八〇メートルの前の院にC1を建設し

Chart 6 —(b)



た。

ここまではほとんどの隊員が二五キロ以上の荷物を背負い、個人装備を除いて、ここに四四〇キロの荷上げを行なった。

C1からC2へのルートは、C1からアイスフォール帯を登って中の院に至り、これを斜め右に横断して二〇〇メートルの急な雪壁に至る。荷上げの初期にはここに固定ザイルを張り、ユマーリングで登ったが、のちに上部でのルート工作に固定ザイルが不足したので、これは回収した。雪壁を登り切り、最後のクレバスを飛び越えるようにして登ると南西稜が目前に現われ、東稜とに囲まれた広大な雪原奥の院に至る。ここからは南西稜を一望することができ、七月四日、ここに標高六〇三〇メートルのC2建設した。C1とC2の間は距離にして約二マイルであるが、中の院以外は傾斜が急なため一人当り十五キロ程度で荷上げを行ない、三八〇キロの荷物をC2に上げた。

南西稜へはC2から一旦氷河を稜線側に下降して稜線の基部に至り、八メートルのオーバーハングした氷壁となったシュルンドを、宮川登攀隊長のヨーロッパできたえた軽妙なアイステクニックによって登り、ワイヤーバシゴをセットした。その上は急峻なクーロアールで、四ピッチ一五〇メートル登って稜線のコルに出る。

稜線は氷と岩と雪とがミックスしたヤセ尾根で、部分的には馬乗り登攀を強いられたり、側面をトラバースしてクラックを登ったりする。七月十日、クーロアールのコルから八ピッチ三〇〇メートルを登った地点で、ヤセ尾根の一部を崩し、岩をならべてわずかなテラスを作り、C3（六二〇〇メートル）を建設、ここには一六〇キロを荷上げした。

C3からはなおも氷と岩と雪のミックスしたヤセ尾根の登攀がつづき、六ピッチ二六〇メートルで、頂上から鋭く切れ落ちる岩壁部に至る。一見手強わそうな岩壁も、幸いなことに連日の好天続きで岩肌が乾いており、アイゼンをはずしてどんどんザイルを伸ばしてゆくことができた。六三〇〇メートルを越した高度での快適なロッククライミング。左はカニバサ氷流上部支流まで一二〇〇メートルばかりスパッと切れ落ち、右は奥の院のベルグシュルンドまで四〇〇メートルばかり切れ落ちている。上部岩壁には大オーバーハングが張り出していたが、人工登攀によってルートを開いた。

C3を建設して三日目には、岩壁中心部十二ピッチ高差三〇〇メートルのルート工作も終り頂上への明るい見通しを得た。

アタック

頂上への目途をつけた七月十二日の夜、アタック隊員に選ばれた小畑、宇佐川、田中、光用の四人は、C3に入って眠れぬ夜を過ごした。七月十三日午前六時、頂上に向けて出発。天気はこの日も快晴、申し分のないアタック日和である。固定ザイ

ルを頼りに、稜線をトラバース気味に岩壁下部に至り、岩壁部にセットした大オーバーハング帯のアブミを用いてユマーリング、九時三十分に最終到達点まで登る。ここから頂上稜線につづく雪稜にザイルを伸ばす。雪はすでにくさっており、急峻な上に溝を掘るようなラッセルを強いられ、二〇〇メートルばかりザイルを伸ばして頂上直下五十メートルのやや安定した地点に四人が集まる。ここからは田中、光用が先発して十二時十五分、田中のバンザイをする姿が頂上に浮かび上がり、次々と四人が頂上に立った。

急峻な岩峯のわりに、頂上にはいくらかゆったりした広さがあった。快晴ではあるものの、風は冷めたく肌をさした。初登頂の四人は写真を撮ったり、行動食を食べたりしながら、C2から望遠鏡でアタック隊を追っている隊長と交信、約四十分頂上に滞在し、小旗をつけたピッケルを雪上にさしてきた。帰路は懸垂下降を連続して十五時四十分にC3に帰幕した。十六時に第二次アタック隊の宮川、松村、清水と大西ドクターが隊長の指示に従ってC3に登ってきたので、第一次アタック隊の四人はC2に向って下降、十八時に隊長の待つC2に帰着した。

七月十四日、第二次アタック隊は五時四十分にC3を出発した。天気は前日同様の快晴で、朝日はタフ・ルタムのするどくとがった容姿そのままをカニバサ氷河に投影していた。前日と同様にユマーリングで登攀を続けていると宮川は、大オーバーハングのルートのはるか上空を白鳥の大群がVの字をえがいて南方に飛んでゆくのを見た。十時十分二度目の登頂に成功して彼らは十三時三十分C3に帰着、この日C2からC3の撤収に向かった宇佐川、光用と共にC3を撤収してC2に帰着、こうして全隊員の登頂に成功した。

おわりに

われわれの登山では、全員が安全に登頂することを目的とするタクティクスをとった。そのため固定ザイルを有効に用いて、アンザイレンせずに連続に登攀できるようにした。その点D・スコットやL・メスナーのような方式とは異った登り方であるといえるが、チームワークに重点をおいた日本的なタクティクスが成果を生んだものと思っている。

〈記録概要〉

隊の名称　大阪登攀倶楽部一九七七年カラコルム登山隊

活動期間　一九七五年六月～七月

目　的　タフ・ルタム（六六五一メートル）の初登頂（全員登頂）。

隊の構成　隊長＝桑原信夫(45)、登攀隊長＝宮川広年(31)、同副隊長＝松村勝雄(29)、隊医＝大西英之(31)、隊員＝小畑和人(26)、清水豊(25)、田中義信

（25）、宇佐川幸夫（24）、光用和也（22）、リエゾン・オフィサー＝カリット・カデール・ブット大尉（25）

行動概要

6月3日大阪発。6月11日ラワルピンディ発。6月12日スカルド発。6月21日バインター。6月27日BC仮設（五〇九〇メートル）。7月1日C1建設（五五八〇メートル）。4日C2仮設（六〇三〇メートル）。10日C3建設（六二〇〇メートル）。13日小畑、宇佐川、田中、光用、タフ・ルタム初登頂。14日宮川、松村、清水、大西、登頂。16日BC撤収。28日スカルド帰着。

プルポー・ブラッカ登頂（一九七七年）

秋山宏明

出発まで

やはりヒマラヤか……と笑われもしたが、「ガラに合った山」を見つけ、地道にやれば出来ないことはない、と七二年の春から夢を語り、アッサムからヒンズークシュまで幾つもの計画案を練り、研究会を重ねたが、その可能性は「山」にではなく、自からの側にこそあると考え、とにかく動き出すことにした。研究会は実行委員会にと育ち、集まった隊員申請書が職員のみで十五人となった。一都六県に散る隊員は、昼夜にわたる十幾種の煩雑な勤務につき、遠征隊員として具備すべき認識も甘く、馴れ合いが苦労の種となった。その原因は、年間所得二百万足らずでその半数は妻帯者、その子供計十四人（帰国時には十六人となっていた）の糊口をひさぐ身で、三個月の無給生活を強いられることにあった。かたや、赤字再建の公企体では、長期欠務を含め付随する問題が多く、当局労組とも「素晴らしい事だが……扱いかねる……」ため準備の全てから公開を控え、静かに出て事故なく登りいつもの勤務に復し生活にもどることができれば最善と考え、最少限の協力を仰いだ。こうしてまとめたヒマラヤへの前提条件は、

㈠夢が育てた研究と、八名の海外登山の経験と技術で対処しうること。

㈡在職許容限界の欠務九十日以内で行動を全て終え、勤務に復せること。

㈢最低の経費と保有する装備で意図を達成できること。

㈣将来への経験の蓄積のため、多くの隊員が登頂可能な目標であること。

㈤未踏の氷河山域をたどり、七〇〇〇メートル前後の処女峰を登ること。

と申し合せ、具体的な目標を探した。

パキスタン、インド、ネパールなどへ隊員メンバーを調査に派遣して研究をつづけ、アプローチと気象の有利な条件を重視し、山域はカラコルムとの結論に達した。

「フーシェとコンダスの両渓谷にある山群の資料は僅かしかない……インド測量局は詳細な測量はしておらず、……どの探検隊も有益な資料を提供していない」(「カラコルム・一九七三」HKT編)。この文章に着目し、鋭峰を並べたコンダス針峰群の北方へ連る山嶺に地形的に「ある程度の高峰」が存在しても不思議ではないと考えた。吉沢一郎氏より、オーベルエステルライヒ登山隊の略図が月刊誌に紹介されており、K7から北へ続く山稜がチョゴリザの西方で主脈に合する地点に「C七〇四一」の数字が示されている、と聞き、かねての予想通りと喜んだ。われわれの前提条件にほぼ合致することも判り、このピークを第一希望とした。

在日パキスタン大使館で「無名峰では受付できない……K2でもよいから名を付けよ」といわれ、チョゴリザ西峰(仮称)とし、申請書を提出した結果、十月二十三日にようやく登山許可申請書が受理された。カラコルム帰りの岳兄からは、「山はないネ」「七〇〇〇はどうかなア」「氷河出合に虎がいるゾ」などとオチョクられ、有名峰や巨峰に魅力を感じぬわけでもないが、もう一つ味の異る山登りがしたく、「山がなくてもいいや」と腹をきめた。チョゴリザ南西峰を初登したコッペルミュラー隊長からは、「無名峰七〇四一」と「北と西側は全く不明」と書いた手紙が届き、カベリ氷河側からの五枚の写真も送ってもらった。

こうして、多くの例にもれず、日に夜のはてない準備作業から生活費のやりくりなどに駆けめぐった末「どうにか出られそう」となった頃、当のパキスタンの政情不安が戒厳令まで発展し、不安種が増えたが、とにかくも極端に節約した五〇〇キロの荷を別送し、かき集めたなけなしの銭を懐にして、「これで計画の五〇%は成就した」と喜び、思いもかけぬ多勢の見送りを受け、涙をこらえて羽田を発ったのである。

ラワルピンディで

これでも食料、なんとか使える日用品、三十五キロもある紙幣、一日一動作の各機関への手続き、慣れぬウルドゥ語を聞き日本語混りのエイゴを語り、暑さの中で味気のないパキスタン洋食を喰って下痢続き、体力の消耗でこれから先が思いやられながらも、山登りの最後の準備を予定通りに終えた。

観光省で登山計画打合せのあとに、

(一)、チョゴリザ氷河は誰も行っていないので状況は解らない。

(二)、今年は三月まで雪が降ったが、チョゴリザ方面は少いので雪崩は心配ない。

(三)、雪豹は十頭ぐらいいるが心配ない。虎は人間の味をおぼえた奴は来るが、普通はいない。用心して火を燃しておけ。

(四)、余分な銭は銀行へ預け、山には必要以上持って行くな。誰でも金を見ると変になる。

(五)、ポーターは我侭で自分勝手だが、しんぼうして使って欲しい。

(六)、ドクターは住民へも診療サービスをしてくれ。リエゾン・オフィサーとポーターにも是非たのむ。

(七)、土地の習慣による一日一ポロはやらせてもらうが、トラブルのないようDCに言う。

(八)、山名は君達が登って考えて来い。帰ってから結論を出すが、「山は無いかも知れないョ」。

(九)、八ミリカメラは禁止なのだが、フィルムの処置は帰った時はっきり答えを出す。

(十)、サーブからポーターへ、上から下へコミュニケーションをうまくやって欲しい。

などのやりとりをして、「山」と「野獣」の存在は疑問となって、「行って登ってみれば全てが判り大助かりだ、良い知らせを待っている、何かあったら軍隊でもヘリコプターでも使え」と珍妙な激励を受けた。

バルティと

二日遅れで六月三日、朝日と共にスカルドに飛び、砂糖と石油を購入し、某国K2登山隊からポーター用支給品を補充した。

六台のガタガタのジープが半砂漠と断崖の道を埃をまきあげ、エンジンに水をぶっかけながらガタガタと走りに走り、五時間三十分で緑濃いカパルーに着いた。地域行政官の公舎を訪ね、登山計画とポーター雇用などを話し、リエゾン・オフィサーが推せんするヘッドポーター（ヘッドと略）を拒否する口実をとりつけた。隊長が目をつけていた二人を呼び、健康診断のあとでキャラバンの行程（フーシェ以遠は不明）や谷奥の状況を答えさせ、「正直である、バルティ語の通訳に使える、住民がしたっている、若いが働き盛りで使い易い、忠実な子分を効果的に動かせる」として、採用した。早速この二人と子分達を使い、六月七日九時三十分からポーターの選抜雇用契約を開始、簡単な身体検査、三十五キロの担荷テスト、挙動観察にヘッドの意見も聞きながら、八十四名を決定し、食費五日分を仮払いした。

レギュレーション二十九項に従って「必要なポーターにセット販売する」と伝え、運動靴、靴下、サングラスをセット二十五ルピーで投げ売りしたら、またたく間に品切れ、二〇〇〇ルピーの臨時収入を得て、これで羊肉が喰えると喜んだ。

隊員と二三〇〇キロの荷とポーター全員の渡し賃として四〇

プルポー・ブラッカ南西峰頂上 (C. 7,000 m) より南方の山々展望 (at 18 : 50 July 22, 1977)

South from the summit of Pruppoo Brukh SW Peak (C. 7,000 m)

○ルピーの一括契約で、ザークを使い隊員のみ（ヘッド二人が手伝いに来た）の苦役で半日かかって荷を、サリン側の広い砂原へ渡し終えた。その日は砂嵐に巻かれて天幕生活第一夜を迎え、泥くさいチャイを飲まされた。

キャラバン

六月六日の薄明のなか、八方から集まって来たポーター達を、八名十組の班に編成し、七時十五分雲間から朝の斜陽がもれるフーシェ谷に向け出発した。

セイチョの小高いモレーン丘を過ぎると、踏跡はとぎれとぎれとなり、サイドモレーンの上をたどる。キャラバン予定日を過ぎ、食料の乏しさと寒さでポーター達の動きもにぶくなってきた。チョゴリザ氷河出合を横断する。チャラクサ氷河と直角に出合うこの氷河は、下流からはまったくその存在が発見できない。源流の朝日に映る白雪のタサと、その直下の谷幅いっぱいのアイスフォールが美しい。フーシェのポーター二人は、我我の言うチョゴリザ氷河をチョゴリンサ氷河と言い、一般的にタサ・ガンジイン（タサ氷河）と呼んでいた。

又、トリニティ峰はタサ（猟犬に引かれた狩人の意）峰であり、その猟犬はアイスフォールを左右に分ける岩峰（後に仮称センターピラーとした）を指していた。

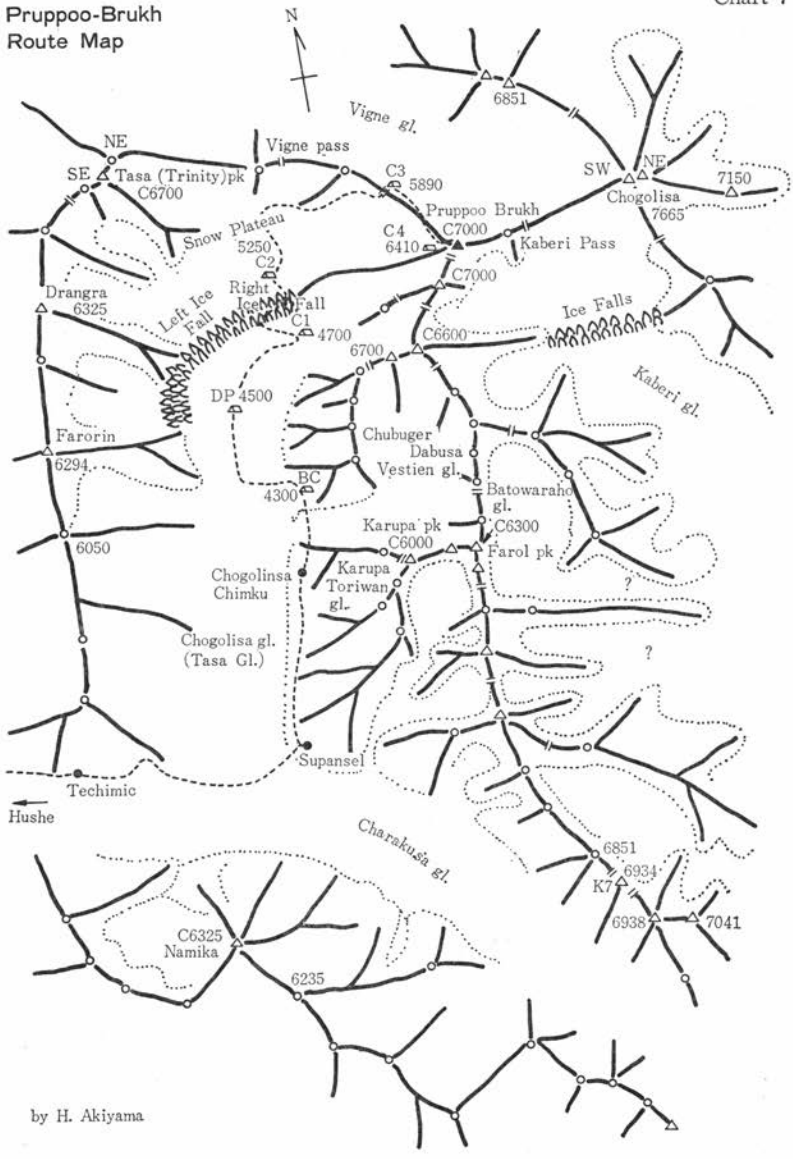
スパンセルの放牧地に上り、高度も四〇〇〇メートルを越した。サイドモレーンの小さな起伏に荒い呼吸をつづけ、ポーターの不穏な空気を感じ、隊列を分断して強引に歩かせる。ベースキャンプ予定地、四一五〇メートルの放牧地、チョゴリンサ・チミックに六月十四日十一時十五分に到着、二三〇〇キロの荷を下した。ここまでは住民もめったに上って来ず、その仮小屋もしばらく前に倒れたままでまったく踏跡もなかった。「いるかも知れない虎と野豹」に用心し、フーシェのポーターも焚火をして周囲に目を配っていた。

頂上に向って

悪天候の三日間をBCの整備と休養にあて、再び上って来た八人のポーターを「保険期日内でローカルポーターの条件で、デポプラッツまでの荷上げに使う」という約束で雇った。偵察隊は先行させ、まったく不明の氷河と目標の峰の探索とアイスフォールの突破ルート選定に出し、併せて初期の高度順応を計ろうと三名一組で四隊の編成で毎日交代で行動し、四日間でデポ地四五〇〇メートルまでの荷上げを完了し、BCを上部の窪地の条件の良い四三〇〇メートル地点に移動した。

並行して右方アイスフォール・ルートの大半を見通せる氷河上の四七〇〇メートル地点にC1を設営した。ここは七本の懸垂氷河が周囲にあり、絶ず雪崩の音が響いている。東側にはK7へ続く鋭い岩と雪の山稜が迫り、南西面に落ちる懸垂氷河と

Chart 7


Pruppoo-Brukh
Route Map
N
Vigne gl.
6851
NE
Vigne pass
SE
Tasa (Trinity)pk
C6700
C3
5890
SW
NE
7150
Chogolisa
7665
Pruppoo Brukh
C4
6410
C7000
Kaberi Pass
Snow Plateau
5250
C2
C7000
Drangra
6325
Left Ice Fall
Right Ice Fall
C1
4700
C6600
Ice Falls
6700
Kaberi gl.
DP 4500
Chubuger
Dabusa
Vestien gl.
Farorin
6294
BC
4300
Batowarahc gl.
Karupa pk
C6300
C6000
Farol pk
6050
Chogolinsa Chimku
Karupa Toriwan gl.
?
Chogolisa gl. (Tasa Gl.)
?
Supansel
Techimic
Hushe
Charakusa gl.
6851
6934
K7
6938
7041
C6325
Namika
6235
by H. Akiyama

短い西稜の頂部に、氷帽氷河を被った目標の山（この時期には未確定で仮にP1とした）が頭を上げていた。大きく八本の縦縞をつくる氷河中央のクレバス、モレーン丘、アフタヌーンフラッドの流れる谷を渡りC1への荷上げが開始された。一方アイスフォールには二日間にわたる作業で一二〇〇メートルのフィックス・ロープを張り、上部への見通しがついた。

連日雲一つない好天の内にほぼ初期の順応も進み、アイスフォール右方西稜の側壁基部の雪壁をルートにして、大雪原の下端に達し、五二五〇メートル地点にC2を建てた。このC1とC2間は、アイスフォールの陥没や崩壊、側壁帯の落石や雪崩の危険が予想されたので、担荷重量を減しスピードのある行動で早朝の条件の良い時間帯を使って通過することにして事故の防止を計った。

天候周期がC2設営後から変化して雲量も増え、気温の上昇と共に氷河の変化も激しくなった。偵察隊の「目標の山はP1である」との確認もあり、危険地帯の通過を最小限にして、最少必要限度の荷をC2に上げ、速攻で登頂を試みるため一部計画を早めた。C2への荷上げと並行して、C3へのルートをのばし、主脈上のコル五八九〇メートルにC3を設けた。

C1で下痢と熱で倒れた隊員一名も戦列に復帰した七月七日、全隊員がC2以上に上りルートも順調に拓かれて、三日後には頂上氷壁の基部六四一〇メートル地点にC4が建った。この間C3には十二人分十日間の食料と装備を荷上げした。

上部キャンプの行動は、一日目荷上げの往復、二日目荷上げ後上部キャンプ泊、三日目更に上部へ登って出発キャンプに下り翌日休養、五日目上部キャンプに移動のパターンで、頂上氷壁部の工作終了までもっていった。C1－C4間は予想より条件がよく、幅広い背稜となっておりクレバスとセラックも雪に半分埋り、雪壁も最大斜度四十度程でいずれも北傾斜で登り良く、六〇〇〇メートルの高所順化に幸いした。

頂上を頭上にしたC4からは緩い雪壁に次いで横に走るクレバス、その上部に大セラックの氷壁が三段あって傾斜も強い。次いで緩い斜面が頂上へと続く。一人でも多くの登頂者を出すためと安全策の一環とし、この核心部に五〇〇メートルのフィックス・ロープを張り、アタック態勢に入った。

しかし、工作隊員と入れかわってC4に入った第一次アタック隊のリーダー（副隊長）が、夜半から、呕吐、平衡感覚の乱れ、脱力感など、高所障害の症状を見せ、十三日早朝、足腰の脱力から歩行不能となった。アタックを中断し降ろして寝かせた結果、意識障害はなく一安心したが、警戒のための看護に一名をつけ、再度第二次隊として四名をC4に登らせた。

空には雲が夕陽に染り天気は下り坂の傾向を強めていたが、七月十四日は快晴で明けた。夜明け前、アタックキャンプを発った四名は、急峻な雪壁を三ピッチ直登、更にクレバスをまた

ぎ六十度の氷壁を右上に約十メートルトラバース気味に登り、一ピッチ直登して核心部を突破した。つづいて頂上への緩い斜面を遅々として進まぬ足をひきずりながらたどる。チヨゴリザ西壁の岩壁に圧倒され、呼吸を乱しながらも、頂上稜線に達したころから、ガスが身を包みはじめ七〇〇〇メートル以上の峰峰は雲の中にかくれてしまった。東側の低いドーム状と比べ南西側が高いので頂上と判断、十二時十分、その絶頂に立った。

トランシーバーのスイッチを入れると、さっそくはるか北方に見下せるコンコルディアの日本K2隊のBCから、登頂確認と祝いの言葉を頂戴し、喜しさがこみ上げて来た。次いで隊長と交信し、名簿の埋設や山稜のスケッチ、近くの同程度の山々の背くらべをしさらに東峰にも登るなど、一時間半ほどの時間を費した後下降に移り、トレールを忠実に辿って十七時四十五分隊長と無念の思いで待つ副隊長の寝るC3に帰着した。

その深夜から強い風雪となって十五日の第二次アタックを中止し、C3に全員が集結した。

十九日、C2に全員が揃い後半の行動が決められた。第二次アタック隊は二十二日深夜一時三十分に出発して、新雪に埋ったフィックス・ロープを掘り出す作業を続けながら、知りつくしたルートを辿り、十四時四十五分第二次登頂をはたし、高差一〇〇〇メートル、十九時間の苦闘をはたして、C3に帰着した。その後直ちにサポート隊と共にキャンプを撤収、二十四日、BCに元気に下降した。

その間、残った隊員の内三名がC1の東側支稜を登り、二名がBC下流のカルパトリワン氷河踏査（源流の山稜のコルに達した）、更に二名はBC直下の枝氷河チュヴギャル・ダブサ・ヴェステンへ入り、その全容を観察して、二十四日全隊員が行動計画の全てを消化し元気にBCに帰着した。

かねてよりポーター達やリエゾン・オフィサー、来合せていたフーシェ部落の放牧人とも話し、登頂した峰に名前のないことを確認し、その妥当な名前について相談したところ、「プルポー・ブラッカ」という名を誰もがいちばんいいというので、そう命名した。このバルティ語の名前の意味はプルポー＝三つの重要な内容を持つ、ブラッカ＝山又は峰とのことである。

この名を採った理由は、

㈠、マッシャーブルム山脈に、南から、K6・K7からの山稜の支脈が合する位置にある。

㈡、南東面はカベリ氷河、北面はビニュー氷河、西面はチョゴリザ氷河へ面する分水嶺である。

㈢、多くの先輩岳兄、勤務先関係者に加えて家族の協力という三つの大きな力が支えとなって、この登山が成功した。

という三点からである。

撤　収

われわれは雲のまつわりついた山々を後に、三十一日BCを撤収した。濁流のフーシェ川を下り、冷い渡渉をくり返し、下痢と脱水症で倒れる隊員を出しながらもニポロを一日で歩く強行軍をこなし、砂嵐でまっ白になって、八月四日十七時三十分、ショーク河岸のアガルチタンの河原に荷を下した。ショーク河を「ガラリの渡し」で越え、カパルーに到着、行政官の公舎でラジャーも同席して、登山の報告と山名について歓談し、われわれの命名が了承されることとなった。

〈記録概要〉

隊の名称　一九七七年鉄道同人カラコルム登山隊

活動期間　一九七七年六月～八月

目　的　ブルポー・ブラッカ（チョゴリザ西峰、七〇〇〇メートル）初登頂

隊の構成　隊長＝秋山宏明（41）、副隊長＝宮原弘之（35）、渉外＝中村浩一（33）、装備＝矢島満雄（33）、輸送＝成田博（27）、総務＝大沢稔（30）、食料＝小林三二（30）、梱包＝中村哲雄（28）、会計＝細木芳清（27）、食料＝森辰男（25）、通信＝木田秋雄（25）、記録＝安治章一（25）、医師＝松村勉（26）、LO＝モハメッド・ラティフ

行動概要　六月三日スカルド着。六月五日カパル着。六月九日キャラバン開始。六月十四日チョゴリザ氷河BC（四一五〇メートル）着。六月十六日登山行動開始。六月二十日BC移動（四三〇〇メートル）。六月二十一日C1建設（四七〇〇メートル）。六月二十七日アイスフォール突破。六月二十九日C2建設（五二五〇メートル）。七月二日戦術変更の指示出る。七月五日主脈上のコルC3建設（五八九〇メートル）。七月十日C4建設（六四一〇メートル）。七月十四日矢島、小林、中村哲、安治、ブルポー・ブラッカ初登頂。七月二十二日成田、大沢、木田、第二次登頂。七月三十一日BC撤収。八月六日カパル着。

報告書　『Pruppoo・Brukh（C. 7000）』鉄道同人カラコルム登山実行委員会（一九七七年十月十日刊）

ヒマルチュリ東尾根（一九七七年）

菅沢豊蔵

東壁攻略と事故

一九七七年五月十三日は、私達にとって将に痛恨の忘れ難き一日となった。前日は絶好の天気だったが、長期間にわたって降り続いた雪がヒマルチュリ東壁の堅い氷の上に予想外に積っていた。第一次攻撃隊の長谷川、五十嵐の二人は想像もしなかった深いラッセルに苦しめられて、健闘も空しく東壁上部の稜線まで高度差五十メートルの地点で力尽きて退却して来た。

運命の日、五月十三日は雲一つ無い紺碧の空にヒマルチュリの雄姿が頭上に燦然と輝いていた。一九六〇年慶応隊の初登頂以来、未だに第二登を許していない。堂々たる風格である。C4にいる私とC6の第二次攻撃隊近藤、三谷の二人との朝五時の交信では、「本日は天候も良好で、昨日の第一次隊　長谷川、五十嵐に引き続き予定通り出発します。昨日の長谷川等の努力で稜線直下までフィックスが完了しているので、何とか今日は稜線に抜けられそうです」と近藤の力強い声が入って来る。私達C4隊も出来るだけ早く出発して上部に向う事を告げて交信を終える。C4から東壁　JACルートは肉眼でも明確に見る事が出来る。ヒマルチュリ頂上から右側に延びる稜線、そして小さなピークに挟まれた、雪庇の張り出したコルへつき上げる急峻な雪壁に、二つの黒点がポツンと見える。

JAC隊の石坂、松田両氏が五月二十一日、果敢にもこの東壁より頂上を攻撃したが、堅い青氷に思いの他手こずって、ついに時間切れとなって計画を断念せざるを得なかったのは十八年前のことだった。JAC隊の時の東壁の状態は堅い青氷であったが、私達の時は急峻な氷の斜面に新雪が積もり、腰位のラッセルを強いられる始末であった。常に雪崩の危険性が感じられたが、技術的には私達に幸いしていたと言える。しかしC6

上部の七四〇〇メートルを超える高度での深いラッセルは、言葉では到底表現出来ないほど苦しいものである。

五月十一日にC6を建設した時点で私達の登山活動は五十日を経過していた。隊員、シェルパ全員が体力的、精神的に限界に近い状態であった。私達、C4隊がジャンプ台への急登にかかった頃、稜線直下に二人の姿が見えていた。私は、長い時間頭上に頑張っている二人の奮闘を首が痛くなる程見上げていたが、ついに先頭の一人が東壁より稜線への突破口を開き私達の視野から消えた。そして二人目が稜線に抜け出たのは丁度午後二時であった。稜線から東壁、JACルートを見下ろすかの様に大きく雪庇が張り出しているが、この雪庇の切り崩しに相当の時間を費してしまったのだ。下から見上げていた私は、過去にJAC、イタリア、青山学院大、の各隊の挑戦を阻止し続けた東壁がついに私達の手によって完登されたという感激よりも、むしろ二人の稜線に出てからの行動が心配だった。慶大の初登頂時のルートと頂上付近で合流すると考えていたが、下からは全く二人の行動を見ることは出来ない。以下三谷の報告に依ると、

「長時間の行動で、二人共疲労気味ではあったが、稜線に抜け出てからアンザイレンをして、目の前に見えている小さな雪のピークをトラバースして、岩稜伝いに行き、西側の雪の斜面をトラバースして頂上に続く緩やかな雪の斜面に出た。ここにザックを置いて、カメラと必要品のみを持って、頂上直下のロックバンドに続く雪の斜面をたどる。途中まで行った所で、時間もすでに遅く、ビバークの用意も無いので、午後四時十五分、引き返す」とある。

私達、C4隊がC5に着いて近藤からの連絡を待っている頃、二人は既に頂上直下一〇〇メートルの地点から退却していた。暗くならない中に稜線から東壁に下りる事が、完全確保の為には不可欠であると、近藤が判断したのである。近藤は一九七五年のチューレン・ヒマール登山隊の第二次攻撃の際に、七〇〇〇メートルのビバークを体験している。高所経験の少ない若い三谷を連れてのビバークがいかに危険を伴うものであるか知っていたのが、退却を決断した大きな理由だったのだろう。

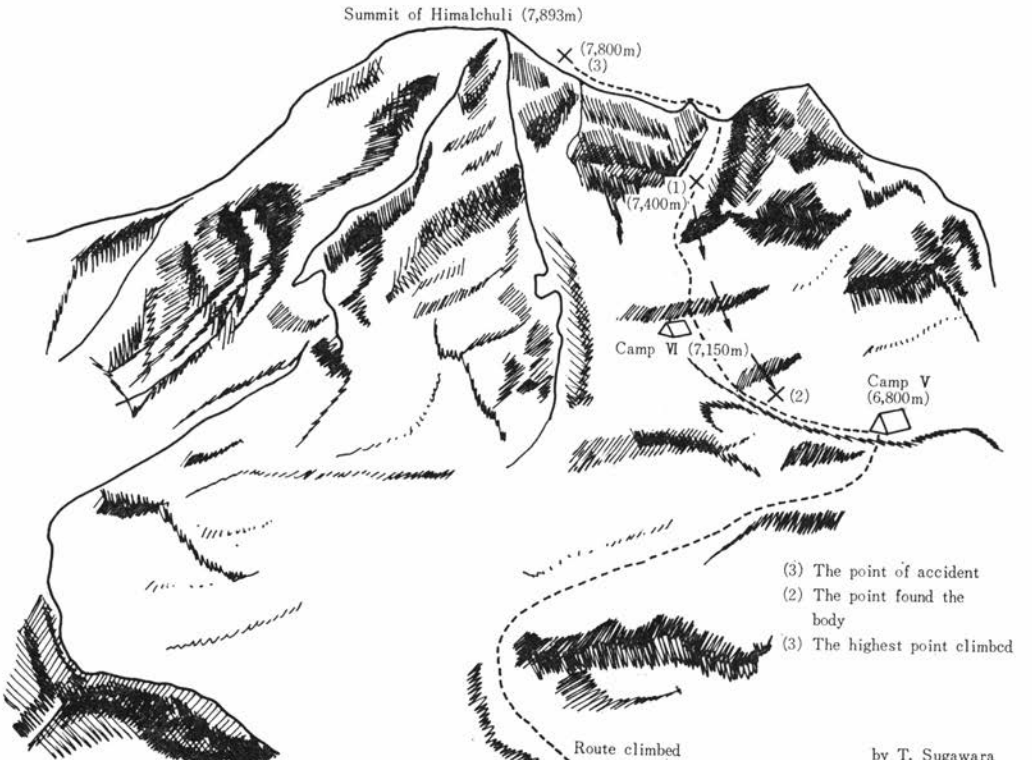
私は近藤達が無事にC6に帰着するのを確認してからC5を後にするつもりで、彼等の連絡を待った。常時開局してあるC5のトランシーバーが午後六時に受信を始めた。

「現在、稜線からJACルートに下降する地点ですが、西側からの強風の為にトランシーバーが帯電して交信が不可能です。壁を少し下った所で再び交信しますので、開局したままでお待ち下さい」

約二十分後に再び近藤の息を弾ませた声がきこえ、「長時間の行動で極度に疲労困憊しているも大丈夫です。本日は残念ながら頂上は踏めませんでしたが、明日の第三次隊の田中、アン

The East Face of Himalchuli

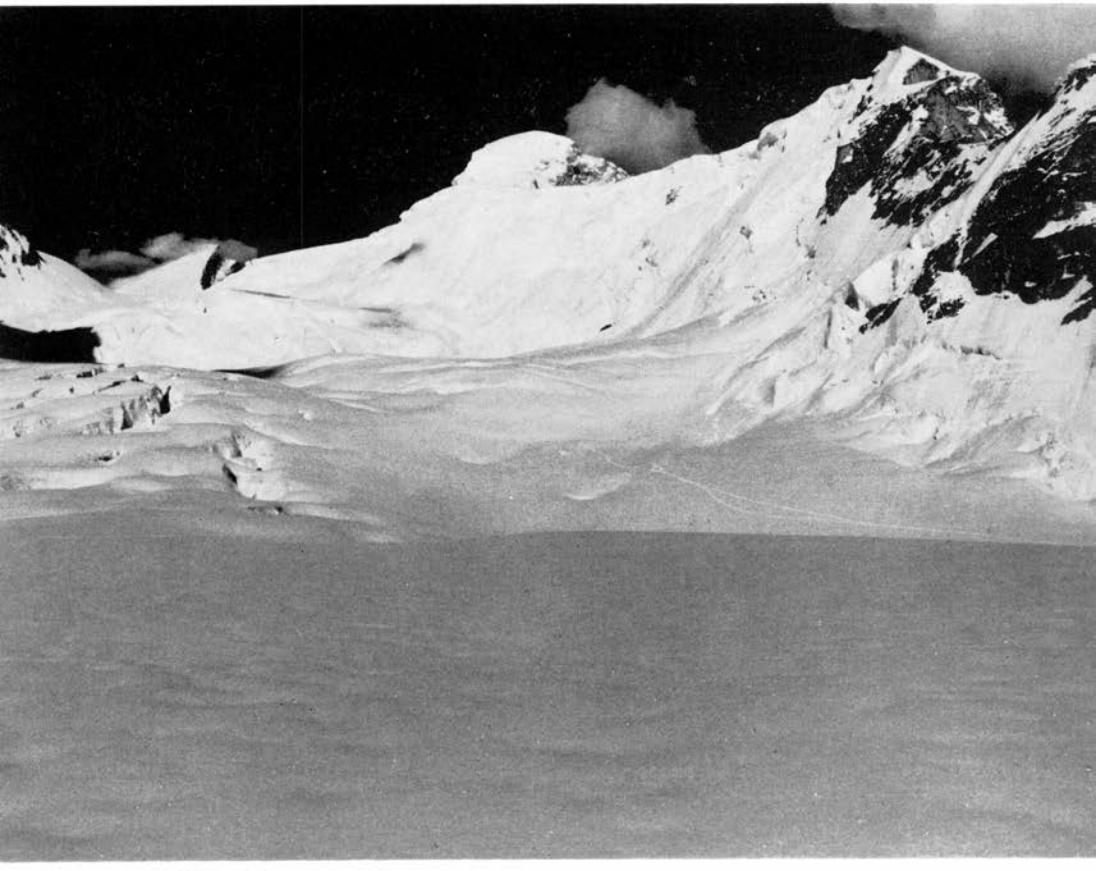
Chart 8



<Plate 10-(b)>

チョゴリザ氷河のアイスフォールとタサ峰、前方のテントはデポ・プラッツ（4,500 m）

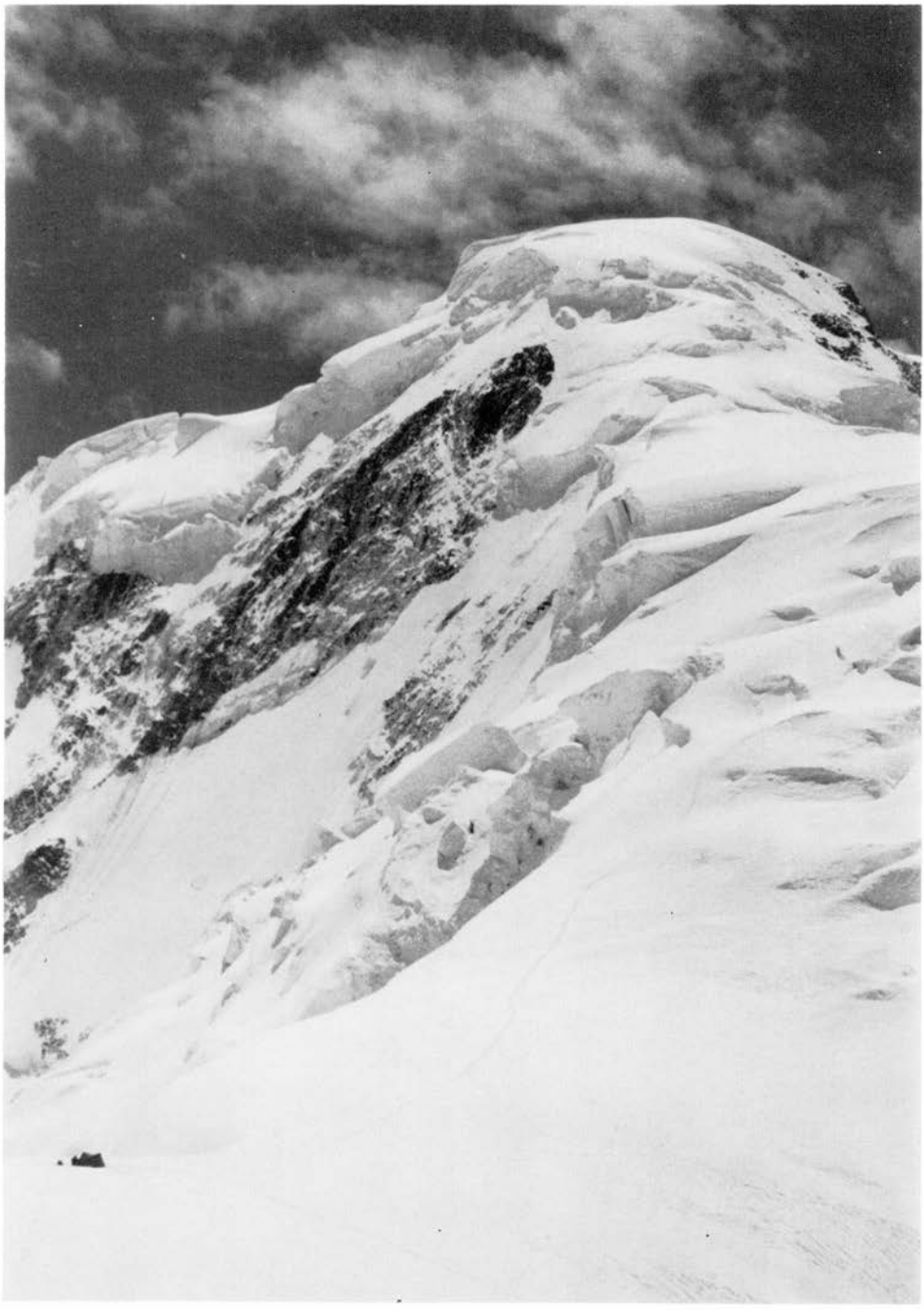
Ice-falls in the Chogolisa Glacier and Tasa Peak in the backward. A tent for the depot seen forward.



<Plate 10-(c)>

C2 上部のスノープラトーよりプルポー・ブラッカ、左奥三角形のピークはチョゴリザ南西峰。

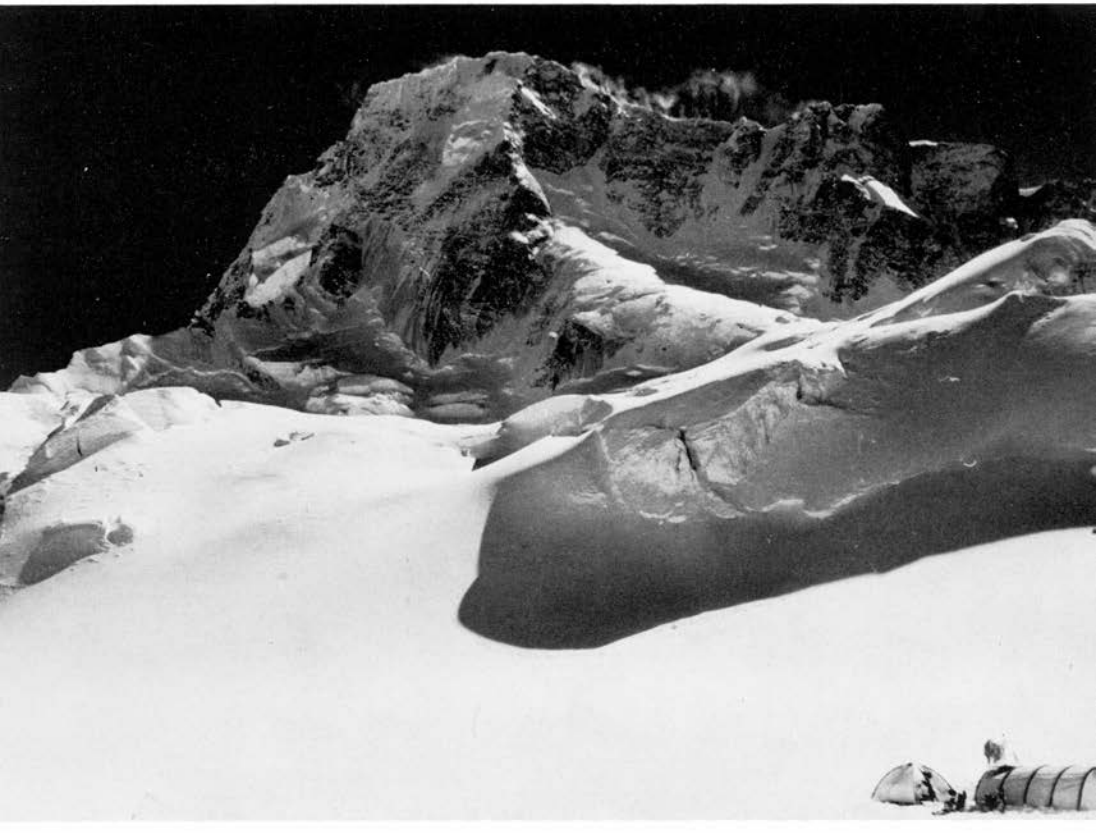
Pruppoo Brukh, seen from the snow plateau above C2. The triangular peak in the backward is Chogolisa SW Peak.



<Plate 10-(d)>

C 3 (5,890 m) とプルポー・ブラッカ北面。

Pruppoo Brukh, seen from north and C 3 (5,890 m).

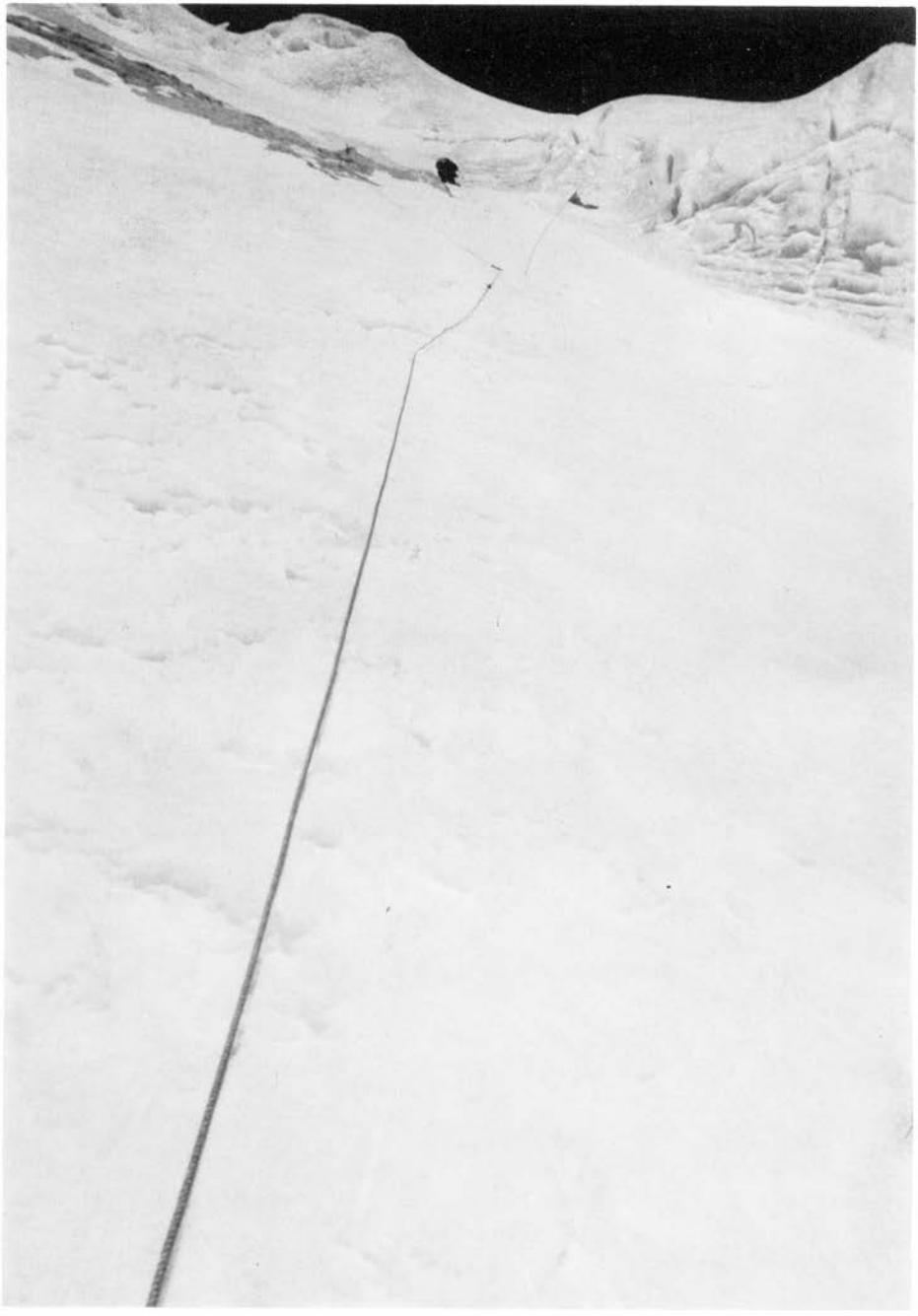


<Plate 11-(a)>

ヒマルチュリ東壁（C 4 より）、右手前がジャンプ台。

Himal Chuli East Face, seen from C 4.

(Plate 11 (a)～(d), by Y. Kondo)



<Plate 11-(b)>

ヒマルチュリ東壁 C3 と C4 間の雪壁を下る。

Himal Chuli : climbing down ice wall from C3 to C4.

<Plate 11-(c)>

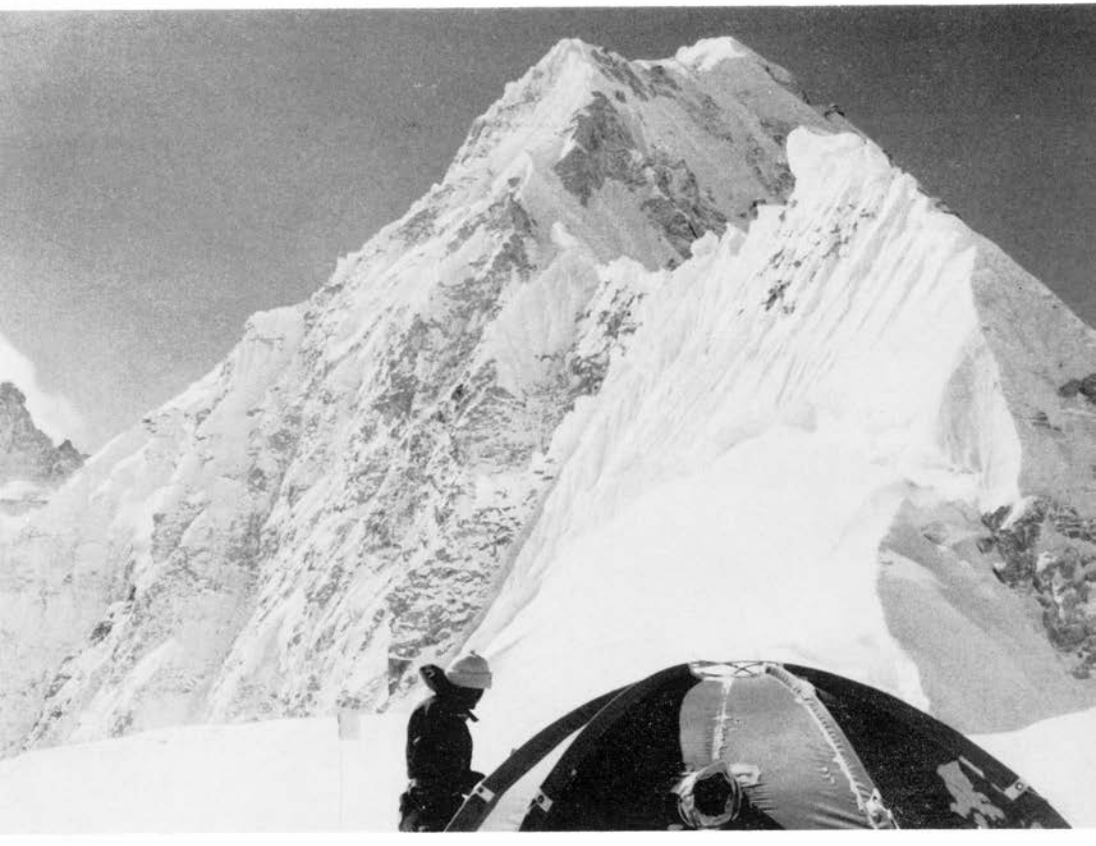
ヒマルチュリ東壁。C 5からガネシュ・ヒマール（右）とスリンギ・ヒマール（左）を望む。左前方にラニーピーク。

Himal Chuli : Ganesh Himal (right) and Sringi Himal (left), seen from C 5. Rani Peak in the left.

<Plate 11-(d)>

ヒマルチュリ東壁 C6 付近を登る。中央クレバスの下が C6。

Himal Chuli East Wall : C6 at the crevasse in the middle.



<Plate 12>

C 3から望むヌプツェ北西峰（右奥の雪のピーク）。

Nuptse North West Peak, seen from C3 (Snow peak at the right in the back).

(by H. Kato)

ツェリンの二人には何とか頑張って貰いたいと思っております。今日は稜線直下で時間を食ってしまい時間切れとなってしまいました。稜線からはさほど困難なルートとは思われません。風は西側から強く吹きつけていますが、明日は何とかなると思います」私が無理は承知の上で、近藤、三谷は明日再度頂上への挑戦意欲はあるかと問うと、近藤から「今は疲労で一杯ですが、その件については明朝の状態を見てから決めたいと思います」と、返事が来た。

私達は、近藤、三谷の二人が楽に東壁をフィックスに導かれて下降し、無事にC6に帰着出来るものと判断して、C4へと下った。下りながら見上げると、JACルート上に二人の姿をはっきり見ることが出来た。一人はC6の間近かに、もう一人の近藤はかなり離れて壁の上部に見える。ジャンプ台からの急斜面を下りきって、平坦な雪原を三分の一程進んだ午後七時、トランシーバー交信をする。

「十八時四十分頃、東壁に大きな雪崩の音を聞きました。すぐ天幕外に出て確認した所、雪崩は私達のルート上に落ちて、デブリはC5とC6の中間地点で止まっています。壁を下降している者は一人しか確認出来ず、雪崩の落下方向に黒点二つが認められます。これから長谷川、田中、五十嵐、アンツェリンの四人でその確認を行ないます。すぐ出発しますのでトランシーバーは開局して待機していて下さい」

C5の長谷川の、このショッキングな報告に打ちのめされて、雪原の真只中に寒気と強い風に凍えながら三人は無言で連絡を待った。

そして二十時十分、ついに運命の時が到来した。何とか近藤が無事にいて欲しいとの強い願いも長谷川の声で完全に打ち消されてしまった。

「近藤さんを発見しました。しかしすでに死亡してます」

何という残酷さであろうか。つい先程、私と元気に交信していたあの近藤が突然に私達の前から消え去ってしまうとは…。再び長谷川から、「本日は長谷川、田中、アンツェリンの三人で近藤さんを安置して帰りますから隊長達はC4に下りてゆっくり休養して下さい」。私達三人は夜の帳が下りた雪原を赤旗に導かれながら無言でC4に向った。

事故の翌日五月十四日は、C5の連中はまず遺体をC5まで下ろし、手分けをしてデブリに点在する遺品の回収とC6の撤収を行なうこととし、C4隊はC5で合流してこれを援助する行動予定を立てた。幸いに天候に恵まれて、皆の必死の努力で午後五時には行動を終了し、C4に集結出来た。C6の撤収に向った長谷川、田中の二人は、近藤が事故当時にいたと思われる地点に大きな穴が無数にあいているのを肉眼で確認した。その地点から重いかたまりが斜面をころがった跡が見られ、岩場を飛び越えた一段下の斜面にも同様の筋が見られて、しばらく

下った斜面から通常の雪崩になっている事が判明した。おそらく近藤を死に追いやった原因は、稜線上の雪庇の崩壊によって発生した氷塊の一片が頭部を直撃して、共に発生した雪崩に巻き込まれたということだったのだろう。後日BCで行なわれた佐々木医師の検死の結果、直接的な死因は右上眼瞼の顕著な外傷であると判定されたが、ブロックの直撃は間違い無いと思われる。

C4に安置された遺体は一刻も早く下界へ下ろさねばならない。しかしC4からC3へのルートには、ラニー・ピークの肩を目指して三〇〇メートルの雪壁を登り返さねばならない。連日の悪天候による深いラッセルと長期間に及んだ高所での滞在の為に、隊員、シェルパ達は体力、精神力共に限界に来ている。私は即刻BCに向けて事故報告と遺体収容の為に、ヘリコプターの要請をする様指示した。五月十七日朝、出発準備を終えて遺体と共にC4からC3に向けて出発しようとした時、ヘリコプター一機がリダンダ氷河の方向から飛来した。しかし遺体を乗せることは承知してもらえなかったのである。気をとり直してC3に向けて行動を再開し、皆の必死の作業によってラニー・ピークの肩を乗越し、五月十九日、近藤は一カ月振りにBCに無言の帰還をした。そして、BCより三十分程下った大きな岩の上で五月二十二日、荼毘に付す。シュラン谷に真白な煙が天に昇る。全員が譬え様のない虚しさをこらえて、部歌と校歌で近藤に別れを告げた。

計画と作戦

私達は将来の八〇〇〇メートル峰挑戦への準備として、より多くの高所経験者をそろえようと考えていた。一九七五年のチューレン・ヒマールに続いて、次の遠征の基本的な条件として、㈠無事故、㈡第二・第三登の山である場合は未踏ルート、㈢頂上を踏む、の三つが私達炉辺会海外登山委員会から出された。結局、ヒマルチュリに決定してその計画の具体化に着手した私達は、ヒマルチュリ東尾根が長大であること、そして東尾根中間に位置するラニー・ピークを登って一段下りなければならない独特の地形であること、更に東壁の攻撃基地であるジャンプ台に隊員と物量を充分に確保せねばならないこと等を考慮して、これらに対処すべき方法を検討した。私達は第一に長くて大きな東尾根をいかに短縮するかを考え、従来の東尾根ルートからでは余程東尾根の状態が良好でない限り円滑にキャンプは延びないので、何とかチューリン・コーラ側からか、リダンダ側からのルートでジャンプ台につき上げるルートは無いかと検討した。その結果、リダンダ側は、距離的に遠く資料に乏しいので対象からはずし、チューリン・コーラを中心に検討し、一九七六年四月に二人の偵察隊をチューリン・コーラに送り、大筋の状況を得ることが出来た。さらに、一九七四年、イタリ

ア隊がチューリン・コーラにルートを見出すべくBCを設営しながらJACルートに変更している例からして、再度チューリン・コーラに偵察隊を送ってルートの有無を確認せねばと考えた。チューリン・コーラのアイスフォールから東尾根上部約六〇〇〇メートルに出られるルートが見つかれば、キャンプ数を一つ少なくするのも可能であると期待もしていた。九月のモンスーンの明け切らない時期に、節田隊長のもと、根深、林、和田の四名はチューリン・コーラに入った。

節田の報告によると、チューリン・コーラのBCは予想に反して四〇〇〇メートルに満たないという不利な点と、アイスフォールの入口付近が狭く、絶えず上部からの氷塊の崩壊があり落石も伴って非常に危険であることから、大部隊で常時ここをルートに使用して、荷上げに連日使用するのは非常に危険であるとのことだった。チューリン・コーラのルートに見込みが無ければ、従来のJACルートを忠実に攻める事が残された方法であった。

長大な東尾根に円滑にキャンプを進め、隊員の高度順化と荷上げを平行して行なうことが必要だった。BCから頂上までの距離が約二〇キロメートルに及ぶ長大な尾根、そしてラニー・ピークの肩に歩を進めてから一旦約三〇〇メートルの下降を強いられるという悪条件下で、いかに円滑に高度順化を展開するか、距離が長くて体力面での消耗が大きい割合に高度を上げることの出来ない不都合をいかに克服して、ジャンプ台に頂上攻撃基地たる強力なキャンプを設営することが出来得るかが、最大の課題であった。

事故までの経過

一九七七年一月末に梱包作業を終了、二月十七日に先発隊四人が羽田を発ち、三月三日、本隊十人がカトマンズに向った。四月十五日、前半戦を終えてBCに全員が集合して、三日間の休養をとった。この前半を反省してみると、長い東尾根は、距離を延ばしてもなかなか高度を上げることが出来ない為に、順化には非常に効率の悪いのは納得していたものの、連日の悪天候による多量の降雪で、ラッセルに苦しめられ、隊員の体力消耗が激しく、高度順化以前に体力面の不調が先行する結果になってしまった。順化と荷上げの問題は、高所登山には重要且つ不可欠の要素であるが、前半戦で早くも順化を円滑にまっとうすることが出来ず、また荷上げの面でも予定の日程を消化出来ず、大幅の遅れを来たしてしまった。BCに全員が集結して三日間の休養をとったが、この休養も生憎と降雪に見舞われて本来の鋭気を養うまでには至らなかった。

三日間の休養の後、四月十九日に後半戦を開始し東壁の攻略へと前進したが、五月一日午前十一時十五分にジャンプ台直下に設営したC5が、雪崩に埋没するという事故に直面した。幸

いにして重大事故には至らなかったが、万一、この雪崩が日中でなく、夜間に発生した事故であったら、C5の三人が無事に脱出出来たか疑問である。四月二十八日のC5建設当時、ジャンプ台に建設を予定していた所が、強風の為に天幕設営に困難を伴うとの判断でジャンプ台直下の斜面を削って設営した為に、三日間の降雪でこの事故に遭遇した訳である。幕営地の選定に於ける判断の失敗であった。

五月三日の好天候を待って、C5の三人を無事にC4に収容し、五月七日、C5を再建した。この雪崩事故で天幕一張を破損して使用不可能になった為、C6には当初二人用天幕を二張設営する予定を変更して、二人用一張を五月十一日に建設した。

反省

このヒマルチュリ登山を振り返った時、私は皆各々が精一杯の力を出し切ったと断言出来る。五月十九日、カトマンズに連絡に行った入沢、岡沢を除いて、全員が近藤の亡骸と共にBCに集結した。私達のヒマルチュリは終ったのである。思えば四月二十四日、C1への行動開始以来五七日間の登山であった。このヒマルチュリ登山は、私達が当初考えていた限界を越えてしまった。計画段階では、三隊の十六人の登攀要員を確保せねばならないという当初の作戦も、C5のジャンプ台以上には、七名の確保が為されたものの、東壁の状態が前述の如く一九五九年JAC隊の報告の如く堅い青氷であったとしたら、私達はこの壁のルート工作に手間取って、より多くの人員の補強を余儀なくされたであろう。しかし、今回の東壁の状態は私達には幸運であった。七〇〇〇メートルを超す高度で、急峻な東壁への攻略にラッセルによる体力消耗に加えて技術的な困難さが伴うとしたら、私達の到底叶う相手ではなかったであろう。C5の連中を助けて、常に交代出来得る人員の確保は不可能であったと思う。

今回の登山は若い体力に満ちた隊員達の独壇場であった。しかしヒマラヤ登山には、体力が凡てではないのは当然であり、技術面、精神面、順化、荷上げ等の問題、そして協調性等と複雑多々な要素が含まれてくるものである。今回の登山に私は充分に安全性を前提とした機動性を発揮することを目的に掲げたが、この機動性を充分に発揮する為には、第一に体力的な裏付けが完全に為されていなければ発揮することは出来ない。故藤田先輩が「山登りは馬力だよ」と始終私達を叱咤されていたことを思い出す。

不幸にして東壁に生命を絶った近藤は、実際にMACにとっての貴重なリーダーであった。彼の遺志に報いる為に私達は、このヒマルチュリ登山での体験を謙虚に反省して、今後のMACの山登りに反映せねばならないと考える。

最後に、私達ヒマルチュリ登山隊に対して寄せられた大勢の方々の温かい励まし、心遣いそして援助に改めて感謝する次第であります。

＜記録概要＞

隊の名称　明治大学ヒマルチュリ登山隊一九七七

活動期間　一九七七年三月～五月

目　的　ヒマルチュリ東壁からの登頂

隊の構成　隊長＝菅沢豊蔵（34）、副隊長＝入沢勝（35）、隊員＝近藤芳春（33）、小野勝昭（33）、長谷川良典（30）、根深誠（30）、岡沢修一（28）、竹田和夫（25）、和田耕一（25）、田中淳一（24）、鳥山文蔵（28）、五十嵐武美（23）、三谷統一郎（21）、医師＝佐々木達海（28）、リエゾン・オフィサー＝B・チョウダリー（25）、サーダー＝アン・ツェリン（29 ナムチェ出身）、コック＝ペンバ・ギャルツェン（37 ナムチェ出身）、コック＝ジャビャン・テンジン（39 ナムチェ出身）、ハイアルティチュード・シェルパ＝ペンバ・ノルブ（28ナムチェ出身）、ニマ・カンツァ（27ザロック出身）、ギャルツェン・ノルブ（35 セオングマ出身）、ローアルティチュード・シェルパ＝ミンマ・テンジン（21ターメ出身）、ソナ・ギャルツェン（37ナムチェ出身）、ニマ・ドルジェ（24クルム出身）、ソン・ツェリン（28クルム出身）、ペンバ（32クルム出身）、ピンゾー（21プルツェ出身）。

行動概要

2月17日先発隊4名羽田発。3月3日本隊10名羽田発。3月7日カトマンズよりトリスリに向う。3月8日トリスリよりキャラバン開始。3月22日シュラン谷（四一〇〇メートル）にBC建設。3月24日C1の偵察開始。3月25日C1（五三〇〇メートル）4月2日C2（六〇〇〇メートル）建設。4月11日C3（六四五〇メートル）をラニーピークの肩に設営。4月15日全員BCに集結、18日まで休養する。4月19日東壁に向けて攻撃再開。4月24日ラニーピークの壁を下降し、雪原を横断してリダンダ側のコル（六一〇〇メートル）にC4を建設。4月28日ジャンプ台下にC5（六八〇〇メートル）建設。5月1日11時15分C5雪崩事故発生、ジャンプ台に避難。5月3日C5の3名をC4に収容。5月7日C5をジャンプ台に再建。5月11日C6（七一五〇メートル）建設、長谷川、五十嵐2名入る。5月12日第一次アタック稜線直下五〇メートルまで。5月13日第二次アタ

ックの近藤、三谷の2名頂上直下一〇〇メートルで引き返す。帰路東壁下降中、近藤が稜線の雪庇の崩壊による氷塊の直撃を頭部に受け死亡。C5の長谷川等20時10分、雪崩跡に近藤の遺体を発見。5月14日遺体収容と、C6、C5の撤収。5月19日遺体と共に全員BCに集結。5月22日茶毘に付す。5月26日BCより帰路キャラバン開始。6月4日深夜カトマンズ着。6月18日帰国。

ヌプツェ北西稜（一九七七年春）

加藤春雄

一九七七年二月十七日、輸送隊二名を残し我々本隊（隊員六名シェルパ三名）は時代物のベンツのマイクロバスに乗り、ラムサンゴに向った。輸送には七三年エベレスト隊参加の経験をもつ国井、七六年秋に偵察隊として入山の経験をもつ志村の二人が当り、空路ルクラへ輸送し、そのまま本隊より先にBC入りする予定とした。したがって、本隊は最少限の荷をもちキャラバンすることにした。

キャラバンの方法について、偵察後ずっとネパールにとどまった志村は、隊員がいくつかに別れ、バッティ泊りで行くのも一つの面白い方法であるといった。しかしその意義は認めつつも、リエゾン・オフィサーのいることでもあり、何よりも無用のトラブルをさけるため、予定通りのキャラバンをする事にした。チャーターしたベンツのマイクロバスは、人間が押して加速してエンジンをかけるという代物である。したがって押し屋が二人同乗するという訳だ。

古都バドガオンを過ぎると、点在する集落の貧しさは一段とひどい。一面が真赤な土で何ができるのか、それとも二月という季節柄のせいか、初日は車の旅で終りだ。スンコシを対岸に渡り、広場にテントを張った。近くには発電所用の導水路があり、対岸のさっき来た道には車が通うという場所で、キャンプサイトは良いものの、何んだか一の倉沢かマチガ沢の出合にでもテントを張ったという感じで、いま一つパッとしない。

翌日朝からバスのクラクションの何とうるさいことか。出発を知らせる合図らしい。出発前ポーター二人が逃げたとシェルパが言う。昨日カトマンズからバスに同乗した子供のポーター二人が二日分の前渡金をもってドロンしたらしい。早速おいでなすった。

これより約一カ月間のキャラバンの開始である。見る物、聞

く物の多くは、何らかの形で私達に予備知識として入っていた。しかし「百聞は一見に如かず」である。見るもの総てが珍らしい。人間には先祖の生活が頭のどこかに残っているのだろうか。いつかどこかでの自分達を見るようで、タイムマシンを逆回転させたような感である。

キャラバン用の小遣は、各隊員が百ルピーずつ隊から支給され、それ以内でやっていくことにした。したがってシェルパの方がサーブよりふところがあたたかく、バッティの薬代も、こちらが出したり出されたりと、いうぐあい。

竹で編んだ篭に鶏を二、三十羽入れて奥地から売りに行く者とよくすれちがう。又我々と前後して歩くポーターは、道路建設用の金網をかつぐ者が多い。今、ラムサンゴからジリまでの車道をスイスの援助で建設中で、現在の道とも所々で交差して工事中であった。機械力は全く使わず、人力のみの工事である。

山といえば草木が生茂るものと考える私達には、草らしい草もなく、山羊の口のとどく所まで木の葉のたべ尽くされている木や、落ちてくる葉を待ちかまえてたべる山羊には、いささかとまどう。

二日目の宿泊地パーカルは尾根上の拓けた牧歌的な所にあった。ラムサンゴに比べ薪代が高いと会計係がこぼす。それもそのはずである。ここに住む人に他に何か売れる物があるだろうか。ポーターとして自分達の労働力を売るか、薪を売る位がせいぜいのことであろう。それでも何を喰わすのか、どこに行っても犬はいる。我々を見てけたたましく吠えたてる。夜、山なみのかなたにポツリポツリと家の明りが見える。火をもやしているのだろう。そんな生活と自分達の日本の生活を思い、どちらがより人間的なのだろうかなどと考える。所詮日本に帰れば今迄通りの生活を続ける事しかできない事を知りつつ……。

昨日のパーカルまでの行程が短かかったのに気をよくしたのは、早とちりであった。三日目の宿泊地シュルケには夕闇せまる頃到着。途中機織り姿さんにカメラを向けたところ、エクルピー（一ルピー）と手を出され、写すのをやめる。トレッカーはほとんどルクラに飛ぶのだろうか、このあたりでは一日に二、三人に会う程度だ。キャラバンを始めた頃は見る物総てが珍らしかったのに、三日も歩くと感受性がもうぼけてしまう。

六日目のトーセではアメリカ・カナダ合同の大トレッキングパーティーと合流、以後前後しながらナムチェまで歩くことになる。彼等はトーセの上のジリまで、カトマンズから飛行機できたという。素晴らしい体の持主が短パンスタイルで歩く姿は勇ましく、少なからずひけめを感じる。しかし数日後には多くのメンバーがよれよれになり、なんとも気の毒な行進風景となった。彼等の使用する生活用具の豪華さもさることながら、我々の羨望の的はなんといっても、内容豊かでボリウムのある昼

食だ。レストランのランチ風のがドサッとでてくる。私達はといえばプラスチックの弁当箱の中でゆられて半分程になった御飯にパラパラとふりかけののった程度の昼食。彼等の横で弁当箱を開けられず、少し所をはずしての昼食は失笑ものだった。

八日目のキャラバンが終るバカンジでは、数人のポーターが寒さを理由に帰りたいという。入れ変りに来たポーターは女性が多く、急に賑やかになる。歌のかけ合い行進は楽しいが、いかにものろいのが困りもの、歌の唄い過ぎで疲れてしまうのではないかと思うほどである。ジュンベシ峠は、わずかに残る雪の上をおばさんポーターの手を取って無事通過。女性群がきたことで、若いリエゾン・オフィサーは急に元気がでてきた。しかしチェットリーの彼は、こちらにきてはどうも分が悪いらしく、思う程にもてないのが気の毒だ。彼はもちろんヒンズー教徒であり、ヤクミートをたべない。しかしいつのまにか、どこかで牛肉のフリカケの味を覚えたらしく、大好物になってしまった。後になってからでは真相を明かす訳にもいかず、そのままになってしまった。

十日目、ヌンタラの部落には美しく着飾った娘がいた。後に知った訳だが、春をひさぐ娘だったとか、そうとも知らず夜は彼女の家に押しかける。近くから同様の女性もくり込み、太鼓一つで歌と踊が切れ目なしにいつはてるともなく続く。ローソクの明りに照らされて踊る姿のなまめかしさは、なるほどと思わせるものだった。シェルパ達は明け方まで遊んでいたとか。

十一日目ついにドード・コシ流域に入る。予定ではカルテ泊りになっていたが、ポーターの足がそろわずカリコーラの学校の広場にテントを張る。次の日到着したカルテには、我々の隊のサーダー、サンゲの家がある。全員彼のワイフに昼飯を御馳走になるが、彼女は浮かぬ顔をしている。それもそのはず、サンゲは二号をカトマンズに置き、三号をパンボチェに持って、本妻のそばには近寄らない。山に入る時はカルテの上を飛び直接ルクラに入ってしまうとか。ルクラ近くになると所々にガムやキャンディの包み紙が落ちており、トレッカーの多さを思わせる。行きかう人も遠征隊ゆずりのセーターなどを着ており、品物の豊富さを感じる。パグディンマのバッティには外国タバコからビールまでがある。

十四日目、いよいよナムチェを目ざす。話に聞くナムチェへの急登も全員快調に登る。写真やフィルムで何度も見たり聞いたりした、そのナムチェももう目前だ。バザールの開かれるという広場の土にテントを張る。夜、冷えびえとした月明りに映える白い家々、時おり聞えるゴンパの鐘の音、そして犬の鳴き声、寒々としたナムチェの夜は絵になる。翌日は待望の休日。シャンボチェのホテルに行く者、ナムチェ見物をする者、好き勝手に一日を過す。

三月四日タンボチェに向う。タンボチェへの登りで初めての

雪に降られるが、たいした量にもならず、順調なキャラバンだ。前後をヤクにはさまれ、ヤクペースで広場に出ると、輸送隊がいた。フライトが無く、ホテルと空港がよいの連日だったという。

全隊員とシェルパが初めて勢ぞろいし、ゴンパのラマも参加してのチャンパーティーを開く。タンボチェで一日休養の後、輸送隊は直接BCへ、本隊はミンボーに一泊旅行に出る。ミンボー谷は明るい開けた谷で、ヒラリー隊が六一年飛行場作りをした事もあり、なるほどとうなづける。今は茶一色でドライフラワーの世界だが、これが緑に変る時の素晴らしさは想像にかたくない。翌日四九七〇メートルを経験し、タンボチェに帰る。

三月八日、ペリチェに向う。シェルパは「ペリチェ・メニメニウィンドー・ベリーコールド」とデンボチェに行きたがるが、風邪気味の隊員もおり、東京医大の診療所もあるペリチェに予定通り向う。診療所では電気の明りの下、ストーブをかこみ、ホテルの宮原さん、金子ドクター夫妻と夜おそくまで話しこむ。ここはまさに別世界だ。

ペリチェからもイムジャ・コーラの上流のチュクンに一泊旅行に出る。無気味な色をしたローツェ、ヌプツェの南壁がものすごい迫力だ。ヌプツェの初登ルートは雪が少なく、今は手も足も出ないという感じである。五三七〇メートルの小ピークに立ち、引返す。帰り路、村人が這松を切り出している。こうしてだんだんと切りに出されれば、成育の遅いこのあたりでは遠からず山は荒れていくことだろう。パンボチェ近くまであった森林も、五十年百年後にはどうなっていることだろう。我々貧乏隊でも一日一束の薪ではさみしかった。大遠征隊の使う薪は大変な量であろう。きれい事をいっても結局我々も又、その破壊に力を貸していることになるのは心苦しい。

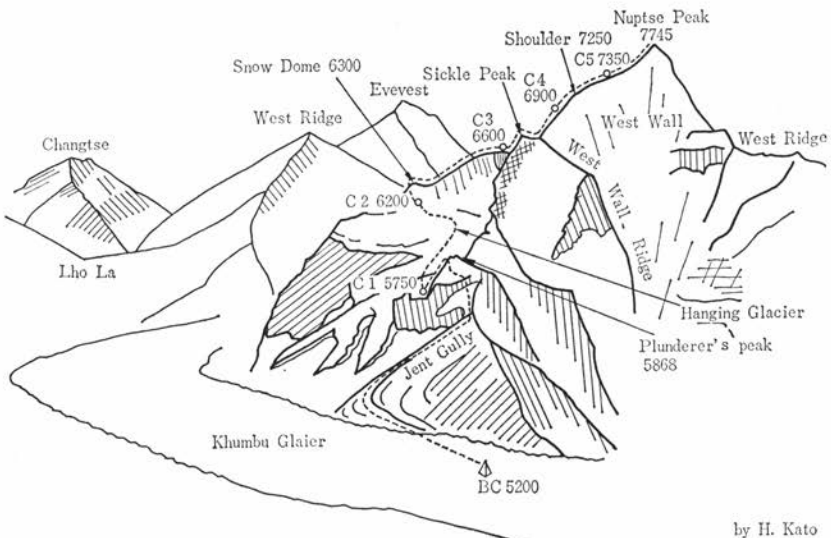
ロブジェでも一日の休養の後、最終宿泊地ゴラクシェップに向う。長かったキャラバンもいよいよ終りに近づいた。めざす北西稜が頭上にそびえたつ。登山の成功、失敗、それは別にして、微力な我々がここまでくることはそれなりに大変であった。そんな計画段階からのことを考えると胸が熱くなる。ゴラクシェップ、ここはエベレスト街道最後の宿場だ。そして贅沢言わなければ、カトマンズからシュラフ一つ持って出かければ、ここまではテント一ツ食料の一片をも持たずに来ることができる。さすがはエベレスト街道である。

三月十六日、BCに向う前にカラパタールの丘に登る。エベレストの絶好の展望台である。めざす北西稜がますます急峻にそそり立つ。エベレストがうしろにひかえているだけに重量感はないが、シャープだ。充分覚悟はしてきたものの、自信がぐらつく。そしてBCへ。

BCはすでにキッチン・カルカもでき上り一応の体裁を整え

North-West Ridge of Nuptse

Chart 9



by H. Kato

ヌプツェ北西稜

ていた。氷河上のキャンプのため、夜はパシパシと氷の割れる音が聞こえ、気味悪い。十八日、ルート工作に入る。すでに前年の偵察でほぼC2までのルートの見通しはついており、一部変更したがほぼ予定の所をC1とする。十九日朝起きると、シェルパ・テントがつぶされていた。薪でポールを補強する。BCは氷河上の真中の為か毎日強い風が吹き、テントの張綱直しが毎朝の日課となる。

ペンパ・ギャルツェンは、隊員の先にたち、歩きにくいモレーン上の石を直しながら、オムマニペメフムをつぶやき歩く。昔のシェルパの面影を残している。

C1からC2までは最もヒマラヤ的ルートとなる。クレバスやアイスビルディングはこの間だけで、他はほとんどがナイフリッジとなる。C2より四、五ピッチ登ると、尾根上に出、真正面にエベレスト、ローツェが黒々とそびえたつ。真下には彼の悪名高いアイスフォールがある。そのわずかに平な所にエベレスト隊やローツェ隊のC1が作られている。上から見ると、彼等のキャンプサイトの良し悪しがよく分る。ローツェ隊のキャンプサイトにエベレスト側からの雪崩の危惧を感じていたところ、案の定、後にキャンプを変更させられていた。

C2から上はルートに変化が多く、C3の設営地に心配するが、信じられない程の広場があり、絶好のC3となる。しかし予定より若干低いのが残念だ。C3から上は雪庇がいちじるしく発達し、なおかつ変化もはげしい。尾根の右から左へとトンネルくぐりを繰返し、そのたびに荷物をはずす動作が腹だたしい。

クンブ氷河側はスッパリと切れ落ち、反対側を登るが、大小のヒダの応対にいそがしい。最大のものには縄バシゴをセットし突破する。C4予定地には幸運にも大トンネルがあり、四人用テントがすっぽりと入る。一方の口からはチョ・オユー、ギャチュン・カン、そして遠くにガウリサンカール、もう一方からはエベレスト南壁が目の前にある。それにしてもこちらから見るローツェの何とさえないことか。南面から見るあの素晴らしい容姿の山と同じ山とはとても思えない。

七千メートルを越えると寒気は厳しい。ユマールを持つ手はかじかみ、感覚をとりもどすのに時間を喰う。午前中まずまずの天気の続く四月だったが、五月に入り、強風の為行動出来ない日が続く。五月一日、ローツェ隊は最終キャンプを作ったという連絡がベースから入るが、その後音沙汰が無い。彼等も又、停滞を余儀なくされているのだろう。他隊のことは気にするまいぞと思っても、少しは気になる。

五月八日、一次アタック隊、玉田、加藤は目標を北西峰のみとし、志村、ザンブーにサポートされC5に入る。翌九日朝、風は強いが晴れていた。予定通り行動、六ミリと八ミリザイルを全部で六本持ち、テントを出てからすぐ固定し始める。短い

雪庇地帯を突破すれば、後は傾斜の落ちた雪原状と考えたのは共に読み違い、雪庇帯の通過に時間を喰う。部分的にはひどい痩尾根もあり、馬乗りになって進むが尻の割れ目にまでくいこむ。雪の斜面にでてからは、こんどこそと思うピークの先に又ピークありで、時間が気になる。二次アタック隊は今日最終キャンプに入っており、自分達は今日中にC4にまで降りることになっている。

こんどのピークが北西峰でなければ引返そうと心に決めて登ったピークも、やはり違った。それはちょうど、西稜とのジャンクションピークで、真の北西稜はまだ先だった。写真を撮ってすぐ引返す。フィックスザイルに着く頃は暗くなりはじめ、闇の中でアップザイレンを繰返す。C5には国井とザンブーが予定通り入っていた。我々はこれ以上の下降は危険と感じ、明日のアタック隊の睡眠を妨げぬ様、テントの端で夜を明かす。

十日、ビバーク準備をして二次アタック隊出発。その日は余裕をもって七五五〇メートルでビバーク、翌十一日、風雪の中を出発。十一時四十五分、北西峰の頂に立つ。同日はアタック隊のトランシーバーのトラブルで交信できず心配するが、下で想定していた通りの行動をとっており、下山中の二人を確認、体から力の抜けるのを感じる。C4のテント以外は全部撤収した。しかし若干登攀用具の不足があったが、お愛嬌として済ますこととした。

〈記録概要〉

隊の名称 登歩渓流会ヌプツェ登山隊

活動期間 一九七七年二月～五月

目的 ヌプツェ北西稜より北西峰の初登頂

隊の構成 隊長＝加藤春雄（38）、副隊長＝国井治（32）、藤塚弘（29）、井上稔（28）、志村一夫（25）、小玉やい子（25）、玉田仁（23）、隊医＝本庄健男（34）

行動概要 2月17日カトマンズ発。3月16日クンブ氷河上にBC（五二二〇メートル）建設。3月24日C1（五七〇〇）建設。4月5日C2（六二〇〇）建設。4月16日C3（六六〇〇）、4月28日C4（六九〇〇）建設。5月8日C5（七三五〇）建設。5月11日国井、ザンブー北西峰登頂。

ビバ・ヨセミテ（一九七七年）

中山芳郎

ヨセミテ渓谷

我々三人が、羽田からソウル経由ロサンゼルス行というややこしい飛行機に乗り込んだのは、東京の暑い夏も終り台風の季節となった九月のはじめだった。涼しい東京を後にして暑いカリフォルニアに向ったのは、他でもなく太古の自然に囲まれ太陽に白く輝くヨセミテのグラニット・ロックでロッククライミングを楽しむためだった。

ヨセミテ国立公園は、カリフォルニア州の東を背骨のように連らなるシェラネバダ山脈の中ほどに位置し、アメリカの西の入口サンフランシスコとロサンゼルスからほぼ同じ位の時間で行ける所にある。公園の中心地であるヨセミテ・バレーは、太古の氷河期に氷河によって何万年も掛って削り取られた大きな谷間だ。ヨセミテの名は、この谷間に古くから住んでいたインディアンの種族名を英語風に発音したもので、その意味は「灰色熊」というのだそうだ。ヨセミテの名前以外にも、白人の侵略によって追われて行ったインディアン達の付けた地名の多くがインディアン・ネームで今も呼ばれている。

ヨセミテ渓谷がアメリカで広く知られるようになったのは、アメリカ国立公園の父と呼ばれるジョン・ミュアーの功績によるところが大きい。彼は一生を自然保護の仕事に捧げ、現在アメリカ最大の自然保護団体であるシエラ・クラブを創立した。彼の自然保護の思想もヨセミテの谷間に小屋を作って生活した時に固まったようだ。ミュアーはこう書いている。「自然は人間の攻撃に耐えるには優しすぎる」。この言葉がアメリカの自然保護の考えを大きく表わしている。

氷河に削り出された花崗岩の高さ一〇〇〇メートルにも達する大岩壁群は、早くからアメリカをはじめ世界中のクライマー

を引き付けていた。またこの岩壁を登るために、アメリカ人達はヨセミテに合った硬質鋼のピトン等の用具や技術を開発し、世界に広めたため、ヨセミテのクライミングはいっそう世界から注目された。ヨセミテの谷間でクライミングの用具や技術が急速に発達したのは、安定したカリフォルニアの気候に負うところが大だったろう。アルプスでは、クライミングの技術のほかに天候や氷河のことを考えねばならず、純粋なロック・クライミングの技術を発達させるまでには至らなかった。その点、ヨセミテでは夏のクソ暑さをのぞけば、晴天がクライマーを守ってくれるのが、思いきった行動が取れるし、アプローチのことも考えずにすむので、クライマーのための好条件に囲まれ、ヨセミテ風のクライミングが生まれた。

今回の我々の最大の目標は、高度差一一〇〇メートルを越すエル・キャピタンを登ることだった。ヨセミテで発生し世界に拡まったクリーン・クライミングなどという大それたものではなく、もっとも標準的な方法でバレー・フロアからリムへとたどり付こうというのだ。ルートはサラテ壁の下部～ミュアー壁～ノーズ・ルートの上部と三つのメジャー・ルートを直線的につなげたもので、トリプル・ダイレクトとかインテグラルと呼ばれている。このルートは、ガイドブックによると、〈VI・5－9・A3〉ということだが、アメリカのグレードシステムは日本やヨーロッパとはちがい、VIは登攀に要する時間の程度を表わし、二日以上のビバークを必要とするルートであることをしめし、アラビア数字はフリーの、Aの付く数字はエイドの、最高ピッチ・グレードをそれぞれ表わす。ちなみに一ノ倉沢の衝立岩正面壁雲稜ルートをアメリカ風にグレーディングすれば、〈III・5－7・A2〉位のものだろう。

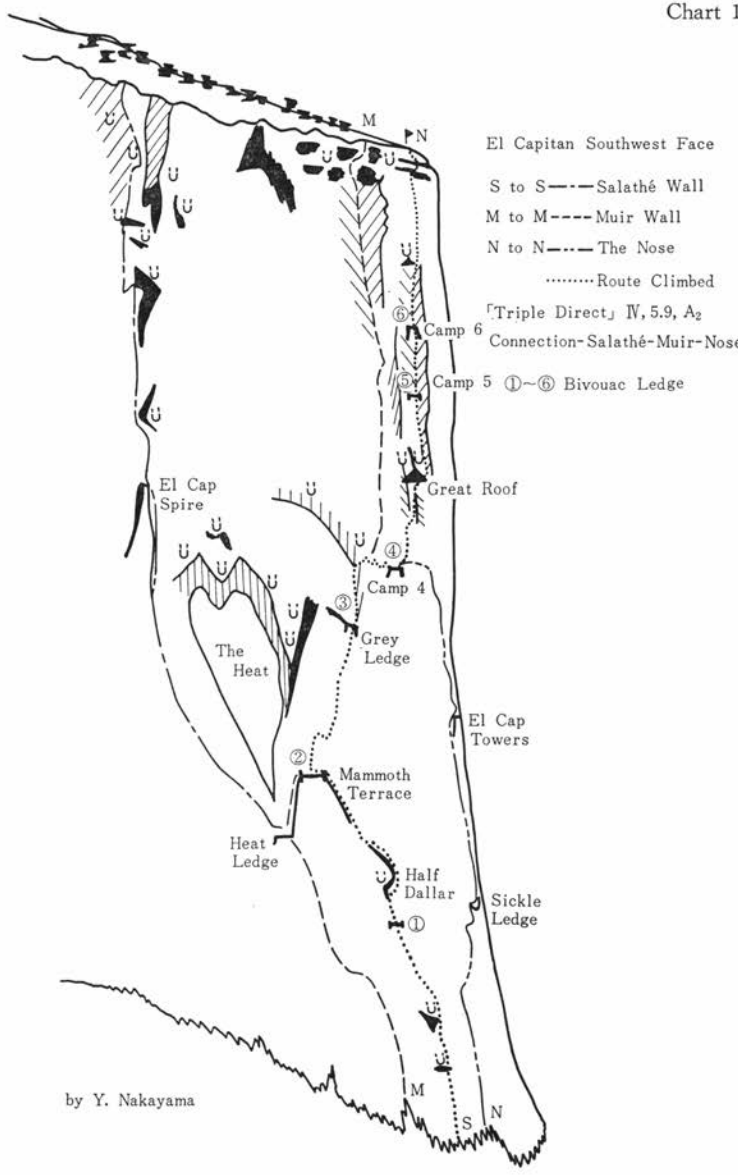
このルートを登るために我々は各種のサイズの硬質ピトンを五十本位とチョックも六十個ほどを用意した。ロープも十一ミリ×四六のものを四本、ヒローループ五十本、一インチスリング二十本、カラビナなどは一〇〇個を超えていただろう。これに加えてビバーク用にコンロ一台、マットとシュラーフを各自一枚、それに七日分の食糧と三十リットルの水等の入った荷上げバッグをパックしたときには、我々三人で本当に上げられるものか不安になってしまった。それでも多少アングル・ピトンやボンベが足りなかったのだが、それはなしでなんとかすることにして、登る準備はととのった。

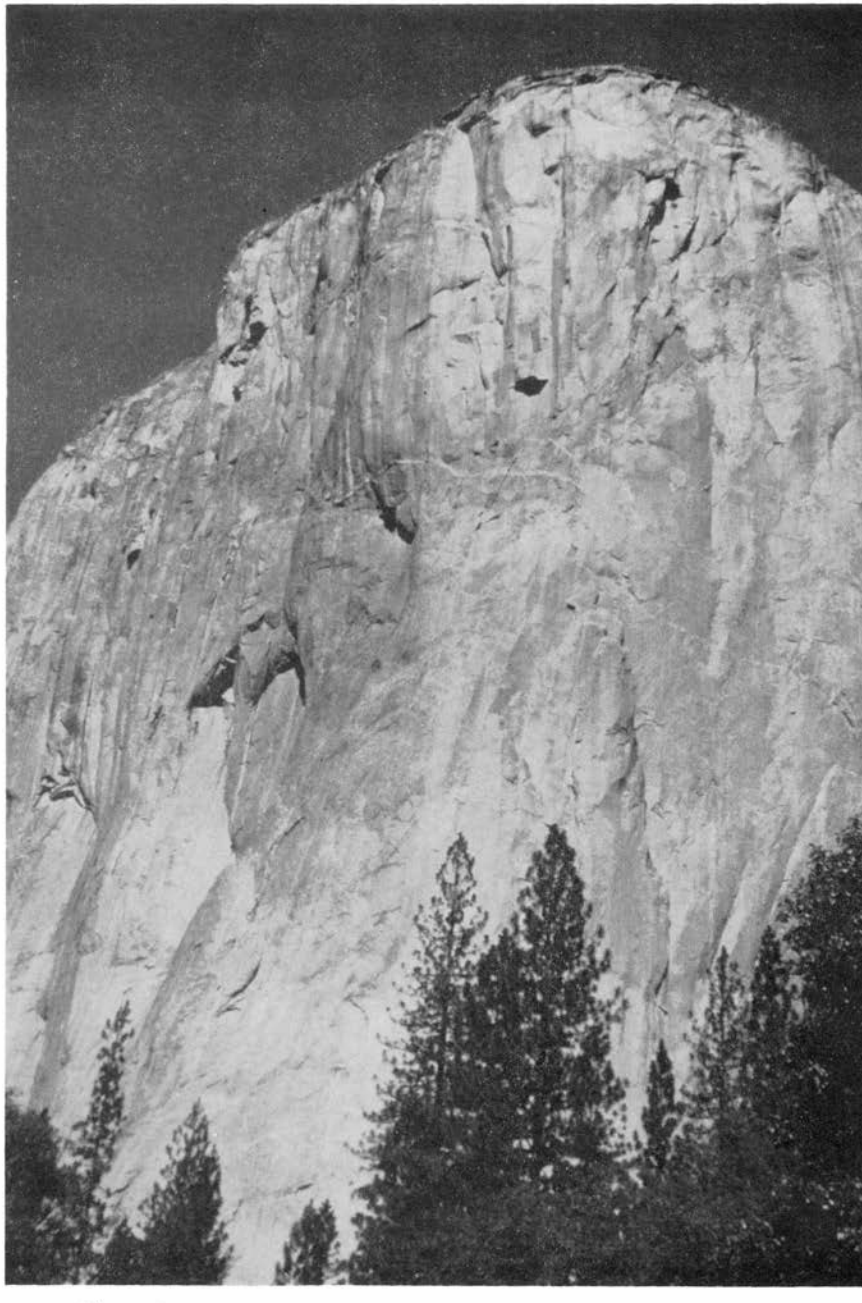
アメリカ流に、さっそく手持のロープの分だけフィックスしながら登り、その最高地点に金物をデポしてキャンプへと戻った。中一日は家への手紙書きにあて、夜にはとうぶんご無沙汰になるビールや美味しい食事を腹に詰め込んで英気を養った。

エル・キャピタン登攀

さあ、六泊七日の垂直の旅の始まりだ。まず重い荷上げバッ

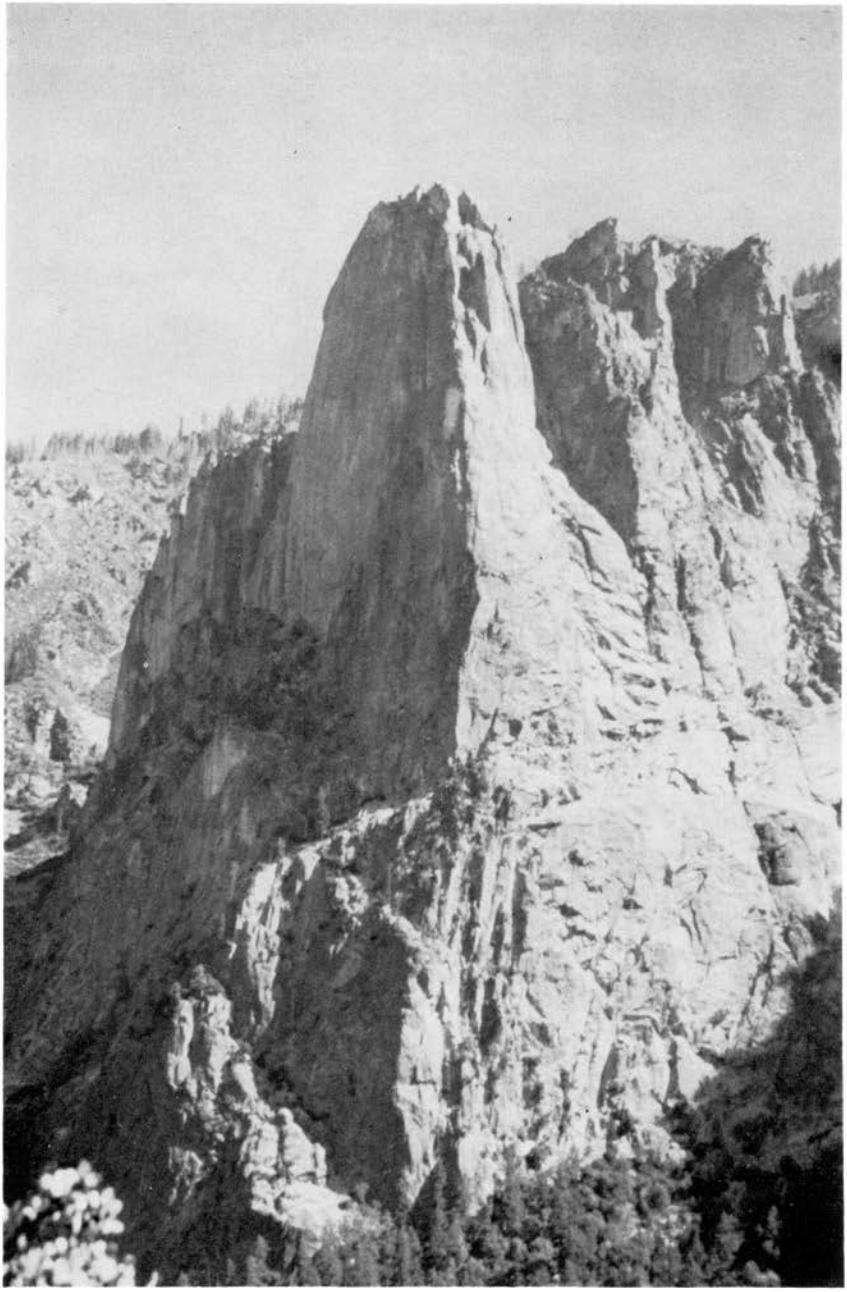
Chart 10


El Capitan Southwest Face
S to S——Salathé Wall
M to M----Muir Wall
N to N——The Nose
·····Route Climbed
「Triple Direct」 Ⅳ, 5.9, A2
Connection-Salathé-Muir-Nose
M
N
⑥ Camp 6
⑤ Camp 5 ①~⑥ Bivouac Ledge
Great Roof
El Cap Spire
④ Camp 4
③ Grey Ledge
The Heat
El Cap Towers
② Mammoth Terrace
Heat Ledge
Half Dallar
① Sickle Ledge
by Y. Nakayama
M
S
N



<Plate 13-(a)>
エル・キャピタン全景。
El Capitan.

(Plate 13 (a)～(c), by Y. Nakayama)



<Plate 13-(b)>

センチネル・ロック（影の部分が北面）。

Sentinel Rock (North face in the shade).

<Plate 13-(c)>

エル・キャピタン、24ピッチ目。グロワリング・スポットより。

El Capitan, the 24th pitch, seen from glowering spot.

<Plate 14-(a)>

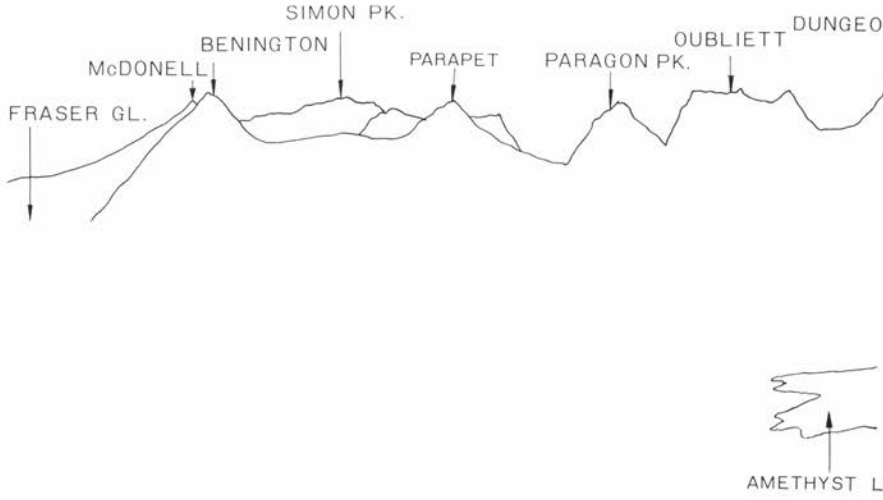
トンキン・バレイ。ハイ・トレイルより望むフレーザー氷河とアウトポスト峰。

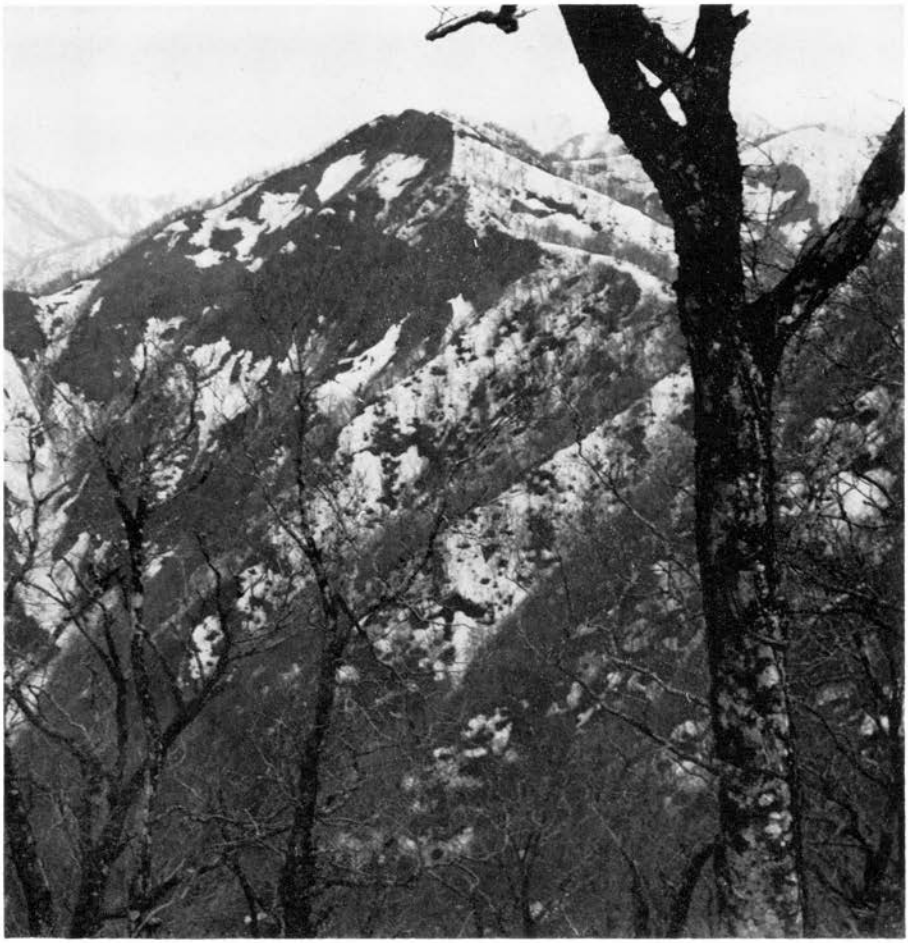
Tonquin Valley, Outpost and Fraser glacier seen from High Trail.

<Plate 14-(b)>

オールドホーンより望むランパーツ山群。

Ramparts Mountains, seen from oldhorn.





<Plate 15-(a)>

白神山地：雁森岳（東方の県境の P 980 付近より望む）。

（撮影・佐藤　勉）

＜Plate 15-(b)＞

白神山地県境の P 941 付近より望む尾太岳。

（撮影・佐藤　勉）

<Plate 15-(c)>
白神山地：追良瀬川源流のツヅミの滝（西目屋村での呼称。八森町では黒滝という）。
（撮影・坂本知忠）

グをユマールと滑車を組合わせて上げる。これを一ピッチ上げるにはユマールを体いっぱいに使って、一〇〇回余り上下させねばならない。そんなこんなで一日目は金物の待っているレッジで終わりそうだ。目の上にはハーフ・ダラーと呼ばれるオーバーハングがある。翌日のことを考えると、それも登りたい。エイドとフリーのミックスでハーフ・ダラーの下端まで登り、グラグラする宇引き位のチョック・ストーンでスリングビレー。突然の客にビックリしたのか、クラックの奥からカエルが出て来て、我々を見ている。次のピッチを登り始めて数メートルでチョックが外れ、ヨセミテで第一回目の墜落を体験した。この出来事で、この日の仕事は早々に終りにして、下のレッジへと下降する。広いと開いていたのに狭いレッジに悪態を付きながらも、三人ともなんとか横に重なり合って寝ることが出来た。

二日目。眠い目をこすりこすり、ユマーリングでハーフ・ダラーまで登り、難関のハングと凹角をハァハァ云って登りきると、気持ちの良いレッジに出た。今日も下の二人には、金物の回収と荷上げと云う大仕事が待っている。セカンドは手を血だらけにしてブツブツいいながら上ってくる。昨日の僕といい、これから手の皮が何枚あっても足りそうにもない。ラストは荷物の尻を押しなら上がってくる。レッジで全員一休みしてから、今日のビバーク予定地マンモス・テラスへとクラックを数ピッチ登り、遂にヨセミテ登攀史によく出て来る広いテラスに着いた。このマンモス・テラスは、サラテー壁、ミュアー壁等のメジャー・ルートや、その派生ルートが集まり、そして分散してゆく交差点のような所だ。ここでルートの三分の一が終って、これから三分の一はミュアー壁をたどることになる。ここらへんから壁は全体に立って来て、夕日に輝やく上部を見るには横になった方が楽だ。一ピッチ、夕飯前の仕事をして広いテラスでビバークだ。手足を延ばして眠れるのは気持がいい。

三日目。いつものように用意が遅れて、仕事始めは十時近い。のんびり登るのが好きな三人が集まったのだから文句も出ない。下のエルキャップ・メドウには、お上りさん等が双眼鏡で岩壁に張り付いているめずらしい動物を見上げているから、尻を出してする朝の作業はたいへんだ。これからのミュアー・セクションは、細いエイド・クラックを追って、一〇〇メートルほどアブミのお世話になって登り、クソで汚れた外開きのチムニーを越えたグレー・バンドでビバークとなった。このレッジは細長いだけで狭く、外傾までしている。ひとりづつ広そうな所を見付けて落付く。レッジの端に誰が仕掛けたのか小型のネズミ捕りが置いてあり、小さなネズミがミイラになって掛っていた。このネズミ捕りを仕掛けたクライマー氏は、以前によほど小動物に攻撃を手ひどく受けたのだろう。今夜は今までになく狭いので、「町中会の紐男」と云った感じで身体をくくり付けて眠る。

四日目の朝は出勤の仕度ののち、シールドのオーバーハングに突き当る七十メートルの大きなコーナーを登り始める。壁も急になって来て、ピトン打ちもチョックのセットも手間が掛かる。コーナーのどんづまりにはツルツルに磨かれたスラブがあり、板ボルトが横に数本連打されている。ここでのスリング・ビレーは、まるで空中ブランコの芸人になった気分だ。それから二ピッチは、本当に空中ブランコそのものの振り子トラバースを数回して、やっとのことでキャンプ下の平らなレッジ（ホワイト・ペデスタル）にたどりついた。この複雑至極なトラバースを暗闇の中でやりとげたラストは、本当にサーカスにでも行った方がよいくらいだ。ノーズ・セクションへあと一ピッチで出られる、平らすぎる位のレッジで眠りに入った。

五日目。お決まりの準備をして、キャンプⅣへとジャム・クラックを登り、ノーズ・ルートに出た。対岸のキャシードラル・ロックも我々の高さと変らない位になって来た。もう三分の一でビールが飲める。下からも顕著に見えるグレート・ルーフのピッチを、急に多くなった残置ピトンをつかって気持ちよく越え、パンケーキ・フレークの下のボルトでスリング・ビレー。さすがにノーズ・ルートは、エル・キャップのクラシック・ルートだけあって、ビレー・ポイントも整備されている。チョックのよくきくクラックを数ピッチ登ってキャンプⅤに着いた。この夜はノーズを登って来たイギリス人と五人でここで泊まるのだが、下のキャンプⅣにしてもここにしても、ノーズ・セクションに入ってから人間様の臭いがプンプンで、便所で寝ているような気がする。

六日目。今日まで六日、飯もろくに食べていないし、特にアルコール分が身体から抜けているので、まことに体調がいい。ヨガの行者のような気になって来るから不思議だ。さすがにノーズ・ルートだけあって、下からワイワイ登って来る。一本のクラックづたいにルートがあるので、皆でロープを貸し合ってキャンプⅥまで登る。合計で十人の多人数なので、スイス人等五人が一段下のレッジで、我々とイギリス人二人の五人がキャンプⅥでシュラーフを拡げた。あしたでこの壁も終ると思うとホッとする。思えば六日間よくあきずに登って来たものだ。

最終日の夜はスイス人たちの美しいヨーデルの歌声で明けた。下の道路を走る車が豆粒のように見え、高い所へやって来たものだと感心してしまう。あと数ピッチなに事もなければ、今日中にはロッヂのバーで腹いっぱいビールやワインが飲めるはずだ。なんとかファイナル・オーバーハングのボルト・ラダーを越えて、ヒョコッと平らな草と木の生えた頂に着いた。次々にロープの下から仲間が表われる。一週間ぶりの広い平らな地面を足でふみしめ、その温もりを楽しむ。今まで対岸のキャシードラルしか見えなかった景色も谷全体に拡がり、我々の幸福な気持もカリフォルニアの太陽のように大きくなった。今ま

で引き上げて来た重い荷を背負って、バレーのキャンプサイトに着いたのは、あぶなくバーの閉店になる時刻だった。

もちろんその夜は、アルコールと温かな食事に舌づつみを打って、ビッグ・ウォール・クライムの酔いに浸った。

センチネル・ロック北壁

エル・キャップのクライムの後、手のケガを治したり美味いものを食べたりで二～三日すごした後、いくつかのショート・ルートを登り、次の目標センチネル・ロック北壁を登ることになった。こんどのルートは、初登攀者の名前を取って、ショイナード／ハーバート・ルートと呼ばれている。グレーディングは〈V・5－9・A2〉で、ビバーク一回で登れそうだし、今回は二人ということもあって、荷物もいたって少ない。

壁の取付でビバークをしてから登るつもりなので、昼ごろになってスーパーでの買い物を終らせて、取付へと登って行く。仲間は朝早くからワシントン・コラムのダイレクト・ルートに出掛けたが、もうだいぶ上まで登ったことだろう。肩の荷物にブツブツ云いながらも、なんとかアプロー・ランプを登りきり、取付近くのビバーク・レッジへと着いた。レッジの回りには枯枝がいっぱい落ちており、今夜のビバークは、六缶のビールとともに楽しいものになりそうだ。ここは北面のため夕方の数十分しか日が当らないのだが、その夕日が花崗岩を紅く染めて美しい焚火の炎が顔を火照らし、キラキラと光るバレー・フロアーのキャンプの光を見ているうち、いつの間にか眠りに落ちて行った。

朝になっても日が当らないので、シュラーフから出るのも遅くなる。のんびりと朝食を食べた後、チェスマンズ・ピナクル右側のチムニーを登り、数ピッチでピナクルの上に出た。エル・キャップの時と違い、荷上げも片足で出来るし、足ごしらえも軽いので気持ちがいい。ここからはメインの壁を登ることになる。上部まで見渡せるので気楽なクライムを楽しめる。

左に開いたオープン・ブックに向ってミックス・クライムで行き、ハングの下を左へと登って、ハング上のビバーク・レッジへ着いた。途中ロープが引っ掛かり、一五〇フィートの空中懸垂で降りたりもしたが、なんとか無事にロープも回収出来、斜に傾いたレッジに尻を落着けることが出来た。このルートもヨセミテの定食コースに上げられるだけあって、ご多分に漏れず悪臭がひどい。

ヨセミテのクライミングというと、Tシャツにショートパンツといった軽装を連想するのだが、ビッグ・ウォールを登る時にはセーターや軽羽毛服が必要だ。我々の服装はGパンにラガージャージ、その上に軽羽毛服というヘビーな組合せだが、ビレー中などは意外と涼しい。

上のオフウィズス・クラックを越れば、アフロキューバン・

フレークと呼ばれるオーバーハング下のスリング・ビレーへと出られるはずだ。Kがトップでワイドなクラックをにじり上って行く。クラックはヘキセントリックの十一番でもガタガタするほどで、下で見ていても心臓に悪い。しばらく登った時、「ガシャーン」という大きな音とともにパートナーが降って来た。ふたりともビックリしたがけがもなく、クラックに悪態をつく。たしかこのクラックの名前は「心に残るクラック」とガイド・ブックに書いてあったはずだ。トップを替ってなんとかかんとか登りきる。

次のピッチはこのルートのクライマックスであるアフロキューバン・フレークのハングだ。ヨセミテには珍らしく脆いフレークのハングだが、連打されたピトン、ボルトにトップは楽しそうに越えてゆく。アフロキューバンを越え数ピッチで木の生えたランプに着き、風化したザラザラのチムニーやフェースを登ると、頂上へと出た。

帰路は、暗闇の中で急なギャリーを一度のラペルを含めて二時間ほどでトレイルに着き。夜中になってなつかしのキャンプへと下った。エル・キャップの長いクライムとも違うし、ショート・ルートの5―10や5―11のハードなクライムとも違うのだが、気の合った同志の気楽なクライムを出来たことがうれしい。

我々はそのほか、ヨセミテの谷間でロッククライミングを三十日間近く楽しみ、それぞれの心の中にカリフォルニアの休日の想い出をうんと貯えた。色々な国のクライマー達と酒を飲んだり、一緒にクライミングを楽しんだり、日本では出来なかった面白い体験を重ねた後、秋も深まったヨセミテを後にした。

△記録概要▽

隊の名称　なし

活動期間　一九七七年九月十七日～十月十六日

目　的　ヨセミテ、エル・キャピタン他のロック・クライミング

メンバー　中山芳郎（26）、黒田薫（24）、黒沢雅典（23）

行動概要　九月十七日、グレーシャポイント・エプロンのクラック・マージナル。二十一～二十七日、エル・キャピタン・トリプル・ダイレクト。十月二日、マニュアル・パイル・バットレスのC・Sコンサート及び同アフター・シックス。三日、チャーチボール・ツリー及びアンクル・ファニー及び同アーント・ファニーズ・パントリー。四日、グレーシャー・ポイント・エプロンのマンディーモーニング・スラブ／ハリー・ディリー・ルート。五日、サニーサイド・ベンキのレイジー・バム。六日、ワシントン・コラムのダイレクト・ルート。六～八日、センチネル・ロック北

壁のショナード・ハーバート・ルート。十一日、ファイブ・オープンブックスのサプライズ。十二日、エル・キャップ・ベース／ザ・スラックのサッチェラー・クラッカー及び同ラ・コジタのレフト・サイド・バリエーション及びシヨート・バット・三二。十三日、グレーシャーポイント・エプロンのハーディング・ルート。十六日、ファイブ・オープンブックスのヨミットメント及びマンジネラ。

トンキン・バレイ
——カナディアン・ロッキー——（一九七一年）

本田夏生

この山行は少し古い記録になるが、私がシカゴ滞在中にシカゴ山岳会の主催する山行に参加した時のものである。

場所はカナディアン・ロッキーの北の玄関口であるジャスパーから程近い、地図上ではジャスパーの南西に位する山系である。トンキン・バレイ（Tonquin Valley）と云ってもむしろ盆地の様な所で、中央に湖（Amethyst Lake）があり、その西岸に聳えるランパーツ（Ramparts）の山群は高さ三〇〇〇メートルそこそこではあるが、圧倒的な偉容を誇っている。

氷河も発達しており、その近くの山々を含めると、初級から上級まで様々な山行が楽しめる恰好な山域と思われるので紹介したいと思う。

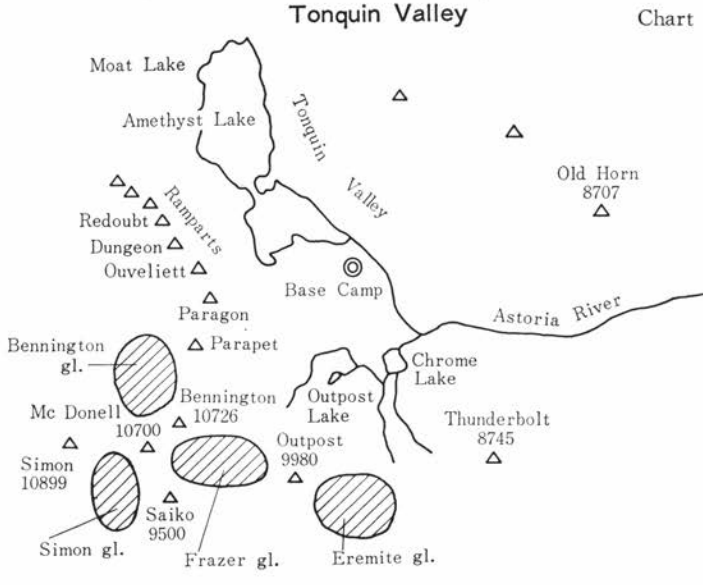
その時の記録は次の通りである。七月二十三日二十一時、友人の車に便乗してシカゴを発った。途中交代で車を運転して、バンフに入ったのは二十五日の明方であった。ここから近いルイズ湖（Lake Luise）を見物し、更に高速道路を北上して昼すぎには早くもジャスパーに着いた。目指すトンキン・バレイはこの附近から入ることになるのである。

二十六日、入山。荷物は馬方にあずけて、軽装でアストリア河（Astria River）に沿った小道を登って行く。天気はいいが、蚊の猛襲には閉口した。日本では考えもしなかった程烈しいもので、通行する人間であれ、馬であれ、容赦なく襲いかかり、一寸としたすき間はおろか、厚手の衣服の上からでも刺そうとするのであった。しかし景観だけは申し分なく、間もなく前方に、スローン峰（Mt. Throne）が、そして右手にオールドホーン峰（Oldhorn Mtn.）が見えてくる。それから樹林帯の中を登って行くと急に視界が閉けて、真正面の針葉樹林の上にランパーツの山群が聳えたっている姿は、真に云い様もない程素晴らしいものであった。

キャンプ地は湖の近くにあり、出発してから四時間半位の行程であった。二十七日は雪上訓練で、終った後、湖に水浴びに行ったが蚊の襲撃と水が冷たすぎるのとで、ゆっくりする暇もなかった。

二十八日、いよいよ山行が始ったが、夫々に数人宛パーティを組んで思い思いの方向に出発して行った。私が加わったのは総勢六人で、キャンプ地の南の樹林帯を通り抜け、ガラ場を越えると氷河末端の湿地帯に出た。ここを適当に道をえらび懸垂氷河の縁に上り、比較的調子のよい他の二人とアンザイレンして氷河を登り出した。やがて尾根の向う側にシモン（Simon）氷河とそこに居並ぶ山々の姿が目に入る。はじめて氷河を登る感激と、氷河に囲まれた山々を眺める喜びとで私の気持は何にも譬えようがなかった。私は気負いたっていたので目前にそびえているマクドネル峰（Mc Donell 10,700 ft）に足を向けたが、相棒のグラフ（Graf）が今日は時間がないから左峯に行こうと云うので、彼の云う様に向きをかえ、トップに立って登った。左側の峰は左程高くはないが、登ってみると眺めは素晴らしかった。ここは地図上で名前がついてないというので、私が登った記念にと、皆が Saiko 峰（さー行こうと云うこと）と名付けてくれた。少々ゆっくりし過ぎたので、七時間半かかっていた。

二十九日、昨日一緒に登った連中は皆休養して動かないの



で、チュック（Chuck）を誘うとアウトポスト峰（Outpost Pk 9980 ft）に行こうというので、二人で出発した。昨日と同じ道を辿り、少しはなれた所にあるアウトポスト湖の傍の小屋に立ち寄った。小屋からはそのままモレーンを乗り越えて、懸垂氷河の下端に出た所でアンザイレンし、アンゼンをつけてから氷河の左側へ向って捲き気味に登り、氷河の上へ出た。それからクレバスを捲く様にしてヂグザグに登って行ったが、はじめは余り気持のいいものではなかった。やっと上部の氷河に出て、クレバスも少なくなったと思って歩いていると、スポッと片足が落ちこんでしまった。「おーい」という声に、チュックがニヤッと笑ってザイルをたぐり寄せてくれた。クレバスがない様にみえても、ただ雪でおおわれているだけなのに気づかなかったのである。左の肩に登りつくと、眼下にエルミテ（Ermite）氷河が拡がり、エルミテ、アルコーブ（Alcove）、アングル（Angle）の諸峯が望まれた。何処を登っても面白そうである。

アイゼンをはずし、ピッケルもザックもここにデポして、軽装で今度はロッククライミングであった。チュックとは何回か一緒に登ったことがあり、彼のクライミングの上手さはよく知っていたので、私は安心してついて行った。しかしそれでも上部氷河まで一気に切れ落ちる高度感には圧倒されそうな感じであった。傾斜が大分ゆるくなって、もう少しで頂上という所で、チュックは私に先に行く様に合図して云った。

「君にははじめてのカナディアン・ロッキーだろう」

この彼の言葉は実に有難かった。頂上に辿りつくと昨日登った連中の氏名を記したカードが空き鑵の中に残っていたので、私達も二人の名前と日時を記入して残しておいた。帰路は同じコースを辿ったが、昨日よりは早く、往復十時間の行程であった。

三十日、今日は足が痛いので休養しようかと思っていると、ノーマン（Norman）がベニングトン（Benington）氷河を見に行こうと誘って来た。ここからは尾根一つ越えなければ見えないのである。そこで私達はハーガン（Hagan）もさそい、三人で出かけた。ランパーツの基部の湖畔のガラ場を飛石づたいに歩くが、足が痛くて困った。湖面から吹き寄せる風は心地よかった。ダンジョン峰（Dungeon Pk）の基部で湖は狭くなり、飛石伝いに湖を渡れそうにも思えた。ところが、ハーガンが飛石に乗りそこねて浅瀬につっこんでしまったので、大休止になった。湖からはなれて暫く行くと、もう一つの湖（Moat Lake）があったので、湖畔のボートを使って対岸に渡り、今迄目につかなかったランパーツの北部の峯々を眺めたが、今日の中にベニングトン氷河に辿りついてキャンプ地迄戻れそうにもなかった。そこで引き返す事になり、帰路は湖の東岸を経由して帰り着いた。

三十一日は足の調子が悪くて停滞し、翌八月一日、今日は何

処へ行こうかと考えていたらアラン（Allan）がトム（Tom）とオールドホーンに行くというのでついて行くことにした。殆んど岩登りだろうと考えて、アイゼン、ピッケルは置いて行くことにした。登路はどこにとるかというと、西面という。東面はどうなんだと尋ねると、とても無理だという。西面のルンゼを登るにしても、私には少し手強いかなとも思ったが、なんとかなるだろうと思って出発した。

この山は、キャンプ地から見えていても、氷河がないのでこれを登ることは余り考えてなかった。そんなこともあって気軽に考え、精々一日往復の積りであった。

九時、取附点の一段目の滝をこえ、次のハング気味の二段目の滝を登って、浮石の多いルンゼを登って行くと、行手は大きな壁にさえぎられてしまった。右手は大きな岩塔でふさがれていたが、左手には幅の広いバンドが入っている。このバンド伝いにまわりこみ、壁の真上に出た。ここから更にガラ場を登ると、三段目の滝があり、続いて四段目の滝が出て来たが、ここが意外に時間がかかった。これを越えるとほぼ難関は終了して、頂上近くの雪田をこえ東壁の直上に出てみると、スッパリと切れ落ちた垂壁であった。余り気持ちのいいものではなかったが、東面伝いに頂上へ続く尾根上によじ登って、最後にややハング気味の所をのりこすと、狭い帯の様になっている頂上に着いた。

時刻は五時二十分であった。頂上に記録を残して、同じルートを降る事になったが、とにかく高度感があるのでハラハラした。暗くなるまでに出来るだけ降りようと、三段目の滝を降りたが、そこでビバークとなった。昼間の焼けるような暑さとは逆に、夜は凄く寒く感じられた。ポンチョを足にかぶせて我慢していたが、どうにもやり切れなくなり、長年持ってまわっていた放出品のメタに点火して足の間におくと、暖かくなってウトウトとする。そんなことを何回かやっている中に北国の早い夜明けが訪れて来て、私はホッとした。後日アランはあの時のメタはうらやましかったと云って居たが、その後の報告書には私にジャパニーズ・ビバーク・キングなる称号が与えられていた。

五時半下降開始。しかしここでトムは路を誤り、行手を垂壁にさえぎられてしまった。やっと登路を思い出して中間バンドに到達する頃、応援パーティのコールが聞こえて来てヤレヤレという気持だった。彼等と合流したのは十二時半、もはや昨夜の寒さが信じられない位の暑さであった。私は雪渓の間のせせらぎで頭をザンブと冷して楽しんだ。すると見ていた連中は、「ホホウ！」と云って、次々に同じことをやって喜んでいた。ただ一人アランだけはやらなかった。「そんな事をしたら髪の毛が落ちてしまう」と云うのだが、彼は、殆んどカラ薬鑵なので私は吹き出してしまった。

翌三日は休養して、四日にフレッド（Fred）等に誘われてサンダーボルト峰（Thunderbolt, 8745 ft）に行く事にした。サンダーボルトはオールドホーンに比べると全く楽な気分であった。クローム湖（Chrome Lake）の畔に出て、針葉樹林帯を登り切り、雪田を越え、ガラ場の急斜面を登る頃には、皆バテ気味で、私独りで登り続けた。頂上から続いている雪田を登り、最後の雪壁をこえると、間もなく頂上であった。頂上から指呼の間にあるエルミテ氷河の周辺の山々や、又遠くに見えるニードル峰（Needle Pk.）、東側のブラックホーン（Blackhorn）シェブロン峰（Chevron Mtn）を眺めて、あれこれと登路を考えるのは楽しかった。頂上で一時間以上も遊んで帰途についたが、雪面の所ではグリセードをやって遊んだりしてのんびりしてみたが、キャンプ地に戻ったのは四時前であった。

一日休養した後の六日、キャンプを撤収し下山した。往路には辿らなかった高回りの道を通ると、高山植物の群落の彼方に、湖岸からそそり立つパラゴン（Paragon）ウーベリート（Ouvelett）等の諸峯が何かしらなつかしく感じられた。又何時の日か、山友達と、春に訪れたいものだと思いながら、この地を後にした。

以上が私の記録であるが、参考までに述べると、この辺の山群の案内は、アメリカ山岳会発行のカナディアン・ロッキーの案内書に記載されていて、所要の地図も記してある。地図はJasper Park Alberta south sheet 1：190,080 に入っている。又、カナディアン・ロッキーの最高峯、ロブソンもこの地域から程遠くない地域にあり、オールドホーンの頂上から望むことが出来た事を附加えておきたい。

縦と横の山旅

――積雪期飛騨山脈の縦走と横断――

竹中昇

第一部　横の山旅（一九七七年三月）

七六年三月十四日、私は八ッ峯Ⅰ峰三稜P四より紺碧の空に聳え立つ鹿島槍の秀麗な双耳峯に魅入っていた。この時、鹿島槍～赤沢岳猫の耳～黒部別山～八ッ峯と、飛騨山脈を横断する山行を想い浮べた。それは、大タテガビン第一尾根の積雪期初登攀を果し、さらに連続して八ッ峯Ⅰ峰三稜に取り付き、P四に辿り着いた直後だっただけに、その横断にはある程度の成算があった。

この大タテガビンより八ッ峯の連続登攀を始めとして、四月の黒部別山、五月の鹿島槍北壁、東大谷駒草ルンゼより池の谷剣尾根と山行を重ね、自分の足で横断の可能性を確かめた。そして、来るべき春の横断計画を、鹿島槍北壁～赤沢岳猫の耳～黒部別山南尾根～八ッ峯Ⅰ峰二稜・主稜～池の谷剣尾根とした。

十一月になって、横断に同行を予定していた信州大学の岡野修君と赤沢岳西北尾根の末端部および梯子谷乗越の二箇所に、それぞれ十日分の食糧、燃料等を荷上げし、立ち木に結わえ付けてきた。

その後、岡野には三月にどうしても欠かせぬプライベートな用ができ、同行が不可能になってしまった。共に準備を重ねてきた彼の無念さは、察して余りあろう。良き仲間が同行できなくなり、私は当惑した。

二月の、あるとても寒い日だった。共通の友人である駒沢大学山岳部の関崎健弘君を通じ、やはり積雪期飛騨山脈の横断を

模索しているという秀峰登高会の山崎祐和君を紹介してもらった。私は、お茶の水の喫茶店穂高でコーヒーをすすりまだ見ぬその人を待っていた。十分ほどたったろうか、羽毛服を着た精悍な男が現われ、「山崎です」と名乗った。お互いの簡単な自己紹介、そして「鹿島槍から剣に行ってみないか」「行きましょう」と手短かな会話を交し、横の山旅・積雪期飛騨山脈の横断がまとまった。こうして出発の僅か二十日足らず前にようやく具体的な計画が作られることになった。

私と山崎との間で最終的にできあがった計画は、初めて共にする山行であることを考慮し、鹿島槍北壁～赤沢岳西北尾根～黒部別山南尾根～八ッ峯I峰三稜・主稜～剣岳と、当初考えていたものよりも縮小した。鹿島槍より剣と、積雪期飛騨山脈横断の型を重視したのである。三月一日安曇野を出発し、三月二十一日までに早月尾根を下降し、馬場島に下山する行程とした。

当時、私は安曇野のスキー小舎で小舎番をしていた。山稜に舞い上がる雪煙を見やり鹿島槍より剣に想いを馳せ、来るべき出発の日を心待ちにしていた。二月二十八日、山崎が重い荷を背負って小舎にやってきた。そして、翌三月一日、「横の山旅」が始まった。

鹿島槍ヶ岳から黒部へ

三月一日（曇り）。午前七時、安曇野は神城の「まほろば小舎」を出発。大糸線の古ぼけた電車で簗場へ。仁科三湖の中綱湖は凍結し、湖上で老人がわかさぎを釣っている。リフトに飛び乗り黒沢高原へと一気に登る。黒沢高原には鹿島槍国際スキー場がある。私達は賑やかなスキー場を離れ、汗を流し黒沢を大谷原へと下る。大谷原では遭難者の家族らしい女の人が長靴をはき花束を小脇に抱え東尾根をじっと見つめている。その横を複雑な思いで通り過ぎ、大川沢へと入る。春まぢかの大川を溯り、その日は荒沢出合の手前にある昭和電工の取り入れ小舎に入った。

三月三日（晴れのち曇り）。小舎での快適な一夜を過した後、「よし行くぞ」と張り切って出発する。幸いなことに晴天だ。荒沢の出合は、東尾根と天狗尾根が迫り、上流にあれほどの奥壁があるとはとても思えぬ位に貧弱なものだ。天狗尾根末端の急傾斜に取り付く。茂った潅木を漕ぎ登高を続けて行く。第一クーロアールは慎重にザイルを使い通過する。この頃より急に雪が舞い始め、視界も悪くなる。天狗の鼻の直下二〇〇メートルあたりと思う所にテントを張る。

三月四日（吹雪）。夜来の吹雪にテントのフレームを飛ばされてしまうし、視界もあまり効かないが、天狗の鼻までは進もうと吹雪をついて出発する。ザイルを結び、両側の雪庇を気づかい、一歩一歩足場を確めながらゆっくり進む。一時間ほどで

視界がほとんど効かなくなり、位置の確めようもないが、天狗の鼻とおぼしい平坦部に到着したところで、広い雪洞をカクネ里側に掘る。これで強風に悩まされずにすむ。入山後三日目を迎え、互いの気心もわかり始めた。

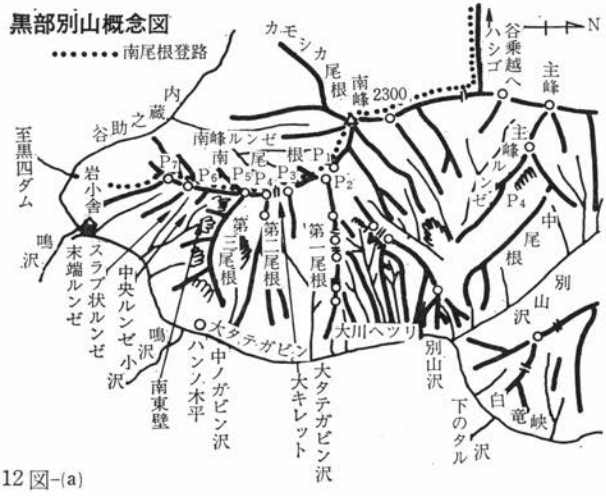
三月四日（吹雪）。静かな雪洞を一歩出ると、外は吹雪が猛り狂っている。ちょっと北壁に向かえる天気ではない。北壁が登れる迄待つか否かと、大いに頭を悩ます。ラジオの天気予報は、ここ二、三日の悪天を伝えている。私達の行く手は遥か彼方の剣だ。先の長さが気にかかるので、残念だが北壁を諦め、少しでも前へ進むことにする。アンザイレンして出発、視界は昨日よりも幾分回復している。雪洞を掘った所が天狗の鼻であることは何とか確認できたが、鼻から荒沢の頭までは、どこが小舎岩なのかさえわからない。視界が悪いということは本当に恐ろしい。頭まで隔時登攀で登高を続ける。頭に着くと急に吹雪の勢いが増してきたので、大慌てで雪洞を掘る。雪洞の中で温度計はマイナス二十度を指している。道理で寒いはずだ。

三月五日（吹雪）。寒い一夜が明けて今日も吹雪が吹き荒れている。視界も良くない。アンザイレンして出発。深いラッセルに跪きながらも足場を踏み固め、忠実に雪稜を辿り鹿島槍北峰に達する。この北峰が鹿島槍より剣へのスタート台だ。さあ行こう剣へ。北峰に立つ私達に激しい吹雪が容赦なく吹き付けてくる。吊り尾根を渡り、南峰を越え、冷池へと駆け下る。

三月六日（吹雪）。後立山連峰を赤沢岳へと向かう。爺ヶ岳、岩小屋沢岳、鳴沢岳と、黒部からの強烈な吹き上げに抗しながら越えて行く。鳴沢岳と赤沢岳とのコルから赤沢岳の西北尾根へとトラバースする。西北尾根は、腰まで没する深いラッセルに難渋し下る。南には猫の耳の迫力ある姿が手に取る様に眺められる。今回は果せなかったが、いつの日かきっと来よう。シラビソの樹林帯に入るとようやく勢いを弱める。西北尾根を黒部の峡谷まで下り、その末端部に到着。昨秋ぶなの大木に結わえ付けたデポ品を回収する。

黒部別山南尾根

三月七日（雪のち晴れ）。早朝には小雪が舞っていたが、九時前には晴れ間が見え出した。一区切りついたここらで一日ゆっくりと休みたいのだが、みすみすこの好天を見逃すことができない。内蔵之助谷出合まで、丸山小谷、丸山谷からの表層雪崩を恐れ、黒部の峡谷を走り抜ける。出合に着いた頃、恐れていたことが現実となり、丸山小谷、丸山谷に雪崩が走り落ちる。私達の次の目標は黒部別山の南尾根だ。雪の状態さえ良ければ、大タテガビンの末端ルンゼから取り付くのだが、今日の状態では雪崩に遭うこと必至だ。内蔵之助谷の出合より末端部から忠実に南尾根を辿ることにしよう。陽が南尾根に差し始めてきた。急傾斜な末端部を、足場を一歩一歩踏み固め、汗を流



第12図-(a)

し登って行く。気温の高い今日の状態では、尾根と言えども雪崩の危険性が付きまとう。丸山東壁の一ルンゼ、二ルンゼからは間断なく塵雪崩が落下し、黒部の峡谷に恐ろしい炸烈音をこだまさせている。南尾根の主稜まで標高差二〇〇メートル、傾斜の強くなり始めた所から隔時登攀で登る。主稜に這い上り、ようやく雪崩の恐怖から解放される。昼食を取り、ゆったりと黒部の冬景色を鑑賞する。私は猫の耳をじっと眺め、岩登りの好きな山崎は積雪期未登の丸山東壁二ルンゼを虎視耽々と眺めている。不安定な雪、繁茂する潅木に苦しめられ南尾根主稜の登高を続け、P7にテントを張る。

三月八日（晴れ）。この南尾根は六六年三月立教大学山岳部の一行により積雪期の初登攀が果されている。末端を内蔵之助谷出合に落しているこの尾根は、潅木に迷彩されているが、P七より黒部別山南峰まで七つのピークをもつ起伏の激しい急峻な尾根だ。私達は夜明けとともにP七をたち、急傾斜なP六ルンゼを登り、P六の直下に出た。P六は内蔵之助谷側をトラバースするが、これが難しい。細かなスタンスにツァッケを引っ懸け恐る恐る進む。忠実に尾根を登高したほうがずっと楽だったようだ。P五は簡単に越え、P四の頭に到着。昨春登った第一尾根の峻しい山容が迫って来る。よく私に登れたものだ。

P四の下降は南尾根第一の難所だ。大キレットの懸垂下降である。私は昨春この南尾根をトレースしていたが、その際この

懸垂下降をしている最中、ザイルが潅木に搦まり空中で悪戦苦闘し、ようやくのことでキレット底に降り立った。そんないわく付きの下降なので、心して下降にかかった。頭から約三十メートル懸垂下降、そこで新たに支点を取り、空中懸垂を含む約三十メートルの下りである。ところが、慎重に慎重に下っていたはずがまたしても失敗を犯してしまう。髪の毛が下降器（エイト環）に絡まり付いてしまったのだ。あがけばあがくほど絡み付いてくる。髪の毛を下降器から懸命に払い除けること十分あまり、ようやく窮地から抜け出す。キレット底に着陸。私にとってこのキレットは難所中の難所だ。数あるキレットの中でも急峻さと狭さは最たるものではなかろうか。

昼食を取り気を鎮める。山崎は私の失敗を思い出しくすくすと笑っている。気を取り直しP三の登高にかかる。急な潅木帯を登る。P三とP二間は小キレット状を呈し、懸垂下降する。このあたりは潅木に迷彩されているが、大タテガビン沢、内蔵之助平側とも急傾斜に切れ落ち、少しでも気を抜くととんでもないことになりそうだ。大タテガビン沢の右俣のコルまでは不安定な軟雪の急雪壁の処理に神経をつかう。P二まで辿り着けば、南尾根の核心部は終わる。P二は大タテガビン第一尾根の頭でもある。昨春P二直下で猛吹雪となり、急雪壁を暗闇の中右往左往しようやくのことで辿り着いたのがこのP二だった。P二からは大ヘツリ側に張り出した雪庇に注意を払いつつ歩を進めて行く。P一の頂で夕闇迫り来たので、テントを張る。今日は十三時間以上も行動し心地よい疲労感を覚える。山は思い切り動くのが一番だ。

三月九日（吹雪）。吹雪だが、この先にはもう難所はない。デポのある梯子谷乗越を目指す。雪庇を気づかい栂の林の中を歩く。黒部別山主峰と南峰との中間点より真砂尾根に入る。乗越に到着し直ちにデポの回収に当たる。昨秋シラビソの立ち木にデポ品を結び付け、高い所に目印の赤布を付け、隣りのシラビソにも付けておいたのだが、今は隣りのシラビソの赤布が雪面にチョコンと出ているのみだ。最初は掘ればそのうちにデポを結び付けたシラビソも出てくるだろうと高を括っていたが、一時間、二時間と掘れども一片の葉さえ現われない。湿雪の吹雪が猛り狂っているが、掘り当てぬ訳にはいかない。夜の十時まで掘り続けるが手がかりもつかめない。朝の十時から十二時間もの徒労にくたびれはて、湿雪で濡れねずみになる。山崎の掘った雪洞に入り、体を横たえるが、寒くてとても寝付けない。

三月十日（快晴）。皮肉なもんで快晴の朝を迎えるが、今の私達は八ッ峯を登るだけの食糧も燃料も持ち合わせていない。デポ品を回収せぬ限りは、ここから行動を起すことは不可能だ。再び雪掘りを始めるが、二時間掘ってもデポ品の行方はつかめない。あまりの雪の多さに降参する。こうなれば、赤沢岳

西北尾根末端部に残置したデポ品の残りを取りに行く以外に食糧、燃料を確保することはできない。そのデポ品にはあまり手を付けなかったので、少くとも十日分の食糧、燃料はある。陽がかげるのを待って下ろう。それにしても、乗越から眺める八ッ峯Ⅰ峰のシュピッツェの何と美しいことか。午後三時すぎデポ残置品の回収に出発。白いおとぎの国の様な内蔵之助平を夢見心地で進む。内蔵之助谷に入ると、デブリがあちこちに点在している。三日前に発った西北尾根末端部に戻り、ザックに十日分の食糧、燃料を詰め込み、急いでもと来た道を登り直す。一時間半足らずで乗越に戻る。阿呆らしい今日の行動であったが、これで八ッ峯が登れる。

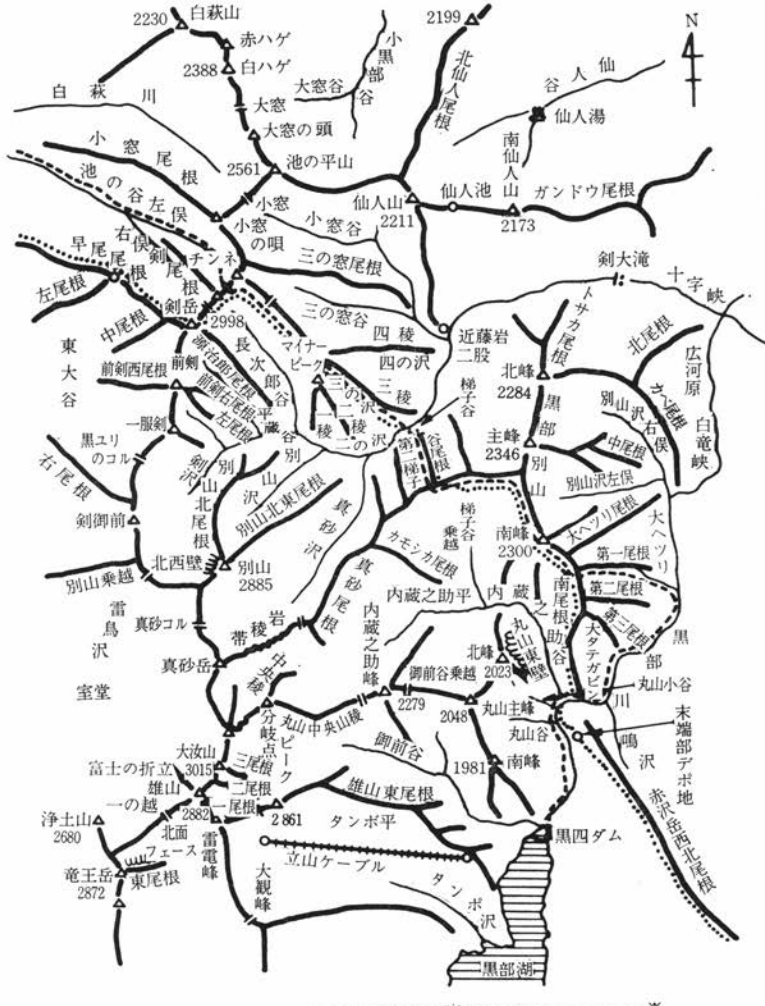
八ッ峯

三月十一日（快晴）。幸運にも今日も快晴の朝を迎える。さあ次は八ッ峯と喜び勇んで梯子谷を駆け下る。剣沢を横切り、八ッ峯Ⅰ峰三稜の末端部の大岩に到着。まる一年ぶりの大岩との再会だ。三稜は、海抜一六五〇メートルの大岩より二六五〇メートルのⅠ峰まで一〇〇〇メートルの高差を鋭角に突き上げ、途中にP一より六まで六つのピークを有している。Ⅰ峰の剣沢側には四つの急峻な山稜が派生している。私達が登ろうとしている三稜を除き、他は未だに積雪期の記録を見ない。価値ある、これら三つの積雪期未登ルートが登られるのはいつのことか。

三稜もP一直下までは難なく進める。ここでアンザイレンし、いざ出陣の思いでスベリ台のルンゼに飛び込む。「登ってこい」「いくぞ」と声をかけ合い、リズミカルに登りつづける。八ッ峯には黒部別山の様な繁茂した潅木帯はない。ダケカンバが立ち木として散在しているのみで、私達の行く手に続いているのは美しい雪稜である。P三の登りは昨春よりずいぶん雪が多くて安定している。P三のナイフの刃の様な頂稜を越える。陽が眩しい。登山三昧の境地だ。P四への雪壁を登る。P四は私が「横の山旅」を思い浮かべた所だ。今日も鹿島槍の美しい双耳峯が望める。P四の平坦な頂稜を辿り、P三とともに三稜の難関であるP五の急峻な雪稜に取り付く。三の沢側は雪が腐りアイゼンに雪の団子がくっ付く。四の沢側はふかふかの雪で、足場を一歩一歩踏み固めるといった嫌な登高でP五を乗っこす。もう私達二人のリズムはぴったり合って来た。P五を越えると三稜もⅠ峰直下まで緩傾斜になる。コンティニュアスで雪稜を進み、P六に雪洞を掘る。

三月十二日（雪のち晴れ）。目を覚まし用足しに雪洞を出ると雪が舞っていた。しかし七時すぎ薄日が差し始めたので出発する。Ⅰ峰の下までコンティニュアスで進み、三稜が四稜に合致する所の急な雪壁に取り付く。ふわふわの雪壁でスタンスを決めるに苦労する。その雪壁を登り、ナイフリッジを恐る恐る

「横の山旅」—積雪期飛騨山脈の横断—　第12図-(b)



- - - - 76年3月「大タテガビンより八ッ峯」※

・・・・・・ 77年3月「鹿島槍より剣」

（※この記録は日本山岳会学生部編
「年報6号」に発表した。）

渡り終えると、そこがⅠ峰であった。いつも来てこのⅠ峰からの展望は素晴らしい。八ッ峯主稜が、剣の本峰が、手に取る様だ。「大和は国のまほろば……」という古事記の言いまわしを借りれば、「八ッ峯は飛騨山脈のまほろば」だ。この八ッ峯の主稜は、一九三二年四月、今井友之助、池野信一両氏により積雪期の初トレースが成されている。以後四十年も経っているが、価値ある登攀ルートであることはちっとも変っていない。Ⅰ峰からはまず雪と岩のまじった不安定な稜を下降する。Ⅰ・Ⅱ峰間の瘤を長次郎谷側に約五メートルの懸垂下降をまじえトラバースし、Ⅰ・Ⅱのコルへ。Ⅱ峰も長次郎谷側の雪壁をトラバース。昨春トレースしているせいかスムーズに愉快な登攀が続く。ルートの状態は昨春よりもずっと良い。Ⅲ峰へはⅡ・Ⅲのコルより三の窓谷側に張り出した雪庇に気を付け雪稜を忠実に辿る。Ⅲ峰の頂で煙草を吹かし一息入れる。天気は回復し紺碧の空となる。Ⅲ・Ⅳのコルへは懸垂下降で降りる。ザイルで結ばれた私達は一心同体だ。ボブ・ディランの唄うミスター・タンブリーマンのリズムに合わせ、リズミカルにⅣ峰へと登る。ここから再び懸垂下降でⅣ・Ⅴのコルに降り立ったところで夕刻の五時、そろそろ行動を打ち切ろう。コルの三の窓谷側に雪洞を掘る。

三月十三日（晴れ）。梯子谷乗越をたってから天候に恵まれ、今日も晴天の一日となる。山良し仲間良し天気も良しで、嬉々として雪稜を辿り、Ⅴ峰へ登る。Ⅴ・Ⅵ峰間は急峻に切れ落ちキレットとなっている。長次郎谷に急角度に落ちるルンゼを八十メートルほど下り、雪壁をトラバースしてⅤ・Ⅵのコルに出る。昨春は雪の降る中をⅠ・Ⅱのコルからここまでしか来れなかった。

Ⅴ・Ⅵのコルから八ッ峯主稜も上半に入る。Ⅵ峰の登りは下半とは逆に長次郎谷側に張り出す雪庇を気づかい急な雪壁、ナイフリッジを登高していく。頭からⅥ・Ⅶのコルへは懸垂下降、細長い頂稜を辿りⅦ峰に到り、再び懸垂下降でⅦ・Ⅷのコルに。そして約五十メートルの胸のつかえる様な急な雪壁を登った後、細い細い雪稜を進み、Ⅷ峰へ。次は八ッ峯の頭だ。Ⅷ峰からいったん少し下降し、五メートルほどの雪壁を登り、ハイ松が二、三本はえている岩稜を渡り終え、八ッ峯の最後の峯にゴールインする。いっときの楽しい憩を終え、岩稜を池の谷乗越へ下れば、あとは通い慣れた雪の稜線を一路本峰へ駆けて行くばかりだ。そこから三十分あまりで私達は剣の本峰に立った。見ず知らずだった山崎とパーティを組み、お互い己れの一挙一動に責任を持つよう心がけてきたが、こうして鹿島槍を、黒部別山を、八ッ峯を面白く登り得たことが無性に嬉しい。二人のトレースはすぐにでも消える。しかし、鹿島槍から剣へ、二人が共有した豊かな時間は消えはしない。山崎が握手を求めてきたが、天邪鬼の私は照れくさくて遠慮する。去り難い本峰

を離れ、早月尾根を一路馬場島へと駆け下って行く。馬場島山荘では酒井ご夫妻に温かく迎えられた。

第二部　縦の山旅

（一九七七年十二月―一九七八年一月）

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず……

とは、近世の風狂詩人・芭蕉の「おくのほそ道」の冒頭であるが、芭蕉が詩の世界を旅し続けたように、私は山を旅し続ける。そして旅し続けていることに芭蕉との強い連帯感を見出す。

芭蕉の旅はけっして物見遊山ではない。艱難辛苦を自ら求め、一歩一歩研鑽を重ね、己れの詩を錬磨する陶冶の場であった。私の山登りもそうでありたい、そう想い、この数年間無我夢中に「縦と横の山旅」を五里霧中模索し続けて来た。

もともと私には、「積雪期の飛騨山脈を縦横に駆け廻りたい」強いあこがれがあった。七七年春の鹿島槍ヶ岳より剣岳に到る積雪期飛騨山脈の横断を実現した後、「おくのほそ道」に励まされ、一九七七年冬、親しらずより槍ヶ岳に到る積雪期飛騨山脈の縦走を試みることにしたのである。そして、縦走をするのなら、是非とも飛騨山脈と「おくのほそ道」との唯一つの接点であるこの親しらずを縦走の出発点にしようと考えた。

それにしても、親を思うひまもなく山に遊び呆ける私にとって、この親しらずという地の名は、何と因縁めいていることであろうか。

私と共に縦走を目指すのは、故郷奈良の一条高校山岳部で同じ釜の飯を食った明治大学山岳部の松田研一、七六年ドゥナギリで苦楽を共にした専修大学山岳部の増田多喜男の両君であった。

私達の計画は、七七年十二月十五日親しらずを発し、白馬岳北方稜線、後立山連峰を辿り、槍ヶ岳を経、七八年一月十四日までに西穂高岳に到着せんとするものだった。七七年十月水晶小舎、十一月白馬山荘に、それぞれ十五日分の食糧および燃料等を荷上げし、私達のプライベートな山行を物理的に可能なものとした。東京の連絡所は、無理を言い明治大学山岳部O・Bの長谷川さんに引き受けていただき、万全を期し、上野発の夜行列車で旅立った。

親しらずより白馬岳

十二月十五日（晴れ）。朝早く親しらず駅に着く。冬とは思えぬ暖かさにとまどいを覚える。朝食をとり夜明けを待つ。夜明けとともに海岸に走り、海抜零メートルを踏みしめる。駅より国道八号線を右手に日本海を見やりながら風波へと進む。ここより飛騨山脈の山中へと足を踏み入れる。風波川沿いに雪の散在する道を辿って行く。うっそうとした杉の林の中だ。飛騨山脈中日本海に最も近い入道山と尻高山との鞍部・二本松峠に達する。ここからは、ただひたすらに西穂を目指し飛騨山脈の稜線を辿って行く訳だ。峠には鄙びたお地蔵様が安置されている。このあたりでは、まだ飛騨山脈は人と対峙するものではなく、山麓の人達の生活の一領域なのだ。風波より朝日岳までの稜線には、青海町のさわがに山岳会により栂海新道が拓かれている。雪の少ない今冬は、私達もこの新道の恩恵を授かる。重荷と暖冬に汗だくになりつつ、尻高山、坂田峠を越えて行く。白鳥山標高約九〇〇メートルの、ようやく冬用テントが張れる所まで、初日は順調に歩を進める。

十二月十六日（雨）。冬の山とはとても思えぬ暖かな一夜を明かす。テントを畳み、白鳥山への雪がぬかるみ歩きにくい道を行く。白鳥山に着く頃、くせ者の雨が降り出す。ショボショボと雨の降る中を一同トボトボと犬ヶ岳へ続く稜線を辿って行く。菊石山あたりより雨足が強くなったので、樹林帯へ逃げ込みテントを張る。

十二月十七日（雨のち雪）。早朝、用を足しに出ると星空だ。これはしめた。六時半に出発するが、小一時間もたたぬうちに憎たらしい雨が降り出す。何のことはない、低気圧の前面のほんの一時的な晴れ間にすぎなかった。雨足は昨日よりもずっと強い。全身ズブ濡れ、靴の中はチャポンチャポンと音を立てている。起伏の激しい犬ヶ岳までの稜線にはゲンナリとさせられる。煙草を吸う気さえ起らない。犬ヶ岳直下より雨は雪と変わり、風も勢いを増してくる。手足がかじかみ凍傷が気遣われる。十五分ばかり急登に喘ぎ、犬ヶ岳の肩に飛び出る。そこには小舎があるではないか。栂海山荘だ。九死に一生を得る思いで小舎に飛び込む。犬ヶ岳あたりは、今までの稜線から一転し白銀の世界となる。こうでないと冬の山はおもしろくない。

十二月十八日（吹雪）。五時すぎに目をさまし、外の様子をうかがうと吹雪。残念、しばらく様子を見よう。九時すぎ突如日が差し、外に出ると、明星山、日本海から辿り来し山稜が望めるではないか。大慌てで小舎の中をかたづけ出発する。皆嬉嬉としている。犬ヶ岳よりしばらく馬の背状の尾根が続く。春は越後側に大きく雪庇が張り出しそうだ。犬ヶ岳を越える頃、またしても日は隠れ吹雪となる。さわがに山からは、二重山稜ぎみの広い尾根が坦々と続く。腰までも埋まるラッセルを続け

る。さわがに山と黒岩山との中間点あたりで、急に視界が悪くなり、やむなくテントを張る。テントさえ張れば後は楽しい時間だ。ラジオから流れる歌謡曲を口ずさみ、へぼ将棋に興じる。

十二月十九日（吹雪）。今日もまた吹雪。その上、視界もあまり効かない。しかし、少しでも前へ進もう。ラッセルは腰まで没する。坦々とした尾根は実に単調だ。一歩進めば一歩西穂が近づく、と己れを励まし深雪と闘う。美しい樹氷の花咲く黒岩山を越え、大雪原となった黒岩平に入ると、何も目標にするものもなく、ルートファインディングは難儀だ。

十二月二十日（地吹雪のち吹雪）。五時、炊事用の雪取りに外へ出ると、何と星空ではないか。勇躍七時出発。しかし、黒岩平を横切り終えるものの三十分後には地吹雪となり、三時間も長梅山へ続く広い樹林の尾根をラッセルし続けていると、元の木阿弥、吹雪となる。長梅山直下二〇〇メートルくらいのあやめ平であろう所より吹雪はにわかに厳しさを加え、視界も殆ど効かなくなり傾斜さえ判然としない。こうなると雪はまさに白魔だ。幸い視力二・〇の増田が標識を見つけ窮地を脱する。だが、腰まで没する登高は相変らず苦しい。喘ぎ喘ぎようやくのことで長梅山の細長い頂の一端に出るが、吹雪はいよいよ猛り狂い前も向けない。これではテントは張れまい。黒岩山方向に五十メートルほど下った梅の林の中にテントを張る。

十二月二十一日（吹雪）。例によって例の如く吹雪の朝を迎える。それでも、十時頃若干視界が効き始めたので、敢えて出発する。頂上に辿り着くと再び視界が悪化し、どうにも手の施しようもない。もと来た道を帰ろうとするが、リングワンデリングを犯してしまう。こうなればどうにでもなれと居直り、頂上に設営する。

十二月二十二日（吹雪）。夜来の降雪は二メートルあまりもあったろうか。お陰で午前一時は松田、四時は増田、六時は私とテントの除雪に大童だ。除雪すれども、たちどころに雪中に没する感がある。どうもテント場は吹き留りだったようだ。夜明けとともにテントを移す。執念深く天候回復の隙をうかがい続ける。しかし終日風雪収まらず、くやしいが、入山以来初の停滞とする。

十二月二十三日（快晴）。やったあ、快晴だ。まるで宝くじに当ったかの様に小踊りし、苦闘を強いられた長梅の頂を後にする。樹氷の花咲く梅の林を、戯れくぐり抜ける。春を思わせる日が眩しい。クラストした斜面を登り切ると、朝日の頂だった。頂からの展望は雄大そのものだ。思えば、親しらずの海浜に立って以来の晴天だ。辿り来し北海の荒磯からの長き稜線、剣の北方稜線、そして私達の当面の目標である白馬の白き峰がすぐそこに望まれる。この調子、この好天ならば、今日のうちに白馬に達せられるであろうと、適当な見当を付ける。が、朝

日の下りでこの見当は脆くも覆されてしまう。とにかく雪が深いのだ。胸までも潜り、まるで泳ぐかの様にして跪き下る。赤男山を汗だくになりひたすらに深雪を漕いで越えると、そこにカモシカが「可笑しな奴らがやって来たぞ」と、怪訝そうな顔して私達を見詰めている。雪倉岳に腹をすかし這い登る頃、日は能登の半島に沈まんとしている。夏道を黒部からの冷い風に煽られ煽られ駆け下り、雪倉避難小舎へと入る。

十二月二十四日（吹雪）。晴天は残念ながら一日限りであった。再び吹雪の朝を迎える。こんなことなら、満天の星空の昨日白馬まで行けば良かったと悔まれるが、今となっては後の祭りだ。午後一時すぎ天候回復の兆しが見え始めたので出発してみる。が、鉢ヶ岳まで行くと、頂上で視界が僅かに五メートル位しか効かなくなり、行く手が皆目判断できない。これでは進めない。敢え無く小舎へ取って返す。

十二月二十八日（吹雪のち晴れ）。小舎の外ではゴーゴーと吹雪が猛り狂っている。遥かなる西穂を目指す私達にとって一日の停滞でも時間が惜しくてならない。もう二日も停滞を余儀なくされているが、昨夜の天気図からすると、今日は何とか天候も好転するはずなのだが、目を覚まし外に出て見れば、またまた吹雪。それでも、風の勢いの弱まった七時頃、出発の支度を整え、三人寄り添って好転をじっと待つ。風の鎮まった九時すぎ、いざ出発と腰をあげたところ、ドアのノブが凍って動かない。大慌てでコンロを取り出しノドを温める。九時半、ようやくのことでドアが開き、外へ抜け出る。晴天だ。小舎はこの四日間の猛吹雪で海老の尻尾が一面に付着し、氷の家と化している。容赦なき猛吹雪から私達を守ってくれた小舎への感謝の気持で胸が一杯になる。元気よく白馬へと出発。二十四日引き返した鉢ヶ岳の通過は、視界さえ効けば何の問題もない。三国境にて入山以来初めて登山者に出会う。農大山岳部の連中だ。そして、黒部からの猛烈な吹き上げに煽られ白馬の頂に辿り着く。親しらず出発以来実に十四日もの時間を費してしまった。さっそく白馬山荘に逗入り、昨秋増田と私とで荷上げした食糧、燃料を回収し整理に取り掛かる。まだ昼すぎだが、久し振りに食糧、燃料をふんだんに使い、ささやかなごちそうをしよう。

白馬岳より水晶小舎

十二月二十九日（晴れのち雪）。珍しく好天が二日も続く。さあ不帰の嶮を越え唐松岳へと気ははやる。杓子岳、鑓ヶ岳と冬の稜線を漫歩し天狗の頭へ。このあたりから眺める剣の八ッ峯、黒部の別山は絶景だ。遥か彼方には槍の穂先も望まれる。あの峯にたてるのはいつのことか。天狗の大下りは一気に駆け下るが、ただ気に掛かるのは先行者のトレースがあること。他人のトレースを辿るのは嫌なものだ。不帰の嶮は念の為にザイ

ルを使うが、取り立てて問題となるような箇所はない。Ⅱ峰通過の頃より雪がちらつき始める。唐松の頂を踏み、夕闇迫る頃唐松冬期小舎に入る。

十二月三十日（吹雪のち地吹雪のち晴れ）。吹雪の中を出発。大黒岳の通過は思いのほか悪くザイルを使う。黒部からの猛烈な吹き上げに抗しながら五竜小舎へ。唐松同様にこのあたりも人間臭い所だ。遠見尾根には、悪天をつき登り来る人達の列がえんえんと続いている。小舎で一時間ばかり天候の回復を待っていると、日が差し始めてきたので、五竜岳の登りに取り掛かる。雪は不安定だ。堅雪の上に乾燥雪が積っている。五竜の下りより八峰のキレットが始まる。下り口からG五の頭まで要所要所にザイルを使い、気をつけて下る。鹿島槍の大きな双つの峰は近くに見えながら一向に近くならない。キレット小舎まで行こうと思うが、G五の頭と小舎の中間点あたりで日が暮れ、雪の斜面を削りテント場を作る。

十二月三十一日（雲）。雲で体中をビショ濡れにしながら湿雪の積った状態の悪い峡を進み、キレット小舎に駆け込む。五竜方面に戻る明電舎山岳部の方より、心温まるココアを頂戴する。まだ九時すぎだが、この雲ではさすがに小舎を出る気は起きない。せめて大晦日はこの小舎で快適に過ごしたい。コンロを点け皆でせっせと濡れ物を乾かし、一九七七年最後の夜を明かす。

一月一日（吹雪）。元旦は吹雪の中で迎える。でも少しでも進もう。あと私達に残された日数は二週間となった。吹雪の日でも動けるなら少しでも進まなければ、西穂はとても覚束ない。キレット底まではザイルを使い一歩一歩慎重に進む。底からは堅雪にアイゼンを軋ませ、鹿島槍の北峰を目指し揚々と登って行く。北峰の頂に立つといつも想うのは、村田愿、小西宗明両氏によって果された一九三六年一月の鹿島槍北壁厳冬期初登攀と、登攀後の風雪のビバークのことである。登攀の価値もさることながら、あの当時の粗末な装備で、よくぞビバークし生還し得たものだと、彼らの強力な生命力に驚嘆せずにはおれない。そして、この鹿島槍は私の「縦の山旅」と「横の山旅」との接点であることを想った。想えば、昨春の「横の山旅」――鹿島槍より剣――でも吹雪の中であった。夏、秋を経て再び新たな仲間とともに「縦の山旅」の旅中にこの鹿島槍にたてたことが嬉しい。南峰からは、登山者も多く舗装された様な雪道を冷池へと駆け下る。冷池はテントの村だ。降雪の続く中爺ヶ岳をトラバースし、種池に到着し荷を降ろす。予定が大幅に遅れている私達にとって元旦を鹿島槍の乗越しに過ごせたのは、せめてもの慰みだった。

一月二日（雪）。風は収まるが相変らず降雪は続いている。天候がただの雪ならば良しとして行動を開始せねばなるまい。岩小屋沢岳の登りはいつ来ても長い。その上今日はブレイカブ

ルなクラストに悩まされる。新越乗越、鳴沢岳を通り抜け赤沢岳へ。この頃より雪が一時止み日が差す。スバリ、針の木あたりは、クラストした堅雪の稜線をアイゼンを小気味よく軋ませて進む。針の木の頂からは、雪の中に蓮華岳から烏帽子岳に到る大きく弯曲した稜線が見え隠れしている。起伏の激しいこの稜線には苦闘を強いられそうだ。疲れた足を引きずり今宵の泊り場の峠へと静かに下る。

一月三日（晴れのち吹雪）。蓮華の登りは束の間の晴れ間を捉え気持よくクラストした斜面を駆け登る。夏の蓮華岳あたりは、蓮華ではなく駒草が砂礫の中に身を潜め可憐な花を咲かせている所だ。白き蓮華浄土か地獄か知らぬが、私達は今一面に雪という花に覆われた高嶺で苦闘を続けている。蓮華の長い下りを終える頃より雪が舞い始める。そして、北葛岳に立つ頃吹雪との闘いが再び始まる。ここから七倉岳へと続く稜線は、樹林に迷彩されているが、高瀬側は荒々しく崩壊し、起伏も激しい。急峻な尾根の登り下りに注意を払い、要所にザイルを使い心して歩を進めて行く。七倉岳を越え舟窪冬期小舎に入る。

一月四日（吹雪）。吹雪をつき、烏帽子を目指し出発。舟窪岳の通過には予想外の時間を費してしまう。細い雪稜、腰までも没する急傾斜のラッセルに手こずり、頂上到着は昼すぎとなる。ここから不動岳へも難渋を極める。低きが故の樹林帯の中の深いラッセルに加え、高瀬側の崩壊のせいでルートファインディングが難かしい。舟窪の下りで熊かカモシカか判然とせぬ獣を前方三〇〇メートルあたりに見かけ、度胆を抜かれる。不動岳に着くや否や吹雪はいよいよ猛り狂い、ほうほうの態で南沢岳方向の樹林帯に逃げ込む様にして下りテントを張る。

一月五日（吹雪）。またまたと表現する以外にないが、今日も吹雪の朝を迎える。昨夜の冷え込みは厳しく、濡れたシュラフの中でまんじりともせずじっと朝を待っていた。南沢岳への登りは腰、所によっては胸までも埋る深いラッセルを続ける。雪粒が容赦なく顔面に打ち付けて来る中を、それこそ無我夢中になって南沢岳を越える。烏帽子は高瀬側をトラーバースし、小舎に飛び込む。北葛、舟窪、不動、南沢岳と飛騨山脈の中で忘れられた山々に針の木での予想以上に苦闘を強いられた。小舎の中に吊された温度計はマイナス二十度を指している。昨夜の寒さに合点が行く。

烏帽子まで来ると西穂はがぜん近くに感じる。しかし、私達に残された日数はあと九日。この悪天を思うと、決して余裕のある行程ではない。

一月六日（吹雪）。午前九時吹雪の勢力の弱まるのを見計らい、水晶の小舎へ向け出発。三ッ岳を過ぎるあたりから猛烈な風が東沢より吹き上げて来る。途中、野口五郎小舎に憩う。そして、再び激しく風雪の吹き晒す稜線を辿って行く。今日の難所である東沢乗越からの急峻な山稜を無事通過、水晶小舎に入

る。小舎には松田が昨秋十月に明治大学山岳部の吉田、北村両君の手を借り、食糧、燃料等を荷上げしてある。

水晶小舎より槍ヶ岳

一月七日（吹雪）。とにかくものすごい風が吹きまくっている。増田と松田でザイルを結び赤岳の下り口まで様子を見に行くが、風に煽られほうほうの態で戻って来る。視界は僅かに五メートル、これでは前へ進めまい。ここに来ての停滞は実に痛い。せめて三俣小舎までは進みたかった。私達に残された日数はあと七日、はたして西穂まで行けるか。それより私達の下山路は、飛騨山脈の真っただ中、この水晶小舎にあっては槍を越える以外にはない。どうしても槍までは行かねばならない。

一月八日（吹雪）。気味の悪い朝焼けだ。案の定、七時出発の頃には野口五郎が雪に隠れ、岩苔乗越あたりで吹雪となってしまう。ワリモ、鷲羽岳あたりはカチンカチンにクラストしている。雪の中に白い雲の平が見え隠れしている。三俣小舎の前で小休止。この三俣、黒部五郎の黒部源流で鬼窪善一郎から山で生活することを教わってから七年の歳月がたった。あの頃の想い出が脳裏を掠めて行く。

三俣蓮華の頂に立つや、吹雪は激しさを増し、視界は全くゼロ。冬の縦走で視界が効かぬくらい恐ろしいことはない。幸いなことに増田が二年前の冬、吹雪の日に三俣・双六間をトレースしているので、増田のリードに頼り双六岳目指し磁石片手に南へと進む。吹雪に抗し歩き続けること二時間あまり、ようやく私達のいっときの安息地双六小舎を眼前にし安堵する。

一月九日（吹雪）。低気圧の通過に伴ない猛吹雪となる。停滞。私達に残された時間はあと五日。西穂に達せられるだろうか。

一月十日（吹雪）。案の定吹雪だが勢いが弱いので、いざ槍へと出発する。樅沢岳までは何とか行けたが、その先が行けない。視界が悪い為雪稜がどう続いているのか皆目分らない。吹雪も勢力を増して来る。引き返そう。これで西穂へ達することは八割方望めまい。縦走を果すことよりも、十四日までにいかにして下山するかだ。

一月十一日（快晴）。嬉しいことに長梅山以来の快晴の朝を迎える。今日の内に北穂に行ければ、西穂への可能性も生まれてくる。昨日どうしても越えられなかった樅沢の下りも視界さえあれば何てことはない。西鎌尾根は適度にクラストして歩き易い。穴毛谷も滝谷も槍・穂高の稜線も真っ白で状態はかなり悪そうだ。千丈乗越の手前で九時の天気図を取ると、低気圧が移動高のすぐうしろに続いている。西穂は無理だろうか。

千丈乗越からカチンカチンにクラストした槍の肩への急斜面を登って行く。肩に着いて槍の穂先を見上げ、はっと驚く。穂先全体が厚いベルグラに覆われているではないか。こんな槍の

姿を見るのは初めてだ。肩の小舎には誰も居ない。それはそうだ、今日は一月十一日だもの。正月登山の賑わいを示すかの様にゴミが山と積もり、うら佗しい。なにはともあれ槍の穂先に登ろう。頂上まで厚いベルグラの上に乾燥した雪がふあっと積った登路を四ピッチの隔時登攀で登る。午後一時、海抜三一八〇メートル槍ヶ岳に立つ。この状態では今日のうちに北穂というのは無理だろう。例え今日のうちに辿り着けたとしても、九時の天気図からして十四日までに西穂に達し下山することはできそうにない。潔く断念しよう。遥か彼方には白馬の白き峰が望まれる。そして、想いを断った西穂は手の届かんばかりの位置にある。槍・穂高の稜線は何としても通りたかった。

二十八日間の時間をかけても槍にしか辿り着けなかった。その故は、予想以上の悪天であろう。が、私達の力と術も今一つ足らなかったのではなかろうか。この点を謙虚に反省したい。残り少ないフィルムに槍登頂の記念を収め、慎重に肩へと下る。槍沢を、目的を遂げられなかった無念さを払拭するかの様に駆け下って行く。今宵は槍沢の冬期小舎に宿ろう。

一月十二日（吹雪）。吹雪の朝を迎え、昨日の槍沢下山を良しと納得し、梓川沿いに下山の途に着く。途中、徳沢園に憩い、夕刻六時夜の帳のおりた沢渡に到着。こうして二十九日の長きにわたった「縦の山旅」が終った。

〈補記〉

積雪期飛騨山脈の全山規模的縦走の記録としては次の二つがある。

(1)宇奈月より西穂高岳へ

一九七一年三月一日より四月四日の三五日を費し、日本大学山岳部（リーダー＝半谷伸俊、山本芳雄、中塚功康、安川英利の四名）が、縦走している。

(2)犬ヶ岳より槍ヶ岳へ

一九七三年一月七日より四月四日の実に八十八日間の日数を費し、川崎山岳会（リーダー＝佐藤和弘、他一名）が、小滝より入山し南岳に達し、悪天に穂高縦走を諦め、横尾尾根より下山している。

〈記録概要〉

(1)横の山旅―鹿島槍から剣岳への横断

隊の構成　竹中　昇（二三歳）早稲田大学山岳部、山崎祐和（二一歳）秀峰登高会

行動概要　一九七七年

三月一日　曇り　安曇野・築場より入山。大谷原を経て、荒沢出合・昭和電工取り入れ小舎

二日　晴れのち雪　天狗尾根約二二〇〇メートル地点

三日　吹雪　天狗の鼻（二三四〇メートル）
四日　吹雪　荒沢の頭、鹿島槍北壁登攀は諦める
五日　吹雪　鹿島槍ヶ岳（二八九〇メートル）を経て、冷池小舎
六日　地吹雪　爺ヶ岳（二六七〇メートル）、岩小屋沢岳（二六三〇メートル）、鳴沢岳（二六四一メートル）を経、赤沢岳西北尾根を下降し末端部
七日　雪のち晴れ　黒部別山南尾根に取り付き、P七
八日　晴れ　南尾根大キレットを越え、P一
九日　吹雪　黒部別山南峰（二三〇〇メートル）を経て、梯子谷乗越
十日　快晴　デポ回収できず、赤沢岳西北尾根の末端部まで残置の食糧・燃料の逆ボッカ
十一日　快晴　八ッ峯Ⅰ峰三稜に取り付き、P六
十二日　雪のち晴れ　三稜を登り八ッ峯Ⅰ峰（二六五〇メートル）を経てⅣ・Vのコル
十三日　晴れ　主稜を辿り八ッ峯の頭に至る。剣岳（二九九七メートル）に達し、早月尾根を下降し、馬場島山荘
十四日　晴れ　伊折へ下山

行動日数　十四日（快晴日数二日、晴れ日数三日、曇り日数一日、晴れのち雪日数一日、雪のち晴れ日数二日、吹雪日数四日、地吹雪日数一日、停滞日数なし）

(2)縦の山旅―親知らずより槍ヶ岳への縦走

隊の構成　リーダー＝竹中　昇（二四歳）早稲田大学山岳部、増田多喜男（二四歳）専修大学山岳部、松田研一（二三歳）明治大学山岳部

行動の概要　一九七七年～一九七八年
十二月十四日　晴れ　二十時五十分上野発急行〝越前〟にて離京
十五日　晴れ　親不知・風波より入山。白鳥山（一二九八メートル）約九〇〇メートル地点
十六日　雨　白鳥山を経て、菊石山（一二一〇メートル）
十七日　雨のち雲　犬ヶ岳（一五九三メートル）
・栂海山荘
十八日　吹雪　さわがに山（一六一二メートル）
・黒岩山（一六二四メートル）中間点

十九日　吹雪　黒岩山
二十日　吹雪　長栂山（二二六七メートル）直下
二十一日　吹雪　長栂山
二十二日　吹雪　停滞
二十三日　快晴　朝日岳（二四一九メートル）、雪倉岳（二六一一メートル）を経て、雪倉岳避難小舎
二十四日　吹雪　鉢ヶ岳（二五六三メートル）まで行くも、視界五メートルのため、小舎に引き返す
二十五日　吹雪　停滞
二十六日　吹雪　停滞
二十七日　吹雪　停滞
二十八日　晴れ　鉢ヶ岳を経て、白馬岳（二九三三メートル）・白馬山荘
二十九日　晴のち雪　杓子岳（二八一二メートル）、鑓ヶ岳（二九〇三メートル）、不帰の峰を経て、唐松岳（二六九六メートル）・唐松小舎
三十日　吹雪　大黒岳（二三八〇メートル）、白岳（二五三一メートル）、五竜岳（二八一四メートル）を経て、G五の頭・キレット小舎中間点
三十一日　霙　キレット小舎
一月一日　吹雪　八ッ峯のキレット、鹿島槍ヶ岳（二八九〇メートル）、爺ヶ岳（二六七〇メートル）を経て、種池
二日　雪　岩小屋沢岳（二六三〇メートル）、鳴沢岳（二六四一メートル）、赤沢岳（二六七八メートル）、針の木岳（二八二一メートル）を経て、針の木峠
三日　晴れのち吹雪　蓮華岳（二七九九メートル）、北葛岳（二五五一メートル）を経て、舟窪小舎
四日　吹雪　舟窪岳、不動岳（二五九五メートル）を経て、不動岳・南沢岳（二六二五メートル）中間点
五日　吹雪　南沢岳、烏帽子岳（二六二七メートル）を経て、烏帽子小舎
六日　吹雪　三ッ岳（二八四五メートル）、野口五郎岳（二九二四メートル）、真砂岳を経て、赤岳・水晶小舎
七日　吹雪　停滞
八日　吹雪　鷲羽岳（二九二四メートル）、三

俣蓮華岳（二八四一メートル）、双六岳（二八六〇メートル）を経て、双六小舎

九日　吹雪　樅沢岳（二七五四メートル）まで行くも、視界三～十メートルのため小舎に引き返す

十日　吹雪　停滞

十一日　快晴　樅沢岳、西鎌尾根を経て、槍ヶ岳（三一八〇メートル）に登頂するも、西穂への縦走を諦め、槍沢を下降し、槍沢小舎

十二日　雪　一ノ俣、横尾、徳沢、上高地を経て、沢渡へ下山

行動日数　二十三日（快晴日数二日、晴れ日数一日、曇日数二日、吹雪日数十七日、雨日数一日、晴れのち雪または吹雪日数二日、吹雪のち晴日数二日、雪日数二日、停滞日数六日、総日数二十九日）

白神山地

坂本知忠
佐藤勉

序

二〇万分の一地図、弘前を広げてみると、秋田・青森県境白神山地の渓谷は意外に奥深いので目を引く。赤石川や追良瀬川はその典型で、人の住む最奥の集落から水源までの距離が長く、林道や山道が中流以上にはない。そのことから察して、県境主脈一帯は広い地域にわたって、無住居地帯になっていると想像される。

何故、一〇〇〇メートル前後の低い山地が人の往来をはばんでいるのであろうか。地勢が険しいのか、気候が悪いのか、その他に何が原因なのであろう。

地図をみていると追良瀬川、赤石川、滝川、暗門川、大川、粕毛川、藤琴川、大川目川などが、多くの支流を集めて、千古不伐の原生林の中を、訪れる人もなく滔々と流れているさまが目に浮んだ。

白神山地について、あらゆる過去の山岳雑誌や文献を調べてみても、その山や谷を登ったという記録は、どこにもなかった。調べれば調べるほど、白神山地は未開な山地でわからないことが多かった。白神山地は多くの登山家から、標高が低いために見過されてきたのに違いない。

五万分の一地図には随所に滝付号がみられる。その滝は、どの位の高さでどんな形をしているのであろうか。赤石川や追良瀬川、粕毛川等の各支流の呼称はなんと呼ぶのであろうか。白神山地はマタギと称する狩猟集団が熊狩をする山と聞く。山とマタギは往古よりどのような係わりをもって来たのだろうか。私は白神山地を縦横に歩いて、白神山地のもつ多くの不明な部分を解明してみたいと思った。

白神山地の概説

白神山地は、津軽平野の南西部から秋田・青森県境にかけて広がる一大山地の称である。その主脈は奥羽本線の通る矢立峠から始まり、ほぼ真西へ伸び、能代市の北方で方向を真北に変え、千畳敷で有名な大瀬崎で日本海に没している。この間、主脈の延長距離は七〇キロにも及び、その両側一〇～二〇キロにわたり無住居地帯が存在する。この山脈を横断する交通路は少なく、近年完成した広西林道、廃道同然の釣瓶落峠越えの歩道、三ッ森付近を越す道路等の外に二、三を数えるに過ぎない。この事実を見ればわかるように、この山地は標高が千を僅かに超す程度であるにもかかわらず、意外な深さと広がりを持つ険しい山岳地帯なのである。

この山地の地図を開くとき先ず感じることは、地名が本州の他の山地とはだいぶ異なることである。駒ヶ岳とか田代岳というありふれた地名もあるにはあるが、むしろ少ない。二ッ森、甚吉森、長慶森、尻高森のような「森」という、東北、四国に多い古い地名、大久保岱、熊ノ岱、李岱、大渕岱のような「岱」という、東北北部に特有の地名、長場内（岳）、笹内（川）、藍内（川）、中小比内のような「内」という、北海道と東北に多く分布する地名等がこの山地ではむしろ多い地名である。このような「森」「岱」「内」という地名は、先住土着民族あるいはアイヌ民族が遺したものであるとも言われているが、何やらすでに亡びた民族の怨念が篭っているような気がする。

それにしても、意味が全く不明で耳馴れない発音の地名が多いのはどういう訳なのであろう。

乱岩（ランガン）の（森）、追良瀬（オイラセ）（川）、摩須賀（マスガ）（岳）、真瀬（マセ）（岳）、津梅（ツバイ）（川）、雁森（ガンモリ）（岳）、尾太（オップ）（岳）、暗門（アンモン）（滝）、粕毛（カスケ）（川）。

何んと異様で呪術的迫力に富んだ地名なのであろう。私は、この不可思議な地名の魅力にすっかりとりつかれてしまった。

この山地は、出羽丘陵、朝日、飯豊、越後の各山地と同様、その生い立ちの起源を遠古の古生代まで遡ることができる。古生代二畳紀に堆積した地層は、この山地で最も古い基盤岩を成している。この二畳紀層は、主として粘板岩より成り、硬砂岩やチャートを挟在させており、この山地の東部、冷水岳以東の県境の北側に広く分布している。中生代に入り、この基盤岩を貫入して花崗岩類が形成され、赤石川中流及び白神岳付近に分布している。

だが、この山地の最も広い面積を占め、この山地の地層を特徴づけているのは緑色凝灰岩の類である。この緑色凝灰岩の類は、新世代中新世初期の活発な海底活山の結果堆積したものである。緑色凝灰岩類の堆積に続いて、更に沈降した海底では硬質頁岩や黒色頁岩が堆積した。このような頁岩類は、この山地の周辺部に分布している。

その後、中新世末より鮮新世にかけて、この山地の隆起運動は盛んになり、今日の白神山地の姿がほぼ形成されるに至った。最後に第四紀に入り、田代岳や駒ヶ岳の火山が噴出し、最後の仕上げを行った。田代岳や駒ヶ岳の付近には、この噴火による安山岩類が分布している。

この山地は、本州北弯山系の内帯に属する褶曲山地で、越後、飯豊、朝日の各山地、出羽丘陵に続く山地である。この山地の主たる稜線や河川の走行方向はほぼ南北であり、この山地の西部ではその傾向が特に顕著である。ただ、粕毛川のみは山脈が形成される以前からの先行流路であったのであろうか、水源から海とは全く逆の東の方向へ流れており、この付近では主脈稜線もほぼ東西に走っている。また、田代岳、駒ヶ岳という火山が存在するため、この山地の東部は、その西部のような規則的な地形的特徴を備えていない。

この山地の山岳の標高は、最高峰の向白神岳でも一二四三mであり、主要山岳の平均標高は千m内外であり、その大部分はほぼ同じ高度の標高を持っている。したがって、南北に伸びる稜線は容易に標高を下げることなく、延々と続くのが一つの特徴であると言える。

このように標高が低い割には稜線は痩せて細く、山相は壮年期の様相を示している。そのため山崩れや地滑りが多く、山腹の緑がざっくり削いだように落ち、地肌が露出している所は至る所で見ることができ、それがまたこの山地の特徴的な景観となっている。ただ、この山地の東部では、地質とも関係しているのであろうが、このような傾向は必ずしも顕著ではない。

渓谷は、一般にV字谷を成し、本流に落ちる小枝流は懸谷となり、滝となって合流していることが多い。しかし流程が二キロ以上もある支流は、このような懸谷とならず平凡に合流することが多い。本流は、廊下や狭所と河原を交互に繰り返し、源流近くなるまでは滝がないのが普通である。本流の河原は美しくまた安息を与える景観であり、林道やダムによって破壊されずに残っているのは誠に貴重と言うべきである。

気象について言えば、我々がこの山地で行った山行は十数回程度であり、しかも四月から十月までの期間に限られているので、あまり多くを語ることができないが、我々の体験から敢えてこの山地の気象の特徴を述べれば、次の三点に要約されるものと思われる。

第一の点は、気象はその年によってかなりの差があるということである。即ち、年間の総降雨量はほとんど差がないのであるが、初夏の集中豪雨や台風によって集中的にもたらされる年と、夏の長雨となって徐々にもたらされる年があるように、降雨の態様や時期がその年によってだいぶ異なるのである。

第二の点は、晴天日が少なくまた天気は変化しやすいということである。我々の全山行日数のうち、日出から日没まで晴天

<Plate 15-(d)>

白神山地：東方 P 1122 の北肩より望む白神岳。

（撮影・佐藤　勉）

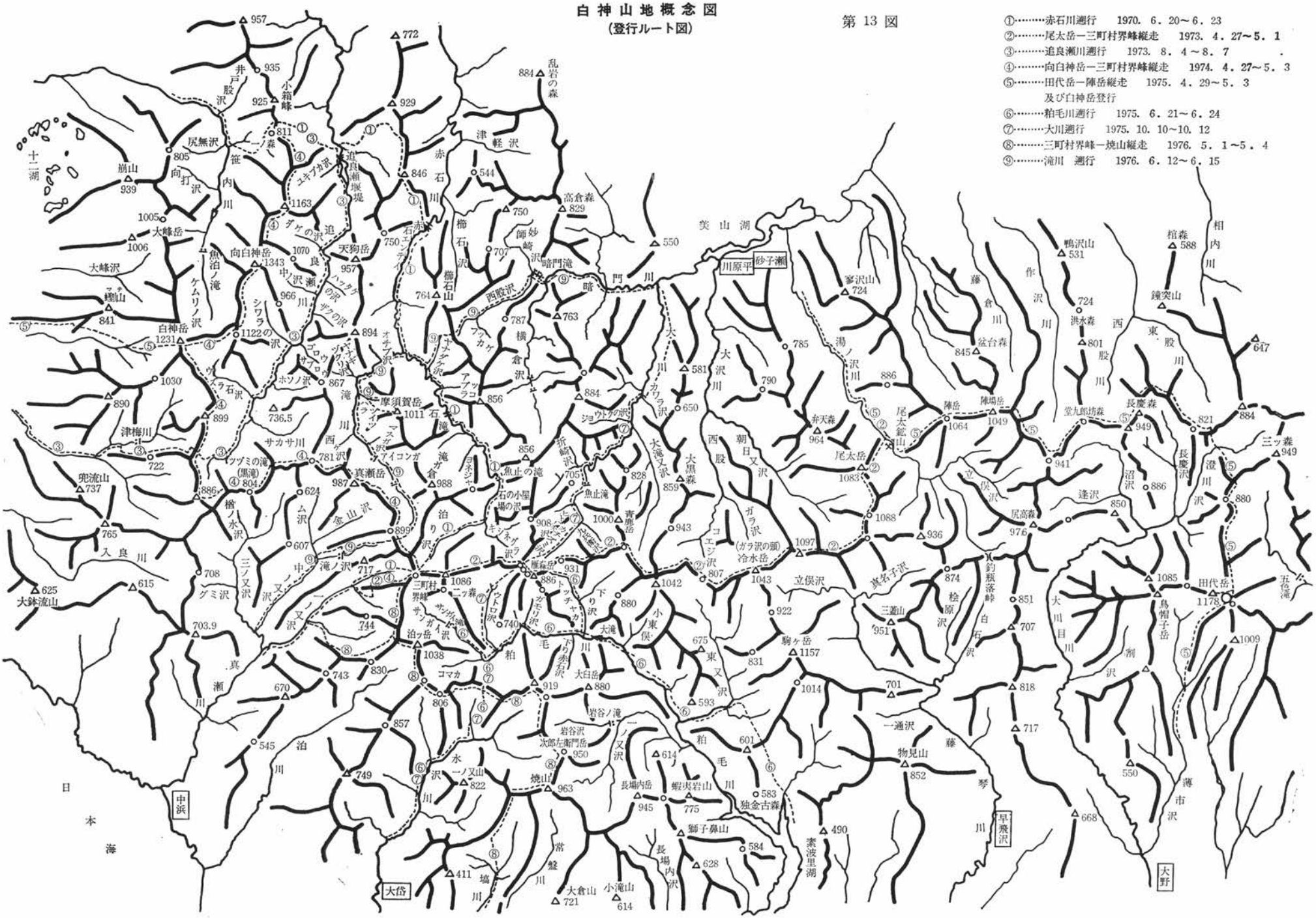
<Plate 15-(e)>
白神山地：粕毛川源流サンガイ滝。

（撮影・佐藤　勉）

白神山地概念図
(登行ルート図)

第 13 図

①……赤石川遡行　1970. 6. 20～6. 23
②……尾太岳ー三町村界峰縦走　1973. 4. 27～5. 1
③……追良瀬川遡行　1973. 8. 4～8. 7
④……向白神岳ー三町村界峰縦走　1974. 4. 27～5. 3
⑤……田代岳ー陣岳縦走　1975. 4. 29～5. 3
及び白神岳登行
⑥……粕毛川遡行　1975. 6. 21～6. 24
⑦……大川遡行　1975. 10. 10～10. 12
⑧……三町村界峰ー焼山縦走　1976. 5. 1～5. 4
⑨……滝川　遡行　1976. 6. 12～6. 15



だった日は一割に過ぎない。これは、この地が高気圧の中心から遠く、常に低気圧の通路に位置するためではないかと考えられる。

第三の点は、比較的天気の良い日でも、天気は驚く程気紛れに変ることである。「暴時々晴一時雨」というのが、この山地で経験する比較的天気の良い日の天候のパターンである。白神山地は海岸近くに位置しているためなのだろうか、すぐ山に雲や霧がかかり時には雨が降ったりする。五能線沿線から白神山地を眺めると、海岸の上空が晴れているにもかかわらず、山頂には雲がかかっていることが実に多い。この時、海岸から数キロ離れた山中では俄雨が降っていることがある。我々が山で降雨に遭った時でも、下山してみると海岸地方では全く雨は降らなかったということは、今までに何度か経験したところである。

四月末から五月初めにかけては残雪期登山の絶好の季節であり、標高五～六百m以上は残雪があり、頂上付近では約二mの残雪がある。この時期は低気圧の往来が激しく、晴雨暴雪の変化が実に激しい。ただ、オホーツク気団の圏内に入る時は晴天が続く。しかし、この気団が東方洋上に停滞する場合は、低気圧が停滞して連日の濃霧と雨となる。この「やませ」と呼ぶ東風が吹く時は、猟師も決して山歩きをしないと言う。一m先も見えない濃霧の中では方角を見失ない、全身ずぶ濡れとなり、たちまち死んでしまうのだと言う。

六月頃はむしろオホーツク海気団の勢力圏に入ることが多く、晴天が比較的多い。その上、午前三時頃から午後八時頃まで明るいので、日長一日ゆっくり遡行を楽しむことができる。ただ、沢の源頭部は雪渓が残っており、中流以下では水量が多く徒渉に手間がかかる。

七月から八月にかけての盛夏の頃は、むしろ気候は良くない。本州中部で梅雨をもたらした前線がこの頃北上し、この地に停滞する。連日のように降雨が続くことが多く、時には集中豪雨に襲われる。たまたま晴れた時でも水蒸気が発生しやすく、蒸し暑くうっとうしい。その上、昼は虻、朝夕はブヨ、夜は蚊というように三段構えの昆虫責めで気が休まる時がない。

九月は台風のシーズンであるが、台風がこの地を通過することは比較的少ない。しかし一たび来れば影響は大きく、土砂崩れを惹起させ、集中豪雨と並んで大きな災害をもたらす。

十月末頃から積雪が始まり、翌年の三月までがこの山地の冬の季節となる。季節風（西風）が卓越し、連日の風雪となる。

この山地の林相を特徴づけるのはブナの原生林である。山腹や稜線は圧倒的にブナ林が多く、時には岳樺の混淆する場合もある。稜線上の大部分は千古不斧の原生林であり、ブナや岳樺は枝を広げ高く太く生長している。その下生えは笹が一面に生えていることが多い。

針葉樹は山麓の人工造林地では多く見られるものの、標高の高い部分で針葉樹林が発達している所は非常に少ない。ただ、尾太岳の頂上付近には地元でオンコの木と称する針葉樹が生えている。

偃松は小岳と青鹿岳にあるに過ぎない。標高千m程度でこのような高山植物が生えているのは、いかにこの地が北方に位置するとはいえ一驚に値する。

石楠花は、雁森岳、陣岳、二ッ森等細い稜線や急斜面の所に見られる。

沢筋も圧倒的に広葉樹が多いが、稜線上とは異なり樹木の種類は、はるかに豊富である。ブナ、カエデ、サワグルミ、トチ、ホウ等の樹木は最も多く見かけるものである。

植物の宝庫とも言うべき湿原は、侵食が激しく地形が痩せているためか、非常に少ない。この山地では例外的な存在の火山である田代岳の頂上や、駒ヶ岳の山腹に湿原が存在するのも興味あることである。

〔佐藤　勉〕

赤石川を溯る

静かで美しい未開の渓谷を歩くことに無常の喜びを感ずる私達にとって、白神山地の渓谷群は実に魅力的であった。

懸案となっていた白神山地の渓谷踏査の中で、最も奥深い赤石川を手はじめに踏査することになった。出発に先だって、現地の八森町、岩崎村、鯵ヶ沢町、深浦町に入谷経路、山小屋の有無、案内人等について不明な点を問い合わせた所、ほとんど詳細がわからなかった。鯵ヶ沢町からの回答は「赤石堰堤から上流は渓谷深く、歩行は困難のようである。赤石川を溯行し、真瀬岳や二ッ森、雁森岳へ登った人は聞いたこともなく、無理ではないかと思われる」とあった。

かくて予備知識が何一つないまま、一抹の不安を抱いて佐藤勉、武田一男両氏と共に赤石川溯行に向った。

一九七〇年六月二十日、五能線陸奥岩崎駅より降雨の中をタクシーにて、弘西林道一ッ森峠へ向う。弘西林道は白神山地を横断して将来、西津軽と弘前を結ぶ自動車道となるが現在、赤石川と追良瀬川間が未完となっている。一ッ森峠から細々たる山道を追良瀬川に下り、追良瀬堰堤を見て、堰堤の下流五〇〇メートルの地点に懸る半崩壊の吊橋を渡る。橋を渡った対岸は栃木沢の出合で、右岸の地図に示された山道をたどる。雨はしとしと降り続いている。栃木沢出合から約二時間、赤石川と追良瀬川を分ける稜線に達した。八四六メートルからの赤石川への下りは急なジグザグ道であった。赤石堰堤に達すると雨でふくれあがった赤石川は、ダムの落口いっぱいに広がって流れていた。赤石堰堤は高さ約三〇メートル、赤石川をここでせき止めて水を導水路をとおして追良瀬川に送っている。日没近く雨は小降りになった。

六月二十一日、昨夜はたいした雨もなかった。湖の水位は明らかに低下し、もはやダムの落口からは一滴の水も落ちていなかった。ダムの落口から下方を見下すと釣師がいる。情報を得るべく梯子を伝って下りてゆく。釣の一行は四人で西目屋村砂子瀬の人達であった。一番年配の工藤成元はこの辺の山にくわしいと自負し、自分はマタギであると話した。九時二十分、湖の上流に出るべくダムの落口を対岸に渡って、湖水の右岸を高巻いてゆく、山裾が湖水に向って急激に落ち込んでいるので、湖水のへりはへつれない。急斜面を木の枝に摑まりながらからんでゆく。二時間の苦闘のすえ赤石川の広い河原に降り立った。そこは上流から運ばれてきた小石や砂が砂洲を作り、湖の浅瀬で立ち枯れた樹木が白い残骸となって林立していた。

幸い今日は良い天気だ。水を蹴って平瀬を溯行する楽しさは格別である。一〇〇メートルに近い幅の川床は、流が分れて川中島を形成している。その川中島にはサワグルミの大木が疎林を作っていた。朗々たる中流美がさらに展開してゆく。赤石川の中流地帯（湖から上流）は概ね広濶なる谷で、快活にして明朗なる雰囲気を醸しだす。マタギが岩渕と称するゴルジュや地層が明確に現われた褐色の大岩壁を見て、私達は午後四時、赤石川と支流の滝川が二対一の水量比をもって合する二俣に達した。滝川出合より三十分程本流を溯行すると、ヤナダケ沢が前方左手より合流する出合に五メートル程の滝を懸けている。さらに十分程溯ると摩須賀岳方面からの支流（名称不明）を右手より合する。しばらく進んで、気持のよさそうな小さな段丘をみつけて夜営地とした。武田さん持参のウイスキーで水割を作り盛大な焚火を燃やした。

六月二十二日、八時二十五分夜営地を発つ。流れは水量をなかなか減じない。平瀬となって続くゆるやかな流を徒渉をくりかえす。山腹の両岸はゆるやかでトチ、ブナ、ホオ、サワグルミがやわらかな緑の葉を広げる原生林だ。左手にアブラッコ沢を分岐する。水量は少ない。九時十分、本流と十対一の水量比でノロの沢が右手より合流する。ノロの沢を過ぎると渓流は流をせばめ小さな滑滝をかけた奔流となる。マタギが石滝と呼ぶ所だ。滝ヶ倉沢（水源P九八八m）、コメの沢（同P八五六m）ヨネジヤの沢（同P八八九m）、下ヤツの木沢、上ヤツの木沢（水源横倉沢との分水嶺）を送迎する。地図に示された魚止の滝は落差二十メートル、右岸を高まいて越える。石の小屋場の沢はケヤキの大木が一本あって、そばに歴史あるマタギの小屋場があった。ケヤキの直径は約四メートル、山中には他に一本もケヤキはない、不思議なことだと工藤さんは話してくれた。

二ッ森西方の三町村界の峰より流下する泊りの沢出合着、午後二時十五分。私達は日本海岸秋田の八森へ越えるべく泊りの沢をルートに選ぶ。泊りの沢は下流より狭い廊下が続くV字谷である。大崩壊やスラブ壁が右岸に著しく発達し、スラブ壁の

下は雪渓となっていた。所々いやな滝が懸り、そのたびごとに高巻きを強いられた。上流の三俣は三本の沢が全て滝となって合しており、水量の多い中ノ沢をルートとした。四時二十五分、滝を登った中ノ沢と左沢の分岐尾根裾に比較的良い夜営地をみいだして野宿した。夜は非常に冷えこんだ。

六月二十三日、明け方の冷え込みに反して夜が明けると、今にも降り出しそうな空模様であった。泊りの沢の最後のつめは合する流を右へ右へと選択し三町村界の峰に達した。下降路に選んだ一ノ又沢コマカ沢は険悪な沢であった。七十メートル、二十メートル、さらに三十メートル、十五メートルと大瀑布が私達の下降をはばんだが、木の枝にすがってかろうじて下降することが出来た。緊張の連続から解放されると、前方に砂防堰堤が現われた。砂防堰堤からはじまった山道をたどってゆくと、真瀬川上流一ノ又沢の林道に出た。後から来たトラックに便乗させてもらい八森へ向う。真瀬岳や越えて来た山々が青い山脈となって遠ざかると、前方に夕陽を受けてキラキラと輝く日本海が広がった。

〔坂本知忠〕

白神山地主脈縦走（その一）尾太岳―二ツ森

赤石川の遡行によってこの山地の魅力にとり憑かれた我々は、次にこの山地の稜線を歩いてみたいと思った。ただ稜線の大部分は道がないので、残雪を利用して縦走することにした。一九七三年四月、坂本知忠、鴨田行雄、宮沢嘉宏の諸君と私の四名で、この計画を実行に移した。

四月二十七日　晴

岩木川最奥の村、砂子瀬そして河原平。ここは狩猟を業とするマタギの村である。三方を山に囲まれ、狩猟の基地としては絶好の位置を占めている。乾田の泥には多くの小石が混っていた。それは耕作の歴史が浅いことを示すとともに、狩猟がはるか遠古から連綿と行われていたことを物語っていた。

夜は工藤光治氏の家に泊めてもらった。山の話や勇壮な熊狩の話は夜更けまで続いた。

四月二十八日　晴

熊狩に行く工藤氏の一行四人に尾太岳頂上まで同行させて戴く。尾太岳の頂上付近は傾斜が急で、雪渓の上に一歩一歩慎重にステップを切って登らなければならなかった。頂上には三角点の外に、明和四年の刻文のある祠と安永四年の刻文のある石灯篭があった。鉱山の繁栄を願い、災害の無いことを祈ったのであろうか。頂上からは白神山地の山並が一望に見渡すことができた。それにしても目的とする白神岳はるか彼方に見え、前途遼遠なることを感じる。

ここで工藤氏一行と別れ、いよいよ縦走にかかる。薮を避けて尾太岳の西斜面をまわって鞍部まで下る。そこからは尾根は広く緩るやかになり、ブナ林の中の快適な稜線漫歩となる。県

境に出ると藤里駒ヶ岳がよく見える。その北麓には湿原なのであろうか、広々とした雪の小平地があった。この日は、P一〇九七mで幕営する。

四月二十九日、三十日　暴風雨

天幕が飛ばないように押える作業と天幕内の水を排除する作業のため、就眠することができない。三十日、雨が雪に変る。

五月一日　霧雨後晴

八時頃になりようやく日が射し、霧氷が朝日にキラキラと輝く。ズブ濡れの衣類や寝袋を干して十一時に出発する。地図の冷水岳までは駒ヶ岳を眺めながらの快適な稜線歩きである。だが、小岳との間には越場と称する鞍部があり、そこは標高が低い上に小尾根が幾つも分岐し、藪が露出して実に多くの時間を消費させられた。越場付近で秋田側から来たらしい二人の足跡を見た。いずれも長靴で、おそらく狩猟に来たものであろう。

藪漕ぎですっかり難儀してしまい、小岳に着いたのは四時頃になってしまった。小岳はその名に反する秀麗な大円頂峰で、東面には巨大な雪庇を張出している。その頂には偃松や石楠花が生えていて、高山的な雰囲気を持っており、標高一〇四二mとはとても思えない。

青鹿岳との分岐まで進み、そこで幕営する。

五月二日　曇時々雨夕刻より雨

高層雲がびっしり張りつめて今にも降りそうである。縦走中遂に雨となったので天幕を張る。その後雨が上ったので再び出発する。

雁森岳は遠方から見た感じでは、藪が露出した小さな突起に過ぎなかったが、近づいて見ると、露岩や赤崩を混え、その名の如く怪奇で凄まじい姿をしている。雁森岳の本峰は東西に二峰に分れて連なり、その間は僅か一メートル幅の狭い尾根で、秋田側はボロボロに風化した岩壁となって切れ込んでいる。岩壁の下のトッチャカ（沢）には物凄い量の雪のブロックが落ち込んでいる。雁森岳は更に第二～四峰を連ねているが、二・三峰間の平地に幕営する。

五月三日　雨後雪　終日濃霧

二メートル先が全く見えない程の物凄い濃霧で、小用をしている間に衣類が濡れる程である。

五月四日　朝濃霧　晴一時曇　午後晴

七時、濃霧の中から突然光が射し込む。急いで天幕を撤収して出発する。雁森の第三峰と第四峰の間に少し藪が出ていたが、その後は快適に雪の上を行く。寒冷前線が通過したらしく気温は低下し、風は痛いくらいに冷たい。二ッ森は南北の双耳峰を峙ててなかなか格好が良い。その北峰に着くと、そこは更に東西両峰に分れていた。西峰には昨年夏に早大ワンゲルが縦走した時の焚火の跡があった。二ッ森から稜線の北側の雪の上を辿れば、たちまち三町村界峰（八森町、鰺ヶ沢町、藤里村）

に達する。赤石川源流は一面の雪で、あの遡行が僅か一ヶ月半後の六月に行われたことが、信じられないくらいである。

行手には白神連峰が真白な屏風となって我々を招くが、最早や食料も燃料も尽きてしまっている。今日は支尾根を下り、一ノ又の林道を通って下山する外はないのだ。谷底は薄緑色であり、そこはむせかえるような若葉が萌えているのであろう。そして海辺には新鮮な海の幸を鱈腹食べさせてくれる宿が待っている。冬から春へ、山から海へ、欠乏と寒気はいよいよ終るのだ。ふり返れば尾太岳の円錐形峰ははるか遠くに見え、縦走が終る日の満足感を与えた。

〔佐藤　勉〕

追良瀬川を遡る

一九七〇年六月、赤石川を遡行してみて、青森、秋田県境の白神山地が想像以上に奥深く、原始境の趣きを濃く残した山地であったので、隣接する渓谷群をさらに踏査してみたいと思った。赤石川を踏査したと同じメンバー佐藤勉、武田一男氏と共に**一九七三年八月四日**、陸奥岩崎駅より追良瀬川に向った。

追良瀬堰堤までは赤石川へ入谷したときたどった道でなつかしかった。堰堤の湖は一九七二年七月の集中豪雨による土砂が堆積し、以前見たときよりだいぶ小さく浅くなっていた。堰堤より上流へは左岸のダム構築物の上を越え、ユキブカ沢出合に降り立った。本流は穏やかな流れであるが水量は多い。平瀬を徒渉をくりかえしつつ遡ってゆく。渓流の両岸山腹は険しく、所々草つきのスラブ状の高い絶壁が聳立している。ユキブカの沢を分岐してより最初の支流ダケの沢が右手より流入してくる。マタギ達は、ダケの沢は入ってはならない沢として伝承している。ダケの沢に入ってもどって来た人はいないと言う。追良瀬川は隣接する赤石川とは成生がいくぶん違うらしい。河原に堆積する石は水成岩、火成岩、変成岩と多彩で、いろいろな紋様と色彩の石をみながらの渓流歩きは楽しい。追良瀬川のいたる所で目についた石は、黒っぽい岩質の中に白い短冊紋様をちりばめた輝緑玢岩、化石かと見違えるような球顆流紋岩である。ハツタケの沢を越えた右岸段丘上を、この日の夜営地とした。

八月五日、夜の明ける頃から断続的な激しい雨が降る。天候を見定めているうち、出発が十一時になってしまった。右手に向白神岳から流下してくる中ノ沢を見送り、八九四からのザクの沢を合する。この間渓流は両岸が迫って函を作り渕を連続させるが、歩きにくい所はない。ゴロウサブロウ沢の出合は三十メートルの滝が懸っており、本流は出合で大きく曲折する。本流の川床は赤褐色の一枚岩であった。ゴロウサブロウ沢を左手に分岐し、明るく開けた渓流を歩いてゆくと、五分程で右手より大きな沢が流入する。五万分の一地図ではダケの沢、最近刊行された二万五千分の一地図では三の沢になっているが、この

沢こそ西目屋村のマタギ達が言うシワラの沢である。マタギの伝承では「神の住む神聖な沢で、ダケの沢と同じく人が入ってはならない沢である」「デロ（出合）に石積みがあっていつも石を積むような音がする」「非常に冷たい沢でマリモのような苔が生えている」「シワラの沢の前を通るときはかぶりものをとる、もし冠りものをとらないと、ふいに冠りものをとられてしまう」「少し入った所に祭壇石があって、そこはジョウトク様が空を飛んで降りた所で足跡がある」。工藤さんから聞いて期待したが、出合にはセギド石も石積みもなかった。

これよりおおむね本流は、山腹が聳立して急峻であるが、流れは浅く穏やかである。やがて白神岳から流下するウズラ石沢出合となる。出合付近は礫岩の河床が美しい洗濯板状の滑床を作る。ウズラ石とは追良瀬川のいたる所でみられる輝緑玢岩だと工藤さんから教えてもらった。ウズラ石沢から三十分程でサカサ川とツヅミの沢の出合う二俣となる。ここで追良瀬川のさしもの水量も目に見えて半減する。ツヅミ沢の下流は穏やかな流れで非常に歩きよい。今夜の泊り場を探しつつ歩くうち、流れの右岸に段丘をひかえた砂洲をみつけ泊り場にした。

八月六日、夜が明けたが雨は降ったり止んだりで昨日と同じような天気である。昼頃になって回復して来たので、さらに前進することにした。ツヅミ沢の二俣に荷物をデポし、ツヅミの滝の懸る左俣沢に入る。ツヅミの滝は二段に懸かり落差八十メートルの大瀑布であった。私達は対岸の山腹によじ登って、その全貌をみた。白布をたらしたような大滑滝である。滝ははるか彼方の上空から音もなくサラサラと静かに流れ落ち、いつまでも見あきないみごとな滝であった。二俣にもどって右俣に入る。ツヅミの滝と同じ瀑布線上に二十五メートルの滝があった。この滝は右岸を高まいて越えた。ツヅミの滝が懸る瀑布線の延長は滝川のアイコンガであり、赤石川の魚止、大川の魚止、大沢の魚止と一直線に結んでいる。私達は津梅川に越えて大間越に出るべく右手の小さな沢に入った。一時間程で津梅川と追良瀬川を分ける稜線に出た。稜線は濃い霧に閉ざされていたからビバークすることになった。ポリタンの中にはウイスキーがあるものの水のないつらさ。しとしと降る雨がうらめしい。

八月七日、ゆきつもどりつ、大木に登ったりして観察したところ、私達は津梅川の二俣に至る尾根を分岐する峰の、手前に居ることが分かった。津梅川は悪い谷と聞いているから尾根どおしに下山する。丸一日ほとんど水なしに過し、延々五時間もの藪こぎの末、体中の水気がぬけきった。津梅川の二俣に出たときはもう体がふらふらであった。林道に出るとアブの大群が執こくまつわりついて、日本海岸に出るまでついて来た。

〔坂本知忠〕

白神山地主脈縦走（その二）

向白神岳――白神岳――真瀬岳

一九七四年四月二十七日、佐藤勉、鴨田行雄、宮沢嘉宏氏らと共に、昨年はたせなかった向白神岳～真瀬岳の間を縦走すべく出発する。陸奥岩崎よりタクシーで弘西林道に入る。雪融けで林道は荒れており、入れる所までという約束であったが、新湯跡と奥の湯跡のほぼ中間で降ろされてしまった。井戸俣沢出合の橋を渡り、弘西林道一ッ森峠の登りにかかる。残雪が急に深くなりブルドーザーが途中まで除雪してあったが、標高五〇〇メートル付近からは除雪してなく、融雪による土砂崩れと残雪が混り合って林道を埋めていた。もうすぐ峠という所で、この日は幕営した。

四月二十八日、一ッ森峠は一～二メートルの残雪に埋れていた。峠より笹内川と追良瀬川をわける尾根にとりつく。P一一六三mから向白神につづく尾根はやせており、東側に張り出した雪庇を踏みぬかないように注意してたどった。ダケノ沢上部は急峻で断崖のように切れ込んでいた。向白神岳はほぼ同高度の四峰が南北に連なっている。三角点は一ばん北峰にある。快調に残雪を踏んで向白神の四つの小ピークを越える。この頃より晴れていた空に天候悪化の兆か高層雲が広がった。P一一二二mの北にある広い台地上を幕営地とした。風当りが強そうな所なのでテントのまわりに風避けの雪を積んだ。

四月二十九日、終日風雨激しく停滞となる。冬天幕は降雨に弱い。ビニールの特製内張のおかげで雨もりはしのいだが、底からの浸水はタオルで拭きとるより方法がない。午後十時頃西風強く、テントが飛ばされはしないかと心配であった。

四月三十日、夜が明けたが外は一寸先も見えない濃霧である。今日も停滞となるかと半ばあきらめていたら、急に青空が広がりはじめた。西よりの微風が非常に寒い。出発する頃には雲ひとつない快晴になった。白神岳の登りではカモシカが目の前から飛びだした。白神山頂からは足下の日本海がよく見渡せた。三角点の北にある石の祠を参拝する。白神山地をことごとく見渡せる大展望を楽しんだ後、津梅川の最低鞍部へグリセードで急降下する。白神岳の山頂付近は潅木と笹の藪であるが、標高一〇〇〇メートル付近を境としてブナの樹林帯となる。空は真青に晴れ渡り、日ざしは強い。グズグズになった雪を踏んで広い稜線上のブナ林をゆく。津梅川の最低鞍部を越え小さな突起を雪を踏んで次々に越える。ツゾミ沢右俣上部稜線上から音をたてて落ちるツゾミの滝が遠望された。

このあたりの稜線は昨夏、追良瀬川から大間越へぬけるとき視界がきかなくて苦労した所だ。今は遠くまでよく見透せる。深浦、岩崎、八森の町界となる峰はその北側をからんでショートカットする。八〇四m付近で熊狩りの一行に出合った。八森

町茂浦の日沼徳治氏一行三名であった。彼等の装具をみれば乗馬ズボン、ゴム長靴、スカリを背負い、腰にナタや双眼鏡をさげている。真黒に日焼けして目だけがうるんだように光っていた。ザックを背負ったままの立話し、地図を広げて八森側の沢の呼称を聞きとった。再び天候悪化のきざしがあったので、P七八一mを越え三ノ又沢のボッチの中腹、風当りの強い稜線をさけ樹林の中に幕営した。夕刻から南の風強まり夜半より雨となる。

五月一日、停滞、一日中断続的に雨降る。

五月二日、天候の行方を見定めているうち出発が十一時になってしまった。昨日越えられなかった三ノ又沢のボッチは、山頂の南側をトラバースする。硬くしまった雪を踏んで、たちまち三ノ又沢と中ノ又沢を分岐する尾根の接点に達する。このあたり追良瀬川と真瀬川の最低鞍部で、全踏査行程の最も低い所である。稜線上はゆるやかな台地状で、中ノ又沢流域は源頭の稜線まで伐採されていた。行手に真瀬岳、そして北方に摩須賀岳が端正な姿で美しい。天候は一向によくならない。ぐずぐずに雪がしみ込んだ靴が冷めたくつらい。真瀬岳の一つ手前、西ヶ沢源頭の峰で幕営する。夜になって天気は回復した。満月が出てブナの梢がテントに影を落した。

五月三日、明け方は非常に寒かった。曇っていたが視界が良くきくので出発する。真瀬岳直下の鞍部へはわずか五分で下ってしまった。急斜面を息を切らして登り、真瀬岳の頂上に立った。真瀬岳から下りきった所は広い台地状の鞍部で、金山沢から風が吹き上げていた。滝川のボッチはすでに雪が消え濃密なる藪になっていた。南西の崩壊した崖をさけ三町村界との鞍部に下る。見上げる双峰の二ッ森は残雪で真白だ。今年は昨年に比べてはるかに雪が多い。昨年藪が出ていた三町村界も深々と雪に覆れていた。昨年と同じルートを一ノ又沢に向って下降する。昨年二時間半もかかった所を、雪を踏んで三十五分で林道の末端に飛びだした。川原に降りて谷川の水をたらふく飲めば、山を降りた喜びが胸いっぱいに広がる。林道を下る私達に春風が吹きぬける。二年がかりの白神山地縦走が終った。

〔坂本知忠〕

田代岳―陣岳　縦走

向白神岳―尾太岳は、この白神山地の主稜の核心とも言うべきものであるが、その縦走は昨年と一昨年で終了した。しかし尾太岳以東にも未だ多くの雄峰が存在する。中でも田代岳は古くから信仰の山として、多くの人に登られている山である。この山に登り、伝説的な長慶金山の奥山である長慶森を通り、津軽の陣岳へ抜ける。そんな魅力的な縦走ルートを考えたのである。

一九七五年四月、宮沢嘉宏君と私は、秋田県から青森県へ、

山脈を横断する山旅に出発した。

四月二十九日　曇後雨

早口駅で下車する。バスが来るまで一時間半程時間があるので田代町の役場へ行く。田代岳への登山道は現在でも、大野、大渕岱、五色滝の三方面からあるとのことで、この山は白神山地の山としては全く例外的に登山道が沢山ある山である。

バスの終点の大野には田村商店という万屋があり、この店は裏手で清風亭という旅館も兼業している。田代岳は昔から多くの人に登られているので、このような最奥の村に旅館があるのであろう。

車道は三合目のカッチ東又沢と薄市沢の出合までで、ここからいよいよ本格的な登りとなる。五合目を過ぎた所に無人の雨量測候所があり、この付近から全面的に雪の上を歩くようになる。曇空はいつの間にか霧雨に変り、だんだん大粒になってくる。夏は湿原となる九合目の平は雪原が白々と広がるのみである。田代山頂はそこから僅かであり、頂には三～四坪の社殿があった。風雨もいよいよひどくなったので、今日は泊めさせて戴く。

四月三十日　朝のうち曇後晴

昨夜は風雨が荒れ狂い、騒々しい一夜であった。天候回復と登山安全を祈願して、田代大明神にカワハギの干物を献上したが、それが効いたのであろうか、不思議や薄日が射し青空が見えて来た。

田代岳から西へは、雷岳、烏帽子岳、茶臼岳と魅力的なピークが連なっているが、我々は北へ向う広い尾根を辿る。ブナの巨木が一面に林立する原生林で、まことに気分が良い。しかし尾根が広く平坦なので、ルートを見誤らないように細心の注意を払う。鞍部からは尾根幅も普通になり、P八八〇mを経て更に北方へ、県境への最短コースを辿る。やがて澄川沢上流の平地が一望に見渡せる所へ来る。

平は未だ一面の雪であるが、蛇行する澄川沢の岸辺には常緑の潅木が茂り、流路は緑のベルトになっている。沢まで下りてくると、沢は思った程太くなく、二～四メートルの川幅で深さも四～五〇センチ程である。靴を脱いで徒渉するが、ものすごく冷たい。

この平の岸辺で昼食にする。日はすでに高く、空は青く晴れ、雪の消えた所には水芭蕉が咲いている。四囲の山は未だ冬であるが、この別天地だけは春が訪れている感じである。

平から県境稜線までは思ったより簡単に登ることができた。この付近は標高が低いので藪が露出していることが懸念されたが、それは杞憂に過ぎなかった。県境はさすがに眺望が良い。雪をつけた岩木山が驚く程近くに見える。田代岳から見た時は小さなコブに過ぎなかった長慶森も、ここから眺めるとドームを連ねた双子峰で立派な姿である。

ここから長慶森までは長慶沢の源頭をぐるりと迂回しなければならないが、さすがに県境は雪が多く快適に歩くことができた。長慶沢の源頭付近で、山脈を横断する道型らしいものがあったが、雪のため確認することができなかった。長慶沢は江戸時代に金山があった所であり、今日でも当時使用した石臼や道具が散らばっているというが、この一面に積った雪からは想像することもできない。

この日は堂九郎坊森の手前で幕営する。

五月一日　快晴

堂九郎坊森は幕営地からすぐの平凡な小ピークであった。ここから目屋、相馬、田代の三町村界ピークまでは小さな上下を繰り返す。途中、小さな池があり、羚羊であろうか、池の氷を踏み破った跡があった。三町村界ピークから陣馬岳までは一直線に稜線が伸びているので、遠くに見えた陣場岳もぐんぐん近づく。標高も高くなり尾根幅も広くなり、雪の具合も上々である。陣場岳の頂は広く緩やかで、喬木もないので、日射しは驚く程強くまぶしい。陣場岳から陣岳までは雪のべったり付いた幅広い尾根で、青空の下快適な雪稜漫歩であった。

陣岳は、この縦走のファイナルピークである。正面の尾太岳はますます接近し、三角形に盛り上った頂、鋭い雪の落ちた支稜、雪のべったりついた斜面を格好良く峙てている。尾太岳の美しさにしばし呆然と見とれる。

一昨年、尾太岳へ登った時はあの急斜面をよく登ったものだと話し合う。今日は眺望が良く、波涛のように延々と続く白神山地の山々を一望に見渡すことができる。このような素晴らしい天気の日は前にも後にもなかった。雪山を去るにはもったいないような日であったが、大休止をした後尾太鉱山を目指して山を下った。

〔佐藤　勉〕

粕毛川遡行

赤石川、追良瀬川という北面の二大沢流を遡行した我々は、次に南面の大沢流、粕毛川を次の目標に選んだ。主脈稜線上からみたこの谷は深く大きく切れ込み、大いに遡行欲をかき立てた。一九七四年の春、萱沢の佐々木伊一郎氏を訪れ沢の様子を聞き、その夏、武田一男、坂本知忠、大山昇博の三君と共にこの谷に乗り込んだが、結果は連日の豪雨で一歩も沢へ入ることができなかった。かくて一九七五年六月、坂本知忠、宮沢喜博の両君とともに再度遡行を試みたのである。

六月二十一日　晴、暑し

少し暑いが初夏の爽やかな朝、二ッ井駅から奥地へ向う。藤琴川にはかつての森林軌道の橋脚がズラリと並んでおり、ありし日の壮大な面影を偲ぶことができる。素破里湖の傍を抜け、冷水岳麓へ向う車道と別れ、粕毛川へ向う荒れた歩道へ入る。小屋跡の平地を過ぎ、東又沢の美しい渓流に沿って下る。沢が

廊下を成す所、沢床から四十メートルの高さの所に鉄橋が架してある。鉄橋を渡った対岸には半ば埋れたトンネルがある。そこからは昔の森林軌道の跡を辿るのだが、トンネルが埋っていたり橋が落ちていたりで、容易に前進することができない。かつてヤードがあったと思われる広場を過ぎると、軌道の跡は再生した自然の中に埋れてわからなくなってしまう。

藪がひどくなるので粕毛川の本谷へ下る。V字谷の底を豊富な水が流れており、緑青がふいたような岩がゴロゴロしている。地図の大滝はすでに崩壊して後退し、二条に分れて落下している。滝の上へは容易に出ることができる。そこは広く緩い河原となっており、歩きやすい。下り沢は滑床となって合流しており、我々はその対岸のやや上流に小屋掛けを作る。

六月二十二日　晴、一時雨

今日はトッチャカを登る日である。トッチャカとは下り沢の支流で、雁森岳に源を発する沢のことである。この沢はマタギ達の間では悪沢とされている。

平坦な下り沢は朝日が明るく射し込み、朗らかな気分だ。トッチャカへ入ると早くも斜滝が現れ、しばらく行くと高さ二十メートルもの巨大な雪塊を見る。左手の山腹はそいだように土砂が崩壊しており、その土砂と雪が落ちたものであろう。更に行手には落差三十メートルの滝が懸り、上段十五メートルは捲いて登る。斜滝が二本続き、雪橋も現れる。三メートル、五メートル、五メートルの三段の滝は沢身をそのまま登る。三条に分れて落下する十メートルの滝を越すと、長大な雪渓が現れる。雪渓は切れることなく徐々に傾斜を増して続いている。雪渓の雁森岳側は草付や潅木を混えた岩壁で、羚羊がいとも簡単に横切って行く。我々は雪渓の最上部まで詰めて引き近すことにした。帰路、雪渓の正面に県境のP九一八mが見えたが、雪渓の上に立つその姿は、到底一〇〇〇メートル以下の山とは思えない程立派であった。

六月二十三日　曇、時々雨

泊地をコマカの出合へ移すために午後出発する。大滝からサンガイ滝の間、粕毛川は幅広い河原の中をゆるやかに蛇行しながら流れ、穏やかな美しい風景を作っている。本流の透明な豊かな水、早瀬や瀞、上流の山の黒い影、水辺に佇む喬木、平凡な風景であるが、心の安まる感じがする。本州中部の山では、このような美しい中流が、ダムや林道で破壊されてしまったのは悲しいことである。オッキリ沢（目屋称ナラノキ沢）付近では本流は赤や白の岩盤の上を流れ、単調な中にも変化を添えていた。この日はコマカ出合の対岸に泊る。

六月二十四日　晴後曇夕刻晴

今日はサンガイの滝まで往復して、帰途につくことにする。サンガイ沢（粕毛川本谷上部の称）はゆるい平凡な渓相で、二ッ森へ喰込む上部の急峻さは、とても想像することができな

い。時々残雪が現れるが格別変化のない沢歩きでサンガイ滝に達する。滝は下から七メートル、三メートル、十五メートルの三段となっており、釜を持った堂々たる滝である。サンガイとは三階から来ているのだろうか。美しい滝をしばらく眺めて泊地に戻る。

今日は峰浜村へ下山する日である。そのためには最低鞍部を越えて水沢川の谷へ下らなければならない。コマカ沢へ入ったすぐの所に、右岸から注ぐ支流をその登路に選ぶ。出合付近のゴルジュを抜けると、あとは小滝の二～三ある平凡な沢であった。上部には雪があったが格別のこともなく最低鞍部に着く。鞍部から見た雁森岳は意外な程大きい姿で迫り、粕毛川流域への別れを辛いものにした。

鞍部から二時間程反対側へ下ると、峰浜川上流の銅山跡へ出る。そこから林道を歩いて下る。途中牛が放牧してあったが、時おり逃げ出して津軽まで行くというから驚く。最奥の村大岱まで歩き、車で沢目駅へ向う。

〔佐藤　勉〕

大川（岩木川）遡行

大川は津軽最大の河川、岩木川の上流の称である。岩木川の水源は何処にあるのか、水源とされている泊岳とは二ッ森のことか、それとも雁森岳のことか、過去において多くの議論のあった所である。また、岩木川は氾濫をもって名高い暴れ川である。その洪水が起るメカニズムはどのようになっているのだろうか、その原因は未知の上流域にあるのではないだろうか。このような興味から大川の源流を、いつの日か遡行してみたいと考えていた。

大川遡行の具体的なプランは、粕毛川の小屋掛けの中で坂本君が立案したものである。それは、大川を遡行し雁森岳へ登り、ウトウ沢を下って粕毛川へ出て、鞍部を越えて水沢川の上流へ下る、というものである。この計画は早速実行に移され、一九七五年十月九日、坂本知忠、宮沢嘉宏、井出悟の三君と共に上野を出発した。

十月十日　晴、時々にわか雨

弘前から西目屋村砂子瀬へ、そして弘西林道を大川に架る橋の所まで来る。ここから段丘上の細い道を辿る、あけびがたわわに実っている。カワラ沢を下り大川本流へ出る。さすがに本流はその名に恥じない豊かな水量を流している。ジョウトク沢が左岸から合流する。

ここでルートは二つに分れる。本流の大廊下地帯を突破するか、それともP六九二mの稜線上を行くマタギのトレースを辿るかである。砂子瀬の工藤光治の「今秋ならば渕も浅く通過できるかも知れない」という言葉に従って、思い切って沢通しに行くことにする。

大滝又沢を分け、沢が屈曲すると両岸の山は高くのしかかる

ように迫り、典型的な廊下となる。両岸の枝沢はいずれも垂直の滝となって落下し、壮観である。峡底からふり仰ぐ空は一文字に青く晴れているが、露出計の針は驚く程暗い値を示している。ただ、紅葉は今が盛りで、その華やかな色が圧倒するような両岸の岩壁に、僅かに彩を添えている。行手には何度か絶望的な場面が現れるが、へつりや徒渉によってなんとか切り抜ける。岩質が黒い岩から石英質の白い岩に変ると、壮大な廊下も終りを告げ、平凡な流れとなって折崎沢の出合に着く。今夜はここに泊る。

十月十一日　晴後曇夕刻より雨

空は不気味な程の朝焼が広がり、前途に何か不安を感ずる。平凡な河原をしばらく行くと魚止滝が二十五メートル程の滝を懸けており、滝の少し手前の右岸を登る。なおも小滝を時々懸ける平凡な沢を行くと、行手の山が立って来る。ヒトハネ沢の出合である。本流は門のように立つ二つの岩の間から流れ出ている。その幅は二メートル程で、一跳びで飛び越せそうである。ヒトハネ沢の地名はそれから由来しているのだろうか。折から朝日があたり、門の奥には何か素晴らしい世界があるような期待を抱かせる。

この狭所を抜けしばらく行くと、左岸に土崩を見る。やがてキュウベイ沢が滝をかけて合流するが、滝はほとんど土砂で埋れている。本流ももちろん土砂に埋れ、正面には樹木が剝ぎ取られた赤裸の小尾根が見える。土砂の崩壊は小尾根のみならず、そのはるか上部の山まで続いている。実に大規模な崩壊だ。この小尾根をぐるりと回った時、思わずアッと声を上げてしまった。目前に洋々たる水面が広がっているのだ。崩壊による堰止湖が出来ているのだ。その奥行は二五〇メートルを優に越すものであり、幅も八十メートルはあろう。この源流近い山奥に、これだけ大きい湖水があろうとは夢にも予想できなかった。

堰止湖は右岸の急な草付をトラバースしたが、再び沢へ下りるまで一時間もかかってしまった。最後の有力な支流である小カチズミ沢を分けると、さすがの大川も水量は減少する。やがてスラブ状の三十メートルの滝が現れ、その上にも更に二～三本の滝が続き、上流の滝場となる。そこを抜けると浅いが典型的な廊下が続き、大川最後の有終の美を飾る。

やがて、この山地特有のテロテロしたスラブ状の岩壁が現れ、沢は岩溝となって草付の中へ喰込む。急傾斜の岩溝を慎重に登り、藪へ入るとすぐ稜線で、雁森岳の第三峰と第四峰の鞍部であった。

第四峰の頂に登り現地点を確認して、粕毛川の支流ウトウ沢を下る。源頭は急で樋状、階段状の小滝が連続するが、格別の困難はない。枝沢を合して水量が増える頃から沢は平凡になる。垂れ込めた雲からはとうとう雨が降り始める。沛然たる雨

の中を歩き続け、粕毛川の本流に出てコマカの出合に向う。六月に来た時の小屋掛けの骨組は未だ残っていて、テントフライを掛け雨をしのぐ。

十月十二日　晴、時々にわか雨

午前に濡れた衣類を干して午後出発する。六月に来た時のように鞍部を越して水沢川の上流へ抜ける。最奥の部落大岱の手前でトラックに乗せてもらう。行手の日本海に日が沈むのは壮大な眺めであった。〔佐藤　勉〕

泊り岳―焼山　縦走

白神山地の残雪期縦走もすでに三回を数え、主要稜線の大部分を踏破した。しかし、粕毛川の南側には、泊り岳（P一〇三八m）、次郎左衛門岳、焼山、長場内岳、蝦夷岩山と主稜に劣らない魅力的なピークを連ねた長い稜線が伸びている。そこで今年（一九七六年）は、この縦走を目論んだのである。参加者は私と宮沢嘉宏君の二人となってしまった。

五月一日　雨

八森から一ノ又の林道へ入る。低い曇空は土砂降りの豪雨となり、秋田木材工業の小屋で泊る。

五月二日　曇一時霧雨、夕刻より雨

夜半に雨は上ったが、上空は一面の雲であり、僅かに雲間から光が洩れているに過ぎない。小屋の少々上流で一ノ又本流の林道と別れ、左岸の山へ行く支線に入る。

林道の終点から稜線へ取りつく。時々強い風が吹いて雪が飛び、天候は荒れ気味である。幸いなことに雪は一面に残っており、あまり苦労せずに稜線に出ることができた。そこは二重山稜となった珍らしい所で、その間の窪地は絶好の幕営地となっていた。そこから三町村界峰（八森町、鰺ヶ沢町、藤里村）へ向う。はじめは潅木や笹の薮が出ていたりしたが、しだいに尾根幅は広くなり歩きやすくなる。サンガイ沢の源流は急峻であり、雪がほとんど落ちてしまっている。

三町村界峰に着く頃、霧が晴れた。曇天の下、白神山地は白々と波を打って広がっている。最高点の木の根に座って過ぎし日の想い出に耽ける。ゆっくり休み、落ち着いた心で山を下り始めると、四人の人が登ってくるのに会う。昨年の同じ頃山中で会った八森の猟師達だ。今日は真瀬岳方面へ熊狩に行くとのことである。その身なりは極めて軽装で、機動力を最大限に発揮できるようになっている。その代り山中で泊ることはなく、里から往復一日の行動半径の所で狩をすると言う。

再び我々はもとの稜線を南へ辿り、二重稜線の所で幕営する。折りから濃密な霧は雨に変り始める。

五月三日　朝夕曇日中晴

昨夜は雨が断続的に降ったので、朝になって止みはしたものの出発は見合せていた。午前八時、一瞬天幕に光が射し込む。

突然、風がおこり、雲が切れ、青空が広がる。準備をするのももどかしく急遽出発する。

泊り岳は大きな山容を持っているが、その稜線は狭く薮が露出している。しかし意外にもそこには古い蛇目があり、思ったより容易に頂に達することができた。この古い蛇目は薮漕ぎの目印と言うよりは、むしろ道型の跡を想像させるものがある。もしそれが道であるならば、一体誰れが何の為に作ったのだろうか。里から泊りがけで来なければならない所からその名が由来する泊り岳は、この縦走路の最高点（一〇三八・三メートル）で、さすがに展望がよい。

この山の南側は急な潅木の尾根で、少しの間薮漕ぎを強いられる。鞍部まで下ると尾根も広く緩やかになり、雪も多くなって歩きよい。P九五〇m、P九三二m、P七五八m、と漸時標高を下げながら見事なブナの稜線を漫歩する。P七九五mの所で主稜線が北を向くと、正面に雁森岳が堂々たる姿で現れる。岩と雪をちりばめたその勇姿は、到底標高千メートル未満の山とは思えない程カッコいい。その峻しさ、立派さ、美しさ、思わず足を止めカメラを向ける。

水沢川から粕毛川へ乗越す最低鞍部（六六〇メートル）付近は標高が低いので、薮が露出していることが心配されたが、雪が辛うじて残っていて難なく歩くことができた。乗越からP九一九mまでは稜線上を東進するので、目標の焼山は一向に近ずく感じがしない。P九一九mでは一面に笹が枯れていた。P九〇〇mは平頂峰で、大臼岳へ続く長大な尾根を分岐している。南へ曲る主稜線を辿ると、岩倉沢から上って来る四～五人の足跡を見る。長靴であるところからみて狩人であろう。次郎左衛門岳は広い頂で、窪地もあって絶好の天幕地であるが、天候はすでに下り坂であり、我々は先を急いで焼山との鞍部に幕営する。

五月四日　曇後雨

幸い天気は朝まで持ちこたえた。天幕を急いで撤収して六時に出発する。焼山の頂は眺望が良い。東方の長場内岳は山勢が急なせいか、雪がほとんど付いていない。焼山から東方への縦走はあきらめ、P八五九mまで西進して、P七一七mまで残雪を利用して歩くことにする。P七一七mからは全く雪は消え、乾いた暖かい薮の中を下る。塙川の岸辺に下り、雪解水の満々たる流れに沿うて下る。

時おり現れる湿地には水芭蕉がほの白く静かに咲いていた。

〔佐藤　勉〕

赤石川支流滝川遡行、摩須賀岳に登る

赤石川本流、追良瀬川、粕毛川、大川、と白神山地の大渓谷を踏査してきた私達の次の目標は、赤石の滝川である。私は同行の佐藤勉、井出悟、宮沢嘉宏氏らよりも一日早く西目屋村砂

子瀬に入った。その一日を現地での情報収集と民俗調査にあてた。

一九七六年六月十二日、工藤成元、光治兄弟を道案内として、赤石の二股めざして我々一同六名と三匹の日本犬は砂子瀬を出発した。弘西林道を鬼川辺沢出合の暗門大橋までトラックで入る。これより暗門川沿いの道をたどり、鉄の吊橋を渡って暗門川に下る。暗門川は昨日の雨で増水し、身が切れるような冷たさであった。暗門の滝は三つの滝で構成され、かすかな山道が最上段の滝の上部まで続いていた。滝は中段の滝が一番美しい形をしており、上段の滝は落差八十メートルのものすごい豪瀑である。暗門滝を登り終えた所は、妙師崎沢とフッカケ沢が穏やかに出合う二股で、ホオ、ブナ、サワグルミが亭々と茂っていた。

春蝉の声を聞きながら、おだやかなフッカケ沢を遡行する。途中、小さなゴルジュがあったが難なく越えて、目屋の人達が追良瀬川へマス釣りに行くとき踏んだ古道、モツクリの上げを登り、赤石川支流のヤナダケ沢に越えた。モツクリの上げは数年前まで傘をさしても歩ける程の山道であったとのことだが、今はもう不明になりかけている。峠の頂で風邪ぎみの光治さんと別れた。光治さんの愛犬チビと権太も光治さんと帰った。さすがにマタギの使う日本犬は山に強い。暗門川の冷たい急流をどんどん泳ぎ渡り岩場も平気だった。

成元さんに導かれ、私達は赤石川の本流に立った。赤石川を遡行したことのある佐藤さんと私には、見覚えのあるなつかしい所だった。赤石川は雨後で増水していた。ザイルを張って本流を徒渉し、赤石川本流と滝川が合流する二股まで下った。二股での夜営は成元さん持参の熊の脂身に、途中で採って来たタケノコとアザミを入れて、野趣豊かな熊なべを作った。広い赤石川の河原で盛大な焚火を作った。

六月十三日、出発前に二股にある成元さんの父、マタギのシカリ（親分）であった工藤作太郎ゆかりの岩窟（いわや）を探査した。成元さんは私達と共に滝川中流のハラツイツの沢まで同行してくれることになった。途中、オチブの沢出合で一五〇年程前に実際に起った、十一人のマタギが遭難した現場を教えてくれた。また、ヤナギゾクリ沢の歴史ある小屋場跡も案内してくれた。ハラツイツの沢は秘峰摩須賀岳登山に私達が選んだ沢である。ハラツイツ沢出合で成元さんと愛犬ツーロに別れをつげた私達は、沢をつめて摩須賀岳に登った。ハラツイツ沢は急峻な沢で大きな滝が懸り難儀であった。稜線から山頂にかけては篠竹とブナの茂る密林で、猛烈な藪コギに終始した。マタギは残雪期にだけ山を歩くから、無雪期に摩須賀岳に登ったのは、おそらく私達が初めてであろう。それほど摩須賀岳は登りにくい最奥の山なのであった。ハラツイツ沢出合に下り再び滝川を遡行した。今日の泊り場はマスガ沢出合の小さな段丘に小屋を掛け

た。

六月十四日、今日は滝川を水源まで遡り、秋田県の真瀬川、滝ノ沢へ越える日である。工藤さんから聞いていたアイコンガは実に不思議な滝だった。滝は二段に落ちるもので上段と下段の間に、大きく底しれぬ滝壺がある。巨大な桶に水をいっぱいたたえたような形をしている。滝の高さはそんなに高くないのに、どうしてこんな固い岩をこんなに大きく深くうがつことが出来るのか、いくら考えても理解できなかった。右岸は衝立のように高い岩壁が聳えていたので、左岸を高巻いてアイコンガを越えた。水源まではいくつか滝やゴルジュがあったが難なく越えた。水源近くはところどころに残雪が渓底を埋め、両岸には草付の岩壁が立っている。もうすぐ源頭とおもわれるころ、行手の本流に二十メートル程の滝が懸り私達をはばんだ。滝のずっと下流の左岸から取付いて、滝の上に出たところで本流をはなれて右手の枝沢に入った。十五分程枝沢をつめると広々とした国境稜線上へ出た。

稜線に出たところで雷が鳴りはじめた。雨の降らないうちにと急いで滝ノ沢へ下降する。伐採地へ出た所で藪こぎから開放されたが、とうとう雨が降り出した。小降りになるのを待って出発する。伐採地からの山道がみつからないので沢通しに下ることにする。十メートル程の滝はうまく下降できたが、その後どうにもならない大きな滝にぶつかって身動き出来なくなってしまった。右も左もすっぱり切れた断層崖で下降できない。しかたなく滝の落口の右岸から山腹にとりつき、雨の中、急傾面を木の根や枝にすがっての藪こぎ登攀となってしまった。いいかげんうんざりするころ、営林署の巡回路に出ることが出来て、皆の顔にやっと笑顔がもどった。真瀬川の中ノ又沢に出ると林道が通じており、真新しいトタン葺きの営林署の休息舎があった。日没には早かったが、どうせ今日中には八森迄は無理だからと、この小屋に泊ることにした。夕刻激しい雨があったが、小屋の中、我々は安全地帯にいる安堵感と、心に残るであろうすばらしい山旅を終えた満足感にみたされていた。

〔坂本知忠〕

終りに

九回にわたる白神山地の山行報告をここに終えるが、これらの山行はすべて市川学園山岳部OB会の活動の一環として行われたものである。筆者の坂本、佐藤を始めとして、文中の武田、鴨田、大山、井出、宮沢の諸君もすべてこのOB会の会員である。

このOB会は市川学園卒業生の山岳愛好家による同窓会的山岳会であり、単に登山を行うのみでなく、登山に関連する各種の研究活動や親睦会的活動等、幅広い活動を行っている会でもある。

その研究活動の中で最大の精力を傾注したのは、日本国内の登山記録を地域別に分類整理するという仕事であった。この仕事は昭和三九年に始まり今日もなお継続されている。（その成果の一部は山と渓谷社の雑誌「岩と雪」の第三三号～第五二号に「地域別登行記録抄」として連載発表されている）。白神山地の山行も実はこのような記録の分類整理の仕事の中から生れたものである。白神山地が大きな山域を持つにもかかわらず発表された登山記録が極めて少ないことに最初に気付き、山行計画を立案したのが坂本君であった。

白神山地は、一たび足を踏み入れてみると原始の面影を濃く残す山地であることがわかる。自然破壊の著しい日本の諸山岳地帯の中にあって、それは誠に貴重な掛け替えのない存在であると言える。我々は赤石川を遡行して以来すっかり白神山地の魅力にとりつかれてしまい、遂に九回も山行を重ねることになってしまった。その記録や想い出は詳しく書けば実に膨大な量となり、また遡行図等の地図も十数枚を超えることになる。それは優に一冊の単行本となる位の量である。

本稿をまとめるに当っては、詳細な山行記録を載せることは断念し、各山行記録は思い切って短かくして山行の要約という程度のものにした。また地図も概念図で概括的に表現した。そして、白神山地の登行の詳細な記録や遡行図については、本稿とは別に後日いずれかの機会に、我々の仲間で一冊の本にまとめて出版したいと考えている。

〔佐藤　勉〕

明治末期における黒法師岳、大無間山の紀行

杉本良

まえがき　静岡在住の会員石間信夫氏から、同氏夫人の遠縁にあたる元本会々員杉本良氏（明治四十五年四月入会、会員番号二八五）が保存されていた旧い新聞切抜きのコピーとして、私宛に送られてきたのが、ここに掲げる黒法師、大無間の紀行である。明治四十二年七月の本登山については、関口泰氏との共同執筆による「両黒帽子山及び大無間山」が、つとに『山岳』第五年第二号（明治四十三年七月刊）に収載されているが、本稿は杉本氏一人の執筆にかかわる点と、右『山岳』を現在所持している会員も少ない点を慮り、また南アルプス南部の早期資料としても珍らしいものとの観点から、山岳編集委員会にはかったところ本号に掲載されることとなった。

本稿は明治四十二年八月二十四日から九月二日まで、九回にわたり静岡民友新聞（民政党系で戦前静岡の代表的新聞の一つ）に連載されたもので、『山岳』の原稿より先きに執筆されたものと推測される。

杉本氏は当時会員であったことは明らかで、戦前いつの頃か、会から離れている。一高、東大在学中は日高信六郎氏とも親しかった由、卒業後は朝鮮、台湾において役人生活をおくった。朝鮮では白頭山、金剛山に登り、また台湾では大正十四年十二月末、新高山（玉山）に登頂、大正十五年十一月の台湾山岳会創立に際しては発起人の一人となり、昭和初期には沼井鉄太郎、平沢亀一郎、千々岩助太郎氏らと共に会の指導的位置にあった（『山岳』第第三十四年第二号所収、沼井鉄太郎「台湾登山小史」による）。明治二十年誕生、九十歳の同氏は現在掛川市日坂から三キロ北方の御林という小村に、夫人と共に健康で悠々自適の毎日をおくられている。

（昭和五十三年三月・望月達夫記）

北遠の無人境

杉本良（寄）

赤石山脈

僕等頃日大無間と黒帽子とを跋渉したので、此両山を世に紹

介しようと思ふ。先づ両山の位置を明にする為に赤石山脈について一言する。南日本の外帯は紀州より志摩にてつき、伊勢海を渡って再び遠州にあらはれ、北走して諏訪湖に達する。外帯は五家荘の如く平地と交通の無い所が多いが、赤石山脈は曾に平地と交通の無いのみでなく、深谿大沢殆んど人跡を絶ち、唯走獣飛禽が居るのみである。陸地測量部も御料局も最近に到る迄、この地方の精査は完成しなかった。

赤石山脈は多くの山脈の群簇から成立て居る。其の主脈は諏訪湖畔に起って蜿蜒として南西に走り、駒ヶ岳となり仙丈ヶ岳となり赤石山となり椹山となり池口岳となり、余脈遠く天竜河畔に達して居る。大井川の上流なる田代川は、此の主脈と、駒ヶ岳の南から東南に分岐した白峰山脈との間に、其の源を発して居る。又安倍川は白峰山脈の分岐したる安倍山脈と身延山脈との間に其源を発して居る。

赤石山の主脈の椹山に至って、更に南方に向って一支脈を出し、田代川と寸又川との分水嶺をなす。大無間山は其最高峰である（標高七六九二尺）。又赤石山の主脈は池口岳に至り、南方に向ひて一支脈を出して大井川と気田川との分水嶺を為す。奥黒帽子は此の連峰の最高峰である（標高七〇八九尺）。

赤石山脈は斯の如くであって、其主峰は既に登攀者ありて内容も世に発表せられたるが、其支脈なる大無間と黒帽子に至りては、まだあまり世に知られて居ない。それは標高が主峰の如くならぬのと、山容が人意を引くに足らぬからであろう。されど我々は遠江に成長して日夕此両山を展望するので、これらの山岳が如何なる状態であるかを知り、これを世に紹介せんとは久しい以前からの希望であった。

処が此夏山岳会第二回講演会の席上で一先生が、赤石山脈の山光水色を激賞せられて、ラスキンのやうに一人のターナーを見付けてモダンペインタースを書かうと思ふならば、一度は赤石のハートを見舞ふ可きであると云はれたので、急に往って見たくなったから、同行者を誘ふたら幸に黒田君、原田君、関口君が賛成して呉れたので、愈七月廿二日静岡を出発することになった。

静岡—千頭

第一日（七月二十二日　晴）午前八時五十分、僕及び黒田君、原田君は静岡停車場に集合した。関口君は行かれなくなったので見送りだけしてくれた。我三人は蓬姿で呉服町の大通りを過ぎ安西に出で、安倍川に掛った橋の袂から奈良間まで二里半馬車がある。乗るも興がない、歩き序に歩けとて徒行した。山崎、羽馬、大原を経て架設中の橋を渡り富沢に入る。道はこのあたりから藁科川の岸に沿ふて居る。水清く岸辺の柳風に揺られて、いと涼しい。上るにしたがって岩角におぼつかない鮎釣が居る。八幡で西から来る支流が合する。其処に清沢橋と名

くる橋がある。千頭道はここから右に折れて山に登る。昼井戸とはここである。一行は爰で昼食をした。これより山路三里洗沢に至るまでに、清水が三ヶ所湧く道は山の尾に沿ふて上下し、焼畑多く樹林少なくあきあきする道である。洗沢はこの道を登りつめた所にある。志太郡東川根村に属する戸数僅に三、その最も奥の家では宿泊もさせる。これから千頭には二里に近い。左に折れ右に折れてひた下りに下る。杉の叢立の間から、大井の河谷を隔てて川根の峰峦が黛の如くに見ゆる。有名な智者山の殖林は右に美しい姿をあらはして居る。下ること一単半にして小長井に達する。千頭はその対岸である。やがて渡船に乗ったら旧暦六日の月が山の端に淡く懸って居る。八時、山田伊右衛門氏方に投宿す。

千頭—湯山

第二日（七月二十三日　晴）昨夜主人に依頼して置いたら今朝案内者が来た。それは千頭区内で山のことに明るい榎田亀作と云ふ猟師である。その云う所によれば、黒帽子に登るには寸又川に沿うて上り、奥黒帽子の東麓なるオサキの小屋から登るのが一番よい。此処からオサキ迄七里、明朝立ってオサキに一泊し、明後日奥黒帽子に至り一夜を野宿し、第三日に前黒帽子に登り、再びオサキに帰りて一泊し、第四日と第五日とを以て大無間に登りて井川に下る都合四泊五日を要し、第六日目に此処に帰り来ると云ふのである。野泊は成るべく避けたいのであるが、必要とあれば致方もない。何泊でも厭はぬと其用意にかかったら、鈴木村長が栗毛の馬に乗って訪問された。附言して置くが、鈴木君は先年騎馬で富士登山をせられた有名の人である。初対面の挨拶と共に僕等の挙を激賞し、懐中から御料局測量上川根村管内図を出して与へ、尚ほ役場よりは地理課の中村君を、青年会よりは令息秀雄君を同行せしむると云はれた。重々の好意を陳謝して居る所へ女中が来て、亀作は俄かに頭痛がして行けぬと云ひ出した。これは登山第一の故障と聊か悲観したが、鈴木君が万事を飲み込んで呉れたから、これに任せて正午より出立することとした。正午頃慶一と云ふ人足が来て、すべての荷物を負ふてくれたから、僕等は雑嚢に必要品のみを入れて旅館を立出で、中村君を役場に鈴木君を其家に訪ふて連立ちて出発した。勿論一行は蔗管笠の扮装、尚ほ中村君は山鉈を腰に挟み、秀雄君は短銃を懐にした。

千頭より大間にいたる道は、大井川の右岸を沢間に出れば釣橋を渡らずに行くことが出来る。前山に渡れば釣橋を二ツ渡ることとなる。前山に渡る釣橋は駿遠の両国に架するので両国橋と云ふ。十年程前に、この川筋にはじめて出来たと云ふ歴史付の橋である。僕等は橋を渡らずに沢間に出た。沢間から少し上った所に「ドモト」と云ふ所がある。ここで大井川は田代川と寸又川とに分かるる。一行は寸又川に沿ふて上る。見上ぐれば

朝日岳は巍然として聳へて居る。大無間、樋山等は雲に入って見えぬ。樺沢を渡って少し上れば雑樹林の中に入り、或は上り或は下る。見下す足底には寸又の清流が巌岩に堰かれて碧潭を為して居る。路傍随所に清水が湧出で居るので、行路の険悪なる割合には疲れなかった。大間に入りては人足を頼まなければならぬ。望月といふ人を尋ねて見たが生憎不在であった。妻君が心配して呉れたが、山の事を知るものは薪採りに山に入って、何日かへるか分らぬと云ふ。一時間余にして漸く与六殿が行けるかも知れぬと云ふ報知を得た。僕等は此間に夕食を了へ再び六時に出発した。

羊腸たる山路を上って下れば、西より来る支流の大間川に架せられたる高い釣橋がある。之を渡れば間もなく湯山に達する。ここに御料局の巡邏で最も地理に明るい大村と云ふ人があるので依頼したが、稼業の都合でドーしても往けぬと云ふ。折よく親父の次平老が山から帰って来たので、依頼したらやうやくに応じて呉れた。案内者を得たので安心して其家を辞し、七時廿分滝並才吉氏方に投宿す。家より十町程隔て湯場があるとの事に其侭出でて行く。道が嶮しくて四張の提灯でも危ない程であったが、無事に入浴を済まし帰り来りて安倍の河谷を眺むれば、電光閃々として暗を破る。静岡は大かた大雨だろう。

湯山―大久保

第三日（七月二十四日　晴）今日こそ愈々黒帽子と、五時から起て旅装を調のへ待て居たら、六時過て治平老が来た。次で与六が来た。治平老の道順は亀作の道順とは大に異る。即ち大間河内を西に入て奥黒帽子の南麓なる大久保の小屋に一泊し、翌日奥黒帽子に登山して再び大久保に一泊し、第三日に前黒帽子に登る。奥黒帽子と前黒帽子との間は、熊笹の繁茂せる為に直行は不可能であるとのことである。よって山中二泊分の食料として白米一斗、醤油五合、砂糖、梅干、鑵詰、酒、茶、菓子等を用意した。又寝具として毛布、防水用の雨衣、油紙等を用意した。これに当日の弁当を合すると重量約十貫ある。之を二分して治平老と与六とで負ふ。一行は菅笠を被り蔞を背にし一様の山姿となる。蛭が多いと云ふから足袋と脚半との間に繃帯を施した。六時三十五分出立、前夜湯場に行きし道の中途から右に折れて上る。漸く進めば路はブナ、ハンノキ、モミ、ツガ、ギヨウブナ等の混交林中に入て尺に足ぬ細径である。而も落葉に埋れて分き難き程である。八時半、焼畑の跡に出た。畑の西の端に小屋がある。この道筋の最後の小屋である。道はここで左右に分れ、右は青ナギ道、左は黒松沢道と木を削って書てある。右をとって進む。展望のよい所からは青ナギ、ソバツボ、ナベワリ等の諸峰が見へる。蝉の音絶へて啄木鳥、カシドリの声のみ聞ゆ。道はこれより下りて漸く嶮峻となり、辿るべき径がなくなった。峰づたいに木の根を踏て行く。サルオカセ

長くたれアケビフジ空に渡って居る。十一時、青ナギ沢に出で一行渓水に口を漱ぎ、ここで中食を認む。涼しさは全く夏を忘れる程である。十一時四十分、再び進行を始む。空俄に掻曇って夕立が来そうである。沢を渡り峰を越へ西の沢山にかかって青ナギ山巓にむかふ。山腹のナギをそのままに上る。治平老は、前者の足にかかった石が動もすれば落下して、後従者を撃つの恐があるから気を付よと注意した。用心しなければ此上もなき危険地である。尾根を上る処々に樅の皮をひきかきた跡がある。地をも掘た跡がある。治平老は教た、是は熊の仕業である。此処らの深谿には猪は居らぬが、熊は沢山居る。人を見れば大抵は逃るが子連れの熊は逃げぬ。彼は死力を出して人と格闘する。木に登れば木に登る。死んだ真似をすれば鼻息をかぐ。イソップ物語のよふである。薄暗い木蔭でこんな話を聞と少々気味が悪くなる。二時五分、青ナギ山頂に達した。陸地測量部の三角点は去年始て入たと云ふ。山頂よりは北に奥黒帽子、東に前黒帽子、南東に板鳥、南西にタバネボツ、西に川上等の諸峰が見ゆるのであるが、今日は雲の深い為に両黒帽子が見へたのみであった。二時四十分再び発足する。

路は是より下である。二十分程にして一の小屋に着いた。所謂大久保の小屋である。其広さは九尺に六尺位、高さはやっと立だけである。夏秋は山葵採の為、冬は銃猟の為に設けたものであると云ふ。夕立が来たので小屋に入り盛に焚火をする。やがて飯が出来たので晩餐を済したら、睡くなって一行は寝てしまった。僕は独座して四辺を眺むれば、夕立は既に去ったが遠雷は尚谷間に轟いて居る。一方の晴渡った空には、三々五々星の輝が見へ初た。物の音何も聞へず、静けさは凄い極である。西北を枕にして寝れば、月が差覗く。谷間からは冷かな風が面を撫で通る。

両黒帽子

第四日（七月二十五日　晴）午前二時起床、カタクソが雞の代りに暁を報じて居る。ウグイカバの皮を松明にして万端の用意を整へ四時半に出立する。始め両黒帽子の往返は三日の予定であったが、トテモ三日には覚束ない。寧ろ苦しくても熊笹を突きぬけて、予定より一日を短縮せんとて、今朝はかく早く出立したのである。

小屋の右より尾根を上る暁霧の中に、奥山鳥の啼音が快い。霧は頗る深い。五時二十五分、奥帽子と二ツ山の間に出た。帰路もここに来るから、荷物を路傍にさし置いて軽装して進む。此所は既に六千尺に近い地である。樹木は皆矮く気候は冷かにして歩きよい。行くこと四十分にして熊笹に出合ふた。深さは腰ほどで露にぬれて居る。それを押分けて行けば袴は忽ちに濡るる。雷鳴電光が加はって霧は益々濃くなる。笹と栂との外何にも見えぬ。後るれば忽ち知れなくなるので、互に呼応して行

く。笹は全身を没する。押分て行く手が疲れるので代り合ふて行く。此先が何程あるかと見上れば、峰は雲に隠れて分らぬ。それのみならず所々に柵が倒れて、其枝は秩序もなく八方に拡がって居る。一行は殆ど行き悩みて居るを、秀雄君が先発となって掛声して進む。一行之に励まされて声を合せて行く。やがて咽喉渇き声枯れて、無言のままについて行く。既にして三角台が霧の中に白く見えた。一行オー頂上と呼ぶ、七時二十分頂上着（標高七〇八九尺）。

絶巓は樹木なく、膝程の小笹の生えた円磐状の平地である。一等三角点が其中央にある。晴天ならば南信北遠の諸峰を双眸に集めて、眺めは雄大であるとのことだが、今日は濃霧の為めに何にも見えぬ。其のみならず肩まで濡て寒さ堪へ難い。治平老の注意で、三角台の材木を切り取りて火を焼いて漸く元気を回復した。方位を地図に合せて一意霧の晴るを待たが、遂に晴ぬ。九時四十分、遺憾ながら断念して下山した。下りは割合に容易である。上る時の跡が辿らるるので、濡ることも少ない。十時三十分、二ツ山に着いた。此所で少し休息し中食を認め、十一時三十分、更に前黒帽子に向ふ。針葉樹、ブナ、カバの美しく繁茂した中を行く。鹿が居そうなと思ふたが、樹林を出て小笹に掛ったら、果して笹の芽が悉く喰れて居た。空漸く晴れて奥黒帽子の峰頭、後にあらはれた。

道は丈余の熊笹がいや生に生茂って甚だ歩き悪い。治平老は此所の道は忘れたと云ので無茶苦茶に行く。午後一時、笹の薄くなった尾根に出た。俄かに夕立が来たから木蔭に憩ふた。尾根より右の方を望めば大井川、智者山が見える。何だかなつかしい気がした。

之より急勾配の尾根を上っては下り、下つては上る。愈々本山に掛ってからは、柵が隙間もなく密生して居る。幾百歳を経たものか苔が一面について、梢が皆白く枯て居た。地は尺に余る厚き苔を以て掩はれ、所々にミヤマタバミ、ガニクモ、マヒツルソウなどが生て居る。二時三十分、頂上に着く（標高六六三四尺）。

前黒帽子の頂上は奥黒帽子よりも広い。笹はなくて丈低い黒松、唐桧松、ビヤクシン等が簇生して居る。小高い処に三等三角点がある。立って見ると、四辺に波のように重畳としたる群峦の中に、大無間が目に入る。椹山は半ば雲にかくれて居る。昨日までは此の河谷の雄と思ふた朝日岳も、今は脚下の一波に過ぎぬ。快晴の日には西南に天竜の流が見へ、東南に駿河湾が見へるとのことであったが、今日はそれは見へなかった。

展望約半時間、感興は尽なかったが午後三時頂上を辞した。今度は道を南東に取り縦柵の林中を行く。倒木が多き上に、大石がごろごろして居るので甚だ歩き難い。熊の跡が非常に多い。辿るは其跡である。行くこと約一時間、落葉樹林にかかったら湯山の人家が見へた。四時四十分、湯山に着く、前日の旅

館滝並氏方に投宿す。見廻せば座敷に雑嚢、水筒、捕虫網等が一纏ある。如何なる客かと問たら、二人連のお若い方であると云ふ。何したのと問たら湯に行ったと云ふ。関口君が来る筈がないがと思ひながら、一行と急いで行って見たら関口君と井上君であった。幸に都合が付たから二日後れて立て、今日愛に着たと云ふ。浴後一行は下湯沢に至て滝を見た。滝は直立二百四十尺、大飛瀑をなして居る。滝の西には突兀たる峰が聳へて、樅の木が捨られたまま生て居る。洵によい景色である。滝を見て帰ったら日は全く暮れて、旅館の後に当り河鹿が月に鳴いて居た。

序に湯場のことを少し書付る。この湯は梅ヶ島と同一系統に属するものらしい。鉱質は硫黄性である。温度は華氏九十六度であるから体温と同じである。故に何時まで這入て居ても少しも飽かぬ。浴室は二間四方で、其中に五尺四方位の浴槽が二つある。これに接して浴容の起臥の為にする七畳の室が三つある。遠方から来る人はないが、農の隙に川根谷から来浴するものがあると云ふ。今日も六七人居った。浴客は何れも自炊で、入浴料として一日十銭を払へば夜具と薪料とは給せられると云ふ。

湯山一日向

第五日（七月二十六日　晴）午前六時三十分、湯山出発大無間に向ふ。与六は都合ありてここより辞し去る。治平老は大無間は知らぬから案内は出来ぬが、荷物を携へて日向まで行くべしとて同行する。今日は一行七人となりたるので勇気は前日に一倍した。治平老の家の東を左に折れ、峰を越ゆれば寸又川の釣橋がある。ここは「岩穴」といふて峡中第一の風景である。此のあたり両岸は巉巌峭立、所々に飛瀑が懸って居る。橋上より下流を眺むれば碧潭鏡の如く岩壁に懸る。樅が倒さに其影を映して居る。治平老のいふところに依れば、此河谷には白昼星の光を見るが如き深き谷があるとの事である。

御料局の新道に沿ふて閑蔵沢、日向沢を渡って午前十一時、日向に着く。ここは東側の終点で、是より信州迄十里の間には碌な小屋もないとの事である。大村鶴吉氏方に投宿す。

日向に着きてより中村君が大いに奔走して呉れたが、大間と同じ理由で人足は得られない。ここには家が三軒しかない。男は皆な山に稼ぎに行って居らぬ。山に入るには米を負ひ味噌を持って行き、五日でも十日でも米と味噌のある間は作業をして居るといふ。大いに困ったが、やうやくして勇作といふを見出して明日一日だけ雇って来た。これは千頭の亀作の弟であるといふ。一行は元来大無間に登り一夜をそこに露宿して、翌日田代に下る計画であったが、勇作の都合が一日だけしかつかぬので、頂上まで案内して貰ひ、頂上より田代へは案内なくして下ることとした。かく決したので露宿をする必要がなくなったか

ら、荷物は治平老に托して大間へ送りかへした。

日向は義務教育免除地である。その昔は、女子は藤の蔓を帯とし髪は巻付にして居ったが、十年前に富士製紙会社がこの河谷の伐採をやったり測量員が入込んだりして、人足が繁くなるにつれて風俗も移り、一方には村の青年が徴兵にでて多少都会の空気を吸って帰るので、今はメリンスの帯をしめ二つ輪の髪を結ぶやうになったとの事である。この夕、関口君が旅館の長男益太郎といへる満六歳の少年に桃太郎の話をしたが、第一に桃が分らぬので先生全然失敗に終った。

大無間山

第六日（七月二十七日　晴）午前二時半起床、旅装を整ふ。今日は極めて軽装す。三時半、勇作来る。四時、出発す。勇作は七人の弁当を負て先頭に立つ。旅館の右の尾根を上る。朝路は頗るはかが行く。「コナラボツ」は知らぬ間に過ぎ日向山に出た。峰を右に取て進む。路は針葉樹林に入り青苔地にしきいと心地よい。今日の案内は中々元気である。カーキ色の猟服をきて猟銃を肩に鉈を腰にし、幅広の肩を左右に振て小笹を分て行く様勇ましい。一行は小駈に駈てついて行く。六時十分、小笹の中に三角台があった。樺沢である。樅林の間から大無間が鮮やかに見ゆる。東に安倍川も見へた。空は快晴である。初めて鹿が丈なす笹原の中を一散に飛去るを見た。勇作の話に依れば、この山には鹿が頗る多く、時としては数十群をなして悠遊して居ることもあると云ふ。彼は一度に三頭をうちとめたことがあると自慢した。熊狩の放胆的な物語も聞かされた。話しつつある間に北に向ふたナギに出た。「鹿が居る！」と呼ぶや否や勇作は飛でいった。僕等もあとについて飛でいった。併し鹿は早くも着弾距離外に逸走した。遺憾であったが鹿狩は目的でないので、見棄て小笹をわけて行く。

午前七時一の三角点を過ぐ。路はこれより下りとなる。このあたりは風致頗る深邃である。針葉樹林に始めて落葉松の雑るを見る。巨幹側々として天を摩して居る。仰ぎ見る梢には駒鳥が琮々として玉を転ずるやうに鳴いて居る。行くこと少時にして道は俄に上りとなる。峻にして峻、石にすがり倒木を攀て行く。九時、とある平地に出た。一行ここで中食を認む。今日は天気が晴朗であるので頗る快よい。唯バイケイ草を摑みて悪臭がとれないので閉口した。峰の南に向ふてはナギが多くないが、北に向ふては大なるナギが沢山ある。ここで足を失して死骸の知れなくなった猟夫もあると話を聞いた。始めてナギから北に遠く赤石山の残雪が見へた。九時五十分、三隅池につく。池は広さ十坪位である。此高山の八合目によく水が保たれると思はれた。最初亀作の話した道を取り露宿するなれば、ここに一宿する筈である。ここには小なる猟師小屋一つあった。十時三十分、頂上に着した（標高七六九二尺）。

大無間は遠江第一の高峰であると同時に、赤石山脈に於る一方の雄鎮である。絶頂の三角台に立て先づ東北を展望すれば、井川山脈、安倍山脈の如きは近く脚下に匍匐するやうに見ゆる。之に反して富士の優姿は遠く雲にぬきんでて、愈々其高さを加ふる。眼を転じて北方赤石山を眺むれば山容瑰偉磊落、富士の女性的なるに対し頗る男性的なるを覚ゆ。更に西南を展望すれば、両黒帽子、智者山を始めとして周智、安倍の山々層々波涛の状を為し、其中に大井の清流は恰も素練を引きたるやうである。而かも是等の群峦は、之を富士、赤石の雄大なるに比すれば、隴土蟻垤殆んど一顧の価値だも有せぬ。

大無間の頂上には丈に足らぬ黒松、唐松が点々密生し、其間には軟草が茵の如く生へ、頗る幽趣に富みて居る。樹蔭には名を知らぬ種々の草花が咲いて居て、其美しき姿は登攀者をして行路の疲労を忘れしむる。殊に其絶巓から北に「赤石のハート」を下瞰して、炎熱焼く如き候に於て残雪を望む時は、其豪宕雄偉の観は殆んど神飛び魂消へしむるやうである。僕等はここに至って山岳会講演会に於る一先生の言空しからずして、僕等宿昔の志酬ゆる所ありしを喜んだ。十一時半、勇作は行手の道を教へて引かへした。僕等はここで第二回の中食を認め、十二時に山巓を辞し東南に向ふて発足した。此時雲俄かに湧きて眺望は全く失せた。少時は尾根について下る。路に沿ふて駿遠国界の標木があったが、それも何時かなくなった。勇作は、行けば間もなく関之沢の小屋に出ると云ふたが、小屋には出合ない。此時中村君が先頭に立ち僕が殿をつとめたが、何だか峰をとり違へたよふだと云ふので一行集りて相談した。行けばどふにかなろうと云ふもあったが、引返せと云ふが多数なので引返しむ。午後一時三十分、漸く旧の峰に復した。更に東に取って進た。霧一面にこめて周囲一町とは分らぬ。右の方では頻りに雷が鳴て今にも夕立が来そうである。大無間は雲にかくれてしまうた。

少時にして路は大きなナギに出た。「カモシカ」の足跡が縦横に通って居る。峰はここで尽き尾根は東南に向って下る。霧が深くて方向を定めかぬるので、一行地図を開き首を鳩めて凝議した。北に向へば田代川の支流に落て絶壁であるに違ない。南に向へば関の沢に出て下られる尾根があるかないか分らぬ。さらば其中間を進めとて終に正東に向って下る。

勿論道のあらう筈がない。只それらしきものを求めて行く。幸に鉈で削った栞があるので辿って行く。二時四十分、夕立サツと来て忽ち晴、関の沢が見へた。よく見れば河の東側に焼畑の小屋がある。之に通ずる道もある。一行は始めて方向を取違へて関の沢へ落込で来たことを知った。先頭なる中村君は常に一町以上先に行き、後の者は声をかけ、それを知るべに辿り行く。倒木の多きことは黒帽子ほどではないが、懸崖は随所にある。之に遭ふときは岩を匐て渡る。若し一歩を失すれば、それ

までである。屍とても知れることでない。

一行は稍疲れたので声をも出さずにひた下りに下る。下るに従って大木の下に潅木叢生して居て、押分て行けば眼を払ひ手を傷つける。草鞋は根に引かかりてきれる。其困難は名状しかねる程である。四時二十分、始めて渓声をきき河磧を見る。一行喜び勇みて進めば忽ち篠竹の中に陥る。声と音とは聞ゆるも笠も蔗も見へぬ。推分々々行く程に漸く河磧に出た。関の沢のドアヒである。傍に一ツの小屋があった。ここで万一の用心にとて残したる握飯一ツを喫し、顔を洗ひ草鞋を結び替た。

午後五時再び発足、小屋があれば道がなければならぬと八方を捜索したが分らぬ。余儀なく河磧に沿ふて下る。河磧とは云ふものの、小家の如き大石が磊々として河身一面に羅列して居て、其中を凄きまでに碧く澄だ水が、湍々として流れるのである。岩を越へ流を横ぎる毎に足がすべる。足袋のみなるは特に危ない。転かかりて踏止まったことは幾度か知れぬ。僕は相替らず後からついて行くので、見渡せば一行が忽ち隠れ忽ち顕はれ、右に滑り左に転ずる。恰も羅漢戯を演ずるが如くである。斯く思ふ間に僕自身忽ち足を失して、水の中に転込んで雑嚢を水浸しにした。声をかけて一行を呼留め追付て見れば、一行も大抵首まで濡れて居た。鈴木君は流石に経験ありて、僕等に草鞋の代りに手拭を足にまけと命じた。早速試みたら頗る好成績であった。

六時十五分、ト見れば一行岩の上に止まった。追付いて見れば両岸せまって、河はここに三丈余の瀑布となって居る。瀬戸と云ふ所であるとあとで知った。当惑して居ると、中村君は既に対岸の木山の中から頻りに呼んで居る。之に励まされて絶壁を滑り下り漸く追付く。先頭の歩調が頗る急であるので、今宵はどうなると思考する遑もない。只忠実に其跡を追ふて行くのみである。

既にして材木が河一面に流れつかへた処へ出た。下流を見渡せば真暗く迚ても行かれることでない。先刻見た小屋に通ずるをに出るの外ない。よって左の谷を遡二無二登り始めたら、壁道立てたやうな岩石に蒺藜の荊のみ生て居て、摑めば刺を立てる。倒木によれば枝は朽て居て攀られぬ。石に倒れば石は落下して後従者を傷つける。石！　石！　と呼毎に疾走して物蔭に寄れば、石は凄じい音を立て谷底に転じて行く。今朝より既に十六時間、疲労は加はる。暗さは暗し、一行殆んど困じ果たる折しも、上の方で「道がある！」と叫ぶので、元気を出して這上って見れば小さき道に出た。辿って行けば小屋がある。中を覗けば火を点じて人が居る。ここは何処かと問へば、井川の奥里マミノオと云ふ処だと云ふ。井川へはどう行くと問へば、おそいから泊れ、里から子供が来たので米もあると云ふ。さらば好意に従はんとて終に泊ることとした。

小屋の外で焚火をなし、着衣を脱ぎ腹巻を解きて乾かせた。

足袋を取たら血がみゆる。足袋と脚半、脚半とズボンの間、蛭に散々やられたのであった。中には「ダニ」にやられたのもある。少しばかり持参した鯛味噌を汁にして晩餐を済したら、夜は既に十時であった。小屋は床もあり半永久的に出来て居るが、中央に炉がきってあるので、七人が寝るには少々狭い。それと見た主人は、子供をつれて近所の小屋に行った。僕等は漸く足を伸ぶることを得た。やがて蓙を着、雑嚢を枕にして寝れば、夢は尚関の沢の河磧を辿々て居る。

井川―千頭

第七日（七月二十八日　晴）午前七時起床、主人の名を問へば滝並音吉と答ふ。先年参謀本部員について田代川を遡り、南から赤石山に上ったとの話があった。昨日僕等が来た道は大無間中で最悪の道である、よくやって来たと感心して居た。行つまった沢は「八丁クラガリ」と云ふ所であって、迚も長嶋まで出られないとのことであった。一行は厚く礼を述べ、八時過小屋を出立し、九時半田代川の右岸なる「井川閑蔵」に出たら人家が見へたので、一行は覚へず歓声を発した。釣橋を幾つか渡って十時四十五分に長嶋に着き、ここで中食をなし大間奥泉を経て、再び数ヶ所の釣橋を渡って四時四十分に千頭に着いた。鈴木君の好意で今夜は一行其家に泊した。この夜、大人なる鈴木村長は酒を置き肴を調へ、村の誰彼を招じ大に僕等を歓待してくれた。酒間面白き種々の物語があった。左に先づ上川根村のことを少しく書付る。上川根村は大井川右岸の最奥なる自治体であって、千頭は其の一区である。役場、学校、御料局出張所、駐在所、病院等は皆な千頭にある。千頭は上川根村の中心であって同時に此河谷の都会である。

上川根村は御料山林六万七百八十町、民有山林四千五百九十町、畑十一町、戸数三百七、人口一千八百余である。是は概数であるが、其面積と人口との割合を計算すれば、如何に山間の村落であるかが分る。従って人民の生業も如何に山間的であるかが分る。即ち其職業は大抵山稼を主とし、中には全く銃猟を以て生活するものもある。大井川に沿た地方はよく開けて生産も盛である。川根茶の主産地はここである。本年は宇治から教師を聘して伝習所を設け、大に発展を謀りて居るとのことである。又山間の渓谷には十年前より葛を伊豆にとって、山葵の栽培を試みたが頗る好成績であるとのことである。正確な数字を知ることの出来なかったのは残念であるが、年を追ふて繁盛に向ふやうである。製茶、山葵の外に椎茸の産出も少なくないのである。若し材木の搬出が充分に行はるれば、更に一層の発達を見ることであらう。水力には非常に富んで居るから、電気を起さしむることとせば、此地の発達は如何なる程度に至るべきかは想像の及ぶ所でない。

登山に関する談話は沢山あったが、それは略する。只ここに

記し置くは、此地方は本邦の山岳部中にありて一と云って二と下らぬ嶮阻な地方であるとのことである。これは確実であることを僕等も保証する。

滞在一日

第八日（七月二十九日　晴）昨日の疲労にて十時過ぎ床を離る。鈴木大人が今日は一日滞在して休息せよとのことに付、其厚意に従ふこととした。午後には大井川に至り終日遊泳、材木流等を試みた。食後椽先より見渡せば、江上月清く風涼しく、連日の疲労も頓に洗去られたやうに感じた。秀雄君は小長谷の古城趾を案内せんと誘なはる、一行之に従ふ。行くこと約五丁、一ツの荒墟に出た。後の山腹には老松の欝然たる下に一団の墳墓がある。夜目には確と分らねど陰森たる鬼気は人を襲ふ。秀雄君は云ふ、これは戦国の昔、小長谷則詮と云へるが築きたるものなるが、武田四郎勝頼が織田右府の為に亡ぼされしとき、孤忠を守りて共に滅びたのであると。戦国には斯る山間にても盛衰興亡を免れざるものと思はれた。

大井川

第九日（七月三十日　晴）今日は愈々千頭を辞することとなった。鈴木君父子に厚く礼を述ぶ。中村君にも別を告ぐ。離愁胸を突て涌く。八時に船が出ると云ふので急いで旅装を調ふ。借りた浴衣を脱ぎて着替れば、旬日の汗に汚れたる衣服は悉く洗清めて、ノリがつけてあった。今更ながら其好意に感じた。一家の人々に送られて其門を出て振返々々て行く。今日は菅笠をやめて夏帽子を冠る。村から同行者が四名あった。河原に至れば船は待て居た。僕等は中央に座を占めた。鈴木君の配慮で船頭も丁寧である。八時五十分、纜を解く。秀雄君はここまで見送ってくれた。離愁また胸を突く。やがて船は中流に出で奔竜の勢で駛する。忽ち右忽ち左、急転直下とはよき形容詞である。小長谷の城墟を後にし藤川の釣橋を過れば左は堀の内、右は藤川である。ここから上長尾までの間が大井川第一の勝である。渓谷の美をなすものは岩と水と樹木と光線である。峨々として聳ゆる巌巌の下に、藍を湛たるが如き碧流が右に折れ、左に廻りて流るるを、盛夏の強き日光が照付て、其反射が巌壁に倒に懸れる蓊蒼たる緑樹と映発する。其中を船は矢を突く如くに岸をかすめて行く。それのみならず巌岩には百合が今を盛にさきて、芳芬風に伴ひて鼻を撲ち、見上ぐる山上には杉の植林が整然列を正して居る。其の叢立の間々に飛瀑が懸って居て、琮々として玉を散すが如き音を為す。其美其快殆んど名状することが出来ぬ。僕等はここで読者諸君に一言する。諸君は仮令大無間に登りたまはざるも大井川は一度下りたまへ、必ず幾何かの寿命を延ぶること請合である。船は青部で乗客を増した。僕等は依然旧の位置を占めた。やがて家山に至りて一時間休息

し、乗客は皆上陸して茶屋に就き食事を認む。終って再び船に乗る。福用で水上警察の取調を受く。切符は家山で買って、ここで渡すのである。これより横岡に至る間に松島の勝がある。三時、横岡に着く。山退き谷開けて河身胖になった。四時二十分、島田の西岸に着く。乗客荷物を携へ上陸し思々に其志すかたに行く。僕等一行もここにて上陸し互に其無事を祝して解散した。振返れば朝辞した千頭は何処、川根谷は那処、千岳万峰の間を飛ぶが如く駛下りたる船は、今正さに岸辺に眠りて居り、そこぞと思ふ山のあなたには雲重畳として居るのみである。

附記

以上述べたのでこの旅行記は尽きたるが、後遊者の為め少しく数字的の説明を加へ置く。千頭へは静岡からも金谷又は島田からも行かれるが、静岡から行くがよい。其行程は九里である。朝立てば夕には早く着く。金谷又は島田からは十二里あって路は甚だ悪しくある。下りは大井川の船に限る。涼しくて興味あって賃銭は僅に二十二銭。

千頭より大間まで三里、大間より湯山まで一里、湯山より大久保の小屋まで三里、大久保の小屋より奥黒帽子の絶巓まで二里、奥黒帽子の絶巓より前黒帽子の絶巓まで三里、前黒帽子の絶巓より湯山まで二里、湯山より日向まで三里、日向より大無間の絶巓まで三里、大無間の絶巓より井川まで四里、井川より千頭まで五里である。山間の道は一時間一里の割合には行けぬ。山に上る時には数時間にて僅かに一里しか上れないこともある。斯の如き路は距離で云ふよりは時間で云ふ方がよい。時間は本文に記したから爰には里程を記すのである。

滝並音吉の話によって井川より赤石山に至る行程を記す。井川から田代へ二里、田代より田代川の終点まで十五里、此間は非常に険阻であるが、水力電気の設計の為め洋風の小屋が所々に立てられてあるので、野泊することなくして赤石山に登らるる。但田代より赤石山の頂上までは、少くも三日を要するとのことである。

黒帽子に登るには米、醤油等は湯山で弁ぜらるるが、鑵詰等は千頭か大間でなくては弁ぜられぬ。大無間も同様である。尤も米だけは日向で弁じられる。人足は大間で雇はれるが、前より申込で置かぬと間に合ふかどうか分らぬ。上川根村の役場又は青年会に予じめ依頼して置けば安全である。この地方では訪問の客を歓迎するから万事に便宜を計てくれる。野獣狩でも同様である。物価は千頭では余り相違せぬ。湯山又は日向では米が平地より一升につき七、八銭高い。是は運賃が掛るからである。人足は一日五、六十銭で喜んで応ずる。山奥の宿泊は一切実費である。宿泊料の規定がないから見計ひで礼をする。湯場のことは前に述べたから、ここでは省く。本文を終るに当って

僕等未識の書生の為め、大なる好意と便宜とを与へられた鈴木君父子及び中村君に深く感謝の意を表する。又此拙き文を世に紹介せられたる民友新聞社に謝意を表する。（終）

〔補註〕

本文は原文通り旧カナを用いたが、句読点は読み易いように僅かに改めた。当時の新聞は総ルビだが、読みにくいものだけにルビを付けた。山名その他現在と相違するものについては、石間信夫氏をわずらわして左に註をつけた。

黒帽子――現在は黒法師と書くほうが一般的であるが、何れが正しいかは遽かにきめがたい。

椹山――信濃俣（三角点二三三二メートル）と推定される。信濃俣の南峰二三二〇メートル峰を椹沢山と呼んでいる。

二ッ山――黒法師南東の一八一〇メートルの峰。

青薙山――二ッ山南方の三角点一七二一メートル峰。

川上山――青笹山（三角点一八六八メートル峰）、石間氏自身川上山という呼称をきいたことがある。

タバネボツ――蕎麦粒山（三角点一六二七メートル）のこと。

八丁クラガリ――関ノ沢川の中程にある。それほどの悪場ではない。栗代川にも、これと紛らわしい名の「八丁クラミ」という悪場があるが、ここは赤石沢に匹敵するという。

鈴木治平村長――長い間本川根町長をした鈴木治平氏の父君かと思う。息、璋一君は元本会々員。現、治平氏は石間氏と親しい。

なお石間氏からは行程図も送付されたが、紙面の都合で割愛し、その要点を記しておく。黒法師の登路は、旧湯山部落から大間川北岸山腹の径を西進、青薙沢（青薙山東側）を中流でわたり、青薙山を越えて、上西出沢の上流に出て、そこに在った大久保小屋に泊る。そこから黒法師と二ッ山を結ぶ稜線に達して黒法師岳往復、さらに二ッ山、前黒法師を経て湯山へ下ったものである。旧五万分の一図には、湯山から青薙沢の近くまで大間川北岸の径が、破線路で明記されている。

大無間のほうは、旧上日向から三角点一八八三メートルを経て山頂に達し（現在の登路と大体同じ）、降路は頂上から東微南の尾根を辿って関ノ沢の源流に下り、沢通し下って途中から左岸の山腹をまいて、柚人の小屋に辿りついて一泊、翌日閑蔵に達したものである。旧五万分の一図には、関ノ沢の源流から左岸をまいて閑蔵へ至る破線路が明記されている。（望月記）

新クラブルーム・図書室建設報告

古い時代のことは暫らくおき、戦後焼土と化した都心に、本会のクラブルーム兼図書室を建設したのは、昭和二十四年（一九四九）三月であった。その詳細は当時の建設・募金委員長藤島敏男氏によって「日本山岳会図書室再建報告」として『山岳』第44年第2号に述べられている。

昭和三十九年（一九六四）七月、体協の移転にともない外苑コーポの一室にクラブルームを移転するまでの約十五年間、いわゆるお茶の水時代が経過することになるのだが、会の戦後の発展にお茶の水のルームが、どれだけ貢献したかは、まだよく記憶されている会員も少なくないであろう。お茶の水ルーム・お別れのパーティを記載した一文（『会報』第233号参照）が、よくその間の消息を伝えている。

折角移転した外苑コーポは、しかしながら半地下の一室で、会のルームとしてはよく機能しないうらみがあった。よって会は神田錦町の向井ビル五階に移転を決定し、昭和四十二年（一九六七）六月末をもって移転を完了した。外苑コーポとくらべて格段に居心地のよい向井ビルのルームは、多くの会員に喜ばれたが、「ルーム移転記念パーティ」（関口周也氏記）の記事（会報『山』第208号所収）にそのことがよくうかがえる。

向井ビルのルームは、内容、立地条件共にとくに不満はなかったが、家主側の都合でたちのきをせまられ、会は昭和四十八年（一九七三）五月、文京区湯島の利根川商事（株）さくらビル七階に移転した（会報『山』第335号・第336号参照）。

戦後約三十年、会はクラブルームを変えること四回に及び、その都度会員に、少なからぬ募金をお願いしてきたのだから、そろそろ永住の地を考えるべきであった。また、さくらビルのルームは特に不満はなかったものの、一般的な物価の騰貴にともなう家賃の値上げが、会の財政に少なからぬ負担となりつつあった。この点は既に前々からも問題視されていたが、理事会の席上で正式に採り上げられ、若手の理事で特別委員会をつくり検討に入ることが決定されたのは、昭和五十一年（一九七六）三月六日の理事会においてであった（担当理事山本良三氏）。また同年四月九日開催の評議員会においても、その構想が今西会長から説明され、了承された。

爾後、物件の物色は山本良三、橋本清、神崎忠男理事があたり、また財政面からの検討は山本健一郎、高遠宏理事に飯野亨監事が参加して行なわれた（同年七月二日理事会記録）。ついで九月三日、十月八日の理事会で千代田区四番町に建築予定のサンビューハイツ一階が、有力な候補物件である旨の了承が得られ、また十一月五日開催の評議員会の席上で以上の説明がなされた際は、積極的に進める旨の賛意が得られて方針がほぼ決定した。

よって十一月五日の理事会でルーム委員会の設置が決定され、委員長に望月副会長が選ばれ、委員の人選は委員長に一任されたが、橋本清、山本良三、神崎忠男、山本健一郎、高遠宏、近藤信行、小倉董子理事が委員として選出され、十二月四日の理事会で承認された。委員会は発足後、毎月二回程度の会合をもち、諸般の検討をかさねてきたが、最も意を用いたのは資金調達の点であった。また購入すべき面積の割りふりについても、委員会以外の多くの役員の意見を徴して、逐次決定していった。

昭和五十二年（一九七七）四月八日開催の評議員会及び理事会において、購入資金の一部を金融機関からの長期借入金とする件が承認され、さらに同年四月二十二日開催の通常会員総会において、本会のクラブルーム及び図書室購入と、そのための資金の一部を長期借入金とする件が承認されると同時に、今西会長からは、全会員に対し多大の協力を致されるよう懇請された。この長期借入金は五千万円を限度とするものであり、現行の会費を直ちに増額することなく、従来の家賃程度の支出をもって約十年程度で返済可能の計画であった。

本会はこの総会をもって、会長は今西錦司氏から西堀栄三郎氏に引きつがれた。新年度の五月十六日の理事会から募金について真剣に討議が行なわれ、六月十三日の理事会において、従来のルーム委員会を一応解散し、あらたに、西堀会長を委員長とする左記の募金委員会を発足することを決定した。副委員長＝望月、折井副会長、委員＝宮下秀樹、山本健一郎、細川沙多子、伏見紀子、高遠宏、山本良三、浜野吉生、神崎忠男、橋本清（担当理事）の各氏。

また顧問として今西錦司、島田巽、辻荘一、早川種三、槇有恒、三田幸夫、渡辺公平の七氏をお願いし、さらに現前役員、評議員、支部長、その他から一七〇名の会員を選んで参与に就任ねがい、募金達成の万全を期した。

そして会報『山』第385号（昭和五十二年七月号）の巻頭に大きく会員への募金をよびかける一方、全会員に協力をお願いする依頼状を六月中に発送、またそれに先だって支部長等参与をお願いした会員へも依頼状を発した。

当初の募金目標、資金調達は左の通りであった。

会の自己資金　一〇、〇〇〇千円

長期借入金　五〇、〇〇〇千円
会員からの募金　一〇、〇〇〇〃
会員外からの募金　一〇、〇〇〇〃
合　計　八〇、〇〇〇〃

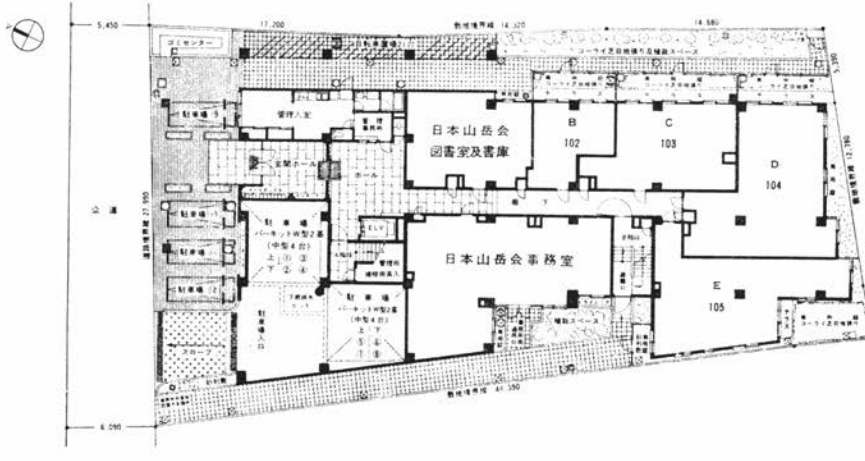
また購入すべき物件は千代田区四番町五―四、「サンビューハイツ四番町」の一階一六四・三五平方米（約五十坪）で、完成は昭和五十三年（一九七八）一月、その所要資金は左の通りであった。

物件買取資金　七〇、〇〇〇千円
図書室整備費　三、〇〇〇〃
内装費等　三、〇〇〇〃
引越費用等　三、〇〇〇〃
募金事務費その他　一、〇〇〇〃
合　計　八〇、〇〇〇〃

会員からの募金は会報『山』第386号以降毎号、欠かさず報告した通り多大のご協力が得られ、目標額を大きく突破し一七、四二〇千円（会員数にして一一三一名）（五十三年九月現在）に達したことは、非常な喜びであると同時に、衷心より厚くお礼を申上げる次第である。

また会員外の法人からの募金は、時あたかも日本経済の不況時にあたっていたことと、図書室という点から、依頼先を比較的縁故ある会社並びに出版、報道、新聞等にややしぼって、九

敷地図及び1階平面図



月以降活動に入ったが、多忙な西堀募金委員長は、精力的に東奔西走されたばかりでなく、当初の募金委員のほかに渡辺兵力、浜野正男、近藤信行、飯野亨、田口二郎、村山雅美、今西寿雄、吉沢一郎、尾上昇、大塚武の諸氏には特に尽力をねがい、また関西地区、中京地区に足をはこんだ細川、伏見氏らの労を特に記しておきたい。

法人関係は合計八十二社、金一三、四七〇千円に達し、目標をかなり上まわることができたのは幸いであったし、それに払われた委員その他関係者のご苦労に対して深く感謝する次第である（協力先については会報『山』第400号参照）。

かくて新ルームは予定通り昭和五十三年（一九七八）一月下旬完成、引渡しを了し、一月二十九日に移転を完了したが、引越しに際しても片岡博氏の尽力や、神崎忠男、堀内章雄氏らを中心とした集会委員会等の若手会員諸氏の献身的な協力を得て、極めて円滑且つ低廉に実行することができた（会報『山』第391号参照）。

新ルームの披露パーティは三月十一日（土）午後二時から行なわれ、会員清野恒画伯による記念絵ハガキを参加者にわかった（会報『山』第394号参照）。また協力を頂いた法人先招待の披露パーティは四月二十一日（金）に開催した。また同日をもって募金委員会を解散し、残務は各担当理事で処理することとした。

会員及び法人からの募金状況は以上の通りで、目標を大きく上まわったため、会の健全財政の建前から、当初の借入金は五百万円減額し、四千五百万円でまかなうことができた。本件に関する収支の報告は、三月末迄については、既に五十三年五月十二日の通常会員総会において財務担当理事から詳しく報告承認され、会報『山』第396号にも記載されているので、ここには省略する。

顧みると、本会が虎ノ門不二屋ビルにクラブルーム・図書室をもったのは昭和四年（一九二九）十一月で、あたかも本会創立二十五周年にあたっていた。そして本会は昭和五十年（一九七五）に創立七十周年を迎え、諸種の記念行事を行なったことは、まだわれわれの記憶にあたらしい。本会の新ルーム建設は七十周年にいささかおくれたとはいえ、ほぼ七十年を経て会自身の、借り物でないクラブルームと図書室をもつことができた。これは文字通り、全会員ならびに関係先の絶大なご協力の賜物でなくてなんであろう。

われわれは、この新ルームを拠り所として、会員のためのよりよき会として、さらに発展すべく努力をかたむけていきたいと思う。

〔望月達夫〕

追悼

加納一郎氏（一八九八～一九七七）

大阪市に生れ、京都で育ち、京都一中時代に山に親んだ。将来極地探検を行うため、この種の学問のできる北海道大学農学部を一九二三年に卒業した。板倉勝宣、大島亮吉らと山岳雑誌『山とスキー』を一九二二年に創刊し、昭和のはじめまで続けた。この間に『氷と雪』を一九二九年に刊行し、将来にそなえた。

加納さんの登山と探検と極地圏を結びつけた著作は、三十一冊を数える。身体は蒲柳のたちであったが、そのねらったことは、ペアリーの北極から、アムンゼンの南極への到達という壮大な夢想と行為でなかったと、誰がいえよう。殆んどの著書は、この両極にかけられていた。

チェリー・ガラードの『世界最悪の旅』（朋文堂、一九四四年刊）とコーリン・ベルトラム『北極圏と南極圏』は俯仰中の無慮をおなぐさめするため、高須茂と筆者が原典をおおくりした。ライフ社『両極』（一九六二年）の訳業も、極地への憧憬をかざるものであった。また短歌も好まれた。

一九三六年十一月六日、山岳雑誌『ケルン』のお手伝いをすることになる。同月十六日JAC支部ルームでお目にかかり、十七日旭区森小路六丁目のお宅を訪問した。ちなみに雅名森昭二は町名のアナグラムである。お子様は三男二女であったと思う。正敏さんは、本年野村貿易のカリフォルニア駐在員として赴任された。『氷雪の回想』には、父子の対面写真がある。この年末に、東都の山岳画家とケルンの忘年会をかねて交換会があった。

一九三七年森小路の家から徒歩で、私の勤務先の工場へ来訪して下さった。この年山岳雑誌『ケルン』の編集をまかされた。ケルン欄という寸鉄頁の文字は、返信葉書の宛名を凸版にしたもので、加納さんのアイディアである。発行部数はたしか二百部ぐらいだったと思う。

一九三八年会社でトラブルがあり、東京へ帰るつもりであったが、加納さんにつれられて、住友電線製造所に別宮貞俊氏（後に社長）（御両者は乳兄弟とか）を訪問し、専門技術者として雇っていただき、停年近くまで勤務させて頂いた。加納さんは、登山をしているから身体は保証しますといわれた。

一九四二年、お父上がなくなられた。たしか宇治の黄檗山のお茶の師匠であったときく。

一九四二年から一九四四年まで、『探検』（朋文堂）という本格的な雑誌を発刊された。

戦争がひどくならないうちに、加納さんは札幌に疎開され、北大に勤められた。その頃の手紙は戦時検閲があったが、これはすでに清書をして、北大出身の林和夫さんにお送りしてあり、いずれ上梓されよう。

一九五五年来阪され、旧ケルン同人らと淀屋橋の舟料理の柴藤で久闊をみたした。その後一度来阪されたが、堂島辺は高速道路となり、重そうな靴をはいていた師は、土倉九三さんと、桂の御本家へ帰宅された。

一九五六年、藤木九三さんが、南極探検局に勤務され、加納さんは永田隊長の顧問にむかえられ、駿台荘で佐伯富男と同席したと記憶する。トンコは北大出身であるが、加納さんの宅の居候であったようである。

御家族、敏子夫人は、藤沢市辻堂におられるが、師のお申出にもかかわらず、参上できなかった。御無沙汰の限りである。

加納さん御一家には、つきせない御恩恵をうけながら、その何分の一のおかえしもしてない愚鈍さを悔いるが、慙愧の至りである。

林和夫さんの編集される御本には、書簡類一切をお渡ししたので、併せて御引見賜れば、師の面影をおったえできるものと思う。

加納さんの御霊は、両極の彼方を守護するであろうと思う。みたまよ安らかなれ。

合掌多謝　謹言。

日本山岳会入会一九一八年十月（会員番号六三四）。一九七三年十一月名誉会員。

〔田中栄蔵〕

川崎吉蔵氏（一九〇七～一九七七）

川崎吉蔵君は昭和五年早稲田大学山岳部を卒業したぼくの同期生であった。卒業を間近に控えたある日、山岳部の部室で、俺は卒業したら山の雑誌をつくることに決めたから、よろしく頼むよと云う。そのとき、現在も使用されている「山と渓谷」というあの書体の写しだか原画だかを見せてくれたような記憶があるようでもあり、また錯覚のようにも思えるので、確かなことは云えないが、雑誌のタイトルが『山と渓谷』であり、すでに田部重治先生から、先生の著書の書名を拝借する許可も得ているのだという川崎君の話に、これはもう彼の夢ではなく相当に具体化しているのだなと、感心させられたことだけははっきり憶えている。

昭和五年といえば不景気のどん底、就職難の最も深刻だった

ときである。就職先を探すのも大変だったが、登山の専門雑誌の刊行という、前人未踏の天地に徒手空拳で飛びこんで行こうというのも、大冒険であるとぼくは思った。

しかし卒業して二ヶ月目の五月中旬には、彼の宣言通り隔月刊ではあるが『山と渓谷』が見事山と渓谷社なるものから発行された。山と渓谷社といっても社員は彼一人で、原稿集めから編集販売の一切を一人でやってのけた。

ぼくや山仲間の誰しもが抱いていた大きな不安をはねとばし、五〇〇〇部刷った創刊号は四日で売切れ、三版目も一週間で品切れになったというから、登山者大衆の歓迎ぶりに彼自身も驚いたのではないかと思う。

創刊号の編集後記に彼は「もう出るか、もう出るかと待ちわびていた山岳専門雑誌を皮肉にも自分で出すようになってしまった。これも山には切れぬ因縁とあきらめてせいぜい勉強する」と記しているが、一般登山者にとって、山の専門雑誌の存在が必要なのだということについては、彼は学生時代から彼なりの考えを持っていた。

それは彼の記した創刊の言葉にも遺憾なく表現されている。まだ書生ッ気の抜けきらない文章だが、彼の理想ともいえるものが行間に読みとれるのである。わが国の登山文化史上、記録に残されてもいいものだと考えられるので、その一部を紹介しておこう。

「輓近に至りまして本邦登山界の急激な飛躍的発展は実に自覚しいものです。然しその発展過程の裏面には常に真面目な登山者群の実践的研究が、不断に積まれて来ていたことを認めねばなりません。

然し遺憾なことは、それら登山者群が発表機関をたった一つしか持っていないか、又は全然何も持合わせていなかったことです。例えば何々大学山岳部又は何々山岳会の機関誌は、それらの山岳部や山岳会の機関誌として、その陣営に立てこもっている人々のみの発表機関だったに過ぎません。

なお我々は世に発表機関を持合わせていない為に、お互いに研究し合わばならぬ多くの事柄を、そのままお互に見過してしまっている事実を遺憾とします。あらゆる立場に立った『山岳専門雑誌』出でよ！　は我々の多年痛感して来た事柄です」

そして各山岳部や山岳会の優秀な人々の文献や、発表機関を持たない人々の研鑽を一つの誌上に包括発表することを大きな特色とすると述べた後、彼はその生涯を通じて持ち続けた出版人としての理念を、早くも創刊の辞の中に表明していることにも注目したい。

つまり優秀な文献を求めて勉強しようとする登山者には経済的負担が大きすぎる。単行本は高いし、年報にしても決して安くはない。だから本誌はあらゆる層の優れた人々の文献を一冊にまとめ、徹底的な廉価で提供したいというわけである。

こうした考えは後年になっても変らなかった。長いこと『山と渓谷』の編集長をしていた現広告部長の岩間正夫氏から聞いた話だが、川崎君の頭の中にはいつもあらゆる層の登山者があった。できるだけ多くの登山者のためになるような仕事をしよう、だから出版物は可能な範囲において定価を押えようという姿勢を崩さなかったそうだ。四十一年『山渓カラーガイド』シリーズを刊行したときも、こんな安い値段じゃとてもできないという印刷会社の再三にわたる反対を彼は頑強につっぱねた。そしてその廉価さが物を云って大成功を収めたという。

江戸ッ子らしく鼻柱の強いくせに、いかなる場合も表面に出ることを嫌ったのも彼の山男らしい一面であった。前に掲げた創刊の言葉にも、編集室よりと題する後記の中にも、川崎吉蔵の名は一切出ていない。彼が署名入りで発表したのは、創刊三十五周年記念号から連載し出した「おちこちの人」と題する山渓四十七年の追想記だけで、それも編集者から強引にすすめられてやっと納得したという。それ以外は大森三郎のペンネームを使って健筆を振っていた。

「おちこちの人」は加納一郎氏の一三七回が最終回となったが、その同じ号に彼の訃報が伝えられようとは彼自身夢想だにもしなかったであろう。

彼の死はそれほど唐突だった。恐らく万年青年といわれた元気な彼を知る誰もが自分の耳を疑ったにちがいない。五十二年八月二十四日、海外旅行や登山記をまとめた『世界を駆けめぐる』の第二巻を自宅で執筆中倒れたのである。六十九歳であった。

その一ヶ月ほど前には妙高、火打に登り、八月はじめにトルコへ旅して帰国したばかり。振り返ってみると、晩年の約十年間、彼は精力的に旅に出ていた。アルプス、ネパール、南極、アイスランド、アフリカなど海外旅行だけでも六十数回を数えた。未知の世界に対する青年みたいな憧れをまだ失なっていなかったことを、自分の撮ってきたスライドの説明をする彼の言葉の中に、ぼくは幾度か発見して微笑んだものだ。

『世界を駆けめぐる』は三冊でも四冊でも書けたであろうに、第二巻の半ばにして絶筆となったことは彼としても不本意の極みだったにちがいない。恐らく天国へ行っても、彼の夢は枯野ならぬ氷河や砂漠や密林の中を、駆けめぐっていることだろう。

彼はぼくより一ヶ月遅く明治四十年十月十五日東京芝に生れた。次男隆章氏に次ぐ三男坊で攻玉社中学時代から山登りに熱を入れた。昭和五年早大専門部政経学科卒業と同時に単独で山と渓谷社を創立。十五年には株式会社として社長に就任、五十一年十月令息の吉光氏にバトンをタッチして会長の椅子におさまるまで、実に四十有七年間社長として『山と渓谷』や『岩と雪』などを育て、数え切れぬほど多くの山岳図書を出版し続け

た。

わが登山界の発展に貢献するところ極めて大なるものがあったことはもち論だが、出版界でも戦前から山岳図書一本で押し通してきた彼は、長老的存在として評価されていた。川崎吉蔵の生涯は『山と渓谷』の歴史そのものといってもいいだろう。その間幾多の有能な編集者を育てると共に、多くの秀れた登山家を世に送り出したことも、彼の大きな功績の一つだと思う。惜しい会員を失なったと残念でならない。

日本山岳会への入会は大正十四年（会員番号九一八）後年一時会籍をはなれ、昭和四十五年復活。〔渡辺公平〕

伊藤弥十郎氏（一九〇三～一九七七）

私が伊藤君にはじめて遇ったのは大正十四年の十月十七日、燧岳の中腹であった。そのとき私は頂上に登ろうとし、彼は長蔵小屋を目指して降りてくる途中だった。

その夜は二人とも長蔵小屋に泊った。私は早大山岳部のパーティーの一人で、数人の部員と共に尾瀬から日光への山旅の途中だったが、互いに気心が合ったというのか、それから彼は八丁湯をへて日光までわれわれ一行と行を共にした。そしてこの尾瀬でのめぐりあいが、生涯にわたって結ばれた彼との親交の出発となった。

それから五十年の年月が流れた昭和五十年私達二人は尾瀬へ旅をし、長蔵小屋で楽しく語りあった。その旅は伊藤君の発案によるもので、半世紀前のことを偲んで、もう一度尾瀬を歩こうじゃないか、という話。私もそれはすばらしいプランだと思い、季節もだいたい同じ十月の十八日、紅葉燃える沼山峠を越えて尾瀬に入った。ともに七十歳を越えていたが、よく飲みよく語り、こんな楽しい山旅は最近なかった。

私は五十年前の尾瀬行の記録の載っている早大山岳部報『リュックサック』の第四号をザックの中に入れていって、それに記念の寄せ書をしたが、その欄外に平野長英氏が「父逝きて四十五年経ちにけり小屋守りきてわれも老いたり」なる感慨を書いてくれた。

伊藤君は福島県の人間だから不思議ではないが、妙に尾瀬に因縁のある男だ。私たちがはじめて遇った翌年の大正十五年の秋、長蔵小屋で本会々員の額田敏さんに遇い、また意気投合して日光まで行を共にしている。

額田さんが福島支部の武藤清次氏に寄せた思い出の記によると、伊藤君は一人で沼山峠を越えて長蔵小屋へやってきた。そしてちょうど燧岳から下りて来、囲炉裏にあたっていた額田さんに、福島の伊藤ですと自己紹介したという。

「頑丈な体格ながらも、どこか純情な青年」とみた額田さんと彼とは話が合ったのであろう。その時共にした山行が終ってからも、三月の尾瀬をはじめ八ヶ岳や吾妻のスキー登山など方方への山行を共にした。そして昭和五年二月には額田さんと藤島敏男さんの紹介で日本山岳会に入会した。会員番号は一一三であった。

彼は明治三十六年二月二十二日、福島市の有名なそばの老舗「喜多屋」に生まれた。大正七年福島市立福島商業学校を卒業してから昭和六年までは家業に従事したというが、大正十一年の夏、高湯から一切経山—ぬる湯—高湯と歩いて以来山にとりつかれ、爾来病に倒れるまで県内、東北の山はもちろん南北アルプスや八ヶ岳の峰や谷に足跡を残した。

戦前の彼の登山の中で、ひとつ注目したい山行がある。それは昭和三年二月の八ヶ岳行である。彼はパートナーの額田さんと二人で本沢温泉から登り、硫黄岳の頂上で慶応の大島亮吉氏らのパーティーに遇った。そして彼が自慢の高級カメラで記念撮影をして別れたのだが、それから一ヶ月ほど後、その大島さんは穂高で遭難、帰らぬ人となってしまった。

大島さんの名著『先蹤者』の巻頭に挿入された「著者遺影」が、この記念撮影の写真からとったものであることを知る人は案外少ないのではあるまいか。『先蹤者』は昭和十年七月に刊行された大島さんの遺稿集だが、その「編者のことば」の終りの方に、編集に協力してもらった人々の氏名があげられており、その中に、槇さんや松方さんの名前と共に伊藤弥十郎の名が並んでいるのは、そのためである。

いまひとつ、昭和五年の八月、吾妻山最悪の沢といわれる中津川渓谷の完全遡行をなしとげたことも、彼の山行の中で特筆すべきことであろう。

戦後、昭和二十二年十二月、日本山岳会の福島支部を創立してその支部長に就任してからの彼は、支部の発展のため、また地域社会における登山界のために東奔西走した。二十三年十二月には福島県山岳連盟の会長にもおされ、同県山岳遭難対策協議会の副会長も勤めた。四十七年彼が内閣総理大臣賞をもらったのは、遭難防止及び遭難救助活動に尽した功績によるものである。

頑固で強情で一度こうと決めたらなかなか妥協しない明治の人間であったが、実に愛すべき性格の持主で、支部の会員からも、また山岳連盟の後輩たちからも敬愛され、信頼されていた。日本山岳会にとっても、日本山岳協会にとっても東北の名物的存在となっていただけに、その死が惜しまれてならない。

略　歴

明治三十六年（一九〇三）二月二十二日　福島市本町、そばの老舗「喜多屋」に生る。市立第一小学校より、県立福島商業学校に学ぶ。

昭和五年（一九三〇）二月　日本山岳会入会（会員番号一一一三、紹介者、藤島敏男氏、額田敏氏）
昭和二十二年（一九四七）十二月　日本山岳会福島支部創設、支部長に就任。
昭和三十二年（一九五七）八月　福島県知事賞。
昭和四十三年（一九六八）八月　厚生大臣賞。
昭和四十七年（一九七二）七月　内閣総理大臣賞。
昭和四十八年（一九七三）十月　文部大臣賞。
昭和四十八年（一九七三）十一月　紋勲、勲五等瑞宝章。
昭和五十二年（一九七七）九月六日　逝去。行年七十四歳。

山　歴

大正十一年（一九二二）夏　高湯―一切経山―ぬる湯―高湯を踏破して以来、山につかれる。
大正十二年（一九二三）　白馬、槍。この年よりスキーをはじめる。
大正十四年（一九二五）七月　烏帽子、槍、穂高を案内人北沢定次と共に縦走。十月、田島―尾瀬―八丁湯―日光。
大正十五年（一九二六）秋　銀山平から尾瀬沼への単独行の折、長蔵小屋にて、額田敏氏と逢い日光まで行を共にする。
昭和二年（一九二七）春　八ヶ岳スキー行。七月、笠、双六、槍、穂高縦走。案内人今田由勝。
昭和三年（一九二八）二月　硫黄岳頂上にて大島亮吉氏一行と逢う。七月、北沢小屋をベースに甲斐駒、仙丈等をあるく。
昭和五年（一九三〇）八月　吾妻山最悪の沢、中津川渓谷を完全遡行。
昭和五年以降　県内、東北の山々を愛し、夏、冬を問わず、病に倒れるまで歩き続けた。

〔後藤幹次〕

保泉利喜之助氏（一九〇三～一九七七）

山岳人としての保泉利喜之助君については、早稲田の古い山仲間や、埼玉県の行田市付近の方々以外には案外知っておられる方は少ないと思う。一九三〇年入会、会員番号一二六四番だった保泉君は、入会当時は安田君といっていて、古い仲間のあいだでは安田君で通っていた。

その保泉君と最後に出会ったのは昭和五十二年四月二十七日上高地の河童橋でだった。丁度、この日第十一回目の上高地開山祭が行われている最中だった。たしか山岳会会員の大野俊夫さんが、早稲田の連中も大勢見えていますよと云われるので、五千尺前の橋の石段の上部を見ると、長島春雄君や和田一男君といった連中にまじって、祭の行事を見守っている保泉君を見かけたのだった。かつて上高地で彼と過した日を回想して、懐

しさ人一倍だった。あれから後、たしかに五十年をはっきりと経ているが、なつかしい上高地で再び相まみえる事のうれしさなつかしさ。あれは大正十四年の十一月だった。あの時、仲間の藤田信道と三人で、初冬の穂高へというので出かけた。保泉君は入営するというので一足早く帰ったが、藤田と二人で、徳本への別れ道まで送って行ったが、途中まで、常さんこと内野常次郎君が鉄砲を肩にして一緒に行ったのが思い出される。あの時の別れの情景を、藤田は何かに詩情あふれる筆致で書いていたのを思い出す。

それから以後の、昭和になってからのこまごまとした彼の山歴の事は知らない。東京でたまに会合がある時に行き合わせたが、共に山を歩くことはなかった。古い行田の足袋屋さんの子息だった彼の事は、福助足袋の社長だった故辻本英一君が、まだ部屋住みの頃、行田の安田君という足袋屋さんで山をやるのを知っているが四谷君の仲間だったそうだねとの事で、辻本君と一層親しくなったものだ。その辻本君も山とスキーが好きだった。

その保泉君については知る人はあっても、彼の残した目星しい山行については知る人は少いと思う。彼の山行については、ものの本によって既に知る人もあると思うが、追憶のままに少し述べて見ようと思う。

話は古いことに遡る。これは大正十四年の秋の話だ。その年の春三月には、彼保泉君は、先輩舟田三郎さんリーダーのもとに、その月の二十一日、第二登ながら積雪期の奥穂高岳へ二人で登っている。それに又彼は、その同じ年の七月に穂高の飛騨側の一つの谷、柳谷を書上喜太郎先輩をリーダーにして、今田由勝君と三人で西穂高から奥穂へと登っている。これは穂高の飛騨側の谷の一つの初登攀である。だからこの年の秋十一月に私と共に、穂高へ這入るまでに、春には舟田さんと雪の奥穂高へ、夏には書上さんと西穂高へと、穂高へ再々のお目見得だった。彼の穂高行は前年の大正十二年の七月の山行に始まる。この時はリーダーに会田次郎さん、同行者の中に山形の後藤幹次君もまじっていて、針ノ木、剣、薬師、槍、穂高と約半ヶ月の山旅をやっている。話のついでだが、『穂高星夜』という本が山崎安治君によって著わされているが、別に同名異文の名文が書上喜太郎先輩によって書かれていて、早稲田の『リュックサック』第四号に、「柳谷より西穂高を経て奥穂高へ」の文章と共に掲載されている。その書上さんの名文「穂高星夜」は、当時の安田君、即ち保泉君と共に暮した奥穂高小屋生活と柳谷登攀の所産だったことを忘れることはできない。その同じ『リュックサック』第四号に、保泉君は「谷」という文章を書き、舟田さんの「穂高岳―冬―」の文章の中にも一章を書いている。

そしてこれから回想しようとする大正十四年の秋の話であ

る。さきにも述べた、保泉君が河童橋の畔りで五十何年振りに仰ぐ穂高だったが、そしてその時、又来年も、この上高地の開山祭に同行しようと願い合い、誓い合って別れたのだが、その日から僅か三ヶ月半そこそこの八月五日、彼は七十三歳、脳血栓症で逝去されたことを、岳友小島六郎さんからお知らせを受けたのだった。

ところで、この文章にも既に登場した山仲間の一人に藤田信道という男がいたことを述べたが、その彼が、山岳界というものと縁を断ってから四十何年、世を去ってからも二十年もたっている。彼と保泉君と三人で行った一九二五年の秋の追憶である。この追憶は、保泉君と藤田と私と三人の間だけのものだった。このことは石岡繁雄さんがその近著『屏風岩登攀記』(碩学書房、昭和五十二年十二月出版)の二九二ページに、屏風岩登攀小史の中に現われて来る次のところ、「(1)大正十三年七月七日・八日青木勝、大賀道昺、佐藤久一郎、慶応稜、(2)大正十四年十一月十日四谷、藤田、保泉、ルートは不明だがB11あるいはB10を経てT2に達したと思われる……」、そして又、『リュックサック』第五号一五八ページに「初冬の槍穂高行、十一月十日屏風岩に登攀を試む」とある、たったそれだけが私達の屏風岩に挑んだ記録と云えば記録にすぎなかった。

彼とは出会う毎に、「あの時は、よくやったね。あの時の恐ろしさは誰も知るものはない。生きていてよかったね」と、五十何年後まで云いあったものだった。そして又、昭和四十九年十一月十二日大沢小屋へ集合して、昭和二年の針ノ木峠雪崩遭難追悼の集いの時に、小屋の前で万感をこめて交わした二人の握手のそこに秘められた言葉、「生きていてよかったね」だった。

さて屏風に挑んだ前夜、屏風の前の岩小屋で共に過したのは、私達三人の他に、その頃槍沢小屋と大槍小屋の主人だった穂苅三寿雄さんと、松本の人二人と、蒲田の松井憲三、有明の大和由松の五人連れとだった。私達が屏風をやるというので、皆いろいろと注意をして呉れた。あそこへ行くまでは、第一ルンゼということで三人の気持は定まっていたのだが、屏風岩と面と向い合ったその時、誰からともなしに「どうだあの正面は」、「バンドが縦横に続いている、うまく利用して伝って行けば、相当のところまで行けるのじゃないか、うまく行くと一晩ぐらい寝て登れるのじゃないか」、双眼鏡で憲三と合わせて四人で夕やみ迫る頃迄、ルートファインディングをつづけるのだった。そして最後に、とにかく正面の壁に取り付いてやろうということで一致した。

十一月十日、穂苅さん一行は涸沢へ、私たち三人は偵察しておいたルートをめざしての出発だった。うるさく、わずらわしいボサを抜け、そこから急な草付を登って辿りついた岩壁の下部、そこはもう相当高いところだった。トップは保泉君、ミッ

テルが私、藤田君がラスト。最初のうちは、昨日マークしておいたところと思われる辺りを辿っているはずだったが、あやしくなってしまった。若い頃は、これこれこうしたところと話もできたものの、五十年もたつと、ある部分はいきいきと回想もできるが、あの日のなつかしさ、恐ろしさ、よくも、あのような無謀に等しい事をやろうとしたものだと思う。とにかく、私達が辿ったルートや、最高到達地点は一体どの辺りだっただろうかと、いつもしげしげと見上げるのだった。

急なところでは、先頭の保泉君の姿がかくれて、ザイルだけが、ズルズルと延びて行った。「よーし」という声が聞こえて来るまで、相当時間がかかったこともあった。何の木だったか、その根っこを利用してのビレー、しかし、しゃにむに強引そのものの登攀だった。とにかく、苦しい荒っぽい妄挙に等しい登り、ようやくたどり着いた一つのせまいテラスのようなところ、そこから一～二メートル離れて幅二～三〇センチの傾いた細いバンドが斜め左上方に向ってつづいていた。そのバンドは二〇メートルぐらいはあっただろうか、その上方には、ちょっとした茂みが見上げられた。それは麓からの偵察で見定めていたもののように思われた。とすると、その茂みの付近から斜め右上へとれば、比較的楽にルートが取れるように思われるところだった。三人は、まったく、いささかのためらいも、不安をも感じないで大胆に、その細いバンドに取りつき始めた。わずかな岩の出っ張りを利用してのビレイをやりながらの前進だった。四～五メートルも進んで、三人がつながったザイルがいっぱい延びきった頃、ほとんど直立したような岩にピッタリと身体を寄りそえて立っている私たちの足の下のバンドそのものが、なんだか動くように感じられるのに気がついたのだった。

先頭の保泉君が「あぶない、だめだ」とまず声をあげた。「早くもどらないとあぶない」。下を見ると藤田の顔が蒼くなっていた。とっさに、ひらめいたのは、スタンスの崩壊！　しかも足下、目もくらむような下方に細々とつづく林道を見おろす場所である。「やられた！」そんな考えがちらっと頭のなかを走った。そこで動作するのも危険だと察知された。とにかく一刻も早くできるだけ静かに、スタート地点への後退である。ハーケンを打つなんてこと、それは崩壊を思わせられる。先ず先頭の保泉君から後退を開始、その間にも岩がゆれる感じだった。でも静かに、隔時に行動して、とにかく確実に後退をつづけた。その四～五メートルを後退する時間の長かったこと、しかし実際は緊張の一瞬としか感じられなかった。漸くの事で、まず藤田がテラスに帰着、とにかく一人がはっきりとビレイの出来る地点に帰着したのだった。つづいて私が、そこでいよいよ最後の保泉君だけとなった。その位置は、テラスの斜め上方にあって、その間が切れ込んでおり距離があった。登りには人間バシゴで行けたが、下りはそれができ無い。そこで、藤田と

私の二人で確保、こちらへ飛び移れということになった。保泉君は真蒼な顔をして「だいじょうぶか」を繰り返えした後、ついに意を決してこちらへ飛び移ったのだった。

その瞬間、彼が今まで立っていた岩、つまり、いままで三人が伝わっていた、そのバンドそのものが、ちょうど私達が伝わって行った部分くらい、轟然と音をたてて崩れ落ち始めた。まず一部分が、そして、それに続く部分がくだけて、空間遠く、或いは高く、バウンドしながら飛び交いながら全屏風岩をゆるがすような物凄い音をたてながら、果ては、凄い岩のツブテの雨となって、遥かな下へと落ちて行ったのだった。そして、私達の屏風岩試登の一幕は終った。

音と共に落ちるだけのものが落ちつくしてしまうと、再び静寂が帰って来た。それと共に、それ迄、はっきりと感じなかった恐ろしさを身にしみるように感じはじめ、同時に身体のふるえを感じたのは三人同様だった。助かってよかったね、と、同時に、とにかく、登れなかったにしても人間が触れたことのなかったところへ、触れたことの事実を三人で味わった。その味わいを、大切に持ちつづけて来た。その一人の好い仲間だった保泉君、謙虚な人柄の山岳人、を今更のようになつかしまれるのである。あの屏風岩試登からの後、数日、彼と二人で、大槍小屋で吹雪の中での篭城、二人で試みた新雪の北鎌尾根、北鎌の氷に彼のピッケルが挑んだことを知っているのは私だけである。あれからもうまる五十三年になる。それでもまだこれからと思っていたのに、人はわからぬものである。つつしんでご冥福をお祈りしよう。

略　歴

明治三十六年十月三十一日生。
大正十一年三月　早稲田実業卒業。
昭和二年三月　早稲田大学政治経済科卒業。
昭和四年三月　歩兵少尉。
昭和五年十二月　日本山岳会入会（会員番号一二六四）。
昭和十六年三月　山海（満州支那国境）赴任。
昭和二十三年より　若葉保育園長。
昭和三十五年より　株式会社保泉商店社長。
昭和四十年　埼玉県行田市教育委員長。
昭和四十二年　埼玉県行田市議会議員。
昭和五十二年八月五日　脳血栓症で死亡。

〔四谷竜胤〕

中野征紀氏（一九〇四～一九七八）

中野さんは去る二月二五日癌のため七三歳で逝去された。主

名誉会員　加納一郎氏
Ichiro Kano (Hon. Mem.)
(1898～1977)

川崎吉蔵氏
Kichizo Kawasaki
(1907～1977)

保泉利喜之助氏
Rikinosuke Hozumi
(1904～1977)

伊藤弥十郎氏
Yajuro Ito
(1903～1977)

中野征紀氏
Seiki Nakano
(1904～1978)

可知邦成氏
Kuninari Kachi
(1903～1977)

安川茂雄氏
Shigeo Yasukawa
(1925～1977)

沢田武志氏
Takeshi Sawada
(1911～1977)

永井清一氏
Seiichi Nagai
(1899～1977)

岡本俊彦氏
Toshihiko Okamoto
(1928～1977)

なる山歴は、北大山岳部での活躍、第一次南極越冬隊のドクター兼副隊長、北大チャムラン遠征隊長等、地味なものであったが、北国に中野チョーハツありとして、知る人ぞ知る的存在であった。

北大には、古くは板倉勝宣氏あたりから、加納一郎、伊藤秀五郎、沢本三郎、坂本直行氏など個性的な先輩が多い。しかし正式に山岳部となってからの五〇年間に席を置いた部員にとり、実力あるクライマーとして、また親分・兄貴分としての中野さんの存在は大きかった。その度外れの肝の太さ、剛毅果断、男の中の男といった人柄と風貌は誠に大きな魅力であった。筆者などは中野さんを知っただけでも、北大山岳部に席を置いた甲斐があったと感謝している。ここに許された紙面を借りて、ありし日の中野さんの姿を伝え、追憶したいと思う。

〈北大山岳部で〉

中野さんが現役として歩いた頃の北海道の山々には、まだまだ原始性が残されていた。予科から学部を出るまでに七年あれば済む医学部に、十一年間も腰を据え、その間心置きなく山を歩かれた様である。筆者が北大に入った昭和九年には、中野さんはまだ現役のおっさん学生であった。その年の夏、筆者等四名は日高山脈に入り、初めての大きな山歩きをした。もちろん道も小舎もない当時で、二週間の縦走は新人にとり苦しかった上に、最後にルートをとりちがえ、遭難事故となった。結果はリーダーの処置がよかったのと、全員が頑張り、最後の一日分の食糧を五日間に喰い延して助かったのである。このとき捜索隊を編成して迎えに来て呉れた、坂本直行さん、中野さん、その他の先輩の頼り甲斐のある男らしさに魅せられて、懲りるどころか、生涯山登りのとりことなったわけである（うち二名は後年雪崩で生命を落すことになる）。

その折、ふらふらになりながら最後の渡渉をして捜索隊の焚火にたどりついたとたんに、真白な握り飯と、岩魚の塩焼が飢えた眼にうつった。こう言う状況では普通お粥から始める相だが、中野ドクターの顔を見ると「ああ喰べろ喰べろ」と言う。喜んでがつがつと口に入れたが、収縮した胃袋が受けつける筈もなく、たちまちげえげえと吐いてしまった。すると中野さんは「ああそうなるんだ。よしよし吐き出せ」と言ったものである。

一体こういう無頓着、おおらか、乱暴とも思える中野流の言い方には一種のユーモアと風格があった。翌年夏同じメンバーで日高の悪い川に入ることになり、前に一度そこを通った中野さんに様子を聞きに行った。不完全な地図の上で、手に取る様に克明に教えて呉れた。「この函は右岸をちょいちょいと捲けばよし、次の滝は左側をすいと登ればよい」といった調子で、要するに大して難しくはないと言うわけ。さて実際に歩いた結果はどうであったか。函の位置も大分ちがうし、ちょいちょい

のすいには程遠い悪戦苦闘の毎日で、長雨にもたたられて敗退した。あまりのことに、札幌へ帰ると厳重抗議をしに押しかけた。そのとき中野さんは少しもあわてず「そうそう、あの川はひどく悪い川でねー」と言われ、てんで歯が立たなかった。

当時の北大にも、山岳部にもリベラルの気風が強く、上級生が威張ったり、形式的なしごきをするなどのことは無かった。大きな山登りでは、リーダーが一番たくさん荷を背負い、へばった新人を天幕に休ませ、数百メートル下の雪渓まで下ってめしを焚いて来て呉れる。新人はたちまち敬愛の念を深め、早く強くなりたいと願う。などと言うやり方は、中野さんあたりの影響が大きかった様に思える。

中野さんは一九六三年北大の若者をつれて、ネパールのチャムラン（七三一九メートル）に出掛けた。あまり様子のわからないチャムランに近づくまでの偵察、登路の発見、そして初登頂の全てを一回で果して、珍しい成功を得ておられる。アプローチに手間取って、日程も食糧も不足を来たし、また隊員の大部分が体調を悪くし、登頂は不可能と思われた。このとき五七歳の老隊長自らがよい登路を見出して、六三五〇メートルまで試登し、隊員を叱咤激励、最後の登頂隊を出発せしめた。安間隊員とサーダーのパサン・プタールが長時間の努力の末、ついに頂上に立ったのである。

〈南　極　で〉

敗戦の打撃から立直って間もない頃、我国も南極観測に参加しようという気運が盛り上って来た。そして種々の曲折を経てついに実現することになり、中野さんもドクター兼副隊長として参加されることになった。時に一九五七年二月、中野さんは五二歳であった。

筆者は、今回あらためて西堀さんの「南極越冬記」（岩波新書）と中野さんの「南極越冬日記」（朝日新聞社）を読み返してみて、越冬の苦心、自然の様相、隊員の心のふれあいなどに興を新しくした。西堀さんの科学する心、合理化精神、何でも見てやろう根性は素晴しい。マナスル遠征が実現するまでの努力、南極行が実行に移された事情等は、西堀さんなしでは考えられない。しかし、その反面ややきゅうくつで煙ったい隊長であった様である（年令差や隊長と云う肩書きのせいもあろうが）。マージャンぎらいと云う一項目を設け、この様な科学の宝庫に入っていくらでも学問の対象は多いのに、マージャンとはと嘆いておられる。

一方中野さんの日記には「この日西堀早く部屋にひきあげたのでジャンをやる。彼は能率協会員だけあって一瞬も漫然としていないで研究している。感心なものである」などとある。中野さんは越年中よく酒も呑み、マージャンや碁で遊んだ様である。帰国後の話で、南極観測は始まったばかりの気長な仕事であり、今回はともかく隊員がゆったりした気持で、健康で春を

迎えて呉れればよい、と考えておられた様である。そのために故意にも隊員をリラックスさせようとされたらしい。

火事の話は物凄い。七月二四日闇の中でストーブの失火から火災発生。西堀さんとしては、貴重な資材を失う恐しさは考えたが、熱のためふくらんで今にも破裂しそうな軽油のドラムカンを見ては、隊員の安全を考えて、一同に待避命令を出すほかなかったらしい。しかし、中野さんは真先に敢然としてとび込み、熱いドラムカンを助け出し、雪をぶっかけたら、ぽこんと音がしてカンのふくれが引っ込んだ相である。引続き他の隊員もとび込んで奮闘し、大事に到らなかった（この場面は中野さんの本では簡単にしか書いてない）。

あれやこれやで、西堀さんは、中野さんが居て呉れてどれほど助かったことかと喜んでおられるし、中野さんにとっても、この南極での生活は生涯のよい想い出となられた様である。なお、南極では、中野さんは昔のあだ名の通り長髪にし、それを後ろで束ねて宮本武蔵の様な姿で過されたらしい。

〈樺太医専教授時代〉（医師としての中野さん）

ドクターとしての中野さんの腕前については「チョーハツの手にかかってはたまらんから身体には気をつけろ」などと冗談がとび、南極でもそのせいで病人が出なかったとの説がある。しかしあの温い人柄と、剛毅な気質から考えてもわかる通り、立派な外科医であった様である。第二次大戦の末期、樺太に医専が出来、昭和十九年秋中野さんは外科の教授として赴任された。しかし間もなく翌年八月敗戦、ソ連軍が乱入し、大混乱におちいった。このとき数少い外科医として非常な活躍をされた。そのあとはマージャン、碁などたのしみながら悠々として時を過し、三年後の昭和廿三年春、看護婦や患者を守って最後の引揚船で帰国された。当時の様子については、北大の有馬英二教授（故人。樺太医専学長を兼任。息洋君は昭和十五年一月ペテガリ登高中雪崩で死亡）から後年になって「中野は落第生で仕様がないと思ったが、樺太の敗戦と引揚げでは立派に振舞った。あれは大した男だよ」と伺った。

今はまぼろしとなった、そしてあまり人に知られていないことなので一筆した。

〈終　焉〉

昭和五一年夏、膀胱癌であることがわかり手術をされた。発見が早かったので間もなく職場（本州製紙診療所長）に復帰され、また余暇に畑を耕したり、お孫さんと遊んだりして、回復されたかと見えたが、やがて再発した病には勝てず世を去られた。追悼会の折、西堀さんが「中野君のことだから、自らの命運を知り、悠々として去ったことと思う」と追悼して下さった。しかし奥様やお嬢様に伺ったところでは、病が重くなってからは気難しく、手がかかってちょっと困りましたとのことであった。あの強かった人も、病んでは奥様や身近な方に苦痛を

訴え、甘えたかったのかと思うと、むしろ中野さんの人間らしさに触れた想いで、親しみを憶えるとともに、悲しみを新しくした。

去られて三ヶ月、再びお会い出来ないと思うと切ないが、しかし人間として山男として、立派に生きた証を残されたことに感謝し、心から御冥福を祈るものである。

略歴

明治三七年七月　熊本県天草郡宮地村にて出生。
大正一三年四月　北大医学部予科に入学し昭和一〇年三月卒業
引続き医学部に勤務。
昭和六年四月　日本山岳会入会（会員番号一三〇一）後年、評議員、北海道支部長等を歴任。
昭和一九年九月　樺太医専に教授として勤務。
昭和二三年五月　引揚げ。
その後、札幌保全病院、帯広厚生病院等の勤務を経て、昭和三四年六月本州製紙診療所長（釧路市）となる。
昭和五三年二月二五日　膀胱癌のため現職のまま逝去。故郷の熊本県天草に葬られる。

登山歴

昭和二年　一月―暑寒別岳、七月―北ア槍、穂高岳。
昭和三年　一月―蝦夷富士、三月―武利岳、三月―斜里岳。
昭和四年　七月―大雪山、九月―芦別岳。
昭和五年　五月―石狩岳、七月―南アルプス赤石岳、八月―穂高岳。
昭和六年　三月―ユーラップ岳、四月―芽室岳、五月―大雪山、七月―白馬岳、針ノ木峠。
昭和七年　二月―天塩岳、三月―クマネシリ岳、四月―暑寒別岳、七月―ポロシリ岳、八月―アポイ岳、一〇月―ニセイカウシュペ岳。
昭和八年　二月―中ノ川溯行、八月―神威岳、八月―札内川上流の山、一二月―札内岳。
昭和九年　七月―ペテガリ岳、八月―チロロ岳。
昭和一〇年　五月―ヌプチミップ岳。
昭和一一年　二月―増毛山塊、ピンネシリ岳、五月―ペンケヌシ岳。
昭和一二年　五月―美生岳、七月―ペテガリ岳、一二月―神威岳。
昭和一三年　八月―ペテガリ岳、九月―大雪山。
昭和一四年　五月―芦別岳。
昭和一五年　八月―台湾大覇尖山。
昭和三二年二月から翌年二月まで、日本南極地域観測隊第一次越冬隊にドクター兼副隊長として参加。
昭和三七年三月より六月まで、北大ヒマラヤ遠征隊長としてネパールヒマラヤのチャムラン（七三一九メートル）に登高し

成功。

（中野さんは戦後国内で多くの登山をしておられるが、詳細不明であるため省いた。）

〔林　和夫〕

追悼

可知邦成氏（一九〇三～一九七七）

札幌、いな北海道の山岳功労者である可知邦成氏の追悼を記すのは、私にとっては非常に荷が重く、不適格者ではあるが、会員のなかから執筆者を得られないまま原稿の締切日を迎えてしまったので、私的な追憶を加えて述べてみたい。

私が可知さんに始めてお会いしたのは、昭和二十七年四月で、札幌近郊の砥石山に札幌山岳倶楽部主催の残雪登山会に参加させていただいたときであった。会長である可知さんがわれわれ新参者に、登山の意義や初歩的な登山技術について懇切丁寧に諭され、技術指導をして下さった。その後も大雪山や十勝岳の登山会に参加させていただき、山に対する感銘を新たにした。

一般社会人を相手に度あるごとに参加者を募り、それがきっかけとなって現在なお活躍している多くの山岳人を見るとき、可知さんが札幌山岳倶楽部を挙げて催された多くの行事に、敬意を表するものである。

その当時、札幌山岳倶楽部の月例会は札幌の円山近くの神道道場で催され、一、二度出席させていただいたことがあった。日本山岳会北海道支部が設立されて間もないこともあって、熱心に日本山岳会の機構を説明され、入会をすすめておられた。支部設立当時の『会報』一四七号（昭和二十四年十月）によると、北海道在住の入会者が四十六名も列記されているので、会員番号三五〇〇番を前後して相当数の入会者が居られるのも、可知さんらのご努力によるものであろう。

戦後いちはやく設立された日本山岳会北海道支部の設立前後の模様については、支部報『ヌプリ』七号（昭和五十二年九月）に可知氏が「戦後、北海道支部発足までの過程について」と題して詳しく述べられている。それによると、当時、国体運営や岳連組織の問題で、せっかく設立された北海道支部も、昭和二十七年十一月に北海道山岳連盟の結成に際し、山岳団体と個人会員の連繋対策などについて議論百出し、結論が出ぬまま支部は時期が到来するまで解散すべきであるとの意見の趨勢に押し切られ解散した。

その後、北海道在住の会員が百名を越し、再三にわたって支部設立の話は持ち上った。日本山岳会六十周年記念事業として、支部の無い地域には支部を設立し、各地で記念登山行事が行なわれた。当時、支部担当理事であった深田久弥氏が来道の

度に支部設立を強調され、その機はたかまっていった。

機熟し昭和四十四年七月六日に北海道支部は再出発し、中野征紀支部長のもとに可知氏は監事を担当された。そして支部の諸会合には卒先して出席され、とかくセクトになりがちな集会でも可知さんは誰へだてなく語りあい、古きよき時代の登山の姿をありありと私共に伝えて下さったり、よりよい支部作りに専念された。

晩年になって山岳団体の要職を退かれたが、日本山岳会に対してはことのほか熱意を持っておられ、他界されるまで支部監事を歴任された。これも心底から山を愛好され、生涯の糧とされた心意気からであったと思う。

可知さんが始めて山の洗礼を受けたのは、昭和二年六月のことで、知人に誘われて支笏湖を訪れ、雄渾な大自然の美しさに深い感銘を覚えたことに始まる。翌三年九月に大雪山に登り、その病い膏肓におちいり、同好の志を誘って北海道で最初の社会人山岳団体である「のぼらん会」を創立した。当時の山岳団体としては、大学では北大山岳部、職場では札幌鉄道局、北海道拓殖銀行、札幌ビール、帝国製麻、小樽の北海製罐などで、その他の団体はスキー団体としての性格が強かった。

現在の札幌山岳倶楽部の萌芽となった「のぼらん会」の設立の要旨は、登山を一部の特殊な人達のものから一般大衆にとっても、親しみ易いものとするために、登山思想の啓蒙、普及をはかるべく指導団体として活躍することであった。それも世代の推移に従って変遷し、会員の変動や主要幹部の移動に伴って会名も変転し、その後は「小羊山岳クラブ」「札幌山岳会」「札幌健歩協会」と変り、それは可知氏自身の苦難の道であったろうし、北海道における大衆登山のとまどいがちな歩みそのものであった。しかし創立以来モットーとしてつらぬいてきたのは〝大衆のための登山〟をめざして努力されてきたことである。

戦後は会名を札幌山岳倶楽部と改め、そこで育った優秀なクライマーのなかから「北稜山岳会」「札幌山岳会」「えぞ山岳会」が巣立っていった。

まさに北海道の社会人山岳団体を育成してきたのは可知氏であり、登山を健全なものとして導いてこられた。厚生省の提唱する「自然に親しむ厚生運動」の一貫として行なわれた野外教室の「登山講習会」は、毎年北海道林務部主管のもとに大雪山で行なわれた。実際の運営は札幌山岳倶楽部に委嘱され、二〇〇余名もの参加者を引率され、旭岳の大雪渓でキャンプしたこともあり、これら集団登山には多年の経験と実績をもって積極的に参画指導された。

後年、札幌山岳連盟会長、北海道山岳連盟副会長などを歴任され、北海道における登山界に大いに功績を残されて、札幌市体育連盟スポーツ賞、環境庁長官より表彰されるなど幅広いご活躍をされた。

略歴

明治三十六年九月二十一日　北海道常呂郡野付牛町（現在の北見市）に屯田兵として入殖した可知源一氏の長男として生る。日本大学専門部に学ぶ。
大正三年　陸軍に入隊。
大正十四年五月　北海道庁都市計画課勤務。
昭和二年二月　札幌市に勤務。
昭和二年六月　支笏湖探勝。
昭和三年九月　大雪山登山。
昭和三年　同好者と計って北海道で始めて社会人の山岳団体である「のぼらん会」（現今の札幌山岳倶楽部）を設立。
昭和十二年五月　第五回冬季オリンピック札幌大会実行委員会勤務。
昭和十七年十二月　日本山岳会入会（会員番号二二〇六）。
昭和十八年七月　大日本体育会北海道支部行軍山岳部幹事となる。
昭和二十一年五月　北海道山岳連盟を結成し理事長となる。
昭和二十三年五月　札幌市役所体育課体育係長となる。
昭和二十四年三月　日本山岳会北海道支部が発足し委員となる。

追悼

昭和二十四年十二月　北海道観光連盟に勤務。
昭和三十三年以降　神道系の宗教団体に奉仕する。
昭和四十三年　札幌市体育連盟スポーツ賞受賞。
昭和四十四年に始まった〝市民歩け運動〟に第一回から参加。
昭和四十四年七月　日本山岳会北海道支部が再発足し支部監事を歴任。
昭和四十七年　日本山岳協会より表彰。
昭和四十七年　国務大臣環境庁長官より表彰。
札幌山岳倶楽部会長を永年務める。
札幌山岳連盟会長を永年務め、晩年は名誉会長となる。
北海道山岳連盟副会長を十年務める。
日本山岳協会名誉指導員。
昭和五十二年二月十七日　心筋梗塞のため逝去。享年七十四歳。

〔高沢光雄〕

安川茂雄氏（一九二五～一九七七）

「月々多くの本を出してゆく本屋さんの編輯という責任のある地位にいて、一年じゅう席の暖まる暇もないくるくる舞の忙しい体でいながら、よくもこれだけの本を書いたり纏めたりする事ができたものだと、その校正刷を見せてもらって、先ず私の感心している安川君である。しかも此の本ばかりではない。

本職のほかにこういう事をやりながら、又別に、バルザックなんかの本格的な重い小説の翻訳もすれば、西洋の登山家のすぐれた著書なども立派に訳してのけるのである。その上人づきあいも懇ろで実意があり、よく友人たちの面倒も見て、他人のために骨身惜しまず奔走これ努めるというのだから、いくら年もまだ若くて毛並もよく、家庭の生活や健康にも恵まれ、おまけにすらすらと動く速いペンを持っている彼とはいえ、実に大したものだと、私などはただただ唖然として、その目はしが利いて活動的な、神経がこまかくて人のいい、汗っかきで、せっかちで、しょっちゅう花が咲いているようでいながら時にはしんみりと瞑想的にもなる此の安川君という若い友の、まだどこやらに甘えっ子の一人息子らしい、ほのぼのとした乳臭の漂っている童顔を、その肩幅の広い堂々たる体躯と共に感歎の念をまじえて眺めるのである」

これは、安川茂雄氏の初期の著書『回想の谷川岳』に寄せた尾崎喜八氏の序文の冒頭部分である。安川氏の性格と表情と、仕事と人柄とをこれほど的確に、巧みに、しかも好意的に愛情をもって表現した文章を私は他に知らない。

安川氏が亡くなったという知らせは、安川氏を知るほとんどすべての人に、唐突な、それでいて、矢張りという全く相反する二つの感情を呼び起したようだ。戦後間もなくの頃から亡くなる直前までの安川氏の行動を知っている人にとって、安川氏の急逝は全く予想外のことであり、ごく親しい、安川氏のここ数年の衰弱ぶりを知っている人たちにとっても、それは予定よりずっと早くきた知らせであった。その意味でそれは唐突であったが、しかし、安川氏の行動の軌跡が乱れていることに気づいていた人々にとっては、形をなさない不安が現実のものとなってしまったことを、矢張りという表現でしめくくるほかはない結末であった。

安川氏の残した仕事は多岐にわたっているから、その業績と評価は、これから後、何年もかかって整理されてゆくだろうが、安川茂雄という卓抜したひとりの山岳人と同じ時代を生きることができたことを喜びとしなければならない人は、意外に多いはずである。安川氏と付合いのあった何人かの人々が寄稿して『長越成雄追悼文集』刊行の準備が一周忌をめざしておこなわれている。安川氏の幅広い交遊と仕事はそこで浮彫りされることだろうが、安川氏が戦後の混乱期の中から着実に頭をもたげて、戦後三十年の日本登山界に一つの確かな足跡を残したことを、個人的にどのような付合い方をした人であろうとも、だれも否定することはできないはずである。

個人的な好みからいえば、私は『回想の谷川岳』の中の一章、尾崎喜八氏も先述の序文で認めている一ノ倉沢三ルンゼの単独登攀を書いた「ひとり息子の山——谷川岳のある単独行」の安川氏の世界に最も強い魅力を感じ、そこに惹かれる。安川

氏の優しさと上質の抒情性とが極めて自然に、ナイーブな形で流露されていて、これは世の中に数多い山の文章の中でも上位に置かれるべきものの一つだと私は思う。青年期の瑞々しい世界が、あるいはその人柄がそのままの形で晩年までつづくことは、ほとんどすべての人の場合と同様、安川氏にあっても無理な注文であったかもしれないが、毀誉褒貶の渦の中でもがいていたことのある一時期の安川氏が、自身で拠り所とし、還ろうとしていたのは、やはり『回想の谷川岳』の世界ではなかったのだろうか。

長越成雄、長越茂雄、安川茂雄と、安川氏は三つの名前で五十年の人生を生きた。三つの名前を使いわけるには、あまりにも短い生涯だったとしかいえない。長越成雄という本名からスタートし、なぜか（母堂にも未亡人にもその理由はわからないそうだが）茂雄という名に変え、そしてそれをついに安川茂雄に変えて、覚悟をきめて文筆の世界に猛進していった。

作家石上玄一郎氏を中心とする文芸同人誌『現象』に、安川氏はバルザックの研究や小論を発表し、戦後の一時期刊行されていた山岳雑誌『山小屋』にも、いくつかの文章を長越名で発表しているが、昭和二十八年四月の『現象』四号に「羊の檻」と題する山を舞台の小説を安川名で発表している。「谷奥の山は、乳色の霧の向ふに閉されて眼路になかった」という文章で終るこの小説は、後年のベストセラー『霧の山』の母胎となり、「霧」で幕を降ろす。『霧の山』で鳥見迅彦氏の詩を引用していることからもうかがわれるように、安川氏には、霧によって象徴される寂漠とした世界に惹かれる心情があったようで、それは快活で饒舌な安川氏の外面からは想像できないことであったが、「しんみりと瞑想的」なそんな面が外面の賑々しさを大きく救っていたと私には思える。

安川氏は一時期、本気で芥川賞を狙っていたことがあるようだが、大学を出たあと、三笠書房につとめて編集長として華やかな仕事をつづけていた。後、山の本の専門出版社朋文堂でも仕事をして、旅行雑誌の編集長もしたことがあるが、このほうはどうも得手ではなかったようである。

安川氏には、登攀者、文筆家、プロモーター、編集者、出版人といろいろな面があって、周囲の人々は、その接した面によってそれぞれ異なる印象と感情とを持っているようだが、安川氏のそうした多面性もまた、その数多い著作とともに年月の試練をへて整理されてゆくであろう。しかし、そうしたいくつかの面の中で、自ずと浮きあがってくるいくつかの業績がある。

一九六三年（昭和三十八年）、安川氏は同人誌『山岳展望』を創刊した。かつての『ケルン』に触発されたことは明らかだが、山岳人としてと同時に編集者・出版人としての安川氏の熱情がなければ、この雑誌は日のめを見ることはなかったろう。経理の能力に恵まれているとは思えない安川氏のことだから、

経営的には支離滅裂だったらしいし、意気込んだほどの新しい運動にもならなかったようだが、しかし、それが大地にまかれた一粒の麦であったことは確かである。すでにその前、第Ⅱ次RCCの創設でも、まとめ役としての安川氏の名を逸することはできないように、英国直輸入的な登山思潮と大学山岳部主導型であった日本の山岳界に、在野の山岳人を結集し、先の二つとは違った山登りの実践と思潮があり、違った山登りの歴史があることを明瞭に打ち出したのは、安川氏の業績の一つであろう。東京池上の安川氏宅は、そのために連日連夜、新しいアルピニズムを指向する若い人々の熱気で、むせかえっていたという。それは、ヒマラヤをめざす人々が世田谷の深田邸に集ったのと同じで、安川邸は、スーパー・アルピニズムの梁山泊であったといえるであろう。

このようなスーパー・アルピニズム指向とは逆に、安川氏には歴史回帰もあって、それは『近代日本登山史』に代表されるすぐれた業績となって結実している。そしてここにも、安川氏らしい着眼があって、表通りの登山史だけではなく、裏方的な、あるいは従来の登山史では対象外となっていた脇道の山登りも丹念に拾いあげて、山登りの世界の幅を拡げた。『近代日本登山史』には、歴史小説的な色彩があって、いわゆる純正な歴史と呼ぶには弱点も抵抗もあるだろうが、この仕事が後世に残る安川氏の業績の一つであることを疑うことはできない。安川氏自身、『増補近代日本登山史』（四季書館版）の個人用原本に、「この一冊の本は、私の書いた幾十冊の本の中でも或いは私の死後も残るかも知れない。若しも残るとしたら、ものを書く人間にとっての望外の幸福といわねばならないだろう。せめて、そんな本を五冊のこしたいが……」と、不安と恥らいをのぞかせながら愛着と自負を書きのこしている。

尾崎喜八氏が書いているように、安川氏はよく人の面倒を見て他人のために奔走した。そしてそのために、不興を買い、去ってゆく知人や友人を持たねばならなかったようだ。しかし、安川氏の口添えや献身的な助力がなかったなら、戦後の山の出版は、もっと寂しく、稔りの少ないものになっていたであろう。すぐれた登攀の実践や、長い山の生涯も、出版・編集人としての安川氏の力がなかったなら、一冊の書物にまとまって読みつがれることはなかったであろう。深田さんは、キズのない人生はないと語ったそうだが、だとするなら、キズだけの人生もまたないと言えるのではあるまいか。

略　歴

一九二五年（大正一四年）十二月十三日　東京芝神谷町（日赤）に生れる。自宅は下谷浅草。

一九四四年（昭和一九年）十月八日　小川太一と谷川岳南面幕岩Aフェース初登攀。

一九四六年（昭和二一年）　日本山嶺倶楽部を創立。

一九四六年（昭和二一年）五月三十一日　円山雅也と幕岩Bフェース初登攀。日本山岳会入会（会員番号二四一八）。
一九四七年（昭和二二年）三月　芝浦工業専門学校建築科卒業。卒業証書番号一八六。
一九五一年（昭和二六年）三月　早大仏文科卒業。のち大学院にすすむ。
一九五二年（昭和二七年）三月　文芸同人誌『現象』創刊。
一九五四年（昭和二九年）『谷川岳研究』を発表。
一九六〇年（昭和三五年）　編集長をつとめた三笠書房を退社、この頃より朋文堂、三笠書房、二見書房、あかね書房、東京創元社などの顧問格として企画・編集に参画。
一九六三年（昭和三八年）　同人誌『山岳展望』創刊。
一九六六年（昭和四一年）夏　第Ⅱ次RCCヒンズークシュ登山隊々長としてアフガニスタン、中部ヒンズークシュのムンジャン山群を登る。
一九七〇年（昭和四五年）夏　第Ⅱ次RCCパミール登山隊に参加。
一九七一年（昭和四六年）夏　ヨーロッパ・アルプスに遊び、メンヒほかに登る。
一九七四年（昭和四九年）十月　四季書館設立。
一九七七年（昭和五二年）夏　カナダ、アメリカ西海岸に遊ぶ。
一九七七年（昭和五二年）十月二十三日朝、喉頭癌に肺炎を併発して死去。享年五十一歳。覚山院妙徳日茂信士位。

（一九七八・六・一九）〔大森久雄〕

沢田武志氏（一九二一～一九七七）

雑誌『ケルン』（朋文堂）が昭和四十年七月号で「人物特集・沢田武志のすべて」を編集している。もちろん生存中のものだが、いま追悼文を書くに際して随時引用させて戴くこととする。

沢田氏において、山との出会いはいくつかある。まず府立一商で中村謙氏の教えをうけたこと。当時中村氏は英語教師で、また山岳部長でもあった。校外では「山小屋倶楽部」のかもしか班長として活躍するかたわら、一商山岳部のOBグループ「白樺会」を主催していた。彼はそのすべてに関係しているから、山歩きの下絵はこの時期に描かれたに違いない。

山をはじめた動機というのが、ふるっている。ひとからカメラをもらった、「人物」では相手に写真を贈るからカネがかかるので、「風景」に切替えた、平地より高地の方が画材が多い、気がついたら山に登っていた——というのだ。耕やして天にい

たる、というが彼のは「写して山にいたる」なのである。

戦前は山小屋倶楽部のリーダーとして活躍、雑誌『山小屋』『ハイキング』に紀行・ガイドを発表していた。このため『ハイキング』の常連執筆家の集いであるハイキングペンクラブのメンバーとなり、これがやがて戦後における『新ハイキング』誕生に連動することになる。

日本山岳会では、あまり熱心な会員でなかったようだ。『ケルン』のアンケートに応えて、こう語っている。

「私も会員だが、あまりにサロン的すぎる。ヒマラヤ・オンリーというのもよくない」

それとは対照的に、『新ハイキング』にかけた情熱はすさまじいものであった。昭和二十五年五月から二十七年間も、新ハイひと筋に打ち込んでいる。遺稿ともいえる最後の七月号の編集を終えたのち、会津・浅草岳に登り、帰京直後に急逝したので、ついにその号を手にとっていない。じつに創刊以来二百六十一冊目の雑誌であった。

著書は『ベストハイキング一〇〇コース』(実業之日本社)のほか、数冊の共著があり、ペンネームは清水野岳士(清水組の沢田武志の意か)、和賀弥満(「わが山」の意か)などを適時用いていた。

「これくらい、なんでも間に合う人にあったことがない。口も八丁、手も八丁、もちろんやまやだから、そのほかに『あし八丁』とつく。山のデパートという異名もある。広いけど浅い、という悪口の意味もあるが、どうして、話題によっては専門店なみの〝ガク〟を発揮する」のである(『ケルン』天城万三)。

個性が強く、正義漢である。筋の通らないことを見聞きすると、直接関係なくても敢然と発言して抗議する。なくなる一年前に富士登山をしたとき、山酔いでフラフラになっているオッサンを、連れの男が手でひっぱりあげていた。それを見た彼は血相を変えて、

「そんなことしたら駄目だ。本人のペースで歩かせなさい。その手をはなせ!」

と、怒鳴りだしたので、みんなびっくりした。(高山病の)患者が息も絶え絶えに、

「いえ、この(手をひいてくれている)人はベテランなのです」

と、ヘンな弁護をしているのに、彼は頑としてどなり続けていた。これが、ぜんぜん知らない人のことなのだ。「カチンのタケ」といわれる所以である。

酒豪ではないが、その雰囲気を好み、「そして興いたれば徹底的に歌う、もうやめろといったって聞くもんじゃない。これが人よんで沢田節、何を歌っても沢田節になってしまうところ、格とうまさの点で比較すべくもないが、森繁節と軌を一に

しているのである」（『ケルン』神谷恭平）。

「山号寺号遊びというのもやった。お寺の名には、何某寺というジ号の上に、たとえば金竜山浅草寺というふうに、かならずサン号がついている。それをまねて、その人の個性をよみこむ、語呂合せ」みたいな遊びなのである。彼のは、

沢田山　読めない字

というのが定稿になった。一度でもその筆蹟をみた人には説明不要だろうが、この人、まことに難解な文字を書く。これがすらすら読めるような人なら、彼と相当ながい交友歴があると判断して間違いないのである」（『ケルン』天城万三）。

話術の名手で、すこぶる筆が立つこの人は、また俳句もよくした。俳人・富安風生に私淑して号を「新雪」。晩年のでない、あえて壮年期の句をご披露しよう。

蜩や　木洩れ陽ほそき杉生道

百合の原　撫子の紅をまじへたる

（二十一年七月二十八日・奥武蔵にて）

秋高し　地球の皺を山といふ

（二十二年九月六日・赤城山にて）

彼、三十六～七歳の作。当時はまだ仮名づかいが旧式であった。

略　歴

明治四十四年一月二十九日　東京・赤坂に生まれる。

昭和三年三月　当時の東京府立第一商業学校を卒業後、ただちに株式会社清水組（現・清水建設株式会社）に入社、昭和四十七年に定年退職するまで一貫する（戦後は職員組合に転じ、事務局長をながく勤めた）。

昭和五年五月　日光・女峰山に初山行、以来四十七年間、急死の前日まで山行を続けた。スキー歴四十二年、昭和三十五年に一級の資格をとり、ながらく新ハイキングクラブのスキーセミナーを主催して講師をつとめた。

昭和十三年五月　ハイキングペンクラブが発足し、これに初回から出席。

昭和二十一年　明朗旅行会（のち明朗山行会と改称、やがて新ハイキングクラブの母胎となる）の創立に参画。

昭和二十二年　日本山岳会に入会（会員番号三〇一二）。

昭和二十五年五月　株式会社ハイキング出版社（のち株式会社新ハイキング社と改称）を同志数名と設立、社長兼編集長として「新ハイキング」を創刊（当初隔月刊であったが昭和三十六年五月から月刊となる）。爾来二十七年間、編集に携わる。

昭和五十二年六月六日　狭心症のため急逝。享年六十七歳。

〔見沢繁幸〕

永井清一氏（一八九九～一九七七）

永井さんの思い出は尽きるところがないが、特に印象深いものを記して追悼としたい。

私と永井さんの出会は約三十年前の昭和二十二年頃だったと思う。永井さんは、山好きの私が一人で別府の鶴見連峯の縦走中、初対面の三谷先輩から大分県を代表する二豊山岳会のことを聞いて入会した当時の会長であり、別府市体育協会の登山部長であった。

その後会合や山行で接することが多く、逐年親交を重ねて来たが、先輩として畏敬するところが多かった。山を好む私共にとっては山は心の故郷であり、大自然は神であり、登山は最高のスポーツであると信じている。「仁者は山を楽しむ」とは正に至言であると思う。氏とは同感するところが多く、色々話し合ったものだ。小学一年の登山遠足から山に魅せられた私にとっては、開眼の師とも云えるであろう。初めて北アルプスの槍穂高縦走をしたときのことは特に記憶が深い。

昭和二十九年七月末の一週間、永井清一、三谷忠一、白井昭一、清水順子と小生の五人で島々を五時のバスで発ち、待望の上高地を経て槍沢の坊主岩まで登って大休止していたが、白井氏が来ないので捜しに下りたら、フラフラの彼を発見して助け上げ、二十時頃やっと殺生小屋に辿り着いたが、小生も高山病にやられて食事も睡眠も出来ぬままに、翌朝三時に発って四時半槍の頂上に立ってご来光を拝んだ感激は、未だに忘れることが出来ない。それから岩稜を突破して、北穂高の頂上に着いたのは十五時だった。大キレットからの登りは「山がそこにあるから」ではなく「山小屋がそこにあるからだ」の一語につきる思いだった。高山病と戦い乍らの登行には全く参った。高圧釜の飯にやっと生気を取戻し、翌日は疲労と天候悪化のためジャンダルム、西穂高を諦めて、奥穂、前穂を通り重太郎新道を経て上高地の西糸屋に着いて一泊した。待望の縦走が出来たのは、全く永井、三谷両先輩の案内援助の賜と厚く感謝している。老令にもめげぬご両人の健脚には、流石大先輩だと感心した。

その後、春の連休に日豊線富高（日向）駅からバスで上椎葉に入り、アーチ式ダム工事や、平家の鶴富屋敷等を見て旅館泊り、一夜の散財で正調稗搗節の歌や踊りを土産に、お手ノ尾部落の人といたどりと猪肉で焼酎の別れを惜しみ、九州脊梁山脈標高一五〇〇メートルの那須峠を越えて熊本県五箇荘村に入り、闇夜にランプを頼りに玖磨川峡谷の桟道や山道を下り、到々道に迷って野宿して、雨に降られ眼が覚めたら、崖縁に寝て

いて驚いたこともあった。そこから雨の五木村を歩いて正調の子守唄を惜しみつつ人吉に出て、吉人線を廻り架野（西霧島）駅を経て、霧島の林田温泉に泊り、翌日、大浪池、韓国岳、新燃岳、中岳、高千穂の峯に登って、神宮温泉に一泊して帰ったことも、懐しい思い出となった。特に霊峯高千穂頂上からの大霧島の落日は壮厳そのものだった。

永井さんは特に歴史や自然保護に関心が深かった。昭和三十七年、一三七五メートルの鶴見岳頂上に自費で火男火売神社の奥宮の祠を寄進、復元したり、頂上避難小屋の復活に努力されたり、自然保護協会の運動に参加されたり、大分県自然愛護会を結成したり、由布鶴見連峯の標高柱や指導標を整備したり、県知事を二豊山岳会の名誉会長に推戴して、全県的な登山と自然保護を推進する等、氏の熱情は全く人の及ばぬものがあった。

厳冬の久住や富士登山等、後輩を奮起させるものが多く、登山は普通のスポーツではなく、体育的、徳育的、精神的に秀れたものであるとの信念を持って常に後輩を指導していた。

多数の岳友を勧誘して、日本山岳会大分支部を結成してから、岳友の目が開け、欧州アルプスやヒマラヤ等海外登山まで向いて来たことは得難いことである。私も日高信六郎氏が会長のとき、お茶の水の岸記念体育館の旧ルームの会合に永井さんと出席して、一段と広く開眼したものだ。

氏は正に縁の下の力持であった。私達は得難い明治岳人の伝統を継いで行きたいものと思う。

略　歴

明治三十二年四月十五日生。
大正十一年三月　神戸高商卒（十六回）。
大正十一年四月　住友銀行勤務。
昭和二年　父死亡のため、住友銀行退職。帰別して家業の貸地貸家業を継ぐ。
昭和十二年まで　別府信用組合理事就任。
昭和十二年　応召、陸軍経理将校として支那南方方面を転戦。
昭和二十年二月六日　ハルマヘラ島より帰還。戦後は不動産管理の傍ら、書店、楽器店を経営。
昭和四十年　廃業、子弟教育のため上京。
昭和四十五年十月　脳血栓に罹り視野1/4に狭少化す。後年胃病を患い切除後肝臓病併発。
昭和五十二年七月五日　逝去。死因脳血栓肝臓病。行年七十八歳。

登山歴

大正八年　わらじ会（昭和三年二豊山岳会に改称）を結成、大分県は勿論九州登山界の草分けとなり、昭和十二年応召まで県内外の山岳活動を行う。
昭和二十一年　二豊山岳会に復帰後、再建に尽力し会長や県山岳連盟の役員となる。

昭和三十年十一月　日本山岳会に入会（会員番号四三二八）。
昭和三十五年八月五日　日本山岳会大分支部（後年宮崎、鹿児島会員を入れ、東九州支部に改称）を結成、支部長に就任。
昭和三十九年　辞任して翌年東京に転居。日本山岳会東京支部及び東京登路会加入。
昭和三十七年十月　大分県自然愛護協会を結成、会長に就任し、日本自然保護協会等関係方面と連携して、自然保護に尽力する。主要登山は次の通り。
県内　由布、鶴見、祖母、傾、九重連峯等。
県外　英彦山、阿蘇、大崩、市房、霧島連峯、屋久島、石鎚、剣、大山、北アルプス、富士、丹沢、関東山群、飯豊朝日連峯等。

〔木本善重〕

岡本俊彦氏（一九二八～一九七七）

岡本氏の他界された三嶺は、氏にとって心の山であり、又「三嶺は僕の一番好きな山」と口癖のように言われていた山でもあります。

岡本氏は「パパさん」という愛称で親しまれていました。氏は大変面倒見が良く、私達山仲間にとっては、良き相談相手であり、良き父親代わりでした。登山の問題だけでなく、人生の悩み事などよく相談したものでした。

私と岡本氏の出会いは、一九六一年の秋の事でした。……職場の先輩でありザイルパートナーのT氏に連れられて日赤病院の門をくぐり、薬剤部のドアをノックする。部屋の奥にデスクがあり岡本氏がペンを執っていた。「おお、きたか。まあ入れや」と黒い顔が笑った。ここに来るまでに判っていた事は、氏は山の大先輩であり、T氏との「麻ザイル」コンビとして、ずっと以前より岩登りを実践されている人物である、ということだけで、私はコチコチになっていたが、岡本氏の笑顔でその緊張はたちまち解けた。T氏の紹介で「私は最近T氏より岩登りを習っている山本です。どうぞ宜しく」と言うと、「Tから話は聞いている。僕はもう齢だから、岩登りはできんけれど、Tと一緒に頑張ってくれや」という返事だった。

岡本氏との出会の第一印象が今でもはっきり思い浮かんできます。そして「麻ザイル」コンビより、「ナイロンザイル」コンビが生まれつつある時でもありました。

四国高知の登山界にあっては、私達はまだローカル線を走っていました。その中で、岡本氏は常に私達に新風を送りこんでくれたものです。高知の山々より厳冬期の北アルプスへと導いてくれたのも氏でありました。高知で山登りを語るには、氏を抜きにしては語れないと言っても過言ではありません。岡本氏

は、私達の山行には常に陰の力となって、行動を共にしてくれました。

冬期初登攀とパパさんとシャンペン（一九六五年、山日記より）……一九六五年二月二十日。これまでの私達の岩登りの総仕上げとして石鎚山北壁の積雪期初登攀（鷲尾ルート）を目指して入山する。―中略―二月二十二日、三時三〇分起床。天気はまずまずというところ。今日はパパさんが入山して来る予定だ。―中略―登攀開始、八時三〇分。確保点は雪の中だ。バイルで雪を払い除けT氏トップで取付く。―中略―二ピッチ目に掛かる。時間は一二時を回っている。壁を甘く見ていたようだ。―中略―四ピッチ目最後の登攀だ。吹雪いて来た。ヤッケが凍る。赤ザイルが見る見る白くなる。この時頂上よりパパさんのコールがある。私達は勇気づけられると共に最後のハングを乗起して、パパさんの待っている頂上へ抜け出た。一六時一五分。三人で抱き合い握手する。―中略―二ノ鎖元小屋で、パパさんが持参した「ホワイト」の封を切る。そして改めて完登の喜びに浸る。外は猛吹雪だ。アルコールが廻るにつれて話も弾む。何より嬉しかったのは、パパさんが自分の事のように二人の完登を祝ってくれた事だ。その上「高知に帰ったら、シャンペンを奢るぞ」と約束してくれた。シャンペンといったら貴族の飲む代物ではないか。洋画に出て来るあのシャンペンを明日にも飲める……パパさんありがとう。ホントにありがとう。

アルコールの本当の味も知らなかったこんな私が、今日に至っても尚前向きに活動できるのも、岡本氏の存在があったからです。そして思い起こせば、一昨年の高知県山岳連盟隊のラムジュンヒマール登山が、氏との最後の山行になってしまいました。氏が生涯の夢であったヒマラヤ登山、そのヒマラヤでは副隊長という任務を、持病と戦いながら遂行され、私達の登頂の大原動力となりました。そして、他の、誰れよりも、この登頂を喜んでくれたのも氏でありました。

岡本氏のキャラバン日記より（原文のまま）……一九七六年三月十九日。誰一人いない早朝、屋上で、美しく厳しく立ちはだかるアンナプルナ山群に向い合った。はじめての石鎚山系を、又、穂高、剣の山波を見た時と同じく、未知の山々は、私を大きくゆさぶる。山旅三十五年目にたどりついたヒマラヤは、私を釘付けにするのだ。

三月二十一日。キャラバン、未知なる旅。それは、何とも言えない響きだ。ヒマラヤの歴史と共に、私の心に住みついたロマンと苦闘の歩みが始まる。

最後の年の山日記から……ヒマラヤのBCまで私は三十五年を費した。そして、現代のヒマラヤの新しい歴史は、手の届かない世界と知った。未知と、より困難をヒマラヤに求めて攀じる事は、私にはもう出来ない。しかし、私はもう一度、ヒマラヤに行こう。満足し得るBC生活を一度はしてみたいのだ。グ

ループの若者は攀じる。ヒマラヤの岩を氷壁を雪稜を。私はそれを見るためにもう一度BCへ行きたい。K・G・Rらしいヒマラヤ登攀をこの目でしっかりと見たい。それが私の夢である。

岡本氏は、もう一度ヒマラヤを夢に見ながら帰らぬ人となったのである。私は叫びたい「パパさん、おまん幸せもんじゃ、一番好きだった三嶺で、あこがれのヒマラヤの夢が見れるきに。けんど僕等は淋しいがやき、しょうまっこと悲しいぜよ」。

略　歴

一九二八年生。
一九四四年　山登りを初める。旧高知県立城東中学校六稜山岳会に入会する。屋久島を始め四国の山々を歩く。
一九五一年　現明治薬科大学卒業。高知日赤病院薬剤部に勤務する。日赤病院院友会を創設する。
一九六七年　高知グループ・ド・ロック（K・G・R）を創設し、初代代表となる。
一九七一年　日赤病院（薬剤部部長）を退職。家業の岡本平和堂薬局の経営に当る。日本山岳会入会（会員番号七二六五）。
一九七六年　高知県山岳連盟ヒマラヤ登山隊副隊長としてラムジュンヒマール登山。
一九七七年五月十三日　単身三嶺に登るべく堂床小屋で睡眠中脳溢血のため死去。

〔山本一夫〕

図書紹介

小島烏水
―山の風流使者伝

近藤信行著　A5判　四五三ページ
口絵、挿画各一葉　一九七八年一月
創文社刊　定価三五〇〇円

本書は烏水・小島久太の生い立ちから三十七歳までの半生にわたって、その人間形成の過程を綿密に追及するユニークな評伝である。

本会の創立にあたり、発起人の一人として主動的な役割を果たした小島さんは、この機関誌『山岳』の生みの親であり、また情熱的な育ての親でもあった。その『山岳』誌上で、この小島烏水伝について筆を執るとなると、まず襟を直さねばならぬとの感を抱かされる。と同時に、恐らく始めて書かれたといってよい本格的な烏水伝が、小島さんの伝統を受け継ぐ本会の会員の筆に成ったことを、よろこびたい気持も覆いがたい。

昭和二十三年末に小島さんが亡くなられて、その翌年発行の『山岳』（第四十四年第一号）は「小島烏水記念号」として編集された（同号は昭和四十八年に、烏水生誕百年記念出版として本会によって覆刻された）。その巻頭に、「登山史上の人としての小島さん」を槇さんが語っておられる。小島さんの探検的登山時代の業績を高く評価し、山岳会の創立こそ、わが国に近代的登山の新時期を画したものであると説いた後、槇さんの文章は次のような言葉で結ばれている。

「私は与えられた問題に対し個人的印象を述べるに止って、内面にまで触れることが出来なかったが、他日何人かが此卓越した登山者を、更らに深く解釈される日の来るべきを期待するものである。」

烏水没後三十年にして、ここに近藤さんの労作が、まず半生の伝記として現れたことは、まさに槇さんの期待に添うものであると言えるし、同時に小島烏水というすぐれた先蹤者へ、多くの人々の関心を呼び戻す契機ともなると思われる。これまで烏水伝に手がつけられなかったのは、その対象のあまりにも多面的であるが故だと考えられるが、著者は敢然とその難事業に取組んだのである。近藤さんは、烏水の幅広い活動分野を十分に見渡した上で、

「したがって、一人の登山家、紀行文家というだけでは、けっしてとらえきれないのであって、小島烏水の全体像にどこまで迫り得るかが私の課題であった。登山行為をとおしての人間と自然とのかかわり、あくことなき美へのあこがれ、明

治の気骨をそなえたディレッタンティズム、それらを彼の内面的経過とともに総合することによって、彼の生涯をとらえてみたかった」

のだと、本書の「あとがき」に記している。困難な仕事であるだけに、著者は一層情熱を燃やし、闘志を湧かせたように見受けられる。

そしてまた、いくつかの偶然が、この仕事への契機となったということだが、その一つに、「文庫」時代に兄事した滝沢秋暁へ宛てた烏水の書簡五十五通に、信州上田の滝沢家で始めて接する機会を得たことが挙げられている。この新発見の資料を駆使して、著者は雑誌「アルプ」の昭和四十五年十月号から、「文庫」時代の烏水について連載しはじめることになった。結局その稿が十八回に及び、さらにこの著書のタイトルとなった「小島烏水・山の風流使者伝」の連載へと引きつがれて、この部は二十二回に及んで、大正二年までの烏水像が描き上げられた。本書には右の雑誌連載分のうち、生い立ちから明治四十三年までが収録されたが、この年が、一方において「文庫」の廃刊、他方において名著『日本アルプス』の〝第一巻〟が完成したという転機にあたっているためである。本書を通読すると、ここに半生の区切りが設けられたことの適切さが、よく理解される。

本書は「横浜山王山」と題する章ではじまる。幼少期から烏水が育った環境を描きながら、それが人間形成へどのような影響を及ぼしたかを探り当てる第一章である。これは、連載をひとまず終えた後に書き下された文章なので、この評伝へのたくまざる導入部となっている。

二十の章にわたる充実した内容にこまかく触れて行くことは不可能なので、ごく大ざっぱな印象を記すと、まず感ずることは、この評伝の中に太い三本の流れがあって、それが互いにもつれ合いながら成長して行く過程が、手際よく描かれている点である。いうまでもないが、その流れの一つは、「文庫」を主舞台とする烏水の文学活動であり、次いで、その間に次第に色を濃くする紀行文作家としての一面があり、第三に、紀行文と表裏一体をなす山旅の愛好にはじまり、次第に探検登山への情熱を燃やすに到る壮年期の活動である。そのほか少年時代に早くも芽生えた錦絵などへの傾倒が、後年の浮世絵研究、版画蒐集へと発展する流れもある。これらのかかわり合いを、著者は資料に即して官観的に語ってくれる。それによって読者は、複雑にもつれた糸が解きほぐされていくように、烏水その人の人間形成の過程を辿ることができるのである。

資料に即するという点では、前記の滝沢秋暁あて書簡を中心に据えた「文庫」時代の記述が、本書前半のハイライトとなっている。この時期の烏水に関しては、『山岳』の前記記念号に河井酔茗が「烏水と『文庫』」、田部重治が「文芸批評家として

の小島君」を執筆して、それぞれ親しい同時代人の眼で烏水の業績を明らかにしているが、これらの他には詳述されたものを見ない。それだけに本書は、従来の明治文学史あるいは文壇史において看過されがちな側面に、新たな光を投じたのではなかろうか。第五章「やれだいこ」などは、その意味で立派な寄与をなす佳篇と思われる。

紀行文家としての烏水のめざましい成長が、「文庫」での活動と重なりながら進んで行く過程についても、この評伝から教えられるところが多い。漢文脈から抜け切れず、誇張の多い初期の紀行文から、苦心を重ねて烏水の新しい文体が育てられて行くあたり、文筆の人である著者の観察は的を射ており、興味深いものがある。「扇頭小景」に始まる諸著作についても、それぞれ述べられているが、とくに「雲表」を近藤さんは高く評価して次のように記している。

「『雲表』には山岳会創設直後の烏水の、自然にたいする共感をよみとることができる。これまでの文章にありがちであった、おしつけがましく、誇張にみちた表現ではなくて、人間と自然との大いなる対話がゆったりとしたかたちで流れはじめている。」

この紀行文作家として烏水と表裏一体をなす登山家・烏水の像については、本会会員が比較的よく親しんでいるところだが、第六章以下の多くの章にわたる探検登山時代の山旅に関する著者の詳しい記述によって、改めて教えられることも少なくない。とくに著者は、烏水が探検登山の折に辿った登路について納得のゆかぬ場合は、しばしば追跡登山を行なってまで、確認の労をとっている。明治三十五年の槍ヶ岳登山の際、烏水一行が沢渡から霞沢を溯行して稜線を越え梓川へ降った上で槍を目指している点を確めるため、霞沢岳東面からのルート踏査を二回実施し（本会会報『山』三五三、三六九、三七〇の各号に詳しい報告がある）、また明治四十、四十一年の烏水による白峰三山へのアプローチについても、その迂回路の謎を解くために追跡登山を行なったのである。これらの労について、本文中にことごとしくは記されていないが、補注や「あとがき」には、これら追跡山行について詳しく記されている。

このような著者の丹念な調査として、この評伝中でも一つ注目されるのは、第十二章の「『甲斐の白峰』をめぐって」である。かつて本会の創立六十周年記念講演会（昭和四十年十月十五日）で、武田久吉博士が「山岳会創立前後」と題して講演をされた折、この白峰登山について「これは最近いろいろ研究してみると、小島氏自身が登ったのではなくて、ウェストンが登った記事を換骨奪胎して、こしらえた」（『山岳』第六十一年所載）ものであると指摘された。武田さんは、それより先、他の山岳雑誌にも、この点について執筆されているので、烏水にとって不名誉な架空登山記の件は、既にかなり広く知られてい

た。しかし、武田さんが挙げたウェストンの記事とは何かについて、著者は武田説に納得できない点があったので、いろいろ調査の末に、ウェストン師の「甲斐ヶ根山の登山」記が掲載された「ジャパン・ウィクリー・メイル」一九〇二年十一月一日号を国会図書館で探し当てたのであった。

原文と対照の結果、烏水の「換骨奪胎」は明らかとなった。今さら古傷を……と不快に感ずる人もあるだろうが、一方、評伝を書くに当っては、避けて通れる問題ではない。著者にとっても快よい仕事ではなかったであろうが、紀行文の「室内捏造は論外」と断じた烏水自身が「文筆家として《神》をおそれぬ、きわめて大胆不敵な行為をおこなった」のは何故か、という一つの謎に、近藤さんは正面から取組んだのである。その謎を追うことによって、その人間形成を探る一助にしようと努力する。

「私は烏水その人のア・モラルな行為を惜しむが、彼の明治三十年代の先駆的栄光に暗い影をおとしてしまったことを認めないわけには行かない」

と著者は記し、この暗い影を招いた遠因を、烏水その人の生い立ちを通じて形づくられた性情、処世態度などにも求めつつ、「烏水の山岳讃仰のこころ、その表現としての紀行文やエッセイが、たとえ烏水個人のたんなる趣味であったにせよ、文筆家としての彼がアマチュアのあいまいな領域にとどまっていたところに」主因があったのではないかと推定している。

これ以上詳述する紙幅はないが、この問題を扱う著者の筆は、まことにキメこまかで、烏水の人間的な弱さの一面を悲しげに眺めつつ描いているような感じさえ受ける。武田さんが講演のなかで「結局小島君のは山へ行って来ると記事をおもしろおかしく書いて、原稿料を貰えばよかった」と冗談まじりで話されたのに対して、近藤さんの方は、むしろ対照的な立場に立って、烏水の気持を探り出そうとしている。そこに文学者の眼を感じるといっては、素人の評者としていい過ぎであろうか。

以上、内容に触れながら所感を記してきたが、終始頭に浮んだのは、著者自身が十分に承知の上である評伝を書くことのむつかしさであり、さぞかし近藤さんは苦労したろうということであった。「要は私自身の小島烏水を書いてゆくほかはない」と決意したことが「あとがき」に見えるが、その決意によって、小島烏水伝はむしろ立派な客観性を備えた作品となった、と私は感じるのである。後半生にわたる続篇についても、一層の健筆を期待して筆を擱く。

なお、五〇ページ近い附録には、詳細な補注と烏水著作・執筆記事（明治三十一年―明治四十三年）が含まれて、著者の並並ならぬ調査の跡が示されている。装幀、造本などにもこまやかな配慮があって、いかにも本造りを愛した烏水を語るにふさわしいものとなっている。完結の際には、ぜひとも詳細な索引

をお願いしたい。

〔島田　巽〕

快晴の山

織内信彦著　A5判　本文三二一頁
あとがき四頁　スケッチ一葉(カラー)
写真六葉　一九七七年十月　茗渓堂刊
定価二五〇〇円

『偃松帯』に続く著者二冊目の山に関する随想集である。定年になって少し余裕ができ、気ままに山行や旅の計画を立てられるようになってからの四年間に亘る快心の山行の記録や、山を通しての人や本との付き合いが主な主題となっている。

全体は四つの部分に分かれ、最初の「快晴の山抄」では、昭和四七年四月から昭和五一年三月までの天候に恵まれた山行の記録一六篇がとり上げられている。著者は日本山岳会のため永年尽力し、よき山の先輩や仲間、あるいは山の人達と親しく交わり、自然や山に対して穏当な意見を持ち、山の美しさに対して限りない憧憬を抱き、定年を過ぎても山から離れないどころか益々山に惹かれているという山の優等生である。困難なルートの開拓や、厳しい岩や氷との対決などは見られないが、随所に登山の本質に関する問題や、美しい人間関係、あるいは自然保護に対する強い関心が顔を出している。また山のよき伝統を伝える木暮理太郎、大島亮吉、田部重治、高村光太郎等の文章もよく引用され、格調ある随想となっている。

第二の「回想の山々」は必ずしも現在から過去を回想した文章ではなく、新旧の原稿一三篇が含まれている。昭和九年や一五年頃に書かれたものなど多少文体も異なるが、変りない著者の山に対する気持が披瀝され、徳沢に牛や馬が遊んでいた頃の梓河原の四季を懐しみ、海外での岳人の心なき行動に胸を痛め、あるいは中央アジアの高原に見果てぬ夢を託すなど、著者の持つロマンとも相俟って、私共を暖かく静かな自然の中へと導いてくれる。

第三の「人と本」には書物や文献あるいは手紙を通じて山と人との関係を論じた一二篇が収められている。ウェストンに始まり、高島北海、藤島敏男、深田久弥、児島勘次、伊藤隼氏等幾人かの真の山岳人の横顔が、著者の温厚な人柄を反映して人間味豊かに表現されている。ここでも、登山と言っても結局人間活動の一環であることを、私達は強く反省させられる。そして著者が先人を渇仰し、山仲間の心尽しに感激し、朴訥な山小屋の主と胸を開いて交わり、素朴な山村の人々を心から愛する気持を改めて理解することができる。

第四の「海外紀行」には昭和四七年のロッキー、昭和四八年

暮から正月にかけてのネパール、並びに昭和五一年のアフガニスタンへの三篇の旅行記が含まれている。これらの地域の一般的紹介の他に、人間に汚されていない美しい氷河、湖水、厚生林と、それらの保護の行届いていることに対する驚き、河口慧海の探検的な大旅行に対する傾倒の気持、あるいはしつらえられた旅行よりも、野性的な旅の方が遥かに魅力的な点などよく表現されていて読む者の心を打つ。また食事への関心が強く、至る所メニューの描写や作り方の説明などがあって、大変興味深い。ただ片仮名の地名が頻繁に出てくる文章には、簡単な概念図でも添えてあれば、一層真実感が出たのではなかったかと惜しまれる。

本書に添えられた写真は著者の絵心を反映して、季節感なり雰囲気なりがよく出ているが、中でも特徴が見られるのは巻頭のスケッチである。著者とはスケッチ山行に同行したよしみもあって、本書ができたとき著者が私に先ず示されたのが、このスケッチの頁であった。所詮生徒の絵であってみれば、山里寿男先生辺りからは早速立体感不足などの批判が戻って来るのかも知れないが、鮮やかな色彩と言い、快晴のさわやかさと言い、実によく春の秩父の感じが出ている。著者にとっても快心の作であり、この一枚のスケッチのために、躊躇なく書名まで決まってしまったのではないかと推測される程である。

「のぼりたいと思う山はまだ沢山あるはずだ。少なくとも当分いや一生かけても登る山にこと欠くことはあるまい」という著者の言葉を俟つまでもなく、更に第三、第四の文集は出るに違いないと考えられるが、その際には、今後の山行において感動をもって描かれたスケッチの数々や、興趣をもって撮影された写真等により、是非それらを飾って頂きたいと思う。

なお本書には限定百部の著者署名入り特製本（皮装、天金、本文用紙レオバルキー、定価九八〇〇円）のあることを付言しておく。

〔中村純二〕

現代登山技術

ヘルマン・フーバー著　横川文雄訳
四六判　本文二九二ページ　折込付録
一九七七年九月　山と渓谷社刊　定価一四〇〇円

本書の原著は Hermann Huber, Bergsteigen heute——Der Leitfaden für die Praxis——, Verlag F. Bruckmann KG, München, 1974 である。

ずっしりとした読みごたえのある技術書である。著者の豊富な経験が圧縮されて、そのまま文字になったものであろう。そ

の体験が解説の行間に、にじんでいるようである。

ところどころに体験報告がエピソード風に挿入されている。これは技術解説の足らざるところを補って、山の登り方のとくに大切な面に触れる部分であるから、著者の豊富な経験を生かして、この部分がもっともっと拡充されたならば、一層効果的であろうと考えられる。

内容の分量について見るに、二一〇組のさし絵を含んでいるが、全ページを文字に換算すると、原稿用紙約七〇〇枚という大冊である。その配分は、序論から一般的山歩きに関する部分が合計で二四パーセント、登攀に関する部分が残りの七六パーセントを占める。これによって本書の重点のおき方が推測できるであろう。

ここで評者の立場を振りかえって見るに、長い間、岩登りなどの登攀には携わっていないし、人工登攀といえば古典的な吊上げ技術か振子トラヴァースくらいしか経験していない者が、こうした傾向の書物を論評する資格はないことに気づいた。しかし編集者からは執筆免除の許しを得られないままに、とにかく自分の気づいた点だけでも述べることにするが、芥川龍之介の「木によって魚を求むる論法」たる譏りは免がれないかも知れない。

本書を登山技術の「教科書」として通読して見ると、なかなか立派な出来ばえではあるが、いくつか気にかかる部分がないではない。

例えば、確保法については、用具を活用した方法を優先している。肩確保などの古典的方法は本書ではむしろ軽視されているが、日本のクライマーの間では、これを制動確保と上手に組合わせて、優れた方法に発展させている例もあるので、ここに付記しておきたい。

折込付録の中に、「本書の印刷中に行われた実験によると」云々などという文字を見ると、性能のはっきりつかめていない方法まで推奨している形になっているが、初心者をも対象にしている教科書においては、どうかと思われる。

そのような方法は付録の中で説明されているのであるが、解説のあいまいな部分を見かける。例えばカラビナ・ブレーキ確保の項を見ると、最上欄にある図は、制動第二段階よりも強力な方法であるが、どの段階に属するかは説明されておらず、また制動第一段階の方法については、図解も解説も与えられていない。次にムンター・ブレーキ確保の最上欄の図は普通段階(本文五四ページの図では第三段階)とされているが、第二段階の図と本質的には同じ働きをするものである。

時には矛盾した記述も見かける。日本でグリップ・ビレイと呼ばれる方法について、一七四ページでは「この《確保》のしかたを、われわれは断固しりぞけるべきである」としながら、一方 二六八ページにおいては「確保用に使うが、とくに二番

目の者の確保によい」とされている。

再び付録に戻って、肩確保に関する部分に「前腕にザイルをからませて制動効果を高める」としてある。この場合の前腕は、どちらの腕ということが説明されていないが、ここではドイツ式の肩確保の解説であるから、被確保者側たる右腕と判断されるのが普通であろう。とすれば、このやり方は、制動効果を高める以前に、確保姿勢を崩して確保を失敗させる悪い方法である。ただし被確保者側の右腕ではなく、反対に、われわれが制動手と呼んでいる左腕にザイルをからませることは、制動効果を大いに上げるばかりでなく、バランスを崩す悪影響も小さい。これはイギリスでよく用いられる方法であるが、そのへんの所が明確にされていない。

次に本書においては、用具や方法について経験に基づいて、細かな所まで行届いた詳しい解説が行われている反面、初心者向きの大切な注意事項が無視されている部分がある。これは上級者にとっても指導上大切な点であるから、教科書としては省いてはならないことだと思われる。例を挙げれば、登山用ザイルの岩角など鋭角に対する意外な弱さについて、強調されていない。イギリスのクライマーは伝統的にザイルの問題を真剣に考えているようであるが、その他の欧米人は意外に楽観的である。また制動確保の具体的なコツをつかむことはなかなか難しいものであるが、こうしたことに関しては別に問題もないといった調子で省略をしている。

雪崩については、比較的降雪量が少なくて寒冷なヨーロッパの山における経験から書かれたものであろう。それは「たいていの場合、雪崩は人によってひき起こされる」という言葉によく表れているが、大雪の降りやすい日本の山では、自然発生の雪崩が上流から襲ってくる例が大きな比重を持っているので、注意してほしい。

次に、これも少ない降雪量と低気温に関連することであろうと思われるが、「勾配がおよそ四〇度を越える急斜面」では少量の雪がひんぱんに滑降するのが普通だとして重要視していないが、日本では本格的な乾燥新雪雪崩にとって、四〇度くらいの斜面が最も警戒しなければならない。かなり厚い雪崩が出る可能性が多いからである。降るそばから、サラサラと流れてしまうのは、日本では六〇度以上の斜面とされている。

また「雪崩事故のほとんど九〇%は、北面から北と東を越えて南東に至る≪日陰の斜面≫で起こっている」とされているが、日本では南東斜面を中心として事故が多い。従って一般論としては、むしろ日陰の斜面でない場合が多い。

日本の冬山で、新雪雪崩に対して最も警戒しなければならないのは、降雪中とその翌日あたりであるが、その外に右のような着眼を頭に入れておけば、本書に述べられていることは、日本の山でも役に立つラヴィーネンクンデであると考えられる。

ただし「雪崩のなかで泳がなければならない」とあるのはどうかと思われる。それについてはすでに何回も書いたので省略するが、次の行にある「両手で口の前に呼吸する空間をあけて」おくようにすることは、評者としては強く推奨したい方法である。

教科書は思想を持たなければいけない。信念のない教師はいくら知識が豊富であっても雑学の徒に過ぎない。そこから優れた生徒は育ちにくい。本書は鋏と糊でっち上げた資料集ではない。実践やその他調査研究から得た知識を集約したもののようである。しかしこの本は初級、中級の登山者が、オーソドックスな教科書として取りあげる本ではなさそうである。上級のクライマーが、新知識を吸収するための参考書に近い。原著副題の Der Leifaden für die Praxis にはそぐわない内容である。しかし本書の内容を優れたものとして推奨する上級クライマーの多いことは、ここにぜひ申添えておきたい。

ここで日本のクライマーに望みたいことがある。それは、悪場からの脱出や負傷者の救出に詳しい人が少ないので、そうしたことを練習によって身につけておいて頂きたいことである。本書ではこうした問題をとくに重点的には扱っていないが、ここに述べられている程度のことは追試して、いつでも役に立つようにしておいて頂きたいと思う。

また初級、中級のクライマーに望みたいことは、本書の中の新しい技術を試みる場合には、必ず上級クライマーの指導のもとに実験して頂きたい、ということである。

登山技術を文字で解説することは意外に難しい。ジェフリー・ヤングのマウンテン・クラフトはさし絵を全く使わずに、文字だけで的確に動作を表現している（文章そのものは難解であるが）。しかしこの本には、何をいわんとするのか意味のつかみにくい部分がいくつかある。そのような部分では著者も執筆しながら隔靴掻痒の感を持ったのではなかろうか。せめてさし絵をふやすなどして詳しく説明してほしかった。

本書の翻訳は四名の訳者の協力になり、それを横川文雄氏が校閲したものである。訳文は総体的に見ればよくこなれている。

登山技術書にとって用語の問題は重要である。現在の日本の登山用語はかなり崩れた部分があり、英独混血などは珍しくもないが、本書でもそれを踏襲して解説抜きで日本訳している場合が多い。例えば日本語の「足場」は英語の stance の意味に使われたり foothold として用いられたりしているが、本書ではそのいずれとも説明されていないので、かなり読み進んでどうやら stance の意味らしいと推定した次第である。

本書の場合、原語をそのまま仮名書きしたのでは、一般の人には耳慣れないドイツ語だから、覚えにくいという面があるが、せめて日本訳するたびに原語を併記してほしかった。ドイ

ツ語は日本語と違って古典が比較的よく残して、体系の整った言葉だそうであるから、その登山用語の概略だけでも紹介されていたならば、大いに参考となったであろう。

〔金坂一郎〕

朝日小事典・ヒマラヤ

川喜田二郎編　B6判　二五四ページ
一九七七年七月　朝日新聞社刊　定価九八〇円

本書は、ヒマラヤの全体的イメージを描き出そうと試みた小事典である。

ヒマラヤはサンスクリットの語源で「雪の棲み家」を意味するように、インド大陸の北にそびえ立つ雪の山をさす。この地域は極めて広大で、インド、ネパール、中国、パキスタン、ブータン各国にまたがり、この全域を指して通称大ヒマラヤと呼ぶ。

この地域に最も早く足を踏み込み、最も広範囲にわたって歩いたのは、インド亜大陸からその隣接する諸国にかけて、大規模な地図作成の仕事にあたっていた、当時のインド陸軍測量部（サーベイ・オブ・インディア）のパンディットと呼ばれた現地人測量者たちであった。この名もない初期の探検家達によって少しづつ明らかにされてきたヒマラヤも、開拓時代に入ってイギリスの測量官たちの、三角測量法による地図作成によって、山の位置と高度が次々と測量されていった。そして今日に至る登山の時代を迎えるのである。

ヒマラヤ地域はまは政治的に問題のあるところが多く、外部からの立入を政治的に拒み続けてきた。このヒマラヤも、刻々と変る政治情勢の中で、未知なものへの好奇心にあふれる人間と、物質文明の威力により神秘のベールを次々にぬいでいった。エベレストをはじめ、数多くの高峰もほとんどが登られてしまった。盛んな登山活動と同時に、地質、気候、植物、動物等の学術調査、さらに諸民族の人類学的研究も進められている。

このように、次第に神秘のベールを脱されつつあるヒマラヤではあるが、その知識が歴史、文化、自然、民族、政治、経済等々各方面から立体的にとらえられ、一般向け書籍としてとりまとめられたことはなかった。しかし、一九六七年には、本書の編者を中心とし、委託研究を受けて「ヒマラヤ地方の民族と政治」が取りまとめられたし、一九七二年には、ネパールに焦点をしぼった包括的資料が海外技術協力事業団（現国際協力事業団）より「ネパール農業開発計画業務参考報告書」として取

りまとめられた。いずれも一般大衆向けのものではなかったが、特に前者は、本書編さんの基盤となった貴重な研究報告書であったといえよう。

本書は、ヒマラヤの全体を把握する目標をもって刊行された。この広大な地域の自然から人間生活にわたる複雑な多彩さは実に驚くべきものである。われわれが近年ヒマラヤについて知り得た知識は、おびただしい量であるが、これがまた、バラバラであることも現実である。

編者は本書のまえがきで、こう記している。

「知的なまた情緒的な興味からいっても、実際的な問題の解決からいっても、今日求められているもののひとつは、全体としてのヒマラヤのイメージなのである。この本はヒマラヤの土地、人、歴史から始まって、近代化、自然、探検・登山にまで及んでいる。小事典ではあるが、この全体的イメージを描き出そうと試みたものである。」

こうした編集の方針にそって、ヒマラヤ地域に造詣の深い二十数名の研究者が、それぞれの専門分野を分担してこの本の執筆に当っている。ヒマラヤ全体のイメージをとらえようとする努力にもかかわらず、資料が多くて入手しやすいネパールについては、全分野について充実した取りまとめが行なわれている反面、他地域については全般にわたっての記載にものたりなさを感じる面もある。また、自然科学、人文科学の面は特に充実した執筆陣をもって、深い掘りさげを行っているが、歴史等の項ではまだ掘りさげのたらない面を感じないでもない。これも、政治的事由に基づくこの地域への入域の困難さと、この地域の持ついい知れぬ神秘の響きで、われわれを惹きつける要素を未だ残していることを物語るものであろう。

このようにヒマラヤ全域という観点からいうと、多少消化不良気味の感じがしないでもないが、ヒマラヤ研究の現状からみると、二五四頁のこの小冊子の中にこれだけの内容を編んだ編集者の熱意に、ただ頭が下がる思いである。

本書では「文明の交差するところ」「地域」「民族」「歴史」「近代化」「自然」「探検と登山」の各章でヒマラヤが語られている。その内容は次のとおりである。

①文明の交差するところ—スケールの大きなこの地域にも自然に加え歴史があり、人の営みがある。人種や民族の移動の十字路という半面を備えながら、ヒマラヤは人間の棲み家として障害でもあり、また隠れ家でもあった。こうした文化の特殊性ならびに共通性等、この地の近代化に至るまでの文明論。

②地域—西はカラコルムからヒマチャル・プラデシ、ガルワール、ネパール、シッキム、ブータン、アッサム・ヒマラヤにわたる多様な地域性について語り、おおまかなヒマラヤのイメージを把握する。

③民族—厳しい自然の中で複雑多様な地域性にふさわしく、

多彩な民族が住んでいる。この章の大部分は現地に入って親しくそこに住む住民と交際し、観察・研究を行った人々によって、ヒマラヤ諸民族の概観や社会構造、言語、宗教等、彼らの築いてきた独自の文化について語られる。

アジアの中央は昔から諸民族の交錯する舞台であったが、ヒマラヤはその一角にあって厳しい自然で人々を拒む一方、避難所としてかくまってきた。それだけに複雑多様な地域性に見合った幾つもの文化の層が累積しているのである。

④歴史―ヒマラヤ山中の民族の多くは素朴な民族であり、固有の文字や文書を持つ人々は少なかった。したがって中世以前の歴史を文書に基づいて探ることは極めて難かしい。説話・伝説等によりわずかにうかがい知るにすぎない。このため本章では近代史を中心に記述されているが、本書に本章の占める割合が非常に少ないのは残念である。

⑤近代化―この章ではまず、チベット問題、印パ問題、中印問題等政治的状況の難かしさ、緩衝地帯としてのこの地域の特殊性等国際環境の現状を紹介している。更に、経済と農業にかなりの頁をさいているが、この項はヒマラヤ地域で大きなウェイトを占めるネパールに限定されてしまった。これも独立国で包括的な資料の得やすいこと、研究者が現地に入れる数少ない地域であることの結果であろうか。

経済の項においては、その構造の特殊性や現況の分析とともに、わが国の経済協力、さらに今後への課題にまで筆がおよぶ。

⑥自然―ヒマラヤの魅力の筆頭は、やはり何といってもその類い稀な自然とそのスケールの大きさである。この章では地質、気候、氷河、植物、動物の各項に分けて、現地調査の豊かな経験を有する研究者が執筆にあたっている。

地形区分、ヒマラヤの生いたち、モンスーンおよび高山地域気候の特殊性、氷河、植生動物区系から昆虫、雪男までが記載され、この地域に築かれた人間の社会、文化の背景を理解するのに大いに役立つ。

⑦探検と登山―ここではキリスト教の宣教師たち、次いでイギリスの軍人や役人によって行なわれた旅や探検から始まり、冒頭で記したパンディットの活躍等、インド測量局の測量と地図作りの時代を迎えた記録が語られている。やがてヒマラヤ地域は世界の屋根をめざす登山家、研究者の対象となり、登山・調査の黄金時代を迎えるのである。

ヒマラヤの登山と探検のすぐれた解説書として、ケニス・メイスン、G・O・ディーレンフルトや深田久弥氏の著作があるが、本章では「地域区分」にそってそれぞれの地域分の活動状況が取りまとめられている。巻末に収められた「探検・登山史年表」「ヒマラヤ主要高山表（山名、高度、初登頂など）」は非常に明解に編さんされており好感が持てる。

なお、本書は目次、索引（全体図、部分図）ともにK・J法で図解され、利用が便利なように配慮されている。

執筆者二五名のうちそのほとんどが現地で調査にあたっているのをみても、戦後マナスル登山から始まった日本のヒマラヤ登山、学術調査の結果が本書に集大成された思いのする一冊である。この一冊が一つの指標となって、まだ埋められていない地域、分野の研究調査が進展すればこの上ない喜びである。

〔松沢憲夫〕

年報第六号

日本山岳会学生部編　判型二一×二〇センチ　本文二七一頁　巻頭写真一六葉（カラー八、モノクロ八）　一九七八年二月　茗渓堂刊　定価三六〇〇円

日本山岳会学生部の年報第六号を興味深く読ませてもらった。その中で特に編集者の企画の中心であったと思われる「大学山岳部の原点を探る」を、大学山岳部で青ち四年間過ごしたOBの一人として、編集者の意図するものが痛いほど感じられた。

編集者らは、編集後記の中で、現在および将来の大学山岳部へのアピールとして、卒直に次のように書いている。

「昨今、大学山岳部の低迷化なる言葉を、よく耳にしたり、目にする。その度に、大学山岳部で育った僕は、言い知れぬやしさと寂しさを感じずにはいられなかった。確かに最近、大学山岳部関係者の好山行の記録は少ないが、基礎体力・技術は過去とそんなに変わっていないはずである。足りない（劣る）のは、おもしろい山行をしようとする意欲ではないか……」

たしかに「大学山岳部の低迷化」なる言葉を直接、間接的に聞いたりする。そう言う意味で、たしかに自分自身の心の中にも編集者と同様な気持が潜在しており、そのように言われる風潮を非常にくやしく思っている。「大学山岳部の低迷化」と言うより、「大学山岳部のマンネリ化」なる言葉の方が適しているのではなかろうか。と言うのは加盟団体の積雪期山行記録〈七〇年から七六年〉を見ても、同じ時期に同じところへ出かけているような山行があまりにも多いような気がする。北アルプスに「表銀座・裏銀座」とか仮称をつけて地図に出ている時代である。一般登山者の行くところが悪いと言うのではないが、もう少ししたら「冬の学生銀座」などと言われるかも知れない。毎年同じところへ行くよりも、もう少し地域研究をし、意欲的なおもしろい登山をしてもらいたいものだと思う。それにより一番満足できるのは当事者なのであり、登山のおもしろ

さ、スケールの大きさ、その深さを充分知ることができるであろう。そう言う努力をしない限りはマンネリ化を打破することはできないと思う。一度、個性的な登山を味わえば、その興味を忘れられず、次々に視点を変えた登山を計画することができるはずである。

登山と言う行為は、そもそも非生産的な行為であって、「遊び」であると思うから、常に満足のゆく環境や条件のもとで活動すると言うことは困難であると思う。しかし、人間と言うものは困難な環境に存在している方が進歩があるのであり、ことに登山について言えば、困難があるからこそやれるのであって、困難がなければ登山などは定義されないであろう。

学生部年報第六号の特集として構成された「大学山岳部の原点を探る」にまとめられた山行記録は、全て共通点として何らかの条件や制約を背負わされている。過去の山岳部の背景を基盤とし、現実の問題を考慮し、さらに将来へステップアップする目標を掲げている。その山行記録を通じて、執筆者達が登山計画から実行へのアプローチとして、苦悩苦悶している姿勢が充分うかがえるし、また執筆者らの後輩達へ期待している意図と言うものも、読みとれるのではなかろうか。

困難な条件や制約は、克服するために存在するものであって、登山を考える上ではさけ得ないものである。そして何よりも価値あることは、困難を打ち破った時の喜びである。登山において目標を定め、そのために一歩々々努力すると言う過程を忘れてはならないと思う。

「大学山岳部の原点を探る」に掲載された記録は、そう言う意味で、現実の困難を乗り切り、将来の大きな目標に向かって全員が努力して登山を実践している記録である。

戦前の早大による「滝谷」、立教大による「ナンダ・コート」は、登山そのものがまだ世間一般に受け入れられてない時代の登山であった。しかし彼等はそこにパイオニア的意義を見い出し、登山の先駆者としての自負をもっていた。現在から考えると大変幸せであったというべきかもしれないが、何よりも最初に実行する時の困難を克服した、その情熱を見直さなければならない。終戦直後の日大による「北鎌尾根独標側稜より北穂高岳往復」、慶大による「春の剣岳より西穂高へ」は、終戦の混乱と物資不足と言う時代に、一致協力し合って登山活動に専念した、積極的な盛り上がりを感じさせてすがすがしい。その時代的背景には、英国のエベレスト登頂を頂点とする、ヒマラヤ八〇〇〇メートルジャイアンツへの初登頂ラッシュの幕明けがあり、その国際的レースに日本山岳界が参加して立派な成果をおさめてきた基盤が、こうした学生登山活動の中からつちかはれて来たことは忘れてはなるまい。さらに昭和四十年代に入って行なわれた日大による「宇奈月より西穂高」、芝工大による「利尻岳」は、学生闘争激化の時代の産物であり、大学山岳部

そのものより大学自体が問われる敏感な時代にあっても、純粋に登山への志向を通したその行動は、大学山岳部としての原点を失っていなかった何よりもの証拠であろう。

さらにごく最近の都立大による「白馬名剣尾根」と早大による「大タテガビンより八ッ峰」であるが、それらは昨今耳にするいわゆる「大学山岳部の低迷」の時代の記録である。過去の大学山岳部は何十人もの部員で大々的な極地法登山を展開したが、そんなことにこだわらず、山岳部員減少と言う条件のもとで、機動力をいかんなく発揮して行なった登山であり、それははっきりと過去の大学山岳部の集団登山のイメージから脱皮した新しい登山であると云える。彼らが決して低迷していたわけではないのは明らかである。

最近の大学山岳部は、困難をなるべくさけて登山をすると言う、何かスケールの小さくなった登山をしているような気がする。本書を味読して、もっと登山に対して一途な情熱と貪欲な意欲をふるい起し登って欲しいものである。

〔桐生恒治〕

Yuraq Janka（白い氷）

Guide to the Peruvian Andes Part I
Cordilleras Blanca and Rosko p. 180.
by John F. Ricker
The Alpine Club of Canada, Banff, Alberta
The American Alpine Club, New York City

本書はペルー・アンデス案内書の第一巻でブランカ及びロスコ山域について取扱っている。案内書の編集方法はヨーロッパに出回っている案内書に似ているが、A5判ほどの大きさでポケット・サイズではないから、手軽に扱えるとはいえない。しかし、本書の内容は唯の案内書であるにとどまらず、ペルー・アンデスにおける小登山史やキャラバンについての注意、服装、食糧、酸素などについての説明など、著者の経験を基礎にして説明がされている。例えば、医療の項では、伝染病や高度順化、更には著者が持参した薬品の種類とか、外科用医療具についても詳述している。

ブランカ山域の最高峰ワスカラン南峰（六七六八メートル）についていえば、一九三二年の初登頂以来三つのルートと、三つのトラヴァース・ルートが記されており、このように当該地

域で登頂された山々については年度別、各ルート別に殆んどの記録を網羅し、記述も単に山行報告資料を無味乾燥に要約せず、適当に興味を引く記述も残すようにして編集されている。当会の「山岳」からも引用されてある。四年間にわたるあらゆる方面からの資料収集と、この案内書を作る下地ともなった十数年に及ぶこの地域での地質・地誌学者としての活動に裏打ちされた内容は流石である。勿論協力者が居たのではあろうが、これをまとめる労力は大変なものだったろうと想像される。

こうして調査されたものの中には、当然未登峰も、未登ルートも混じっている筈だが、今日の登山団体が出版する案内書のあり方として、こうしたものは掲載していないと断り書きをしてあり、巻頭には「我々はコルディェラ・ブランカの美を守る義務がある…」とうたっている。

巻末にまとめてある現地言葉の発音の仕方とか、言葉の意味について記述した箇所は、言語学上からも興味があるのではないかと思われる。

長い年月を要する労作の宿命として、最近の記録が載っていないという欠陥はあるが、ペルー・アンデスの当該地域を知ろうとする者にとって、付録の地図（十万分の一）二葉とともに本書は欠くことの出来ない案内書といえよう。

〔岡沢祐吉〕

世界山岳地図集成・ヒマラヤ編

諏訪多栄蔵他編著　三七センチ×二六センチ　三三〇頁　一九七七年十二月　学習研究社刊　定価一九〇〇〇円

会員諏訪多栄蔵、吉永定雄、阿部和行、薬師義美氏らが中心となってヒマラヤの地図集成を作っているという記事を、日経新聞夕刊で見たのは、昨年十月二十五日であったが、このほど立派な出来栄えで誕生したことは、まことに嬉しいことである。

巻頭にネパール・ヒマラヤの photo-map と、その裏面にグレート・ヒマラヤ（三百万分の一）の折込みがあり、つづいて高山竜三氏によるヒマラヤ一人と風土と題したカラー写真十六頁がある。ここにはヒマラヤの山姿ばかりでなく動植物、住民と生活、ゴンパ等等が、かなり広範囲にとりあげられていてそれだけでも一つの立派な作品と思われる。ついで在田一則氏「ヒマラヤの地形と地質」上田豊氏「ヒマラヤの気候と氷河」高山竜三氏「ヒマラヤに生きる人々」が十二頁に亘って述べられ、いよいよ本文の地図が始まる。

まずネパール・ヒマラヤの二百五十万分の一地図につづいて、ヒマラヤの山々―一の写真が現われるが、カラー八頁に亘る山岳写真は何れも素晴しく且つ貴重なものが多い。

地図の第一はブータン、ついでシッキム・ヒマラヤ、カンチェンジュンガとその西部、エベレスト、クンブ・ヒマール、ロルワーリン・ヒマール、ランタン・ガネッシュ・ヒマール、マナスル・ヒマール、アンナプルナ・ヒマール、ダウラギリ・ヒマール、カンジロバ・ヒマール、アピ・ナンパ・サイパル、以上十二面見開き大の地図と、各山群についての登山史が参考文献を付して添えられている。

次にインディヤン・ヒマラヤとして同様な方針のもとに二百五十万分の一の地図をかかげ、ヒマラヤの山々―二のカラー写真が八頁収められている。

同様に見事な作が多い。地図はナンダ・デヴィ、カメット、ガンゴトリ、レオ・パルギャル、クル、中央ラホール、メントサ、キシュトワール、ヌン・クン、レー、スリナガール等十一面見開き大の地図と、登山史が添えられている点は前と同じである。

最後にトレッキングについても三十余頁があてられ、探検・登山史年表（一六二四～一九七六年）、地図地名索引三頁が添付されているが、前記の各山群の登山史には本書の多くの部分があてられ、全体で三三〇頁となっている。

本書は、現在までの日本人によるヒマラヤ登山及び研究の、ある意味では精華を示していると言っても過言でない労作であり、編纂の中心になったと想像する諏訪多氏らをはじめ、多くの執筆者、地図作成者、写真撮影者、同提供者の協力に賛辞を呈したい。そして本書が、今後日本におけるヒマラヤ登山者、研究者の座右におくべき一書として、欠くことのできぬものであることを喜びたい。

最後に私なりの感想を少し述べてみる。出来栄えは既述の通りまことに見事であるが、地図集成と銘うったからには、もう少し地図の部分が多いことを、実は期待していた。いわゆるスケッチ・マップ式のものでも、信用できるものは、とり入れた方がよくはなかったか。更には、日本山岳会マナスル隊作製のマナスル東面地図とか慶応隊によるヒマルチュリの地図のように、実測図のあることも知られているし、少し古いものではカール・ウィーン作製のゼム地域の地図とか、最近ではE・シュナイダーによるエベレスト周辺の精細な地図（二万五千分の一）などがある。これらについて編纂者らは、ご存知でない筈はない。ただ著作権、版権等の問題で簡単にとり入れられなかったことと思う。もしそれならば、そうした地図の所在を文献上に明示できなかったものか。登山史の記述をもっと省略して、例えばエベレストなら現在――の地図が最良、それは――を見よ、といったような記述が望ましかった。

各山群の登山史にはかなり詳細な参考文献が添えられているが、むしろ地図の作製史といった観点から書いてほしかったと思う。この編纂者たちならそれが十分出来たかと思うだけに、いささか惜しまれる。またヒマラヤの地図の作製史の領域まで入りこむのは、少しおおごとになるとしても、ヒマラヤ全域の地図が印度測量局の地図なくしては考えられぬとき、その基本的文献である R.H. Phillimore: The Historical Records of the Survey of India, 5 vols. は何をおいても挙げておくべき文献ではなかったかと思う。

本書中地図作製史的見地からの敘述が、やや見られるのは薬師氏の「カンチとその西方山域」、同「アンナプルナ山群」、阿部氏の「ランタン」、吉永氏の「カンジロバ」等である。

なお地図上の山名、地名等をいちいち詳細に検討する時間的余裕はなかったが、本文中には少々誤植があり、二一九～二二一頁にそれがやや目立ち、また二二六頁（右）の参考文献として挙げたHJの巻数に間違いがあるのは、この種のものとしては全体を精査して、是非正誤表を作られることを望む。

本書は監修者として吉沢一郎氏の名が見られるが、編纂者の明記がない。執筆者全員というわけではあるまいから想像する以外にないが、これだけの本なのだから明記すべきであった。

またヒマラヤ篇であるのにナンガ・パルバートが含まれていない。これは或いは次に計画中のカラコルム、ヒンズー・クシュの方へ含めるお考えかと推測するが、それなら、その点も明記すべきであったと思う。なおアッサム・ヒマラヤのナムチャ・バルワ周辺は明瞭なものが入れにくかったと思うが、スケッチ・マップ程度でも収められていたら、よかったと考える。

〔望月達夫〕

Everest The Hard Way

by Chris Bonington,
Hodder and Stoughton, London, 1976, p. 239

過去六回の挑戦を退けてきたエベレスト南西壁も、一九七五年九月二十四日、遂にイギリス隊にその城を開け渡した。

エベレスト南西壁がいかに難しい対象であっても、また、それが難しければ難しいほど、挑戦者は後を絶たず、そこに挑む登山隊がある限り、いつかは登られる運命にあったことは云うまでもない。しかし、こんなに早く、こんなにスマートに、エベレスト南西壁が登られることを予想した人がどれだけいただろうか。

実は、イギリス隊がロンドンを出発する少し前の一九七五年

七月、私は、日本山岳会高所登山委員会のメンバーの一人として、カトマンズを訪れたことがある。目的は、日本山岳会が捲土重来を期して、エベレスト南西壁を試みるために、登山許可をめぐる問題を解決することだった（最終的には、明大隊が一九八〇年プレ・モンスーンの許可を取得したために断念）。

今やこれも〝幻の計画〟になってしまったが、その当時、われわれは、エベレスト南西壁を登るには、あるいは一シーズンだけでは無理じゃないかと考えていた。そこで、宮下秀樹氏を中心に、ようやくまとめあげた作戦は、一九七九年のポスト・モンスーンにルート開拓と八〇〇〇メートルまでの荷上げを行ない、翌八〇年のプレ・モンスーンに一気に登りきるという、二シーズンにまたがる連続攻撃を主体とするものだった。

もしイギリス隊が登れなかったら、南西壁をめぐる戦いは一九七九年以降にもちこされるにちがいない。そうなら、一番乗りの入場切符だけは手に入れておこう、というのがそのときの考えだった。それだけに、イギリス隊の見事な速攻による成功のニュースに接したときはショックだった。

しかし、今から考えてみれば、とくに、隊長のボニントンによって書かれた公式報告書である本書を読んでみれば、エベレスト南西壁は、彼らの手によって、登られるべくして登られたという感が強い。これも〝コロンブスの卵〟なのかもしれないが、イギリス隊の成功をもたらした要因は、①強くて優れた登山家の結集、②卓越したリーダーシップ、③用意周到な作戦計画、の三つに要約できる。とくに、本書を読むと、ボニントンの隊長としての活躍が強烈な印象を与え、かつ、ボニントンのリーダーシップがイギリス隊の成功に果たした役割がいかに大きかったか、を知ることができる。

私はボニントンに会ったことはないが、たまたま三十分程エベレスト南西壁の問題について、電話で話しをしたことがある。そのときの彼の落ち着いた包容力のある話し振りが、本書を読んでいると、自然に浮かびあがってくるようだ。本書では、直接彼の登山観や人生観を披瀝しているわけではないが、むしろエベレスト南西壁に真正面から取組んで戦いを挑んでいった具体的な過程を通して、彼の人柄とか登山に対する姿勢を幾冊もの他の著書以上に知ることができたように思う。ボニントンと話しをしたのは、丁度、イギリス隊にエベレスト登山許可が下りた直後の一九七四年九月だった。"The Mountains" 編集長のケン・ウィルソンに頼んで、ロンドンでの面談の約束をとりつけたのだが、先方の都合で駄目になり、結局、マンチェスターにいるボニントンを電話で呼び出すことになった。そのときの話題は、①日本隊との合同登山の可能性、②ポスト・モンスーンの登頂の可能性、③ロック・バンド突破のルート選択、の三つだった。すべて基本的な作戦に関わる問題ばかりだった。①については、当然こちらが提起した問題だが、彼は、

即座に、「過去の失敗は二度と繰り返したくない」と断ってきた。②と③は、彼の方から切り出してきたことだが、ポスト・モンスーンの可能性については、日本隊（一九七三年のRCCⅡ隊）の登頂、が何よりの証明である、と云って、RCCⅡ隊の資料をしきりに欲しがっていたことと、ロック・バンドのルートについては、左のクーロアールから突破するつもりであることを明言していたことが印象に残っている。

彼が、RCCⅡ隊をはじめ、過去の登山隊の経験を評価し、その成果を謙虚に採り入れてきたことは、本書のなかでも随所に触れられているが、今から思うと、既にそのとき、ボニントンの頭のなかには、作戦の原型が明確に描かれていたという気がする。

ボニントンという人は、多分、生来のリーダーなのであろう。その点では、一九五三年のエベレスト隊々長だったハントとよく似ている面が多い。軍人としての共通の経歴がそう思わせるのかも知れないが、登山の好みもスタイルもまったく異なるにもかかわらず、リーダーとしての資質、例えば、計画の立て方、隊員の選考、隊の運営、リーダーとしての位置のとり方、といった面で二人に共通点が多いのが面白い。

ノイスは、『エヴェレストーその人間的記録』のなかで、ジノ・ワトキンスの言葉を引いて、リーダーとは、「彼の統卒する隊のなすべきこと全てを、自分ですることができ、しかもいつでも引き受けられる人物」と言っている。これは、多分に、イギリスの探検の伝統から生まれた、イギリス的な定義と云える。しかし、ハントとボニントンに共通するリーダーシップの理念は、このように、常に前線に立って、卒先垂範でチームをひっぱっていく指揮官というところに求められる。イギリスの二つのエベレスト隊は、まさに、そのようなリーダーの下ではじめて登頂に成功している。一九五三年の初登頂の際に、最終攻撃のためにサウス・コルへの荷上げを行なったのはハント隊長自身であった。今回の南西壁からの登頂の場合も、問題のロック・バンドは、ニック・エスコートとタット・ブレースウェートの二人によってあっさりと突破されたが、その活躍を引き出すお膳立てをつくったのは、ボニントン隊長自身である。隊の進行ダイヤグラムを見ると、彼が第五キャンプから上で八日間も頑張って、ルートを開き、荷上げをしたことが如何に大きな意味をもっていたか、一目瞭然である。しかも、普通の隊長なら、これだけでも出来過ぎというべきで、満ち足りて、後は他の隊員にまかせようと考えるだろう。しかし、ボニントンは、あくまでも自らが頂上に立つことの魅力を捨てきれず、悶々と悩む。こういった、生ぐさい、どろどろした著者の内面や心理的葛藤が赤裸々に描かれているところが本書の最大の魅力になっている。

本書を書くにあたって、著者は、素材として、毎日テープレ

コーダーに吹き込んだ日記をフルに活用している。更に、隊員の日記や手記、家族への手紙をふんだんに織りこんで、臨場感を伝えるのに成功している。それだけではなく、これらの一次資料が、隊の進行の過程での意思決定のプロセスや、局面局面での隊員の心理、主体的な関わり方を解き明かすための武器として有効に使われ、隊長であった著者の眼を通して、別の〝もうひとつのドラマ〟として、立体的に再構成されているところに、本書の報告書としての価値と新しさがある。

一九五三年のエベレスト初登頂の際は、公式報告書であるハントの "The Ascent of Everest"（『エベレスト登頂』朝日新聞社訳）を補うものとして、ウィルフリッド・ノイスの "South Col"（『エヴェレスト―その人間的記録』浦松佐美太郎訳）が刊行されている。ボニントンの狙いは、やり方は違っても、多分、ハントの報告書とノイスの手記を一緒にしたものを書こうというところにあったのだと思う。そして、その狙いは、かなりの程度達成されたと云えよう。そして、われわれは、それら報告書のスタイルの相違のなかに、むしろ、二十二年間のヒマラヤ登山の内容と登山家の考え方の変化を読みとることができよう。

なお、本書の末尾に付いている資料は、今後のヒマラヤ登山を目指す人に貴重なデータを提供している。とくに、〝計画にあった〟とするコンピューターを利用したプログラム作成の部分は、きわめてユニークである。

本書には、大浦暁生、平林克敏訳『エベレスト南西壁―英国登頂隊の記録』（昭和五十二年五月二日、集英社刊）と題する全訳本が出版されている。細かいところまで配慮された労訳である。写真は、原本よりはるかに美しく仕上がっている。

〔中島　寛〕

昭和五十三年二月十六日、戦後の関西支部、というより、我が国のアルピニズム再建史の、第一ページに登場した佐谷健吉氏が逝った。行年五十八才、脳溢血であった。

昭和八年浪速高校尋常科より登山を始めた佐谷氏は、北アルプスの、主として荒沢奥壁、カクネ里を中心に活躍、昭和十五年東大パーティの一員として荒沢南稜の積雪期初登に成功している。

大戦中海軍航空隊の内地勤務であった為、戦後逸早く復員した彼は、早速篠田軍治、西岡一男、太田敬、田中栄蔵、岸田権二といった人々と関西支部の再建にかかる一方、母校（浪高）山岳部の現役を指導して山行を再開した。

昭和二十一年十月　平川沢二本松尾根

昭和二十一年十二月　杓子フェース合宿（未登）

昭和二十二年八月　明神最南峰東壁及び中又白奥壁の完登

昭和二十二年十月　下又白奥壁の完登

昭和二十三年一月　鹿島槍北壁の完登

昭和二十三年三月　白馬三合尾根初登

あの戦後の小舎も道具もなかった時期に、これだけのスケジュールをこなしただけでなく、学連やＪＡＣの東西交流を精力的に推進する一方「岳人」の北アルプス記録集をまとめるなど、彼の燃える様な登山への情熱は今日目をみはるものがある。

佐谷健吉氏のこと

又、当時の大学山岳部総極地法登山化の風潮に対して、彼は少数精鋭のラッシュアタック方式を信奉し、実践し、そして成功した人であった。たとえヒマラヤンジャイアンツであっても最終アタックはこのタクティックしかなく、最終キャンプ迄のアレンジは誰れにでも出来るということ、そして登山も又人間の問題であるから、気心の知れない多勢で行く位なら、止めた方がよいと、彼は常々云っていた。

そうした彼の激しい山行も白馬三合尾根でぴたりと終る。毎日顔を出さぬ日のなかった支部ルームにも二度と再び現れることはなかったのである。昭和二十五年より警察予備隊に文官として入隊し、途中で航空自衛隊に転じ、昭和四十七年、術科教育本部監理部長を最後は停年退職した。

山登りが山と人との出会いである反面、山を介しての人と人との出会いであることも真理である。又、今日のヒマラヤンブームによって、本来のスポーツアルピニズムが変貌を遂げつつあることも事実である。そうした中で、日の経つにつれて惜しい人をなくしたという感慨に胸を打たれるのは、私だけではあるまい。

没後、生前の功績により勲四等瑞宝章を授与されている。

〔徳永篤司〕

（佐谷氏は昭和二十二年入会、会員番号二三九二、後年会籍をはなれた。）

会務報告

昭和五十二年（一九七七）七月～昭和五十三年（一九七八）六月

◇**七月理事会**　七月十一日（月）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、皆川、鈴木、倉知、黒石、越田、浅田、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤、小原
▽議事・報告
一、故中原万次郎氏遺族よりの寄付の件
二、ルーム基金募金の件
三、図書・集会・海外連絡・山岳編集委員会報告の件
四、青年懇談会報告の件
（詳細は「山」三八七号参照）

◇**九月理事会**　九月十二日（月）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森（久）、鈴木、黒石、田村、浅田、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤、小原
▽議事・報告
一、UIAA総会出席者の件
二、明治大学アンナプルナ南峰登山隊推薦状交付の件
三、熊本支部二十周年記念行事の件
四、ルーム基金募金の件
五、自然保護・集会・図書・山岳編集委員会報告の件
六、高所登山・遭難対策委員会報告の件
七、青年懇談会・婦人懇談会報告の件
八、山研運営委員会報告の件
（詳細は「山」三八九号参照）

◇**十月理事会**　十月十一日（火）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、宮下、高遠、山本、中川、橋本、鈴木、大森（薫）、黒石、越田、田村、牧野内、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤、小原
▽議事・報告
一、第二次RCCカラコルム登山隊推薦状交付の件
二、予算状況中間報告の件
三、ルーム基金募金の件
四、山研運営・高所登山・学生指導・図書委員会報告の件
五、婦人懇談会報告の件
（詳細は「山」三八九号参照）

◇**十一月評議員会**　十一月十四日（月）ルーム
出席者　望月、折井、浜野、山崎、金坂、松丸、小原、大野、織内、山本、中村、細川
▽議事・報告
一、名誉会員推薦の件
二、定款一部変更のため臨時総会開催の件
三、ルーム基金募金の件

◇**十一月理事会**　十一月十四日（月）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森（久）、皆川、鈴木、大森（薫）、倉知、黒石、越田、田村、牧野内、嶂峨野、浜野、山崎、金坂、小原

▽議事・報告
一、UIAA総会の件
二、ルーム基金募金の件
三、評議員会報告の件
四、会長の中国訪問報告の件
五、山日記・山岳編集委員会報告の件
六、高所登山・集会・自然保護・海外連絡・学生指導・図書・指導委員会報告の件
七、婦人懇談会報告の件
八、信濃支部三十周年記念出席報告の件
九、熊本支部二十周年記念山行報告の件
（詳細は「山」三九一号参照）

◇**支部長会議**　十二月三日（土）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、大塚（北海道）、笠原（岩手）、柴田（秋田）、後藤（山形）、伊達（宮城）、藤島（越後）、蒲生（信濃代理）、大沢（山梨）、山本（静岡）、松井（岐阜）、中田（富山）、亀田（石川代理）、今西（関西）、野口（東九州）

▽議事
一、会務報告の件
二、ルーム基金募金の件

◇**十二月理事会**　十二月十二日（月）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、宮下、高遠、山本、小倉、中川、大森（久）、皆川、鈴木、黒石、越田、牧野内、嵯峨野、浜野、山崎、小原

▽議事・報告
一、定款一部改正の件
二、臨時総会開催の件
三、本会事務所移転期日の件
四、中国登山協会との交流の件
五、日本中国文化交流協会に団体加盟の件
六、ヒマラヤンクラブ五十周年記念に会長出席の件
七、会報・山日記編集委員会報告の件
八、自然保護・海外連絡委員会報告の件
九、ルーム基金募金の件
（詳細は「山」三九二号参照）

◇**臨時総会**　一月十一日（水）ルーム
出席者　西堀会長以下十五名（他委任状出席一四八四名）

▽総会次第
一、会長挨拶　西堀栄三郎
二、議長選出　織内信彦
三、定款一部改正の件　高遠宏
（右、承認）
四、議事録署名人選任の件
（詳細は「山」三九三号参照）

◇**一月理事会**　一月十一日（水）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森（久）、皆川、鈴木、黒石、越田、田村、嵯峨野、浅田、浜野、山崎、松丸、近藤、小原

▽議事・報告
一、新ルーム・オープンパーティーの件
二、ラトック登山隊の件
三、ルーム募金の件

四、図書委員会報告の件
（詳細は「山」三九三号参照）

◇**二月理事会**　二月十三日（月）ルーム
出席者　望月、折井、宮下、高遠、山本、小倉、中川、橋本、大森（久）、鈴木、大森（薫）、黒石、越田、田村、嶮峨野、浅田、村山、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤、小原
▽議事・報告
一、慈恵医大創立百年記念学術登山隊推薦状交付の件
二、ルーム移転完了の件
三、カラコルム学術遠征隊の件
四、集会・指導・図書・山研運営委員会報告の件
（詳細は「山」三九四号参照）

◇**三月理事会**　三月六日（月）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、宮下、山本、小倉、中川、大森（久）、皆川、鈴木、大森（薫）、黒石、越田、田村、牧野内、浜野、山崎、金坂、小原
▽議事・報告
一、昭和五十三年度事業計画案承認の件
二、昭和五十三年度収支予算案承認の件
三、総会日時の件
四、会長帰国報告の件
五、学生指導・集会・山研運営委員会報告の件
（詳細は「山」三九五号参照）

◇**四月理事会**　四月二十四日（月）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、宮下、高遠、皆川、鈴木、大森（薫）、黒石、田村、牧野内、嶮峨野、松丸、近藤、小原
▽議事・報告
一、昭和五十二年度事業報告承認の件
二、昭和五十二年度収支決算・財産目録承認の件
三、昭和五十三年度役員（監事）候補者の件
四、立正大学カラコルム登山隊推薦状交付の件
五、昭和五十三年度通常総会提出議案の件
六、ネパール国王来日に関する件
七、東海・関西・宮城支部総会報告の件
（詳細は「山」三九五号参照）

◇**四月評議員会**　四月二十四日（月）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、浜野、金坂、松丸、近藤、小原、大野、織内、山本、水野、中村、細川
▽議事・報告
一、昭和五十三年度役員（監事）候補者推薦の件
二、総会提出議案の件

◇**支部長会議**　五月十二日（金）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、山川（北海道代理）、佐藤（岩手）、川又（福島代理）、藤島（越後）、蒲生（信濃代理）、大沢（山梨）、山本（静岡）、尾上（東海）、松井（岐阜）、今西（関西）
▽議事
一、ルーム基金募金の件
二、支部の現状報告の件

◇**昭和五十三年度通常総会**　五月十二日（金）東京都千代田区九段北四―二―二十五・私学会館
出席者　西堀会長以下一一九名（他委任出席一、三〇九名）
▽総会次第

一、会長挨拶　西堀栄三郎
二、会務報告　西堀栄三郎
三、物故会員に対する黙祷
四、昭和五十二年度事業報告　宮下秀樹
五、昭和五十二年度収支決算、財産目録報告　山本健一郎
六、監査報告　飯野亨
（右、承認）
七、昭和五十三年度事業計画および収支予算案の件　宮下秀樹
山本健一郎
（右、原案どおり承認）
八、昭和五十三年度役員（監事）選任の件
監事として次の各氏を選任した（任期は一年）
〈監事〉村山雅美（再任）、片岡博（新任）
九、昭和五十三年度除籍の件
十、議事録署名人選任の件
（詳細は「山」三九六号参照）

◇**五月理事会**　五月二十三日（火）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、宮下、中川、大森（久）、皆川、鈴木、倉知、黒石、牧野内、嶮峨野、片岡、浜野
▽議事・報告
一、支部長交代の件（岩手、福島、石川）
二、学生部アラスカ遠征（ブラックバーン峰登山）の件
三、支部長会議報告の件
四、青年懇談会、婦人懇談会報告の件
五、集会委員会報告の件
六、山日記、山岳編集委員会報告の件
（詳細は「山」三九七号参照）

◇**六月理事会**　六月十二日（月）ルーム
出席者　西堀、望月、折井、高遠、中川、橋本、鈴木、黒石、田村、片岡、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤
▽議事・報告
一、ドイツ山岳連盟若手メンバー来日の件
二、年次晩餐会（十二月二日）会場の件
三、海外連絡、集会、図書委員会報告の件
四、婦人懇談会報告の件
五、北海道支部十周年記念山行報告の件
（詳細は「山」三九八号参照）

◇**小集会**
▽第三五八回　昭和五十二年七月十三日（水）東京・千代田公会堂
映画と講演会　講師　西堀栄三郎氏
（詳細は「山」三八八号参照）
▽第三五九回　昭和五十二年九月十日（土）ルーム
越後の山を語る会　講師　藤島玄氏
（詳細は「山」三八八号参照）
▽第三六〇回　昭和五十二年十月二十五日（火）ルーム
山岳写真講習会　講師　白簇史朗氏
（詳細は「山」三九〇号参照）
▽第三六一回　昭和五十二年十月二十九日（土）東京・全電通会館
第一回ノミの市
（詳細は「山」三九〇号参照）
▽第三六二回　昭和五十二年十月三十日（日）南アルプス・夜叉神峠

山岳写真講習会・現地写真山行
（詳細は「山」三九一号参照）
▽第三六三回　昭和五十二年十一月十三日（日）秋山二十六夜山
現地山行
（詳細は「山」三九四号参照）
▽第三六四回　昭和五十二年十一月十五日（火）ルーム
山岳写真講習会・写真批評会　講師　白　簇　史　朗氏
（詳細は「山」三九一号参照）
▽第三六五回　昭和五十二年十二月十八日（日）東京・知行院
もちつき大会（青年懇談会と共催）
▽第三六六回　昭和五十三年一月十三日～十五日（金～日）八方尾根
中大山荘
スキー親睦会
（詳細は「山」三九四号参照）
▽第三六七回　昭和五十三年三月三日（金）東京・私学会館
スキー親睦会反省会
▽第三六八回　昭和五十三年三月二十五日（土）ルーム
新入会員オリエンテーション
（詳細は「山」三九五号参照）
▽第三六九回　昭和五十三年三月二十九日（水）ルーム
マカルー西稜映画会
（詳細は「山」三九五号参照）
▽第三七〇回　昭和五十三年五月十三日～十四日（土～日）箱根山
総会後の懇親山行
▽第三七一回　昭和五十三年五月二十七日～二十八日（土～日）会津
駒ケ岳
山菜山行
（詳細は「山」三九七号参照）
▽第三七二回　昭和五十三年六月二十日（火）ルーム
会津の山を語る会

◇主なる行事および集会

▽自然保護委員会上高地集会
昭和五十二年八月二十七日～二十八日　上高地
「山」三八八号参照
▽奥日光現地集会（青年懇談会主催）
昭和五十二年九月十日～十一日　奥日光・光徳ロッジ
▽越後支部記念山行
昭和五十二年十月二日～四日　杁差岳
▽自然保護委員会東京集会
昭和五十二年十月十五日～十六日　裏丹沢長者舎山荘
「山」三九〇号参照
▽第十回山岳図書交換会（図書委員会主催）
昭和五十二年十月二十二日（土）ルーム
「山」三九〇号参照
▽東海支部映画と講演の会（講師・西堀会長）
昭和五十二年十月二十八日（金）名古屋
▽信濃支部三十周年記念集会
昭和五十二年十一月五日～六日　上高地
「山」三九二号参照
▽熊本支部二十周年記念山行
昭和五十二年十一月五日～六日　祖母山
「山」三九二号参照

▽第二十回もみじ会（静岡支部主催）
昭和五十二年十一月十二日～十三日　大日峠
「山」三九二号参照
▽関西支部映画と講演の会（講師・西堀会長）
昭和五十二年十一月十五日（火）大阪
▽昭和五十二年・年次晩餐会
昭和五十二年十二月三日（土）京王プラザホテル　出席者二八三名
「山」三九一号参照
▽この一本展
昭和五十二年十二月三日（土）京王プラザホテル
「山」三九三号参照
▽第二十一回山スキー技術講習会（指導委員会主催）
昭和五十三年二月十六日～十九日　鹿島槍
▽高所登山研究会（高所登山委員会主催）
昭和五十三年二月十八日（土）ルーム
K2登頂報告　講師・広島三朗氏
▽新ルーム・山岳図書室オープンパーティー
昭和五十三年三月十一日（土）
「山」三九四号参照
▽第六回山岳史懇談会（図書委員会主催）
昭和五十三年三月十六日（木）ルーム
一九二〇年代のアルプス　講師・各務良幸氏
「山」三九七号参照
▽山岳図書を語る夕（図書委員会主催）
昭和五十三年四月十二日（水）ルーム
ドイツの山の本について　講師・横川文雄氏
▽第二十一回登山技術講習会（指導委員会主催）
昭和五十三年四月十四～十六日　富士山御庭小屋付近
▽ヒマラヤを描く美術展（ネパール国王・王妃ご来日記念）
昭和五十三年五月十六日～二十一日　東京日本橋三越
「山」三九七号参照
▽第十六回木暮理太郎翁碑前懇親会
昭和五十三年五月二十日～二十一日　金山平
「山」三九七号参照
▽第三十二回ウェストン祭
昭和五十三年六月四日（日）上高地
▽北海道支部十周年記念山行
昭和五十三年六月十六日～十八日　ペテガリ岳
▽雪崩研究会（遭難対策委員会主催）
昭和五十二年九月十六日（金）、十月二十日(木)、十一月十日(木)、十一月三十日（水）、十二月二十日（火）ルーム

◇海外登山界との交流

▽本年度は三十ヵ国六十団体と情報および機関誌の交換をおこなった。
▽UIAA（国際アルピニスト連合）一九七七年度総会に吉沢一郎会員が出席（昭和五十二年十月十二日～十五日、メキシコ市）
▽ガルワール登山隊（隊長原　真）が昭和五十二年十月四日タルコット峰の登頂に成功。
「山」三九一号参照
▽青年懇談会で昭和五十二年八月にドイツ山岳連盟との青年交流登山のため、ドイツへ代表を派遣
▽学生部アラスカ登山隊（隊長　深沢幸弘）が昭和五十三年六月マウ

ント・サンフォードに登頂

▽日本体育友好代表団の一員として西堀会長が中国を訪問（昭和五十二年十月二十七日～十一月八日）中国登山協会関係者と懇談し、合同登山を提案した。

「山」三九〇号参照

▽ネパール外相クリシュナ・ラジ・アリアール氏歓迎レセプション（日本ネパール協会との共催）

昭和五十二年十二月十六日（金）東京丸ノ内・銀行クラブ

「山」三九二号参照

▽ヒマラヤンクラブ創立五十周年記念の会合（昭和五十三年二月十七日～十九日）に西堀会長が出席。

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXXIII 1978 **Issued in December 1978**

Contents

In English (also in Japanese, pages in parenthesis)

The Second Ascent of the K2 Peak, 1977 ……Ichiro Yoshizawa… 1(90)

The First Ascent of Pruppo-Brukh in East Karakorum, 1977
……Japanese Railway Workers Karakorum Expedition… 3(112)

Tahu Rutum, the Rock Tower in Karakorum, 1977……Nobuo Kuwabara… 7(104)

The North-West Ridge of Nuptse, 1977……Haruo Kato… 9(129)

Himalchuli, the East Face, 1977……Toyozo Sugawara…10(120)

Broad Peak, 1977……Michio Yuasa…11(95)

In Japanese

Visits to Chinese and Indian Mountaineers……Eizaburo Nishibori……(1)

JAC's appeal against Alpine Polution……Kohei Watanabe……(6)

Winter Climbs Records

Tsurugisawa Ohtaki……Hosho Mountaineering Club……(15)

Tsurugi-Dake Yatsumine, the 4 th ridge of Peak I
……Gakushuin University Mountaineering Club……(32)

Kurobe Maruyama East Wall, the 2 nd Gully……Yuwa Yamazaki……(43)

Karasawa-Dake Makuiwa……N. Sakashita, K. Takeuchi……(52)

Eiger North Wall……Tsuneo Hasegana……(64)

History of Club's Local Sections

Kwansai Section……Toshio Imanishi……(72)

Echigo Section……Gen Fujishima……(79)

Kumamoto Section……Ken'ichi Nishizawa……(83)

El Capitan……Yoshio Nakayama……(136)

Tonquin Valley……Natsuo Honda……(144)

The Two Traverses of Hida Mountains……Noboru Takenaka……(149)

Shiragami Mountains……T. Sakamoto, T. Sato……(168)

Travel on Mt. Kurohoshi and Mt. Daimugen
in Meiji Era……Ryo Sugimoto……(190)

Opening of the New Club Room……Tatsuo Mochizuki……(204)

In Memoriam ……(208)

Book Reviews ……(237)

Club Notes: July 1977-June 1978……(256)

Editor : Nobuyuki Kondo

Editorial Staffs: Yasuji Yamazaki, Ichiro Kanesaka,
Hiroshi Nakajima, Ryozo Yamamoto, Jusetsu Setsuda,
Chizuko Ikeda, Yoshikazu Takahashi, Noboru Takenaka
Kei Kurachi

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sun-View Heights, 5-4 Yonban-cho, Chiyoda-ku Tokyo.

Office Bearers and Committee

1978 (April 1978-April 1979)

President : Eizaburo Nishibori
Vice-Presidents : Tatsuo Mochizuki, Ken'ichi Orii
Honorary Secretary : Hideki Miyashita
Honorary Editor : Nobuyuki Kondo
Honorary Librarian : Yasuji Yamazaki
Honorary Treasurer : Ken'ichiro Yamamoto
Auditors : Masami Murayama, Hiroshi Kataoka

Committee

Hideki Miyashita	Hiroshi Takato	Ken'ichiro Yamamoto
Nobuko Ogura	Takeshi Nakagawa	Kiyoshi Hashimoto
Hisao Omori	Kan'ichi Minagawa	Hiroyuki Suzuki
Nobuo Omori	Kei Kurachi	Tsune Kuroishi
Kazuo Koshida	Shunsuke Tamura	Akitake Makinouchi
Hiroshi Sagano	Haruo Asada	

Council

Masao Hamano	Yasuji Yamazaki	Ichiro Kanesaka
Hideo Matsumaru	Nobuyuki Kondo	Haruko Obara
Toshio Ohno	Nobuhiko Oriuchi	Takashi Ohta
Seiji Hashimoto	Hyoriki Watanabe	Tomosaburo Yamamoto
Ryuichi Kotani	Yuichi Matsuda	Masahiro Mizuno
Akito Noguchi	Junji Nakamura	Satako Hosokawa
Tokuro Date	Setsuo Tanbe	

Chairmen of Local Sections

Hokkaido : Takeshi Ohtsuka
Yamagata : Kanji Gotoh
Fukushima : Masao Nakajima
Shinano : Norinaga Okuhara
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto
Toyama : Seibei Nakata
Gifu : Tatsuya Matsui
Kwansai : Toshio Imanishi
San'in : Osamu Oda
Kumamoto : Ken'ichi Nishizawa
Iwate : Toshihiko Sato
Akita : Kinji Shibata
Miyagi : Tokuro Date
Echigo : Gen Fujishima
Yamanashi : Isaburo Ohsawa
Tokai : Noboru Onoe
Ishikawa : Toshizo Masue
Fukuoka : Daisuke Suematsu
Higashi Kyushu : Akito Noguchi

The Second Ascent of the K 2 Peak, 1977

Ichiro Yoshizawa

Thanks to the previous expeditions, such as the Americans', Italians', Polish and others', we could luckily make the second ascent of K2 in August, 1977. But we can never forget the precious experiences of those predecessors on whose strong shoulders we could climb the mountain. And I must emphasize especially here the fact that Dr. Charles S. Houston, Mr. Fritz Wiessner, Mr. Nick Clinch and Mr. H. Adams Carter, who were all my good friends, gave me long and useful advices before we started for our real climbing.

We sent 2 reconnaissance parties in advance namely firstly for finding the most interesting route for us (1975) and secondly for reconnoitering the again-and-again tried South-East Ridge as high as possible (1976). In the end it was decided that our supreme and sole task was to be that of sending some selected members (more than 10 if possible) to the top rather than trying unsuccessfully a new route.

Under the auspices of the Japan Mountaineering Association, our 1977 expedition was consisted of 52 members including Ichiro Yoshizawa (General Leader, 73), Isao Shinkai (Leader, 48). Among the 52 members, we have 10 TV and cinecameramen. The average age of the climbing members is about 30. We invited 3 men of the Alpine Club of Pakistan to join our expedition. Major Kamal Afzal Khan was our Liaison Officer. The fact that there had been no porter-problems occurred was wholly due to his ability, experiences and personal character.

On May 26, 1977, our expedition left Skardu with 15 tractors and 20 jeeps for Bahar. Mr. Ghazi Johar Khan, Deputy Commissioner of Skardu District and Major-General Qamar Ali Mirza, the President of the ACP were very kind and generous to us to prepare for our crossing of the Indus River by the bridge in construction. Our loads weighed 25 tons or so including low-porters' large quantity of foods. The number of our low-porters was a little under 900 in total.

Here we divided our party into 3. The first one started on the 29 th of May, the second on the 31 st and the third on the second of June. The oxygen party was not here yet. The 3 parties reached BC (Godwin Austen Glacier, c. 5200 m) on June 11, 15 and 16 respectively. The oxygen party reached BC on the 21 st with 260 bottles made in Japan and 8 made in France. The route making began on the 16 th of June.

Our activities after the BC was established; June 19-C1 (5530 m), June 22-C 2

(6260 m), July 1-C 3 (6850 m), July 12-C 4 (7460 m), July 25-C 5 (7920 m) and August 3-C 6 (8130 m).

Aug. 4 : The first attacking party was made up of Ryuichi Babaguchi (30), Yoji Teranishi (32), Takao Uzu (28), Toshitaka Kobayashi (28) and Nazir Ahmed Sabir (22, Pakistani). They left C6 at 2.30 am under the sky full of brilliant stars. But they returned from 8300 m at 3.45 am owing to the sudden change of weather into the violent storm.

Aug. 5 : The members of the second party were Tsuneo Shigehiro (29), Shoji Nakamura (35) and Takeyoshi Takatsuka (35). They were staying at C5 and waiting the recovery of weather.

Aug. 6 : Serious shortage of food and oxygen came owing to an unexpected heavy snow fall which buried them too deep to recover in a short time. So they asked the third party which was staying in C4 with other members, to bring up necessary loads to C5. Onodera, Yamamoto, Ube and Dr. Gashu came up with the required loads. The second party went down to Plateau (7200 m) and received them there. Thus the second party could spend the 6 th night safely.

Aug. 7 : The weather was fine and the second party went up to C6. They kept all their bottles into their tent to prevent them from freezing, putting on the gas all through the night.

Aug. 8 : Two of the second party left C6 at 5 am, Shigehiro followed them 30 minutes later. The snow slope from C6 to the Canal (we named it "Throat", 8220 m) above was about 50°. From here they traversed to the left in deep snow. The huge hanging glacier above their heads was always threatening. As the snow was so deep, they were forced to take route on the hard ice towards the ferocious hanging glacier. Then they traversed to the left again for about 80 m (2-rope length). Then to the right 20 m (c. 8400 m). From here directly up 60 m. Until this point from C6 their route was all fixed with ropes-550 m in total. Then an easy climbing followed a little. At 8470 m they could see their BC. When BC-men saw them moving slowly, they were at c. 8530 m. One more pitch (40 m) was fixed with rope and here they used up their ropes.

At 8550 m Nakamura broke a thin snow bridge and fell down about 7 m. But the other 2 managed to rescue him out spending one hour. After a short rest on a plateau, they again started for the last arduous climb and finally reached the summit of K2, the second highest point on the earth. Summit : from 6.50 pm to 7.20 pm. C6 was reached at 11.30 pm groving in the black night and C5 at 0.15 am (9 th of August). The second party's oxygen lasted 18 hours from C6 to

the top and further down to C 6 because they used it at a rate of 2 litres a minute when they were moving.

Aug. 9 : The third party which was consisted of Mitsuo Hiroshima (34), Masahide Onodera (34), Hideo Yamamoto (28) and Ashraf Aman (24) started C 6 at 5.16 am. They followed the second party's route using the fixed ropes almost all the way. Summit at 2.15 pm. Left it at 4.10 pm. In retrospect, this two hours' long stay on such a highest place, even in a normal state, was a little problematical and seemingly it affected them seriously on their descent. They reached C 6 at 7.30 pm. While Hiroshima and other one stopped there, where the half of the 4 th party was staying, the other members descended as far down to C 5.

Aug. 10 : Ryuichi Babaguchi (30), Yoji Teranishi (32), Toshiaki Kobayashi (29), Takao Uzu (28), Ryuji Hayashibara (27), Toji Niu (28), Kanji Kadota (28) and Nazir Ahmed Sabir (22) were the members of the 4 th party. They were well-prepared for the next day's probable last assault. But in the night the weather changed again and they must hear soon the voices of the staff in the BC to stop the more attempt and to leave the mountain behind.

BC was evacuated on the 22 nd of August in a snow storm and began the return journey to Skardu and Rawalpindi. (See plate 7 (a), (b))

The First Ascent of Pruppoo-Brukh (c. 7,000 m) in East Karakorum, 1977

Japanese Railway Workers Karakorum Expedition

"From an untouched glacier to an unclimbed peak"-this had been our dream and was the purpose of our expedition.

Mountains at the head of Hushe and Kondus valleys have not yet clearly surveyed and exact details in that area have not been well known. Unknown high mountains may exist there. Among a very few past records of expeditions to the area, we found a report telling that there is a peak with the height of 7,041 m at the junction of the ridge extending from K 7 and the one from Chogolisa.

We aimed at the peak and submitted an application to the Pakistani Embassy. The officer in the Embassy told us that they would not be able to accept the application for the nameless peak, therefore, we tentatively named it as "Chogolisa West" for which we received permission later.

Our party was organized by 13 members of mountaineering club of the Japanese National Railway Corporation. Our first problem was how to organize an overseas expedition and, as usual, we encountered with difficulties in acquiring the necessary funds for the expedition. However, thanks to the kind understanding of the authorities and to the warm help extended by many friends, we could finally leave for Pakistan in May.

On May 23, 13 of us arrived at Rawalpindi and stayed there for a week to make all the necessary preparations for the expedition. On June 3 rd, we flew to Skarudu and then proceeded to Khapalu in 5 ieeps. The approach march started with 84 porters on June 9 th towards the Chogolisa West Peak.

At 6 : 30 am, June 14, the morning calm at Techmi was broken by a loud whistle and the approach march to go into the Chogolisa glacier started. Even the Sirdar and porters have never been in this area before so the valley depths were completely unknown. We proceeded along a narrow track cut in the rock face and running alongside the lateral moraine of the Chogolisa glacier in an increasingly rarefied atmosphere.

The advance party and the Sirdar decided on the Base Camp site, located in an open space surrounded by low bush with a tiny stream on the east side of the slope and a big moraine rising on the west side. Another stream usually arising in the afternoon to the north of the Base Camp, flowed from north to south. This area is a part of the Chogolinsa Chimiku grass land and is 4,150 m high. The advance party arrived here at 11 : 15 am followed by the other team members, high porters and 84 local porters carrying 2,300 kilograms of food and equipment. Each porter received payment of 360 Rs and then they all left, going back down the mountain. Next day we had a snow with the low temperature. The members gathered in the kitchen tent and had a wonderful morning. In the afternoon, the mail runner brought letters.

June 16. At last the actual climbing activity began. A reconnaissance party of three members climbed over the moraine to the central part of Chogolisa Glacier and established a depot at 4,500 m high, above the crevasse area. From the next day transportation members and 8 high porters started to carry food and equipment to Camp 1 and above. This continued until June 30 while we worked actively to find the mountain which we were going to climb.

June 21. Camp 1 was temporarily established on the east side of the ice fall and the Base Camp was moved up to 4,300 m high, above moraine. The slopes to the south and west of the new Base Camp were carpeted with beautiful flowers

and water was easily available from several nearby streams and ponds.

June 22. Eight porters left and went down the mountain. The Camp 1 members' activity started at dawn working from the right hand side of the ice fall to fix a rope for 500 meters through the mass of casually opening crevasses and seracs. On the following day, Camp 1 was moved to a new location from where the route across the ice fall could be seen. At the same time, transportation was done by members carrying about 15 kgs. on each shoulder. At this point, we became certain that the peak we were aiming at was the snow covered dome located on the east side of Camp 1 from which southwest, a huge glacier, hung down with the main ridge to the south having one rock face and with a short snow-covered ridge to west. At this stage the route was re-discussed with the leader who came up to Camp 1.

The rock face going up to the west ridge and hanging glacier obviously would be too dangerous at a higher altitude, especially as the hanging glacier was prone to continuous avalanches. The gently sloping plateau area towards the south of the glacier seemed to be the only possible route although there was also a possibility of avalanches at a higher level. However, concerning this plateau, we only knew that it was quite big. The leader ordered the team members to go up to the main ridge from where most of the local conditions should be seen. All the members felt re-invigorated and carefully extended the fixed rope as long as 1,100 meters, fighting against the risk of collapse of the seracs and finally reaching the top of the ice fall.

June 24. In the warm summer sun, the 300 meter ice fall was safely negotiated by 12 : 30 and Camp 2 was temporarily set up. From there, a route was established along the ice wall where the risk of avalanche was anticipated. The route taken was through weird-looking crevasses and seracs reaching up to the 5,000 meter level. This was torture for us because we were not yet sufficiently adjusted to the altitude. After fixing a rope for 100 meters along the smooth rock across the avalanche route, the party reached the outwash snow from the glacier and the high plateau came in sight. Unfortunately the plateau was full of hidden crevasses and crossing it was extremely exhausting. Camp 2 was moved to a safe area at 5,250 m on the 29 th. A white peak could be seen to the the north east but it was not certain if this was the 7,000 meter peak we were aiming at or not.

July 2. The leader who had come up to Camp 2 told members to minimize the time spent here and to prepare for the attempt at the summit as soon as possible in order to avoid risk from the frequent avalanches. So members became very

busy ferrying the necessary food to the higher camps, and reconnaissance activity continued up from Camp 2. On July 5, we went over the crest of the glacier and looked at the Vigne Col on the left and gained the altitude towards the east. Later Camp 3 was established on the Col. From this point, Karakorum peaks could be seen running from north to west. The great range of Chogolisa lay to the east and the Concordia ranges were visible in the distance. Our objective lay in front of us to the north west. On July 7, after the route was made up to Camp 4 point, all the members got together at Camp 2. Camp 4 was established on July 10 at 6,400 m as the attack camp. The remaining distance to the summit was 600 meters of height.

July 12. 400 meters of rope were fixed along the core of ice fall to the summit. At the same time all the necessary food was carried up to Camp 4. The weather looked promising. The leader selected 2 members for the first attempt to the summit and they went to Camp 4 together with one supporting member and the leader. Another 4 members were preparing for the 2 nd attempt at Camp 3. Unfortunately one of the initial attack team was taken ill and the attempt was replaced by the 2 nd team and they were sent up to Camp 4.

July 14. Following is the report written by Yajima, a summit attacker.

The sky was full of stars when I woke up. Kobayashi and Nakamura roped together and I roped with Anji. We left the tent at 4 : 30 am. The first 300 meters could be covered without belaying. Then we replaced the fixed rope snow bar and traversed for about 100 meters towards the right using jumars. K2 and Gasharbrum appeared in a delicate shade of pink. We climbed 5 meters up on ice block then traversed for 60 meters at the edge of a huge crevasse and then crossed a snow bridge. We fixed a screw piton into a huge ice wall and climbed up vertically. After two pitches, we came across another crevasse which we could jump over. We fixed another screw piton and traversed about 10 meters to the right on an overhung and reached an ice wall. We climbed up this wall in 1 rope pitch then came to the snow slope which lead to the summit. Thick dark clouds started covering peaks over 7,000 meters. The summit ridge consisted of 3 gentle domes and we arrived at the middle one at 12 : 10 pm. There was a sheer drop to the south-east. Gasharbrum, Broad Peak, K2 and Mustagh Tower were all in sight. We called the leader on the radio. The supporting team was already at Camp 4 and congratulated us. We performed a climber's rite, sketched and took some photos of the surrounding ridges and peaks and then climbed up to another peak. After one and a half hours at the summit, we descended along the fixed ropes and arrived back

at Camp 4 at 13 : 35.

July 15. Following the leader's instructions in the stormy weather which began at midnight, the summit attackers descended from Camp 4 to Camp 3 where they joined the Camp 3 members. They then folded up the tent and carried the sick member down to Camp 2. After struggling in fresh snow against hidden crevasses and with the constant risk of avalanche, they finally arrived at Camp 2 at 17 : 30. They were all completely exhausted.

By 19 th, the route was re-established across the ice fall, and the doctor was sent up to Camp 2. The second attempt was then started by Narita, Osawa and Kida under much more arduous conditions.

On July 22, the team left Camp 3 at 1 : 30 am. The route was already well known by then. They gained altitude smoothly and reached the summit at 14 : 45 with no difficulty. However the weather was not very promising, so they hurried down after taking some photos, arriving back at Camp 3 at 20 : 30.

On the same day, the leader and one member left Base Camp for reconnaissance of the Chubugerdabusa Vesuten Glacier while 2 other members for the Carupatoriwan Glacier leaving the second leader at Base Camp in charge of the remaining members. On July 24, climbing was concluded on the return of the 2 reconnaissance teams to Base Camp.

In conclusion, we would like to point out that some of the peaks and glaciers are called by different names by local people such that Chogolisa is called Chogolinsa and Trinity Peak is called Tasa.

We took opportunity to name the peak we climbed which was temporarily called Chogolisa West Peak as Pruppoo-Brukh, (a mountain which has 3 important meanings) and the necessary procedures were taken through the authorities within the Pakistan Government. (See plate 10 (a)～(b), chart 7)

Tahu Rutum, the Rock Tower in Karakorum, 1977

Nobuo Kuwahara

The Tahu Rutum, a rock buttress vergin peak with the height of 6,651 m, is located in a hidden place in the Biafo Glacier, that is, on the south-east side of Kanjut Sar (Latitude N. 36° 10′, Longitude E. 75° 30).

Our party was consisted of 9 members and 1 liaison officer. Nobuo Kuwahara leader, Hirotoshi Miyagawa, Hideyuki Ohnishi, Katsuo Matsumura, Kazuto Obata, Yutaka Shimizu, Yoshinobu Tanaka, Yukio Usagawa, Kazuya Mitsumochi and Captain Khalid Qadeer Butt (Liaison officer).

After 6 days march-in from Baintha, we arrived Base Camp (we established 2 camps and 2 deposits on the way) at the height of 5,090 m on the snow field in front of "South Tahu Rutum glacier" at the basin of the Biafo glacier (June 30).

Our scheduled climbing route was through the steep south-west ridge. We started transport to Camp 1 (5,580 m), which was set up on July 1. We divided our party into 2 groups. The first group makes up the climb route and another transports luggages. The route to Camp 1 was through flat glacier basin, then 2,000 m of crevasse belt on the South Tahu Rutum glacier.

From Camp 1 to Camp 2, we went on very steep snow slope, first climbing the west side of ice fall, then crossing to east side, and climbing directly up the steep snow slope, which lead us to a flat place. Here Camp 2 (6,030 m) was set up on July 4. We could see all the way of our climbing route on the south-west ridge of Tahu Rutum from Camp 2.

From Camp 2 to Camp 3, we followed a snow valley to go down about half mile, and climbed up a gully to a col of the south-west ridge. After climbing the sharp and steep ridge (rock, snow and ice mixed), Camp 3 was set up on July 10, at the height of 6,200 m. From the col to Camp 3 was 8 rope pitches (300 m).

From Camp 3 we aimed at the summit. It was at first climbing the ridge (6 pitches) and then 12 pitches (300 m height) on the rock buttress with an overhung wall.

We needed 3 days to make route on the buttress. We were however, very lucky to have the buttress dried up after having a half month of fine days. If storm would have come, it had become a very difficult climb.

On July 13, Obata, Usagawa, Tanaka and Mitsumochi left Camp 3 at 6 : 00 am. They could use fixed ropes to go through the buttress. Then, they climbed 5 pitches (150 m) on the steep snow ridge. The snow was so soft that they had to dig trench about 1 meter depth. The steep ridge turned into a flat snow, then they reached at the summit at 12 : 20 pm.

The summit was a dome covered with very soft snow. They stayed about 1 hour on the summit. from where they could see many Karakorum mountains, Ogre, Kanjut Sar, Kingyang Kisch and Distegil Sar.

The next day, other 4 members, Miyagawa, Ohnishi, Matsumura and Shimizu

made the second ascent.

On July 15, all members came down to Base Camp. The weather went worse from this day. Next day, we left Base Camp and started return journey to Skardu but we had to go down without porters. We had a hard storm on the way, so we stayed 3 nights on the Biafo glacier. We came back to Baintha Camp ground on July 20. (See plate 9 (a)~(e), chart 6 (a), (b))

The North-West Ridge of Nuptse, 1977

Haruo Kato

We, 8 members consisted of Toho-Keiryu-Kai Mountaineerng Club, established Base Camp at the height of 5,220 m on the Khumbu Glacier on March 16 after 1 month of march-in leaving Kathmandu on February 17. We aimed at the ascent of Nuptse from the north-west ridge, to which the route from the Base Camp had been explored in the previous year by the reconnaissance party.

From Base Camp up to C2 which was pitched a little below the Snow Dome (6,330 m) on the north-west ridge, our route was made through a couloir and a steep hanging glacier. From the Snow Dome, the route was always on the sharp north-west ridge. C1 (5,700 m) was built on March 24 and C2 (6,200 m) on April 5. We were afraid if we could find enough space for the camps on the steep upper ridge, but we fortunately found unbelievably broad terrasse which was taken as the place for C3 (6,600 m).

The ridge was not only steep but also very complicatedly shaped and with big cornices. We had to dig tunnels to get through the ridge. C4 (6,900 m) was made in a big tunnel, from where we could see Cho Oyu and Gyachung Kang on the one side, and the South face of Everest on the other side.

Windy days continued since the end of April, and our progress on the ridge was much disturbed by strong winds.

On May 8, C5 was built at 7,350 m, and the next day Kato and Tamada left C5 for the summit of Nuptes. Many small peaks on the steep ridge made it difficult for us to proceed smoothly. We had to go back from the junction peak of the west ridge.

On May 10, Kunii and Sherpa Zambu made another trial to the summit and this

time they at last reached at the north-west peak of Nuptse (7,745 m) at 11 : 45 am on the 11 th after having one bivouac. There still remained a long steep ridge to the main peak of Nuptse from the north-west peak and it was for us out of problem to make a trial with our remaining supplies and bad weather conditions. (See plate 12, chart 9)

Himalchuli, the East Face, 1977

Toyozo Sugawara

The three parties, JAC (1959), Italian (1974) and Aoyama University (1974), tried to climb the east face of Himalchuli but all of them were unsuccessful until our attempt in 1977. We could climb the east face and reached at the north ridge of Himalchuli (May 13, by Kondo and Mitani). When we made the climb, the steep east face was not covered with hard ice but deep snow. During our attempt, it snowed everyday. We were disturbed by the heavy snow, but it reduced technical difficulties.

On May 13, however, Kondo unfortunately was killed by an ice block fell from the north ridge while climbing down at upper east wall. Due to this accident, we immediately stopped our activities and on May 19 we came back to the Base Camp.

We again had to realize the greatness of nature. At this time of season, we rarely meet the collapse of snow on the ridge. We could make the climb of the east wall which was our purpose, but it was only made with the big sacrifice by Kondo's death. We eagerly hope to climb the summit of Himalchuli in the post monsoon period of 1977, but we had to give it up under such circumstances.

Our party was consisted of the following members of Meiji University Mountaineering Club:

Toyozo Sugawara-leader, Masaru Irisawa, Katsuaki Ono, Yoshiharu Kondo, Ryoten Hasegawa, Makoto Nebuka, Shuichi Okazawa, Kazuo Takeda, Koichi Wada, Junichi Tanaka, Bonzo Toriyama, Takemi Igarashi, Toichiro Mitani, Tatsumi Sasaki-doctor.

The expedition's short diary is as follows:

March 3 left Tokyo

March 4 arrived Kathmandu
March 8 caravan started from Trisuli Bazar to the Base Camp
March 22 arrived the Base Camp
March 24 started to the upper camps

We established the camps as follows:

March 28 Camp I (5,300 m)
April 2 Camp II (5,800 m)
April 11 Camp III (6,450 m)
April 24 Camp IV (6,100 m)
May 7 Camp V (6,800 m)
May 11 Camp VI (7,150 m)
May 13 accident
May 26 left the Base Camp
June 5 returned to Kathmandu

(See plate 11 (a)~(d), chart 9)

Broad Peak, 1977

Michio Yuasa

Academic Alpine Club of Aichi-Gakuin University succeeded the 2nd ascent of Broad Peak (8,047 m) through the west-ridge on August 8, 1977.

Members are:

Michio Yuasa, the leader, Norikazu Ohno, Kunio Teranishi, Yoshiyuki Tsuji, Kenji Itoh, Masahiro Itoh, Yohsuke Sakurai, Mitsuyoshi Hongo, Kazuhisa Noro, Takashi Ozaki, Mitsutaka Tada, Mitsuyasu Hamatani, and Kiyohiko Suzuki.

On June 22, we began approach march from Skarudu. Our loads amounted 2.4 tons including foods of porters and 20 French oxygen bottles for security of high-altiude (Settled 2 oxygen bottles each camp).

July 7. Base Camp was established at 4,900 m on the Godwin-Austen glacier.

July 9. Started climbing of the west face.

July 11. Climbed up the west face and set up Camp 1 at 5,450 m on the top of the face.

July 23. Set up Camp 2 at 6,200 m on the west ridge.

July 28. Set up Camp 3 at 6,900 m above the snow-plateau.

August 2. Set up Camp 4 at 7,500 m.

August 8. Tsuji, Noro and Ozaki started from Camp 4 at 2 : 30 a. m. and reached the top of Broad Peak at 8 : 49 a. m.

August 10. We left the Base Camp.

(See plate 8)

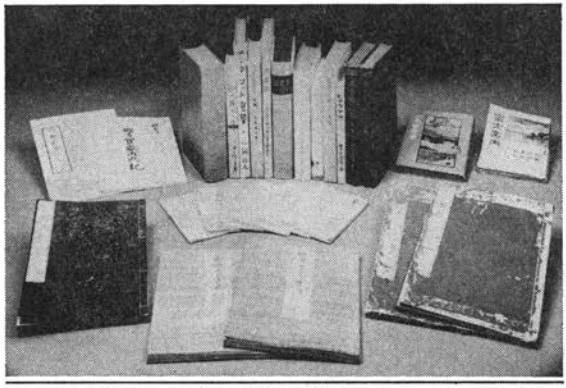
新選 覆刻日本の山岳名著

全20点・29冊／解題書・特別資料二点付

近代登山の黎明を告げる先蹤者たちの限りない〝山への讃歌〟

企画・編集＝日本山岳会（会長西堀栄三郎）

編集委員＝島田巽・串田孫一・山崎安治・近藤信行



〈全巻一括配本〉 予価175,000円（分割払いの方法あり） ●内容見本呈

❶谷 文晁「名山圖譜」全三巻……文化2年
❷播隆上人「迦多賀嶽再興記」……文政6年
❸播隆上人「信州鎗嶽畧縁起」……天保5年
❹松浦武四郎「石狩日誌」……万延元年
❺松浦武四郎 山岳紀行六種（私家版）……明治18年～20年
❻高島北海「歐洲山水奇勝」全二巻……明治26年金港堂
❼野中 至「富士案内」……明治34年春陽堂
❽河口慧海「西藏旅行記」全二巻……明治37年博文館
❾小島烏水「山水無盡藏」……明治39年隆文館
❿鹿子木員信「ヒマラヤ行」……大正9年政教社
⓫東京帝大山の会編「叙澤に逝ける人々」……昭和6年梓書房
⓬吉江喬松「山岳美觀」……昭和10年協和書院
⓭尾崎喜八「山の繪本」……昭和10年朋文堂
⓮大島亮吉「先蹤者」……昭和10年梓書房
⓯京大白頭山遠征隊編「白頭山」……昭和10年梓書房
⓰小島烏水「アルピニストの手記」……昭和11年書物展望社
⓱竹節作太「ナンダ・コット登攀」……昭和12年大阪毎日新聞社 東京日日新聞社
⓲足立源一郎「山に描く」……昭和14年古今書院
⓳*Walter Weston: Playground of the Far East, 1918 John Murray*
別巻 中村清太郎「山岳礼拝」（新編集）

解題書「新選 覆刻 日本の山岳名著解題」日本山岳会編
特別資料1 日本山岳会「會報」第101号（昭和16年1月）～第200号（昭和33年11月）覆刻合本
特別資料2 播隆上人筆「鎗ケ嶽繪圖」（天保6年）

大修館書店 〒101 東京都千代田区神田錦町3-24
振替/東京9-40504 電294・2221〈大代表〉

M·KATAGIRI SINCE 1914 TOKYO JAPAN

山とスキーの専門店

キスリング
クレッターザック
門田ピッケル
〃 アイゼン
夏冬用テント

片桐

東京都文京区湯島3－38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794番 6680番

信頼されて50年

山とスキー用品専門店

TAKAHASHI

山友社 たかはし

四谷本店 〒160新宿区三栄町3番地 TEL (351)7432·1912
八重洲口店 〒103中央区八重洲1－5－11 TEL (271)1560·8575
新宿店 〒160新宿ステーションビル4階 TEL (352)6564

吉沢一郎総指揮・監修による世界初の出版。

新発売

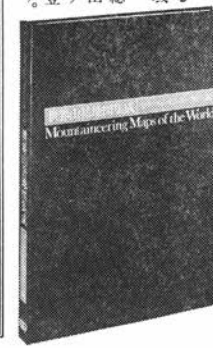
いま、世界のクライマーの熱い視線をあびるカラコルム、ヒンズークシュ、パミール全域を収録した世界で初めての山岳地図集です。1977年K2登頂を成功に導いた日本隊総指揮・吉沢一郎氏を初め第一線で活躍する山岳家の遠征、研究成果をもとに大縮尺のレリーフ4色地図を作成。現地のカラー写真や登山ルートを豊富に収めた本格山岳地図集です。

世界山岳地図集成
カラコルム・ヒンズークシュ編

吉沢一郎・監修●高木泰夫／宮森常雄他・編著

〈主な内容〉
■カラコルムサセール・カンリ／マモストン・カンリ／K2とバルトロ氷河ほか
■カシミール・ヒマラヤンガ・パルバット
■ヒンズークシュコヨ・ゾム／カランバール峠～カランバール川ほか
■パミール・天山コミュニズム峰／レーニン峰ほか

●B4判／340頁／見開き地図25点／上製箱入り
定価＝21,000円



好評発売中

ヒマラヤ編

●吉沢一郎・監修
●諏訪多栄蔵／薬師義美他・編著

世界の屋根ヒマラヤ全域を詳細した世界初の集大成。大縮尺で統一されたレリーフ4色地図と豊富な資料でキャラバンやトレッキングに役だちます。

●B4判／328頁／見開き地図25点／上製箱入り
定価＝19,000円

全国の主要山岳を網羅。山岳関係者の基本図書

日本山岳地図集成 全2集

●吉沢一郎他・編著

第1集〔北海道→中部山岳(北部)編〕
第2集〔中部山岳(南部)→九州編〕

●B4判／第1集202頁／第2集190頁／上製箱入り
全2集セット現金価格＝24,000円
〈分割払いもあります。〉

●詳しい内容見本を用意しております。ご希望の方は下記にお申し込みください。

学研 学習研究社

㈱学研美術販売 〒146 東京都大田区仲池上1-17-15 ☎東京(03)754－5523・5524

保険は愛です。力です。

まごころの共栄火災です

まごころ KYOEI

共栄火災海上保険相互会社

本社　東京都港区新橋1−18−6 〒105 TEL (03)504−0131(大代表)

47名の男は「K2」にすべてを賭けた。男の夢とロマンに出逢うために……。

●世界第2の高峰の登頂に成功!

K2

「ここより高い所はありません」

K2登頂1977・日本K2登山隊公式報告書

白き氷河の果てに

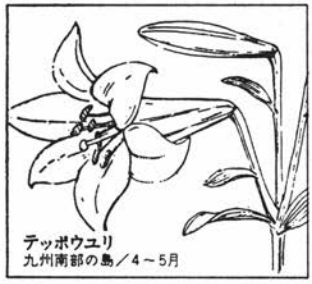
日本山岳協会・日本K2登山隊／編

●定価4,900円

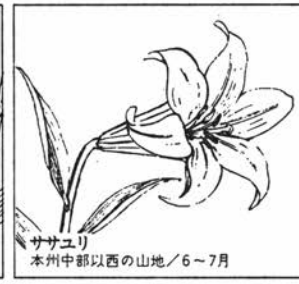
東京・文京・音羽

講談社

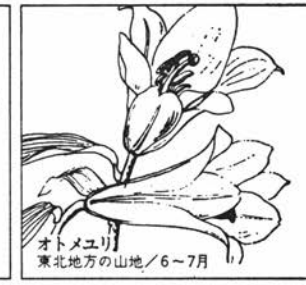
日本全国で
一年じゅう咲いている花



テッポウユリ
九州南部の島／4～5月



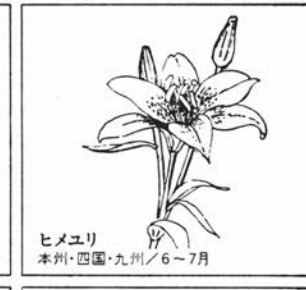
ササユリ
本州中部以西の山地／6～7月



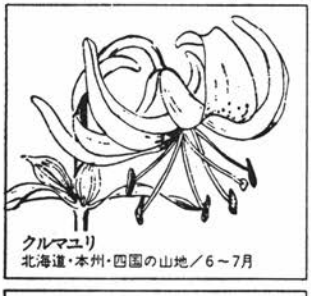
オトメユリ
東北地方の山地／6～7月

ヤマユリ
近畿以北の山地／7～8月

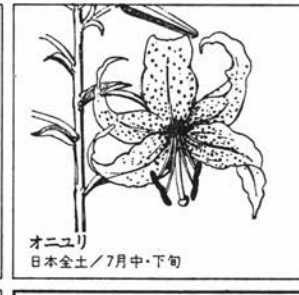
イワトユリ
紀伊半島以北の太平洋岸／7月上～下旬



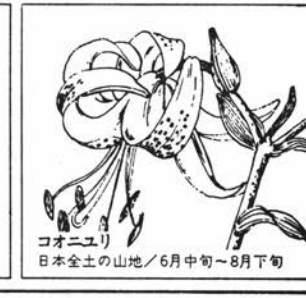
ヒメユリ
本州・四国・九州／6～7月



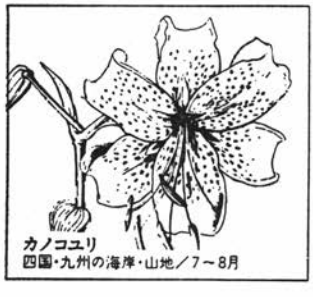
クルマユリ
北海道・本州・四国の山地／6～7月



オニユリ
日本全土／7月中・下旬



コオニユリ
日本全土の山地／6月中旬～8月下旬



カノコユリ
四国・九州の海岸・山地／7～8月

協和の支店は全国で220余ヵ店。
それぞれの地域で、みなさまのくらし、
みなさまの事業の
よきアシスタントとして、
いっしょうけんめい努力しています。
シンボルはユリの花。
協和は、清潔で明るい銀行を
めざしています。

いつもごいっしょ
協和銀行

秀山荘で登山を完成

ハイキング用品から遠征隊装備迄

あなたの登山が安全で楽しいものであること
を願って、当店では商品を厳選しております。

●二村ピッケル　（ナンバーネーム入り）

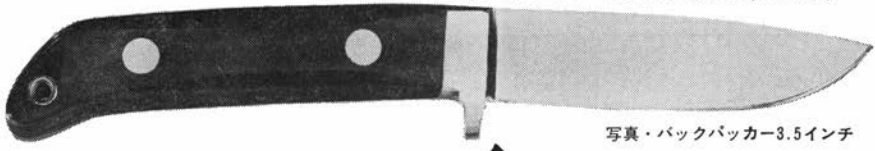
あなたの為に一本一本注文製作する名品です

真空材……39,000円　　大気材……33,000円

●二村カスタムナイフ

最高級カスタムナイフを注文製作、RC60の刃は切れ味
バツグン（ケース付・グリップ黒檀）

4 インチ　ドロップポイント……24,000円
4.5インチ　ドロップポイント……27,000円
5 インチ　コーティリティ……33,000円
3.5インチ　バックパッカー……25,000円
（グリップにアートライト使用は4,000円増）

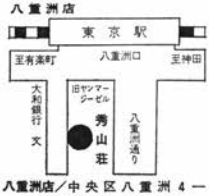


写真・バックパッカー3.5インチ

■地方の方は通信販売をしております。

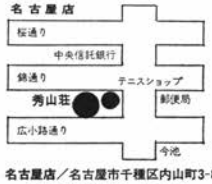
●営業時間
平　日=AM10：30～PM8：00
日曜・祭日=AM11：00～PM6：00

秀山荘



八重洲店／中央区八重洲4－1
☎03-281-8456

五反田店／品川区西五反田7－22－17
TOCビル1階ミツコプラザ内
☎03-494-3247



名古屋店／名古屋市千種区内山町3-85
☎052-741-2010

自然と旅を愛する人へ…

旅の山菜 片岡 博
山菜21種との出会いと味わい方を綴る1500円

山菜記(正・続) 片岡 博
滋味あふれる随想集！…… 正980円・続620円

新版 山を考える 本多勝一
世界をわかせた著者が綴る好エッセイ 980円

きたぐにの動物たち 本多勝一
北方動物と人間とのかかわりを描く…1200円

山のパンセ 串田孫一
自然文学の不朽の名著。ロングセラー 1500円

若き日の山 串田孫一
処女出版作、中・高時代の作品も収録…1500円

心の歌う山 串田孫一
荒廃した精神と自然に抗する著者……1800円

上高地の大将 木村 殖
クマやカモシカ相手のアルプス40年… 980円

谷川岳ヒゲの大将 高波吾策
谷川岳に生き、親しまれた著者の一代記 980円

剣岳の大将文蔵 佐伯文蔵
剣沢小屋主人の貴重な自伝と記録…… 980円

はるかな尾瀬 朝日新聞前橋支局編
自然と人間とのかかわりを鋭く追求…1500円

飛騨のやきもの 長倉三朗
やきものとその歴史を初めて体系化‥2500円

炉辺山話 岡 茂雄
山にまつわる名編を収録したエッセイ…1300円

私たちのシルクロード 平山美知子 平山郁夫装画
平山郁夫夫人のユニークな探訪記……1400円

K2登頂幸運と友情の山 広島三朗
執念の登頂を果たした著者の感動の記録 1300円

●ブルーガイド海外版
ネパール・パキスタン ヒマラヤ・トレッキング
世界一豪華な山岳展望と町の詳細案内 1380円

●ブルーガイド海外版
ヨーロッパ・アルプス
すべてを紹介した初のアルプス案内……680円

東京銀座1-3-9 **実業之日本社** 振替東京1-326

数々のエクスペディションで実証された高性能、高品質

ザンター羽毛服

海外遠征隊重装備用

羽毛服Ⓐ

色：紺・赤　サイズ：L・M・S
総重量：1,050g
価格：L ¥41,000　M ¥40,000
S ¥39,000

パンタロン

色：紺・赤　サイズ：L・M
総重量：610g
価格：L ¥24,000　M ¥23,000

国内の冬山登山向

羽毛服Ⓑ

色：紺・赤　サイズ：L・M・S
総重量：850g
価格：L ¥37,000　M ¥36,000
S ¥35,000

本格的クライマー向行動用

登攀用羽毛服

色：紺・赤　サイズ：L・M
総重量：550g
価格：L ¥24,000　M ¥23,000

ニッカ

色：紺・赤　サイズ：L・M
総重量：420g
価格：L ¥19,000　M ¥18,000

●主要販売製品
羽毛服、パンタロン
登攀服、ニッカ
アンダーウェア、ベスト
フード、ミトン、シューズ
シュラフ各種

株式会社
ザンター

東京都世田谷区野沢2-20-1　☎03(410)8808

ニッチの

登山・ハイキング シリーズ

定評ある著者陣容！

全56巻

定価各450円

雷鳥マークのカラー表紙
に衣替えして新発売!!

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

① 奥武蔵　武甲・雲取
② 奥多摩　大菩薩
③ 奥秩父
④ 陣馬・高尾　秋川渓谷
⑤ 丹沢山塊
⑥ 富士・五湖　三ッ峠
⑦ 箱根　熱海・湯河原
⑧ 奥日光　奥鬼怒
⑨ 尾瀬　銀山湖
⑩ 軽井沢　妙義山
⑪ 伊豆半島　大島
⑫ 三浦半島　鎌倉
⑬ 美ヶ原　霧ヶ峰
⑭ 谷川岳
⑮ 八ヶ岳　蓼科山・
⑯ 那須・塩原　鬼怒川
⑰ 磐梯・吾妻　安達太良
⑱ 志賀高原　草津白根
⑲ 上高地　乗鞍岳
⑳ 黒部・白馬　鹿島槍
㉑ 房総半島
㉒ 浅間・蓍平
㉓ 蔵王連峰
㉔ 八幡平　岩手山・駒ヶ岳
㉕ 霧ヶ峰　白樺湖・蓼科山
㉖ 霊ノ平
㉗ 妙高・戸隠　野尻湖・黒姫
㉘ 南アルプス北部
㉙ 中央アルプス
㉚ 南アルプス南部
㉛ 北アルプス
㉜ 加賀白山　白川郷
㉝ 飯豊・朝日
㉞ 大雪山　層雲峡・然別湖
㉟ 槍・穂高　アルプス銀座
㊱ 立山・剣　黒部渓谷
㊲ 東海自然歩道Ⅰ
㊳ 東海自然歩道Ⅱ
㊴ 東海自然歩道Ⅲ
㊵ 入笠山　守屋山・高遠
㊶ 苗場・鳥甲　清津峡
㊷ 越後三山　奥只見・巻機山
㊸ 御岳　木曽路
㊹ 金剛山　葛城・岩湧山
㊺ 六甲・摩耶
㊻ 比良連山
㊼ 大峰・吉野
㊽ 大台ヶ原　大杉谷
㊾ 赤目・青山　室生寺
㊿ 鈴鹿連峰　御在所・伊吹
(51) 大山・蒜山
(52) 三瓶山　帝釈峡
(53) 秋吉台　三段峡
(54) 九重山　久住高原
(55) 英彦山　耶馬渓
(56) 阿蘇山

※保存用には
日本登山地図集
Ⅰ中部山岳・信州篇
Ⅱ関東・上越篇
をどうぞ——定価各4,800円

地図の **日地出版**
本社　東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03 (261)5126
支店　大阪市南区安堂寺橋通り3-60
大阪 06 (252)7421

豊かな
生活環境を築きあげる……

（建　材）	（機　器）	（電　機）
●カーテンウォール	●NKフィルター	●電気洗濯機
●アルミ自然発色NKカラー	●各種浄水・廃水処理装置	●冷凍ショーケース
●サッシ ドア	●熱交換器 装置	●冷蔵ショーケース
●用途別サッシ ドア	●熱交換器用フィンチューブアライトロン	●オープンショーケース
●各種間仕切	●ウエルフィン	●ウォータークーラ

日本建鐵株式会社

取締役相談役　早川種三

東京都千代田区大手町2－6－2　〒100

TEL 東京（03）270－6511（大代表）

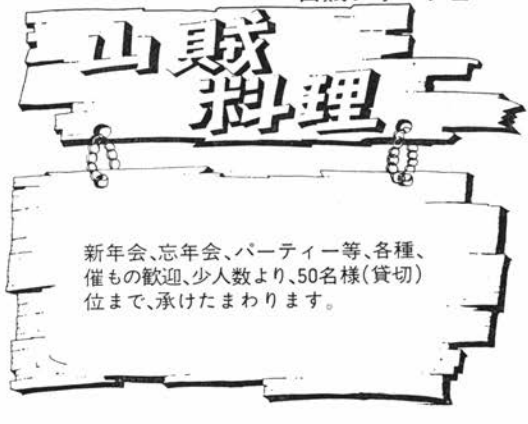
白水社の山岳図書

ヒマラヤの高峰 全3巻	深田久弥著	合判	A5判
処女峰アンナプルナ 最初の8000米峰登頂	望月・諏訪多・雁部編	¥一四〇〇	各¥五八〇〇
アンナプルナ南壁	エルゾーグ著 近藤 等訳	合判 ¥一四〇〇	
わが山々へ	ボニントン著 山崎安治訳	合判 ¥二〇〇〇	
大いなる山の日々	ボナッティ著 近藤 等訳	合判 ¥一八〇〇	
星と嵐 —六つの北壁登行	ボナッティ著 横川文雄訳	合判 ¥二〇〇〇	
レッド・ピーク ソ連最高峰登頂記	レビュファ著 近藤 等訳	合判 ¥一五〇〇	
星空の北壁	スレッサー著 坂下心一訳	合判 ¥一二〇〇	
ジャヌー北壁	近藤 等著	合判 ¥二〇〇〇	
ザイルのトップ	小西政継著	合判 ¥一八〇〇	
日本登山史	フリゾンーロッシュ作 近藤 等訳	合判 ¥一三〇〇	
ヒマラヤ —その探検と登山の歴史（第二版）	山崎安治著	A5判 ¥二三〇〇	
登山の技術（全二巻）	メイスン著 田辺・望月訳	A5判 ¥四〇〇〇	
ヒマラヤ—第三の極地	日本山岳会編	四六判 各¥二〇〇〇	
小西政継 ロック・クライミングの本《新刊》	ディーレンフルト著 福田宏年訳	合判 ¥三二〇〇	四六判 ¥一四〇〇

白水社
101 東京都千代田区神田小川町3—24
振替東京九—三三六

ヨーデルの調べと山賊料理をお楽しみ下さい

Restaurant FONDUE Brigand STYLE
山賊フォンデュ

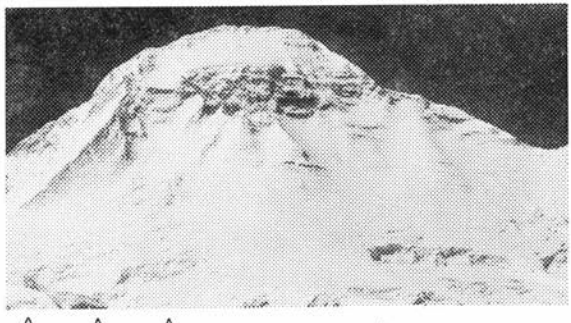


レストラン ブリガンド
東京都港区西麻布4—5—2
☎03-407-3009

新宿に姉妹店オープン！
SUPPER CLUB ちか
職安通り交番ワキ新田中ビル4F
東京都新宿区歌舞伎町2—15—7
☎03—209—5567

登山ハンドブックシリーズ

〔全6巻〕 山岳研究会編
各A5判



6 山の資料

●発売中
●980円

遠征登山計画に必読！本書は、地図と文献、世界の山岳国体の紹介、古今東西の山岳名著などを取りあげ、より山を味わえるように編集してあり、登山史年表を付して完璧な資料集。
主な内容●山の本▼山域別地図と文献▼日本、世界対照登山史年表▼山岳団体／英、仏、独、オーストリア、伊、ソ連、他

1 登山教本

総合的な登山案内書
●980円

2 登山技術

先鋭的登攀技術を解説
●980円

登山界の実践的第一人者がアルピニズムの歴史からトレーニング法、用具と装備、岩登り技術と氷雪技術、山の危険など幅広く解説した総合的案内書。巻末に用語解説を付す。
細心の注意力と高度なテクニック、特にトレーニングが要求される岩壁および氷雪壁の先鋭的登攀技術を解説。時代の先端をいく画期的な技術を説明した本格的な技術書。

■以下続刊■各巻予価980円

3 世界の山岳

遠征登山の必須知識を満載！登山の歴史と遠征登山ガイド

4 山の心

世界中の登山家の渓望を集める名峰の古典から現代までを論ずる必見の書。

5 山の自然科学

大自然の驚異を最新の科学資料でつづる。

東京都千代田区神田錦町3-3 ベースボール・マガジン社 ☎03(291)7901

アメリカ大陸の山と旅

アラスカ・カナダ・USA・メキシコ・南米

SIERRA BLANCA

シエラブランカは
「白い山々」という意味の
スペイン語からとっています。

バックパッキングからエクスペディションまで

シエラブランカはアラスカからパタゴニアまで、南北アメリカ大陸のほとんどにわたる山岳関係のインフォメーションを揃えています。バックパッキング・トレッキングからライトエクスペディションのパッケージはもとより、遠征隊のための航空・地上手配、地図、エアタクシー、登山申請などに関し、現地に詳しい知識と実績をもつ専門スタッフがご相談に応じています。殊に夏のアラスカ・カナダや冬の南米方面への遠征をご企画でしたら、どのようなことでもぜひお問い合わせください。ご満足いただけるアドバイス、資料提供、お手伝いができるものと確信いたしております。

プレイガイドツアー

運輸大臣登録一般旅行業第189号

プレイガイドツアー・シエラブランカ・デスク
108 東京都港区高輪3-13-3ホテルパシフィック3階
☎03-445-7521

本格派の確かなパートナー〈ベルグ®〉

BERG®
アタックザック

写真：YRA-3620 ¥11,700

「疲れにくいザック」のテーマのもとに
〈ベルグ®〉アタックザックをさらに
グレードアップ。キネシオロジー（身体運動学）
を基礎に、日本人の平均的体型に合わせた
曲線を随所に採用しました。このため、
身体にムダな負担をかけることがなく、
疲れを大幅に減少させることができます。

疲れにくい
曲線ザック

MIZUNO

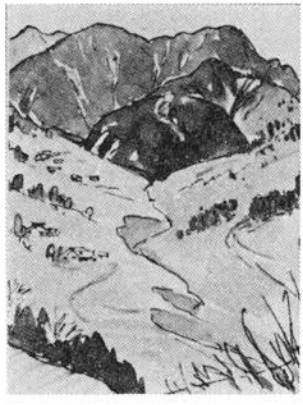
VICTORY® 美津濃

茗渓堂

川崎精雄／望月達夫／山田哲郎
中西　章／横山厚夫　（共著）

静かなる山

あまり知られていない山々九七座の四季折々の紀行。図上で未知の山に思いを馳せるときに似て、沢歩きや、藪こぎ、雪上に道をさがす、あるいは見なれぬ角度から山を眺めるなど、忘れられがちな山登りの楽しさが味わえる。



●主な山名
前黒法師岳／山伏
矢倉岳／富士見山
達沢山／御神楽岳
御池山／太郎助山
未丈ヶ岳／藤尾山
鍋割山／十二ヶ岳
家老岳／オドケ山
大博多山／蓬田岳
窓明山／羽賀場山
神座山／大鳥屋山
台倉高山／大西山
吾国山／大木戸山
水ヶ森／日本平山
土埋山／貉ヶ森山
道志二十六夜山
甲州高尾山／ほか

B変型判　二一〇頁　写真十六葉
定価一、七〇〇円　送料四〇〇円

年報　第六号

日本山岳会学生部編―〈21cm×20cm二七六頁〉
定価三、六〇〇円　特集・大学山岳部の原点を探る‖一九三二年の早大山岳部の積雪期滝谷から'76年の学生部ドゥナギリ峰遠征までの主な記録を特集した。これを基に大学山岳部の〝原点〟を探り考察し、今後の活動の参考に…

ランタン紀行

エーデルワイス・クラブ編〈A五判一五六頁〉
定価一、五〇〇円　装備や食糧の綿密な報告、雪のガンジャ・ラ越えの記録、エーデルワイスとの劇的な出合い等、ここを訪れる人達にとってよい資料である。また二十日間にわたるキャラバンの日記も読んでいて実に楽しい。

快晴の山

織内信彦〈A五判三二五頁〉定価二、五〇〇円
彼は氷ノ山以来五年間十幾つの山行がみな好天に恵まれたというから誠に幸運な天気男と言えるだろう。「回想の山々」「人と本」「海外紀行」等、その中に織り込まれたユニークな山岳観、人生観その他について……（三田幸夫）

茗渓堂　山の本売場ご案内

お茶の水店三階に山の本を揃えて御来店お待ちしております。

営業時間　平　日　午前十時半～午後八時
　　日・祝日　午前十三時半～午後六時半

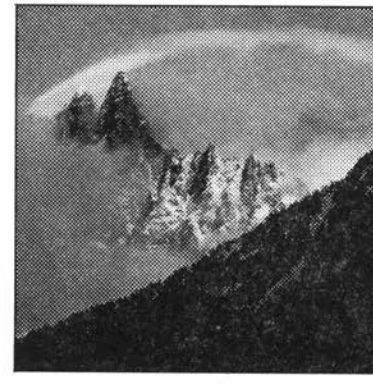
日本山岳写真界の第一人者がカメラで挑んだ本場アルプスの岩と雪

ヨーロッパアルプス

白籏史朗 豪華写真集

B4判／豪華本装丁／ダンボール保存函付
★定価二〇、〇〇〇円

●日本の山岳美を発表し続けている山岳写真界の第一人者・白籏史朗氏がヨーロッパ・アルプスの雄大な景観に魅せられて撮り下ろした豪華山岳写真集。モン・ブラン、ヴァリス、ベルナー・オーバーラント、ベルニナ、ドロミティ各山群の著名なピークを網羅。吹きつのる風、雲の動き、凍てつく寒気、澄明な空気感など臨場感あふれる傑作が迫力あるB4判で繰り広げられます。地図、解説、随想付。



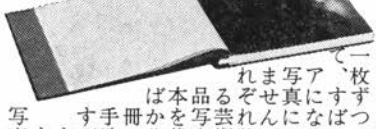
山光と影

エッセイ＝串田孫一　装画＝生澤朗

日本の山々のもっとも美しい表情だけを集めた豪華さ＋アイデアの異色の山岳写真集。

現代山岳写真家代表作集

A3判／新企画造本愛蔵版
★定価17,000円



◉本書の新しいアイデア、すぐれた特長

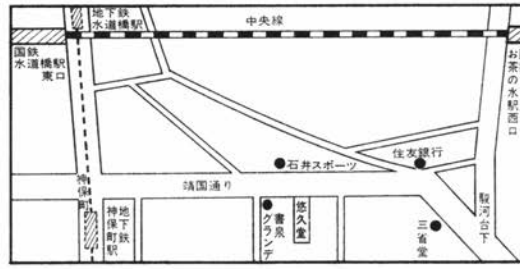
一枚ずつが額に入れられて、すばらしいインテリアになります／ワイド写真にノドの線が入りません／一点一点がそれぞれ独立した個性ある芸術作品です／出品写真家は現在の日本を代表する人たちばかりです／一冊一冊の表紙をすべて手造りで仕上げたすばらしい装幀です／この一冊で、すばらしい山岳写真展が開けます

〒105 東京都港区芝大門1-1-33
山と溪谷社
電話03(436)4021
振替東京8-60249

山岳書・動植物書

古本の買入と販売

関係書の御相談もどうぞ—地方出張も致します



㈲悠久堂書店

〒101 東京都千代田区神田神保町1－3

☎03（291）0773・0920

“より良きテントの最高峰をめざす吉田のテント”

1952	日本山岳会	マナスル踏査隊
1957	文部省	南極観測隊
1956	日本山岳会	マナスル登山隊
1970	日本山岳会	エベレスト登山隊
1970	日本山岳会東海	マカルー登山隊
1976	植村直己	グリンランド横断
1978	日本大学	北極点遠征隊
1978	植村直己	北極点単独旅行
1978	植村直己	グリンランド縦断旅行

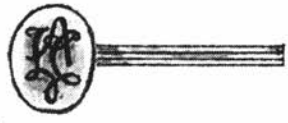
（敬称略）

吉田テント

東京都杉並区桃井1－3－3

☎(399)2548・夜間(398)8469

日本山岳会の記念品・バッジを作ってます。



株式会社 **ラマーノ**

〒102 東京都千代田区三番町24三番町ハイム ☎ 03(262)0525

技報堂出版 ★好評経営図書

情報管理システム

●システム構築の方法論

R・L・マルチノ著
ビジネス・コンサルタント訳

コンピュータをいかに有効に使用できるかをMISを設置し、利用する経営者の立場から説いた経営実務指針書。(主な目次)システム計画／デシジョン・テーブル／コンピューターの作図法／ソフトウエア／費用と効果／検索と更新／分担図表／プログラミングの世界／挑戦

情報ディスプレイ
I・H・ハワード著 ビジネスコンサルタント訳 ¥1,000

ネットワーク手法入門
R・L・マルチノ著 ビジネスコンサルタント訳 ¥1,000

MISダイナミックス
R・L・マルチノ著 ビジネス・コンサルタント訳 ¥1,000

プロジェクトマネジメント
J・S・バウムガートナー著 ビジネス・コンサルタント訳 ¥900

ゆがめられた目標管理
一倉 定著 ¥300

あなたの会社は **原価計算で損をする**
一倉 定著 ¥400

東京都港区赤坂1−11−41・〒107／TEL.585−0166・振替口座東京4-10 ★総合図書目録送呈

山岳　第七十三年（通巻一三一号）
一九七八年十二月一日発行

価三〇〇〇円

発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
（〒一〇二）
電話　東京二六一局四四三三番
振替口座　東京三―四八二九番

発行人　西堀栄三郎
編集人　近藤信行

〈編集委員〉
山崎安治・金坂一郎・中島寛
山本良三・節田重節・池田智津子
高橋善数・竹中昇・倉知敬

印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二ノ一
電話　東京二九一局九四四二番
振替　東京八―二四七二三番

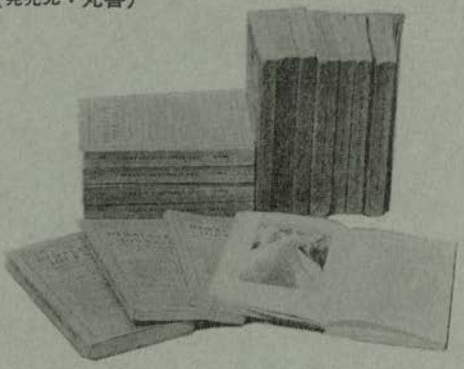
本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

The Himalayan Journal

(Records of the Himalayan Club)

発売中！

Edited by **K. Mason, C. W. F. Noyce & H. W. Tobin.**
Vols. 1-15 (1929-1949)
Oxford at the Clarendon Press.
Reprint edition. （発売元：丸善）
Paper bound.
Set ¥85,000



●300部限定版
●体裁：原本と同じです。
●分売はいたしません。

本覆刻版をお買い上げくださったお客様には，国立国会図書館所蔵の「深田久彌旧蔵書目録」（九山山房蔵書）を無料進呈いたします。

ヒマラヤン・クラブは「アルパイン・ジャーナル」の編集者で，アルパイン・クラブの会長も務めたD.W. Freshfieldの提案に基づいて計画され，1927年10月6日に設立されました。ヒマラヤン・クラブは単に登山家を対象としたクラブではなく，〝ヒマラヤの旅行や探検を奨励・助成し，ヒマラヤ及び隣接する山系の知識を科学・芸術・文学・スポーツを通じて拡める〟ことを主眼として設立されたクラブです。会員はヒマラヤに造詣の深い世界各国の人々が対象とされ，クラブの設立時には基礎会員127名を数え，1928年2月17日にデリーで第1回の会合が開かれました。同年12月には"the Mountain Club of India"と合体して活動範囲を拡大しています。年刊会報誌「ヒマラヤン・ジャーナル」はクラブの会員であり，「アルパイン・ジャーナル」の編集を務めるE.L. Strutt等のアルパイン・クラブ会員の協力を得て，クラブの趣意に沿って創刊されたもので，K. Masonを編集主任として，1929年4月に第1号が出されています。「ヒマラヤン・ジャーナル」は1940年に一時中断されましたが，1946年に再刊され，以来Oxford University Press（India）からVol. 34（1977）まで刊行されています。本誌には世界の秘境といわれ，数々の未知の分野が残されるヒマラヤと周辺の山々に関する情報が，科学・考古・民族学からスポーツに到るまで豊富に収録され，1921年頃から活発になったヒマラヤ高峰の登頂報告を含め，正確で詳細な優れた内容に富んだ会報として，広く世界の人々に愛読されています。このたび弊社刊行の覆刻版は，本誌の優れた内容のためはもとより，バックナンバーの入手が極めて難しくなっていることから，各界の皆様のご要望に応えるべく企画したものです。

Ⓜ丸善
※お問合せもしくはパンフレットの請求は弊社 仕入第三課（内281,452）までどうぞ
〔〒103〕東京都中央区日本橋2－3－10　☎(03)272－7211　振替東京7-5番

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXXIII

1978